
死にたがりな男の娘が転生

ディアボロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりな男の娘が転生

【Nコード】

N0814X

【作者名】

ディアボロ

【あらすじ】

何か首吊って死んだら、いきなり神だとか抜かす頭が可愛そうなおっさんが居た。うまい棒買ってやるから頑張れコノヤロー。

この小説は、死にたがりな男の娘がチートを駆使して、事件や儀式をこなしていくと言うお話です。

どうやらみなさん、キャラを何処かに置き去りにしてしまった模様…… かわいいそつに……。

第一話 死にたがり、神に会う前編（前書き）

……ああ、すいません

……
どうやら私は、これを無意識のうちに書いてしまっていたようです

……
どうか、許してほしい……

最近、忙しい毎日からやっと抜け出せたのがうれしくて、つい籠が外れてしまったのです……

反省も後悔もしています……

……首を吊ろう……

第一話 死にたがり、神に会う前編

「……あれ、ここ何処……」

俺は目を覚ますと、何か凄く白くて広い場所に来てしまっていた。確か俺って、首吊って死んだはずだよな？

「おお、目が覚めたかの？」

「……おっさん誰やねん……」

「ほお！？驚かなかった……だと……」

「いや、だからおっさん誰やねんて……何で俺、見ず知らずのおっさんの目の前で寝てんねんって、起こせや、見てたなら起こせや。もしくは毛布持ってこいや、後ついでに枕も」

「何でいきなり関西弁になったかはどうでも良い……。お主は何故いきなり目が覚めてこんな所に居るのか、疑問に思ってるじゃろ？」

「おお、すげえ。ここ何も置いてねえや。おっさん、こんな所で一人で住んでるとか悲しいな。なんかのキノコと百円やるから泣く

なコノヤロー」

「お願いだからわしに話させて!?!わしにターンをおくれ!」

うるさいおっさんだなく、全く。やっと自殺が上手く行ったかと思えば、これだよ……ああ、めんどくさいね……。

「なあなあおっさん、俺死んだのに何でこんな所に居んの?」

「今まさにその事を説明しようとしてたんじゃがの!!!」

「はいはい、お口にチャックしときますよ」

「ふう、やっとこれで落ち着いて話せる。して、何故自殺して死んだ筈のお主がこんな所に居るのかと言うとじやの。お主は異端なんじゃ、だからわしが殺した」

……ちょっと待ってくれ……わしが殺した?俺は自分で首を吊って死んだ筈だぞ?

なのに、こいつは、さも自分が殺したように言いやがった……。

「俺が異端?何処がさ?俺は至って普通、至極普通の高校生だぞ?」

「お主は……生前凄く死にたがりじゃったな？」

「……まあ、そうだな」

「まさにそれじゃよ。お主は小さいころから自分の体を傷つける事に何も感じなかった。じゃからお主は毎日の様に自殺をしては失敗するの繰り返しじゃったはず」

「……何だこのおっさん……気持ち悪い……ストーカーおっさんだ……警察呼ばなきゃ……」

「いや、わしどこもおかしくないから！！これまでの流れで大体察せないかの！？わしは神じゃー！！」

「……駄目だこのおっさん……今度は自分の事を神とか抜かし始めたぞ……精神科医紹介してやるから落ちぶれるなコノヤロー」

「いい加減にせええええええええい！！」

「……これが現代では見られない雷おやじか……可愛そうに、もはや現代遅れだから、こっやって誰かを誘拐してまで叱りたかったん

だね……。素直に怒られてやるから元気出せコノヤロー」

「お願いだから話をさせてください！（土下座）」

おお、雷おやじかと思えば、今度はいきなり土下座し始めたぞ……
プライド無いんか……。こいつ……。

「分かった分かった、聞いてやるから土下座するな。ほら、今度うまい棒奢ってやるから頑張れコノヤロー」

「ああ、やっと話聞いてくれる気になったか……」

（割愛）

「ふうむ、してっと……。俺には神のご加護がついていて、自殺しても死なない体質だった……。だがその死にたがりはあまりにも異端、異質な物だから。おっさんがその神のパウワー（笑）で打ち砕いて、俺が自殺させて成功させるようにわざわざ死亡率も上げた……。と……」

「うむ、やっと話し終えたわい。ふう、すっきりすっきり……。ちと聞きづてならないものがあったがの……」

「……あい分かった……おっさん、アンタ疲れてんだよ。今度五円チヨコ奢ってやるから気をしっかりしろコノヤロー」

「お主は……はあ、もう良いわい……もうめんどくさくなったから、後は大まかな事を言うぞ」

「はいよー」

「お主にはこれから転生してもらおうと思っ」

「転生？何で？」

「お主には生前、神のご加護がついていた。人間が生まれつき神のご加護を受けれるのは、ごく稀なのじゃ。じゃから神達は、その人間の一生を見て、その人間の死後、神としてこちらに引き込むか。それとも悪と定めて、地獄に送るかを決めるんじゃ」

「へえ、厨二乙」

「じゃがお主は神のご加護に加え、悪魔のご加護も受けてる様じゃ」

「何それ怖い」

「じゃからお主は死にたがりじゃし、幾ら死のうとしても、神のご加護で守られてるから死なない……じゃから、お主には転生してもらうのじゃ」

「……何の為に？」

「そこで悪魔のご加護を払う儀式を行う……じゃから、お主には力を授ける」

「……おお、おっさん……何か神々しいな……拜んでやるから喜べコノヤロー」

すっげえ、おっさんのバツクが光ってるよ。

これが神々しいオーラ（笑）って奴か……すっぐえな……。

「じゃが困ったことに……のう。その儀式が終わったとしても……お主の死にたがりは無くならんかもしれん……」

「儀式の意味ねーwwwwつか何で？」

「もはやお主のそれは癖みたいなものじゃ。じゃからお主はきつと、息をする様に死のとするじゃろう……」

「マジで？うわーい、また自殺できる」

「喜ぶな！！さて、転生させる前に力を授ける。何でも良いぞ、バンバン言ってくれ」

「このままで転生させて」

「……………お主人の話聞いてた？」

「うん」

「力授けないと、儀式出来ないんじゃないよ？」

「それで死ぬるかもしれないから、そのままが良いかなと」

「……………何なのこいつ（泣）」

後編へ続く

第一話 死にたがり、神に会う前編（後書き）

何か書いてる内に意味分からなくなったお

一応前後編に分けてみた……長くなりそうだったから（笑）

今回はもしかしたら短め更新がデフォになっかも……

まあ、頑張るお

第一話 死にたがり、神に会う後編

「駄目なものは駄目なのじゃ！お主に力を与えんと、わしがお主をここまで連れてきた意味がないじゃろ！？」

「え〜、マジかよ〜」

めんどくさ……まあ、何かこいついい感じに頭逝かれてるし、ちょっと話合わせときゃ良いか。

「じゃから頭は正常じゃ！さっきからお主は心の中で毒を吐きすぎじゃー！いい加減スルーにも限界があるわいー！」

「なつ……俺の心を読んだ……だと……まさか、本当に神様……なのか？」

すげえ……読唇術使える奴初めて見た……すげえ……神様マジすげえ……感動的だ！。
これが神様かーすげえ……マジパネエ……すげえ……。

「どつじゃ！すげえじゃろ！だからさっさと何の力が欲しいか言ってくれ！ー！」

「じゃあ、魔法。魔法が良い、空飛びたい。綺麗まつさらな空を飛びたい！」

「変なところで純粹じゃの……まあ、それはお主が良く世界では必要な物なので、意味がない。ほれ、次行ってみよー」

「じゃあ斬魄刀！斬魄刀が欲しい！氷輪丸とか使いたい！」

「斬魄刀か、じゃが鏡花水月は無しじゃぞ？後虚化も」

「うっしやー！」

あれ？何その言い方、鏡花水月は無し？……つつつことは……だ……。

「では、鏡花水月以外の斬魄刀を使えるようにしよう。して、次は？」

やっぱかあああああ！
すげえ、神様マジ太っ腹や……じゃあ……死神とかになれんのかな？かな？

「んじゃ次は、アंक欲しい！アंक！」

「アंक？あのオーズに出てきたメダルの怪物か？」

「おっさん！アंक舐めんな！あいつカッケエんだぞ！マジカッケエんだぞ！！」

アंकく、もう最終回で消えたのマジ悲しかった……アंकマジカッケエエ！
アंकをパートナーにしたい！

「だから！アंकも強くな！」

「よし分かった。さあ、どんどん来い！まだ行けるぞ！」

「どんだけよ！？神様……アンタマジ神様だ……」

それからしばらく……俺は神様に願いを言いまくった……。

~~~~~

「ふむ、これで全部か？」

「ああ、これで全部だ！」

「……この、容姿が……めちゃんこ可愛い男の娘ってのが気になるのじゃが……しかも身長低くって言うのがの……」

「いや、生前も結構童顔だったしさ、どうせなら男の娘になってみようかなと……気にするな」

「いやあ、でもまさか……こんな事もあるもんだな！」

「死んだと思ったら神様が居て、転生しろって言われて。挙句の果てにはチート能力貰って……。何これ幸せ……。」

「あ、所でさ。俺、何処の世界に転生するの？」

「ああ、まだ言ってなかったな。場所は『リリカルなのは』の世界じゃ」

「……リリカル……なのは……だと？」

「そっじゃが、どうした？」

「……いや、何でもない……」

うづむ……これはどうしたものかな……、リリカルなのはか……。

「なあ、原作に介入しないといけないって事ある？」

「いや、特に無いの。これはお主の儀式を行う為に転生させ、それからの生活を見るのが前提の事じゃ。じゃから、儀式を無事行いさえすれば、オーケーじゃ」

「……じゃあ、原作をぶち壊しても？」

「むろん、許される」

「……分かった……んじゃ、デバイスくれや」

「そう来ると思ってたわい。それ、受け取れ！」

そう言つて、神様は俺にデバイスを投げ渡す……。俺はそれをキャッチして、その手の中にあるデバイスを見る……。

「……………何故二つだ？」

「一つはお主のデバイス、もう一つは、お主のパートナーにでも上げるんじゃない」

「……………アングの分か……………ありがとう！神様！」

「よし！ここまで来れば最後の仕上げじゃ！！お主に魔力を捧げよう！」

まだあつたんかい……………そかー、魔力か……………何か……………体が熱いんですけど……………。

熱い熱い！死ぬ！体の内部が熱いつて！熱い！

「……………い……………い……………い……………」

「我慢せい、今リンカーコアを作ってる最中じゃ……………もう数秒で出来る……………よし、できたぞ」

「ううゝ、痛いゝ……想像を絶する痛みだったゝ……」

「うむ、これでお主に授ける物は授けた……では、もう送るぞ？」

そう言っや否や……いきなり俺の足元が開き、俺は真っ逆さまに落ちていく……。

「うわああああああ！！」

「達者でな！お主の事は見守らせてもらっぞ！！」

そして……穴は塞がり……また、神様一人だけの空間となる……。

第一話 死にたがり、神に会う後編（後書き）

…… g d g d y a …… まあ、頑張るよ

最初はオリジナルかな？

そこでアंकも出すし、どんな能力をもらったかはその都度その都度出そうかと

では、また次回！

**第二話 始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！！（前書き）**

はい、アंक登場

まあ、パートナーにしたのは……この男の娘の主人公にデレッデレ！

親よりも親ばかになったアंक書いてみてーとか思って出しました

まあ、キャラ崩壊しまうけど、アंक好きは寄ってらっしゃいな

では、始まります

## 第二話 始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！

く??く??

あれ?ここは……何処だ?

暗い……暗い、闇の中……でも……怖くは無い……とても安心する

……。

まるで、母親に抱きあげられて、抱きしめられているかのようだ……

……安心する……。

だが、その暖かさが、すぐになくなった……。

「もう少しよ!頑張って!!」

「んうくん!!はあはあ……!!」

「頑張れ!もう少しだ!!もう少しで生まれるぞ!!」

何かが聞こえる……誰か新しい生が、目の前で生まれ出時みたいに

……切羽詰まっていた……。

そして、この体が動く間隔……。

「んうん!!」

「頑張れ!頑張るんだ!!」

「んうん!あああ!!」

「……オギヤア!オギヤア!(うおっ、眩しっ!)」

俺はいきなりの光にびっくりし、目を閉じ……っで、あれ?何も見えない……。

既に目を閉じている状態なのか?

「産まれたぞ!とうとう産まれた!」

「ええ!貴方!」

「オギヤアオギヤア!(俺、まさか最初から!?リスタート!?)」

とにかく……俺は産まれてしまったらしい……。

↓それから三年後↓

……ふう、まさか、あんな羞恥プレイがあったとわな……。  
あ、どうも……。どうやらキンクリしてしまったようだね……。ここは  
すでに三年後の世界……。  
早いね……。この三年間はとても恥ずかしかったと言えよう。

ああ、言い忘れていたね、俺の名は……。ああ、転生前の名は忘れて  
しまったんでね、何て言ったら良いか……。そう、今の名前は……。ア  
ニス・クロイツベル……。そう、俺の名前は厨二になってしまったん  
だ……。

「アニス〜！どこに居るの〜！」

「あつ、お母さん！こっちやこっち〜！」

前方に、俺を捜してるお母さんと呼ぶ。

お母さんの名前は、アリス・クロイツベル……。うむ……。何処かの某  
幻想郷のアリスさんみたいな人だ……。

「もう、勝手に居なくなっちゃ駄目っていつも言ってるでしょ？」

「えへへ、ごめんなさい。でもでも！アंकが居るからだいじょ  
ーぶーねーアंकー！」

「ああ、そうだな。大丈夫だ、俺がしっかり見ていた」

「アंक！もう、しっかり見てる位なら、ちゃんと注意しなくちゃ駄目よ！」

「ふん……」

アंक……そう、彼はアंक……下の名は無い……。

彼がどう言う経緯でここに居るのかって？……何かね、この人、俺と同じ神様に会って、使命を受けたらしいんだ。

俺のパートナーになれって言う……まあ、その対価に神様がアंकに人間の体とコアを全部（タカ・コア三枚クジャク・コア三枚コンドル・コア三枚）をくれてやったらしい……。

神様、アंकも強くって事、覚えていたんだね！

で、どうやってここに来たか？だよな？

アंकは……そうだね……神様に送られてから、何かこの家で働きたいと言ったらしい……。

何でも俺の家は金持ちらしく……それで、俺が産まれたから専属の執事兼ボディーガードを欲していたらしい。

それを利用して、アंकは俺の専属の執事兼ボディーガード！

最初は乗り気じゃなかったらしい……いきなり神とやらに会って、俺のパートナーになれとか言われて……まあ、アングのキャラじゃないしね。

でも、そこは神様……どうやらアングに五感の他に、情も入れてくれたらしい……。  
だから、俺の執事をしている内に、情が移り、今では仲良しこよし！ってわけ。  
因みに、俺が転生者だって事はアングは知ってる。

「それより、ここで何していたの？」

「アングと遊んでた！」

「そう……もう、アニスはアングにすごく懐いてるわねえ。羨ましいわあ〜」

「当然だ、産まれてからすぐに一緒に、付つきりだったんだ。それで懐かないんだったら俺が困る」

「あらあら、アंकも言うようになったわね。それじゃ、おやつにしましようか！」

「やった〜!!」

「今日はクツキーを焼いてみたの！」

「……何……だと……」

「……おい……逃げるぞアニス」

アंकの声で我に返り、俺はアंकと共に逃げる。

ヤバイ！やばいやばいやばいやばいやばいやバイ！母さんの料理は駄目なんだ！

核以上に危険なんだ！やばいやばい！まだ死にたくなあああいい！！

「あ、何で逃げるのよっ！？アंकも！」

……だって……お母さんの料理は、洒落にならない位……まずいん

ですもん……ねえ。

一回、神様に再び顔見せに飛んで行ったんだ……魂が……。

こんなのが、今の俺の日常！

あ、あともう一つ……。

死にたがりは何とか自分で抑えてますぜ……まあ、アंकも居るから、そうそう首吊ろうとか、手首切ろうとか考えなくても良いんだけど。

時々、無意識に何だけど……剣とかで訓練してる時に、自分に切っ先を向けちゃう時があるんだ……。  
一回は未遂、二回目はアंकが何とか防いでくれた。三回目は少し首に先が刺さった程度……。

やっぱあれだね、死がこびり付いて取れないや……。

お父さんやお母さんは、何かの病気なんじゃないかって思って、何回も検査してもらった。

でも結果は正常……でも、こんな俺でも気持ち悪がらずに接してくれてるから、頑張っって抑えている。

「アニスく、今日も可愛いな〜」

「えへへ〜」

今の声の正体はお父さん……名は、クラウド・クロイツベル。  
富豪息子だったらしく、家業を継いで、今に至るらしい……。  
そして、親ばかだ……気持ち悪い位に親ばかだ……でも、嫌いじゃないわ!!

「今日もご苦労だったね、アंक君」

「アニスの専属の執事だからな、これ位は当たり前だ」

まあ、やっぱアंक。雇い主に敬意を払おうとしないし、敬語も一切使わない。

だがお父さんはそこが気に入った!とかで、アंकを雇うことにしたらしい……。

「さて、皆もそろったし、夕飯にしましょうか!」

「じゃあ、俺はそこらの周囲を見ている」

そう言って、つかつかと移動し、他のメイドや執事達の所で立っている。

……「こうして見ると、やっぱりアंकって執事の中でかなり浮いてるな。」

「さ、頂きましようか」

「」「」「この世の全ての食材に感謝を込めて、いただきます」「」

何故トリコ風の挨拶なのかって？

……まあ、俺もそこには突っ込んだよ……何でっ？ってな……まあ、気にしないことにしたよ……。

第二話 始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！！（後書き）

ああ、男の娘可愛い……

アニスは猫を被ってます

本当だったら親にも

「~~~~~やるから元気出せコノヤロー」とか

「……頭が弱いんだね……頑張れコノヤロー」

とか、毒吐きます

さて、ガンバる

読んでくださりありがとうございます

第三話 どうやらこの世界では、斬魄刀は……（前書き）

はい、斬魄刀の回です

ぶっちゃけ、無理やり感が否めません

まあ、そこは目をつぶってくださればな〜と

それでは、始まります

### 第三話 どうやらこの世界では、斬魄刀は……

アニスサイド

やあ、アニスだよ。

そうそうキンググリムゾンは発動しないから安心したまえ。

それにしても、ホントこれってチートボディーだなーって思うよ。

術式やら、勉強やら、剣術やら、体術やら、魔法やら……全部すぐに覚えられる。

そして、この家では代々、ベルカ式やミッド式は使わないらしい。もちろん使えるが、俺達の血筋が使える魔法がある……。

それが、クロイツ式って奴らしい……まあ、あれだね、何の捻りもないね……。

それで、そのクロイツ式何だけど……何の事のない、斬魄刀を媒介にして魔法を放ったりするんだ。

一度お父さんに見せてもらったけど……凄かった……。

「喰らえ！牙王炎！」

とか言つて、いきなり始解しちゃったからもうびっくり！

まさか原作設定に無理やり入れてくるとか……マジありえねえよ神様……。

しかも、お父さんの斬魄刀は、相手を喰らいより鋭く、より強く、より軽く、より重くなるらしい……そして、火を纏つて相手を攻撃したり、そのまま斬撃にして出せたりする……。

……あんたの家業一体何なんだ……。

そして、今日俺は……その契約をしてる真っ最中です！

「良いかアニス、自分が使える斬魄刀を呼び起こすんだ……」

「でもお父さん、俺まだ子供だよ？それに、何でこんな早い内からなの？」

「それはね、アニス。斬魄刀は扱いが難しいんだ……。私も、クロイツベル家の中では優秀だった方だ……。私がアニス位の時には、既に魔法も全て一通り終わらせ、勉強やら何やらも学び終えた……。そんな私でも、始解に至るまで五年。何も言わないで始解が出来るようになったのが三年。ちゃんと斬魄刀を屈服させるので六年年。そして、最後の秘術……。卍解を会得できたのが……。更にその十年後何だ……。」

マジかよ……。俺と同じ位の年から始めて……。大体27歳位で卍解に至ったとか……。

まあ、死神と人間の時間を合わせたり較べたりしたらあれか。それでも、凄い方なのだから……。

「アニス、お前は私よりも強くなる。それに、私より才能豊かだ……。だから、私はお前に早く契約して、斬魄刀を使いこなしてもらいたい……。」

「……分かったよお父さん！俺、頑張る……！」

「うん！その意気だ！さあ、その魔方陣に入るんだ」

俺はお父さんが書いたお手製の魔方陣の中に座り込む。

「さてアニス、さっき私が教えたとおりに唱えるんだ。分かったかい？」

「うん！分かった！」

俺はお父さんに笑顔を見せて、魔力を集中する……。

「……私の剣となる者よ、この問いに答え姿を現せ。導の道は既に  
ある、我が身に集え！契約、執行！！」

その瞬間、魔方陣が光だし、俺はその光に包まれる……。  
何だろう……。俺の体に何かが入ってくる感覚は……。暖かい……。すっ  
げえ心地いいわ……。

そしてしばらくするとその光は収まり、俺を浮かせていた風は無く  
なった……。

「どうやら成功したようだね。さあ、斬魄刀を出して、私に見せてくれないか？」

「分かった！」

俺は手に魔力を込めて、斬魄刀を取り出す……。握られていたのは、何の変哲もない日本刀……。まあ、まだ始解できてないし、当たり前か。

「……これは……何と……凄いのを呼び出したな……」

「？お父さん、何の斬魄刀が分かるの？」

「ああ、名前は言えないが……氷結系最強の斬魄刀と言っても良いだろう……」

……オーケーおとん、今ので分かったから……氷輪丸だわこれ……

…。  
まあ、嬉しいわ。氷輪丸を一発で引き当ててよかった！  
でも、おかしくね？あの神様、鏡花水月以外の斬魄刀なら全部使える言つてたやん……。

まさか……ね？

俺は試しに、空いている左の手に魔力を集中する……。

カチャ……。

「なっ!?!」

「……あはは……」

ビンゴ……どうやら俺は、ほとんどの斬魄刀を、体の中に所有してるらしい……。  
しかも……何か、どんどんまだまだ増えてってる気さえするのだが

……。

「何故斬魄刀が二本も！？……まさか、二本一変に、所有者と認められたのか!?」

いや、二本どころか……ほとんどだよおとん……。

でも、これは口が裂けても言えないな……流石に気落ち悪がられるだろうし……。

でもま、これで斬魄刀を手に入れた訳だし……良かった良かった。

「しかもこれは千本桜！？……アニス……やはりお前は、私以上に才能がある子らしい!」

「ホント？アニス、嬉しい!!」

お父さんは喜びのあまり、俺を抱きしめる。

おおっ……流石クロイツベル家の家業を継ぐ者……腕力パネェ……出る、出ちゃいけない物が出る……。

「お父さん、苦しいよう……」

「おっと、すまんすまん。嬉しさのあまり、つい強く抱きしめすぎた様だ。わははは！」

そう言いながらガシガシと俺の頭を撫でる。

いやぁ！一時間も掛けてセットした俺の髪！？……まあ良いか、後でアंकクに結ってもらおう。

「お父さん、これでもうお終い？」

「ああ、これで無事契約は完了。もう戻っても良いよ」

「うん！分かった！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「それで、何をやってたんだ？」

「えへへ、クロイツベル家に伝わる契約をやって来ました」

「そうか。それで、何と契約したんだ？」

「斬魄刀」

「斬魄刀？何だそれわ」

「俺の居た世界では漫画の話に出てきた、死神が使う武器何だ。でも、あの神様がどうやらこの世界の設定に無理やり入れたらしい」

「あの馬鹿は……そんな事したら世界が崩壊すんぞ……」

「まあまあ、神様だから何とかなるんじゃない（笑）」

「まあ、今の俺にはどうでも良いけどな。お前さえいれば俺は生きていけるし」

「ああああ、欲望の鳥とまで言われたアंकが、まさかこの三年で丸くなるとは」

「人間の感情、五感、全てを手に入れ。こうして人間と向かい合ってみると、中々どうして。人間も捨てたもんじゃないと思えてくるから不思議だ。人間何ぞ、欲望の塊でしか思ってたあの頃が懐かしい」

「……………映司に会いたくないの？」

「……………あいつが掴む手は、もう俺じゃない。それに、勘違いするな。俺とあいつは、利害が一致した者同士だ。あいつは力が欲しかった、俺は命が欲しかった……………だからあいつをオーズに選んだし、俺はあとして、ただのメダルの塊が死ぬるところまで来た……………」

「ふふふ……………アंकも素直じゃないね」

「ふん……………ほら、出来たぞ」

お、結び終わったか……………どらどら。

俺は手鏡で、今の自分の髪型をチェックする。

「……………うん、ありがとうアंक！いやあ、アंकも上手くなったもんだね。最初の頃は戦っただけしか能がなかったのに」

「うるさい。つたく、誰のせいでこんな事をしなきゃならなくなってるか分かってんか？」

「はいはい、アंकは最高のパートナーです あはははは！」

「……つたく、こりゃ重症だな……」

もう、重症とか言わないでほしいな！

「それじゃあ、僕はちよつと庭に行くね？」

「？何かやるのか」

「うん、斬魄刀と、ちよつとO H A N A S I、じゃなかった、お話してくれる」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「とは言ったものの……斬魄刀とどう話したら良いのやら……」

つうか、ブリーチとかもつうろ覚え何だが……まあ、斬魄刀だけで、

鬼道や縛道は使えるようにはなっていないし……それはそれでいいか。

あんな長い詠唱、覚えられんから……。

「まあ、とにかく氷輪丸だけでも使える様にしたいな」

出来るだけ自力で頑張ろう！

んで、出来なかったら、少しお父さんに助言もらおう。……教えてくれるかな？

「さて……精神を集中させてっと……」

一応、月並みだけど、座禅をして精神を集中させよう……。あ、ちなみにちゃんと結界は貼ってあるよ？まあ、怪しまれないでしよ。

一応俺、全部魔法覚えてるし、結界貼ってたって、魔法の練習でもしてるだろう程度にしか思われないだろう……。

「……………来た……………」

……………案外早かったな……………俺は、そのまま精神世界に入っていく……………。



「久しぶりじゃの」

「……………あるえ」

「……………やっほー」

「……………はっ」

「……………何で神様が居んの？」

精神世界に行っただと思っただら、神様の所に来てた……………。

……………やべえ、今軽くポルナレフ状態なんだが……………。

「どうしたじじい、寂しくなったのか？俺をこんな所に連れてきて。何かの魚と一円やるから帰せコノヤロー」

「いや、お主が自分で来たんじゃないだろうが…！」

「……………何……………だと……………」

「まあ、大方斬魄刀と意思疎通してみようと試みたんじゃないけどな……………」

「……………やっぱりじいさんがしでかした事か……………」

「お主、言ったじゃろ？斬魄刀が使いたいと。その願いが既に叶っているのじゃから、初めから使えるのじゃぞ？」

「…………それを早く言えよ!!」

座禅して損したわ!

時間損したわ! 全く、何なんだこいつは……。

「じゃあ、さっさと体に戻してくれ」

「自分から来たくせに……それじゃ、もう来るんじゃないぞ?」

そうじじいが言った瞬間、懐かしい浮遊感に襲われる……。

「また落ちるのかあああああああああ!」

~~~~~

「…………はっ!」

…………何だったんだ今の……。

とにかく…………まあ、斬魄刀はもう使える状態なのは分かった。

でも、これお父さんに見せたら驚くだろうな。始解も年数掛かつ

て漸く出来るようになったって言ってたし……。
まあ、見せるのはもっと先の話かな。

「それよりも……やってみますか」

俺は座禅を止めて、斬魄刀を持つ。

………んじゃ、行っきまーす!!

「霜天に坐せ!氷輪丸!!」

そう唱えた瞬間……この周りの温度が一気に下がるのを感じた……。
だが、寒いとは思わない……、このままでも動きに支障は無い。

「………すげえ………これが氷輪丸………」

そして、後ろを向く……そこには水と氷で出来た龍が宙を舞っていた。

「………卍解は………たぶん出来るんだろっが………」

やったら結界壊れそうだし、それに、下手に膨大な魔力を使っちゃ

お父さんやお母さんに気づかれるのも嫌だから、よしとしよう。

さて……次はどんな事が待っているのやら……。

第三話 どうやらこの世界では、斬魄刀は……（後書き）

結局 bad bad

流石ディアボロクオリティー

でも、リリカルなのはの小説は、実際初めてではないんですが……

無印から書くのは初めてという……

今まで二期と三期、もしくは全くオリジナルの話で書いたりしてきましたから

無印か……でも、今回は……はやてと絡ませたいな

アंकが、闇の書起動まで子煩悩みたいなキャラになったの書きた
いし

……よし、やっぱり今回も無印は書かない！

読んでくださりありがとうございます。

第四話 アニスの訓練風景（前書き）

やあ

……やあ……

……特に話すことは無い！

本編始まります

第四話 アニスの訓練風景

「おはよ〜……」

「おはよぶ。ほら、さっさと顔洗って来い」

「……む〜……」

どうも、朝にめっぽう弱いアニスです……ふあ〜。

「……アंक〜……眠い〜……」

「俺に寄りかかって来るな！さっさと顔洗って目え覚ませ！」

そう言いながら、アंकは俺を洗面所まで運ぶ。

優しっさすい〜……ふあ〜……あれだね……肉体に精神が引っ張られるってのは本当にあるんだね。

「て言うかいい加減その恰好で寝るのは止める！」

「……いや……裸ワイシャツは……眠りやすい……んだよ……」

裸ワイシャツこそジャスティス……他にはスパッツとか……。

「……グー……」

「寝るなあああ……」

~~~~~  
~~~~~

「……超スッキリ！」

「俺は朝から疲れた……」

「どうしたアंक？まだ朝だよ？モナカ買ってやるから元気出せ」
ノヤロー」

「……はあ……」

ありゃ、ため息されちった……。

「ごめんごめん、ちょっと調子に乗っちゃった。謝るから許して？
ごめんね」

「……まあ、アイスで手を打ってやらん事もない」

「あはは、やっぱりアंकと言ったらアイスだよね」

ヴィータやスバルと良い勝負出来そうだよね。

大食いとか？いや、でもアंकも今は普通の人間の体だし……いや、
行けるか。

「それよりも、朝食に遅れるぞ？」

「あ、そうだった」

そう言われれば、もうそんな時間か……。

俺は一回自分の部屋に戻り、私服に着替える。一回寝ぼけたまま朝食
食食べに来たんだけどさ。

ワイシャツとパンツだったから、驚かれたよ。

まあ、まだ三歳だし、ワイシャツはサイズぶかぶかだから、見えな
かったけどさ……何だろう……アルカナのアンジェみたいな感じ？

まあ、そんな格好で来たから怒られるかもと思ったけど……。怒られなかった、むしろ可愛いとまで言われた……。だから俺は、もうお母さんやお父さんの前で、裸ワイシャツは見せないと誓ったんだ。

アंकには見せるよ？だってアंक、特に反応もしないから。

「おはようございます、お父さん、お母さん」

「おはよう、アニス。今日は少し遅かったね？何をしていたんだい？」

「少しアंकとお話をしていました。すみません」

「お父さんは怒ってる訳じゃないから、謝る必要なんてないのよ？アニス。さ、皆そろったことだし、頂きましょうか」

俺はいつもの席に着き、手を合わせる。

「」「」「この世の全ての食材に感謝を込めて、いただきます」「」「」

だから、何で「リ」やねんって……。

~~~~~

「さて、今日は何をするかな……」

朝ごはんを食べてから、一時間。

これからお父さんと訓練をします。まあ、自分としては斬魄刀で戦いたいんだけど……。

始解を見せたら驚かれるかもと思って、それは避けてるよ。たまに秘密裡で結界貼って、始解をして訓練はしてるけどね。

因みに、俺が結構使いやすかった斬魄刀がこちら。

氷輪丸、双魚の理、灰猫、千本桜、雀蜂位かな。

氷輪丸は長いけど、その分触れたらなんでも凍らせれるから良いんだ。

次に双魚の理、双剣でその分短くなるから良いね。灰猫と千本桜は、刀身が消えるから、持ちやすい。

雀蜂は指に着けて暗殺をする時には有利だね。

後は刀身が長くて重いから、振るのがキツイ。

斬月なんて始解状態のまま出てくるから持てない。卍解すればまだましになるんだろうけど……。

後は……多すぎてまだ使ってないんだ……。

「それじゃあ、魔法と剣の訓練でもしようか」

おっと、地の文で話してたら、いつの間にかお父さんが今日の訓練を決めれたようだ。

「分かった！」

「一つ言っとくが、あのオリジナル魔法は禁止だぞ？」

「分かってるよ。デバイスしか使わないから」

オリジナル魔法……デバイスを使わなくても、詠唱で使える魔法……。

まあ、オリジナルじゃなくて、ネギまの何だけどね。

俺の始動キーはエヴァのをパクりました。

マギア・エレベア  
闇の魔法は使えないよ？流石に雷速瞬動とかは使いたくないよ。  
人間で居たいのさ……後は、ガツシュ達の呪文が使えます。

まあ、流石に口から雷は出さないよ？そこはゼオンを模して手から

出すよ。

因みに、これが管理局にバレたら間違いなく研究対象に指定されると、お父さんに言われました……。目がマジだったとです……。

「それじゃあ、始めようか。アイギス、セットアップ！」

《スタンバイレディー、セットアップ》

「クイーン、セットアップ！」

《セットアップ》

俺とお父さんは、二人同時にバリアジャケットを纏う。

お父さんのバリアジャケットは、騎士甲冑の様だ……。あれ、シグナムみたいな固っ苦しい奴。

俺は……。まあ、最初どんなバリアジャケットにしようか考えて、ブリジットの格好にしてみた。

どうやらバリアジャケットのデザインは選べるらしい。そして下はスパッツ。

「相変わらずのバリアジャケットだね……。アニス……。」

「修道服っぽくて可愛くない？」

「時々、本当にアニスは男の子なのか、心配になってきたよ……」

まあ男の子じゃなくて男の娘ですけどな。

心配するなお父さん、ちゃんと俺にも息子についてるから安心しろ  
コノヤロー。

等と、心の中で言ってみる。

「それじゃあ、先ずは剣からだ」

「うん！」

「ハアッ！」

お父さんが俺に剣を振るってくる。

俺はそれを避けて、反撃に回る。だがお父さんはそれを読んでいた  
かのように回避し、再び斬りかかってくる。

「プロテクション！」

ガキン！

「おお、だいぶプロテクションを瞬時に出せるようになってきたね。でも、まだまだだ！」

ギギギ！ピキ！ピシ！

うっそおん！？ヒビ入って来てますやん！

完全に割れる前に、後ろに後退つと……。

俺はプロテクションを消したと同時に、後ろに下がる。

「ハアツ！」

ガキン！

「そら、下ががら空きだ」

ガッ！

足を払われ、俺はそのまま地面に転ぶ。

それを好機と言わんばかりに、お父さんは追撃をしてくる。

「ハア！」

「爆ぜろ！」

ドガァン！！

俺は故意に魔力を暴走させ、空間を爆発させる。  
そして煙を利用して、お父さんとの間合いを取る。

……よし、これぐらいで良いだろう……。俺は魔力を剣に流し、構える。

「いつけえ！！」

ズバン！！

おっし！直撃コースk t k r！

やっとお父さんに一撃を入れれる時がキターーーーー！！

「喰らえ！牙王炎！」

……あれ？今のって始解だよね？

……あれ、お父さんの魔力が上がったよ？何で何で？おかしいなあ  
……何か大きい炎の龍が浮いてるよ？  
……どーしよう……。まさか斬魄刀使われるとか……思ってもみな  
かったよ……。

「いやあ、まさか私が斬魄刀を解放してしまうとは。H A H A H A  
H A！」

「せっけえ！せっけえぞお父さん！何だよそれせっけえよ！せっけ  
く一撃入れたと思ったのに！柏餅やつから斬魄刀しまえコノヤロ  
ー！」

おっと、少し素が出てしまった様だ……。  
つか、H A H A H A H Aじゃねーし！！ぜってえ確信犯だ！ぜって  
えそうだ！

「でも、これは私も少し大人げなかったと思う。反省はしている、  
だが後悔はしていない！」

「……もう良いよ……」

何かこのお父さん……威厳の欠片もねえ気がしてきた……。  
まあ、これはこれで、有りなのかもしれないけど……さ、少しは  
何とか粘ってみようよ……むしろ安易に斬魄刀解放しちゃ駄目じゃ

ん……。

そこはプロテクション貼るとかさ、ブリッツアクションヤソニック  
ムーブで避けれたはずだよ？

まさか、子供の攻撃に、わざわざ斬魄刀って……ハア……。

「そうか……じゃあ次は、魔法のの練習だ」

「はい。クイーン、杖お願い」

《了解しました》

「アイギス、ガントレット」

《オーケー》

……うん、ガントレットって、近距離だといつも思うんだけど……  
中々どうして……お父さんの砲撃や魔法弾は、手から出るんだ……  
しかも正拳突きに乗せてくるからさ、威力マジキチ……。  
アンタは何処の薬味坊主なんだと言いたい。

「行くよ！アップ！」

俺のその掛け声で、十数発の魔力弾が周りに発生する。  
まあ、なのはも結構掛け声使ってたし、違和感無いとは思う。

「ストップ！」

そして、周りに魔力弾を発生させたまま固定する。

「ホント、アニスは私以上に才能豊かだな。そんな使い方、一度も考えたこともなかったよ。ハアツ！」

そう言いながらちゃっかり魔力弾放つとるやないですか……。  
まあ、いいや……。結構数多いけど、先ずは回避を試みよう……。それで、避けれない奴が出てきたら、一発ずつ使って落とそう。

「よっ！ほっ！はっ！おっと！危な！きゃっ！うわ！あらよっと！こなくそ！」

よし、計九発は避けれた……。でも、後ののはキツイな……。  
お父さんの魔力弾は数にして約四十発……。キツイ……。子供の訓練になんちゆう数を……。

「これは無理だな、ゴー！」

俺は一発ずつ使いながら、的確に落としていく。  
途中、魔力弾は切れたが、簡易砲撃で逃れた……いや、マジで危な  
かったよ……。

~~~~~

「よし、これで今日の訓練はお終い！」

「ふにゃ〜……………疲れたあ〜……………」

「よしよし、良く頑張った。さ、帰ろうか」

お父さんは俺の頭を撫でて、抱っこする。

お父さんの腕は暖かいのう……………あ〜、今日も疲れた……………今日は結構
長い時間訓練したな〜。

「……………お父さん……………」

「何だい、アニス」

「……俺……強くなれるかな……」

「アニスならなれるさ。既にBクラスの魔導師には遅れを取らない程度には強くなってる。後三年くらいしたら斬魄刀も使える様になるかもしれないし、それに、その時は今よりもっと強くなってるさ。アニスは生まれつき魔力量が多いんだ、きっと、強くなれるよ」

「……ありがとう……お父さん……」

微睡の中……お父さんの優しい言葉を聞きながら……俺は静かに目を瞑った……。

第四話 アニスの訓練風景（後書き）

三歳の息子に斬魄刀を開放するお父さんマジリスペクトっす

まあ、そんな感じの第五話、いかがだったでしょうか？

次回はもしかしたらキンクリするかもしれません……このまま三歳のころのアニスの話を書いていたら、いつになったらはやての所にたどり着けるか……

本編&儀式開始編辺りで、アニスのプロフィールを書きますゆえ、しばしお待ちを

それでは、読んでくださりありがとうございます

第五話 鬼神の伝説と、別れと誓い（前書き）

まあ、疲れた……

さて、今回は少しシリアス&正解があります

ご注意を

では、本編始めます

第五話 鬼神の伝説と、別れと誓い

良くも悪くも無く、普通の幸せを実感しながら、早六年……あ、キ
ンクリし過ぎだって？気にしないの

まあ、そんな冗談も言ってもらえないんだけどね……。
特にこれと言って、知りたかったわけじゃない……。
俺としては、お父さんの仕事なんて、興味がなかった。
ただ、一族の家業を継いだ、程度にしか聞いてい適ったので、会社
の社長かなんかでもしてるのだろう……。そう思っていた。

「貴方……」

「ああ、私としても、信じたくはなかったよ……」

「アニスは、やっぱり」

「ああ……アリス……」

「……貴方……どうします？」

……さて、このシリアスな空気……どうしたら良いのやら……。

どうも、アニスです。

ちよつと寝る前にホットミルクを飲んで寝たので、少ししてから尿意に襲われたのでトイレに起きたら……こんな話に遭遇してしまいました……。

「こつという時……やはり我が子を守る手だけが一つや二つだけ……
というのが……情けなくて、申し訳が立たないよ……」

「仕方ないわ……それほど、貴方が切羽詰まってるんですから……」

「……どうして……我が子が……我が子が……禁忌の子だとわ……」

禁忌の子？何だよ……それ……。

「少なくとも、後一〜二年は大丈夫だと思っていた」

「でも、もう明日攻めてきそうな空気がありますね……」

「一応、隠蔽の魔法を使つてのだが……もう、無理か……だから、
私の命に代えても、あの子と、君は守り抜く」

「何で……そこまでして」

「……何、私は十分幸せだ……君と恋仲になれて……アニスと言う……私とお前の、両方の血を受けてくれた子供が出来て……そして、その両方を、胸を張って守れる今の自分に……私はもう、何もいら……ない……」

「……いない……何て……悲しい事……言わないで……！」

「……アリス……明日、全てを話そう……」

「ええ……分かってるわ……あの子が……鬼神の子と言う事を……」

鬼神の……子？

何だよそれ……鬼神の子って……。

「もはや、一刻の猶予もない……私の仲間も、もう騒ぎ立てている。鬼神の子が復活した……と。私は、今まで一緒に戦ってきた仲間と、殺し合うのが怖い……見る、今だって、考えただけで手が震える……。確かに、私は何百何千と、人間を殺してきた……それでも、犯罪者を裁くことに、何も感じなかった」

人間を闇討ち？それが仕事？……何なんだよ……一体全体……どうなってるんだよ……クロイツベル家ってのは……！？

「だが、我が子はその対象になるとわ……思いもよらなかった……」

「貴方……」

なあ………どういう事だよ……お父さん、お母さん……。

俺が、

鬼神の子？俺は、殺されるべき対象なのか？

「……私………決めたわ………貴方と共に、戦います」

「それは駄目だ………君には、アニスに着いてもらいたい。戦闘は私に任せて、アニスと一緒に逃げてくれ！」

「私には………やはりどちらも選べないの。クラウド………アニス………どちらを取るべきか。私は………あの子を、幸せにしたい、貴方と一緒に。だから、共に戦いましょう………そして、生きて………アニスと一緒に、幸せに暮らしましょう………？」

「お前………まさか………」

「ええ、あの子だけでも逃がします。そして、私達が勝って、自分

たちの足で……あの子を迎えに行きましょう……?」「

「……転移させる場所は決まっているのか?」

「第97管理外世界、地球。ここは魔法文化も無く、管理局も手が出せないし、ほとんど知らない地よ……」

「……分かった……あの子には辛い思いをさせてしまつな……」

「ええ……そうね……」

……何なんだよ……何なんだよ、その話は……。
鬼神の子?戦う?……どうして……そんな話をしてるんだよ……。
俺はフラフラしながら、自分の部屋に戻り、そのまま……眠りについでしまった……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

次の日の朝……何故か今日の空気は、いつもと違っていた……。  
アंक以外の使用人は皆居なく……この部屋には、俺とお父さんとお母さん……そしてアंकのみとなっている。

「……お父さん……話とは何でしょうか？」

「……ああ、何だ……その……な……」

煮え切らないお父さん……それを見て泣きだしそうになっているお母さん……。

俺は、不意に、昨日の事を口にする。

「……鬼神の子……」

「！……アニス……」

「昨日、二人で話してたよね？俺が鬼神の子だって……」

「……聞いていたのか……」

「盗み聞きするつもりはなかったんです……たまたま、トイレに起きて、部屋に戻ろうとした時に……偶然……」

俺の話聞き、お父さんは神妙な顔をするが……すぐに観念したよ  
うな顔になる。

「すまない……アニス……」

「何故、謝るんです?」

「自分の息子を救う手だてが、もう一つしか思いつかなくて……本  
当にすまない!」

「貴方……」

「……それより、話してくれますか?何故、僕が鬼神の子と呼ばれ  
なくちゃいけないのか……」

「ああ……説明しよう……いきなり、そんな事を言われても……理  
解できないだろう……」

そう言っつや否や……すぐに、お父さんは鬼神の子について、語りだ  
した……。

ベルカ時代……まだクロイツベル一族が、そんなに栄えていない時代の時の話……。

斬魄刀を使う我ら一族の中に、アイリスと言う、クロイツベル一族の天才が居た……。

彼はクロイツベル家の中でも異質の存在で、僅か一年未満で始解を習得、そして翌年で斬魄刀を屈服させ、二年で卍解に至った者だった……。

そして、そんな彼には、更なる異質があったのだ……

そう、彼は斬魄刀を複数所持する者だったのだ……。  
確かに、二本使える物は、10年に2〜3人、居るか居ないかの話  
だったのだが……。  
彼はその数30以上の斬魄刀が使えたのだ……。

そして、そのものの戦い方は……。狂気に満ちていた……。  
ある者はばらばらに、殺して解して晒して並べてあり……。ある者は、  
氷漬けにされ、ある者は、火達磨になり……。ある者は、雷に撃たれ  
……。ある者は、毒で殺され……。まるで、自分の斬魄刀の能力を試し  
たいが為に、剣を振るっている存在だった……。

そして、ある事件が起きた……。  
彼は何を思ったのか……。他のクロイツベル一族の者の斬魄刀を奪い  
取り、契約権を奪ったのだ……。それも、斬魄刀の能力で……。

そして彼は、裕に60本は超える斬魄刀と契約を結び……狂気に飲み込まれた……。  
その者は、鬼神と言われ……彼を殺すのに……クロイツベル一族が総力を挙げて……倒したのだと言っ……。

だが最後に、鬼神は死に際にこう言い放った……。

「いつの日か……俺と同じ……複数斬魄刀を所持出来る……子が……生まれるだろう……ククク……それは、俺の生まれ変わりだと思……え……」  
「……」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「そして、お前が生まれたわけだ、アニス……」

……そう言う事だったのか……だが、確かに俺は、お父さんとの斬魄刀の訓練で、二本試したが……何故、俺が他にも所持しているのかが分かったんだ？

「でも、お父さん……俺は斬魄刀を二本しか使ってませんよ？」

「……アニスが、時々結界を貼って、斬魄刀を開放してるのは知っている……。斬魄刀を解放したら、多かれ少なかれ、使用者の魔力の質が変わるんだ……。だがアニスは……。その移り変わりが凄く激しく……。斬魄刀解放時の魔力量が、いつも違ったりしたのが分かった……」

……そう……だったのか……。

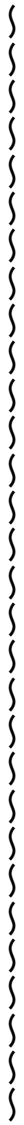
……調子に乗った……。俺の落ち度だ……。

「……ただ……他の人に知られるような事はしていないんだけど……」

「クロイツベル一族の中には、予言が出来る斬魄刀所持者が居る。仕事で集まる時に……。取集が掛けられたんだ……。そして……。疑われたのが私だ……。ここ九年間の中で、クロイツベルの一族で生まれた子供が、お前しかいなかったからだ……」

「……」

もう、何も考えられなくなった……。



~~~~~

お前を転移させるのは……明後日……。  
魔力がまだ十分に溜まっていないから、もう少し時間が掛かる……。  
それまでに、荷物の整理をしておきなさい……。

そう言われて、家族会議的な物は終わった……。

「……どうするんだ、お前」

「……出来るなら、一緒に戦いたい……」

「……死ぬかもしれないんだぞ」

「それでもだよ。大事な家族見捨てて、俺だけ一人おめおめと逃げられる訳がない……」

「お前を狙ってくる連中だぞ？お前が前に出せば、たちまちそいつらの格好的になるだけだ……たぶん、お前の親父も、母も、他の奴に足止めされて終わりだ」

「……なら……どうすれば良いんだよ！！それしか他に手がないん

だ！……！俺に、もうそれ以外に考えられないんだ！……！」

「……はぁ………」

アंकはため息をつきながら、俺の頭を撫でる……。

「少し落ち着け………」

「……アंक………」

「お前が逃げれば、後はあの二人が安心してその場から離脱出来るだろう。それ位の腕はある筈だ……俺が何で、お前の親父に、お前を守ってくれて言われたと思ってるんだ………」

「アंक………」

少し落ち着きを取り戻した俺。  
取り敢えず、荷物は言われたとおり整理しよう……そう思ってベ  
ツドから立った瞬間！

ドガアアアアン！！

何処からか爆発音が聞こえた……。

「アंक！」

「ああ！」

俺とアंकは、急いで部屋から出た……。

ゴアア！ドガア！

移動する度に、爆発音が激しくなる……。  
もう……攻めてきたのか？

こんなタイミングで……攻めてこなくても……。  
何で……このタイミングなんだよ……！！

俺は音がより一層激しく聞こえる部屋のドアを思いきり蹴破る。

「お父さん！お母さん！」

そこには、何人かの敵と対峙してるお父さんとお母さんの姿が目

映った……。

相手は黒い服に身を包み、顔を見えないように隠してある……。

「アニス！何故来たんだ！？」

「いきなり爆発音が聞こえたから！」

「早く貴方は逃げなさい！！」

「ほう……こいつが、鬼神の子か……」

一人の黒服の男が、俺を見るなり、襲い掛かってくる。  
ヤバい、反応が遅れっ……。

ガキン！！

「クッ！」

「アंक！」

「はぁ！！！」

バキッ！！

アंकは右手だけどグリード化して、敵の攻撃を受け止める。だが、そこは斬魄刀……幾ら異形の腕と言えど、受け止めただけでダメージを与えられる力はある。

「アंक君！早くアニスを連れて逃げるんだ！！」

「私達がここを抑えてる内に！」

二人がそう言い放つが……お母さんの結界が、その一瞬の隙に破られる……。

「きゃあー！」

「アリス！」

「お母さんー！」

「……飛ばせ、飛び魚」

シュン!!

敵が斬魄刀を開放して、お母さんを斬った瞬間……お母さんの姿がいきなり消えた……。

「そん……な……」

「アリス!グアツ!」

バキッ!ドガアツ!

そして、お父さんもお母さんが消えたことで隙が生じ、蹴り飛ばされる。

「貴方は殺しませんよ?貴方達はクロイツベル一族の中でも、優秀な部類に入りますから……ただ飛ばすだけにします……」

ザシュツ!シュン!!

そして……お父さんも斬られ……飛ばされた……。

「お父……さん……？……お母さん……？」

その瞬間、俺は崩れ落ちた……。

俺が……俺が……出て来たせいだ……俺のせいで……お父さんとお母さんは……。

「安心すると良い、君の両親は、安全な所に飛ばしました……まあ、今から死ぬ君には、関係ない事だと思えますけどね？」

「お父さん……お母さん……」

バキッ！！

「アニス！逃げるぞー！！」

アंकが俺に近づいてくる敵を殴り飛ばして、俺の所に近寄る。

……アंक……。

「化け物は化け物と呼ぶ……ですか……良くこんな化け物と一緒に住めましたね、あの人達は……殺れ……」





「……………群鳥氷柱……………」

俺は敵に向けて、大量の氷柱を放つ……………氷輪丸、しかも卍解の状態の攻撃をかわしたり、相殺したりする術も無く、ほとんどの者が、巨大な氷柱によって絶命した。

「う……………そだろ……………そんな……………馬鹿な……………」

いや、一人だけいた……………斬った物を何処にでも飛ばす能力でもあるのだろう……………お父さんとお母さんと飛ばした張本人は……………所々血が噴き出ていた。

「……………」

「ま、待ってくれ！止めてくれ！」

「……………黙れ……………竜霰架」

ザシュー！ピキピキ！！

「うああ！凍る！嫌だ！！嫌だああ！！」

ピキピキ……。

男は完全に氷に成り果てた……俺はその氷を殴り砕く……。それを終えた瞬間、氷解は解けて、俺は倒れこんだ……。

「アニス！」

「アン……ク……」

「しっかりしろ！ただの魔力切れだ！」

「……アン……ク……お父……さんと……お母……さんが……」

「あの二人は生きてる！あの男が言っただろ！！」

「……なら……探さない」と……」

俺はそう呟き、魔力切れで動かない体を、無理やり動かす……。だが、指一本とも、動こうとしない……言う事を聞かない……。

「今はまだ駄目だ！お前は既に、狙われる存在だ！ここに居ては、満足に動けない！ここは一回、身を隠すべきだ！」

「……でも……そうしたら……お父さんと……お母さんが……あいつらに……何をされるか……」

「あいつらなら大丈夫だ！約束したんだろ！？生きて、元気で、また再開するって！転移させる時点で、あの二人は言ってただろ！！」

「……アंकウ……」

俺は、自分の愚かさ、不甲斐なさのせいで泣した……。悔しい……。自分のせいで……。両親を危険な目に晒してしまったことに……。

「……アニス……」

アंकウは俺の名前を呼びながら、俺をギュッと抱きしめる……。強く、強く……。俺が潰れるんじゃないかと思うほど、強く……。

「……安心しろ……。俺が……。お前を守る……。そして、お前の両親

も、見つけ出してやる……」

「……アंक……」

「俺はお前のパートナーだ！！何があっても、守ってやる！！だから、俺の手を掴め！！お前は、ここで終わるべき人間じゃないだろ！！アニス！！」

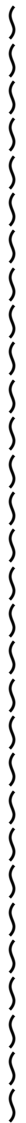
「……そうだね……」

俺は……覚悟を決めた……。  
必ず、お父さんとお母さんを見つけ出してみせる……絶対に……。

「……お願い……アंक……俺を……連れて逃げて……計画通り……に……」

「分かった……行くぞ……」

そう言って、アंकは俺を抱きかかえ、お父さんとお母さんが考えた計画を実行することにした……。



~~~~~

「ここか……」

「……うん……」

地下室……ここにはお父さんの所有物であふれかえっている。
その一つに、転移装置が置いてある……俺とアंकはその中に入り、
スイッチを押す。
だが、まだ魔力が十分に溜まってないのだろう……起動しない……。

「やっぱり……駄目……か……」

「……アニス、これって、他者の魔力を込めれる事って出来るのか？」

「……分からない……やった事……ないし……聞いた事も……無いから……」

「……だったら、試してみる価値はありそうだな」

数秒悩んでから、すぐにアंकは口を開く。

そして出た答えが、とりあえず魔力を装置に流すと言っ事だった…。

「ハアッ！」

アंकは完全グリッド化をし、魔力を転移装置に思いきり流す……。
……すげえ……これがアंकの全力か……。

「グッ！まだか！」

「……もう……少し……」

ゲージがもう少しで満タンになる……後50……40……30……
20……10……。

「よし……溜まった！」

「クッ！ハア、ハア……俺も、魔力切れ起こしそうだ……」

そう言って、アंकはすぐに人間の状態に戻る。

まあ、一日二日掛けて魔力を貯める必要がある装置だしね……アंकは頑張った……。

「もう設定はしてあるんだな？」

「……うん……大丈夫だよ……」

「それじゃあ、今度こそ……」

アंकは装置のスイッチを押す。

魔力が十分になったので、さっきと変わって、中の明かりがつく。そして、装置が作動した……。

《転移を開始します……場所は、第97管理外世界。ただちに転移します……》

機械音が鳴る響く……。

ああ……意識が……瞼が重くなってきた……。

その瞬間……俺とアंकは、姿を消した……。

第五話 鬼神の伝説と、別れと誓い（後書き）

結局 b o r b o r

いやあ、長い長い……疲れた……

アंक×アニス……ありだと思えます……

今回は……はやて視点からのスタートとなります

やっと原作キャラでおお!!

そして、近況報告!

何と!

リトバスのラジオ、ナツブラで!

私めの投稿メールが!

あの、私の憧れの！アイドル的存在の民安さんに！

読まれたああああああ！！

……ああ、今日、月曜日に配信されたのを聞いて、トークランキングの一発目で読まれたので吹いたwwww

いやあ、うれしいな……

そんなわけで、近況報告でした

では、読んでくださりありがとうございます

第六話 アニス、はやてと出会ったの事（前書き）

いやあ

今日は学校のプロジェクトでチーズ作ってたお

朝の六時半から学校に行って、そこから夜の六時半辺りまでずっと
作業

きつかった……眠かった……足が痛かった……そして明日もあると
言う恐怖

……泣きてえ……

つうわけで、本編始まります

第六話 アニス、はやてと出会うの事

はやてサイド

「んっ……ふぁ〜……」

いつもと変わらない朝。いつも通りの時間に起きて、ウチはベッドから降りて、車いすに乗る。

せやけど……何やるうか……いつもと感じが違う朝になりそうなのは……ウチの気のせいやるか……。

そう思いながら、リビングのカーテンを開けて、外を見る……。

「……はあ？」

いつもと変わらない風景……の筈が……二人の人が……男女が倒れとるのが分かった……。

男の人は、女の子を庇う形で気を失っており、女の子は……さながら騎士に守られる姫の様に綺麗やった……。

「……アカン……神話の読み過ぎや……」

ウチは自分の目を擦り、もう一度外を見る。

「……やっぱり人が倒れとる〜!?!?」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「……んっ」

「ああ、どないしようどないしよう!?!?やっぱり警察!?!?それとも救急車!?!?ああ、どないしよう!?!?」

……何だこいつは……人の周りを車いすでグルグル回りやがって……。  
……  
そっぴゃあ……アニスは!?!?……良かった、俺の腕の中か……。

「よいつしよ……」

くっ……転移装置に魔力を流し過ぎた……体が重い。  
俺はアニスを起こさないように起き上がり、そのまま抱きかかえる。

「あ、起きたんか!?!?」

「少し静かにしろ。こいつが起きるだろうが」

「あ、………すいません………」

「………それより、ここは………」

見渡す限り、家があり………ここもどうやら、人様の敷地ならしい。もしここが魔法文化の無い世界なのだとしたら………なぜ、この家の中に魔力反応を感じるんだ？

「あの、大丈夫ですか？」

「……………」

少し訛りの入っている子供が声を掛けてくる………。  
そいつは足が不自由なのか、車いすに乗って、こちらを見上げている。

「ああ、少なくとも俺は大丈夫だが………こいつはどうだかな………」

アニスとは昨日の戦闘で、魔力を根こそぎ斬魄刀に持って行かれた。普通の奴なら半日は寝込むだろうが、こいつなら何時間かで目を覚ますだろう……。

「あの……」

「何だ？」

「急ぎじゃないんですしたら、ウチの家で休んでいきませんか？」

「……………」

願っても無い提案だ……だが……。

こいつの家の中の魔力反応が気になるな……、一体、何を企んでる、こいつ……。

だが、欲望があるわけでもないし……その目には、悪意の欠片も移ってない……ただの善意か？

だとしたら、一刻も早く、こいつを休ませてやりたい……。

ここは、背に腹を変えられないか……。

「ああ、迷惑を掛けるな」

「なら、こっちから入ってください」

ガキが指を差す方には玄関があった。  
俺はアニスを抱えながら、その玄関へと向かい、中に入る。  
そして、外から戻ってきたガキがこちらに手招きをしたので、俺はそちらの方へ向かう。

「ウチの部屋で申し訳ないんやけど、寝かすならここの方がええ。  
他の部屋やと、少し準備に手間取ってしまうさかい」

「すまん」

「いえいえ、これも何かの縁ですし！」

「そうか……」

俺は部屋に入り、ベッドにアニスを寝かせ、掛布団を掛ける。

……これで先ずは一安心か……。  
そう思いながらふと振り返ると……鎖で縛られて置いてある黒い本に目が映る。

これか……魔力の元は……こいつ、魔導師か？いや、だったら俺達の魔力を感知できるだろう……。

「あの、どないしたんですか？その本をじつと見つめて」

「っーいや、何でもない……」

「そうですか。あ、ここで話をしてたら起こしまつな……聞きたい事もあるんで、リビングに来てください」

確かに、いきなり人ん家の庭で気を失っていたんだ……聞きたい事なんぞ山ほどあるだろうな。  
さて、何処まで話せるか……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「うつ……くつ……！」

体が重たい……まるで、自分の体じゃない様だ……。
そんな体に、自分は鞭を打ち体を起こす……。

「知らない部屋だ……」

先ず第一声がこれ……。
何処だここ……つつか、見覚えがあるんだが……。

「それよりも……俺は一体、何でこんな所の……あっ！」

思い出した！

昨日の夜、襲撃されてお父さんとお母さんが飛ばされたのを見て激情し、卍解を使って魔力切れを起こしたんだ。

そして、そのままアंकに抱きかかえられて、転移装置に乗って……地球に……。

「……そう言えば……アंकは？」

俺の近くには居ない……。

まさか……転移の時に離れ離れになっちゃったとか!?

そんなぁ……アंक……。

「……ぐすっ……アंकッ……ぐすっ……アंक……」

寂しい……お父さんもお母さんも何処かに行ってしまった、今度はアंकまで……。

お父さん、お母さん、アंक！

「アंक……。アंक……。……うわあああ！……」

寂しい……あれほど近くに居た人達が、一日で一気に居なくなってしまう……。

「お父さん！お母さん！アंक！うぁっ……………アंकウ……………さみっしいよっ……………」

胸が苦しい……………俺は、こんなに依存してたんだ……………。
お父さんやお母さん以上に……………アंकに……………。

「アン……………ク……………！うぁっ……………！」

その時、この部屋のドアが開かれる。

俺は泣きながら、ドアのそこを向いた……………そして、顔を出したのは……………。

「おい、どうしたアニス」

居なくなっただと思って……………俺のパートナーの、アंकの顔だった……………。

俺は無意識の内にベッドから出て、アंकに抱き着いた。

「アंकッ！」

「おっと！……どうした、いきなり」

「アंक！アंक！アंक！」

「ああ、俺だ！だから何回も俺の名前を連呼すんな！！」

「アंकうゝ……グスッ……アंकも、何処かに居なくなっちゃったと思った……よ……怖かったよ……！うあっ……」

「……泣いてんのか？」

「声の……感じで……分からないかな……？普通……グス……」

「何で泣いてんだよ」

「だって！だって……お父さんも、お母さんも……居なくなっちゃって……一緒に逃げ来たアंकまで、居なくなっちゃったかと思っ
て！」

「……はあ、俺がお前を置いて何処かへ行くと思ってんのか？バ

カ

そう言いながら、アंकは俺を抱きしめ返す……。

「お前を置いて何処かに行くわけないだろ。誓ったろ？お前を守るって、必ず両親を見つけて出してやるって」

「……アंक……」

……うし、少し落ち着いた……。

これで何とか持ちこたえれそうだ……主に精神的な意味で……。
それより、ホントにここ何処なんだろうか？

「なあ、アंक……ここ何処分かる？」

「俺が知るわけないだろ。俺も気が付いたらここに居たんだ。詳しい話を聞きたいなら、リビングにここに住んでるガキに話を聞くと良い」

「ここに住んでるガキ？」

アंकサイド

取り敢えず、一旦こいつから話を聞かないと下手に動けないな……。アニスの事もあるし……。

「粗茶ですが、どうぞ」

「どうも」

ガキが出したお茶をすすり、俺は本題を切り出す。

「……何でお前の家の敷地で気を失っていたか、だろ？聞きたいのは」

「ええ、そうです」

「話せば長くなるが……俺達は少し、遠い所か逃げて来た……そういう解釈で話を進めるが、良いか？」

「……何や？駆け落ちでもしたんか？」

ブーッ！

俺は飲んでいたお茶を吹き出す……。
何言ってるんだこいつ！ガキが益せた台詞言いやがって！

「なわけねえだろ！」

「だって、あんな小っこい可愛らしい子を抱きかかえて気を失ってたんやで？まるで姫を庇った騎士みたいにな。でも、あんな小っこい子と駆け落ちって……犯罪やで？」

「だから違ってるって言うてるだろ！人の話を聞きやがれ！！」

「あはは！冗談やて冗談。それで、何で倒れてたん？」

「ああ、実はな……さっき寝かした奴居ただろ」

「あの可愛い子やな？その子がどないしたん？」

「あいつ、良い所のお坊ちゃんなんだよ。それで、そいつの家がつい昨日襲撃されてな。俺はあいつと、命からがら逃げて、ここで気を失っていたんだ」

「……ちよつと待ちいな……」

やっぱ……信じられるわけねえか……。

まあ、いきなり突拍子過ぎて、着いていけるわけもないしな。

「あの可愛い子が坊ちゃん!? お嬢様や無く坊ちゃん!? あの子男の子やったんか!?!」

「気にするとこそそこか!?!」

「当たり前や! 女のウチよか女の子らしいで!? 世の中不公平やわ!?!」

「まあ、お前よりは可愛いと俺は思うが……って、俺は何言ってるだ!」

ヤバイ……あいつのせいで狂って来たな俺……。

「それで、その子が命を狙われとる事やけど」

「サラッと本題に入りやがったな……」

「行く宛とか無いんやったら家に住まへんか？一時身を潜めるつもりで」

「……それを俺に言われても、決めるのはあいつだし。それに従うのが俺だ」

「結構な忠義心やな」

「はっ、あいつしか仕える奴が居ないんだよ。さて、少しあいつの様子を見に行ってくる」

「分かったで」

俺はそう言っつて、さっきガキに案内された寢室に向かう。向かったのだが……。

「お父さん！お母さん！アンク！うあっ……………アンクウ……………さみっしいよっ……………」

……ああ、明らかにあいつ引きずってんなこれ……………はあ、相変わらず、戦闘は強いが、精神的に駄目な奴だ。

俺は内心でため息をつきながら、ドアを開ける。

「おい、どうしたアニス」

部屋に入り、アニスに声を掛けた。

その瞬間、アニスはベッドから飛び出て、俺に抱き着いてくる。

「アंकッ！」

「おっと！……どうした、いきなり」

「アंक！アंक！アंक！」

「ああ、俺だ！だから何回も俺の名前を連呼すんな！！」

「アंकうゝ……グスッ……アंकも、何処かに居なくなっちゃったと思った……よ……怖かったよ……！うあっ……」

「何でこいつ……こんなに泣いてんだ？」

まさか、いきなり俺が居なくなつたせいか？……はあ。

「…………泣いてんのか？」

「声の……………感じて……………分からないかな……………？普通……………グス……………」

「何で泣いてんだよ」

「だって！だって……………お父さんも、お母さんも……………居なくなっちゃって……………一緒に逃げ来たアंकまで、居なくなっちゃったかと思っ
て！」

案の定だ……………こいつは……………。

「……………はあ、俺がお前を置いて何処かへ行くと行ってんのか？バ
カ」

そう言いながら、俺はアニスを抱き返す……………。
全く、俺は男だぞ？簡単に抱き着きやがって……………つと、こいつも男
だったな。

「お前を置いて何処かに行くわけないだろ。誓ったろ？お前を守る
って、必ず両親を見つげ出してやるって」

「……………アंक……………」

何であんな恥ずかしい事を言ったと思っただこいつは。もう絶対、お願いされても言いたくない台詞だ……………。はあ、やれやれ……………さて、どうしたものかな……………。

「なあ、アंक……………ここ何処分かる？」

「俺が知るわけないだろ。俺も気が付いたらここに居たんだ。詳しい話を聞きたいなら、リビングにここに住んでるガキに話を聞くと良い」

「ここに住んでるガキ？」

「ああ、行くぞ」

俺はそう言っつて、アニスを抱きかかえる。

「ちょっ！？何で抱きかかえるのさ！？」

「うるさい、昨日魔力切れ起こした奴が何言っただ！良いから黙って大人しくしてろ！」

「……あーっー……」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「どうも……アニス・クロイツベルと申します……」

「これはご丁寧に、八神はやて言います。宜しゅうお願いします」

……結論、ここは地球で海鳴市であり八神家でした……。  
まあ、何という確率……俺に幸運EXでも付いてるんだろうか？

「あの、アंकと何処まで話しましたか？」

「アंक？ああ、この人の事やな。まあ、君がお金持ちの坊ちゃん  
って事と、命を狙われてるって事までや」

「ま、まあ……大まかに説明するとそうかな……あはは……」

アंकめ……。

俺はアंकをキツ！と睨むが、顔を背かれました……。

「それで、その、アंकさんにも話したんやけど。身を潜めるって事で、しばらく家に住まへんって言ったんやけど。アंकさんには決定権が無いって言われてもって、決めるのはアニス君だって」

「まあ、そつだろつね……」

うん……。

まあ、命を狙われてる事は間違いないけど、あの次元世界内の事だけだし……ここには被害はそう起きないだろう。

それに、住むところは愚か、お金もないし……家なき子だしね……。

「……本当にここに泊めてもらっても良いのでしょうか？」

「ええ、ウチは構いませんよ。どうせウチだけしか住んでへんしな」

「あつ……ごめんなさい……」

「うん、気にせんといてアニス君。もうウチは気にしてないさかいに……それで、どや？」

「……あの……不束者ですが……よろしく願いします……」

「………使い方間違つとるよ………アニス君………」

「えっ！？あれ？違つの！？………はう………」

「はやてサイド」

「何やねんこの子！可愛すぎやろ！」

「間違い指摘されて、恥ずかしくて顔赤うしとる………アカン………可愛すぎる………」

「こんな子が男の子や何て信じられへん！どっからどうみても女の子やん！」

「あ、あの………八神さん？」

「はっ！ど、どないしたん？アニス君」

「いや、いきなり俺の顔をじっと見て固まってたから………気になっちゃって………」

「あ、あはは………な、何でもあらへんよ？気にせんといて？」

「う、うん……分かったよ八神さん」

「それ」

「へっ?」

「その八神さんっての、何か他人行儀で、ウチは好かんねん。ウチの事ははやてでええよ?ウチはアニス君って呼ばせてもらっとなるから。それと、敬語も無し!今日から一緒に住む家族やからな!」

「八神さん……」

「アニス君……?」

「あ……は、はやて……ちゃん」

そう言つて、アニス君は恥ずかしそうに頬を染めながらウチの名前を呼ぶ。

~~~~~!可愛い!何やねんこの子!?ホンマにかわええ!

それに、ウチより年下なのに、こんなに行儀がええとわ……偉いな

あ……。

「あの、はやてちゃんって……何歳かな？」

「あ、ああ。ウチは今年で九歳やで」

「あ、そうなんだ。俺はもう誕生日来ちゃったから……はやてちゃんより一歩リード。えへへへ。俺も九歳なんだ」

……………な、ななな……………何やってええええええええええええ！？

この子、ウチと同じ年やおおおおおおお！？
身長ウチより結構差があるで！？ホンマに九歳！？おかしい！神様は不公平やっぱ……！

そしてそのハニカミ！……………もう……………何て言うか……………！

可憐な子たちを救うために！

第六話 アニス、はやてと出会った事（後書き）

最後ははやての心の叫びで終了

やっぱりはやては二期の頃が一番可愛かった!!

何故だろう？二期のはやてには一向に萌えられなかったんだ……

それにしても、明らかに腐臭が……まあ、アंकは落としますよ？

つつか、絶賛無意識攻略中ですアニス君

この中で攻略が難しいのは明らかアंकです

つつかしよっぱなから八神節が……

でもはやては可愛いので良いのだ!!

さて、ここから守護騎士達が出てくるまで日常&儀式編かな？

では、ここまで読んでくださり、ありがとうございました

第七話 意外な所で過去との決着（前書き）

はい、今日もチーズを作っております

やっぱりしっかりしたものを作るには、大変な工程を踏むんですね……

しかも、コストも掛かる……

牛乳40？を使って出来るチーズは大体4？

10分の1です

そして、価格を計算すると

大体牛乳の値段が？35円だとすると

40×35は1400円

価格だけ聞くと、あんまりコスト掛かってないじゃんとか思いますが

酪農家にとっては、結構な額です

だから、家の牛乳を使って作ったので……1400円もらったと言
う事になります

それに、光熱費、水道代なども含まれる、加工食品は……すっげえ
金使う……もうパネエは位な感じですねはい

さて、あんまし為にならない話をしてしまいました

本編始まります

第七話 意外な所で過去との決着

「ほな、買い物行こうか！」

唐突に、はやてが言い出す。

「買い物？」

「そや、ここに住むんやったら、ある大抵の物は必要になるやろ？」

確かにそうだ……。

俺らは荷物を整理する前に逃げて来たから、持ち物はデバイスと、魔法で空間にしまつてある魔具位の物だろう。

それに、今着てる服も、ここ日本ではかなり浮いている。

「あ、でもアニス君……命狙われとるんやつたな……」

「あ、それなんだけどさ。それはただアंकが大げさに言ってるだけで、実際は家でして来ただけなんだ、それで、ポディーガード達が捕まえに来る、とかそんなだからさ、気にしないで」

「そ、そやつたんか？もあ、アंकさんあんま大げさに話すからつ

「いつい信じてもうたわ」

「あはは、ごめんね。それで、買い物何だけど。行くよ、僕も逃げて来たから、必需品持って来てなくて」

「やろうなあ。ほな！ご飯食べたら行くこうか！アंकさんも、それでええな？」

「ああ、俺は別に構わない」

「あ、でもお金無いんだっけ……あつたとしても、あつちのお金だから使えないんだけどね。
さて、どうしたものか……」。

「あ、アニス君今、お金の事心配したやろ？」

「なっ！？読まれた！？読心術か！？すごい！はやてすごい！おっさんの次にすごい！」

「ドゥー」

「むむむっ」

「キャラ崩れてるぞ、いい加減その癖直せ」

「……あ……あぁ……し、身長が縮む……」

「あ、あはは……アंकさん、あんまりアニス君を殴らんとって、暴力は禁止やで？」

「……あ、今0.5m縮んだ……」

アंकに頭を殴られたせいで身長が少し縮んだ……解せぬ！

それにしても、良い拳骨だった、まさかこの年で拳骨されるとわ……いや、普通か。

「お金の事は気にせんでええ、ウチの親戚の人が、結構な金額のお金を送ってくれるんや。でも、こんな体やから、そんなにお金使わんねん。せやから貯まる一方でな、ウチ一人やと使い切れんのや」

親戚……ギル・グレアムか……。

あいつ、俺嫌いなんだよね、多くの犠牲より小さい犠牲ってのは良いけど……ただの復讐心に駆られてる奴のは、どんなに言葉を並べても復讐にしかない。

しかも、はやては関係無いだろ。はやても被害者だろ……。

「ん〜……でも……」

「気にせんでええって。無一文なんやろ？せやったら頼ってえな」

「……取り敢えず、返す手立てがないので体で払います……」

バキッ！

「ガキが益せたこと言ってるじゃねえ！」

「またもやアंकの拳骨……」。

「だから背が縮むから止めると……また縮んだじゃねーか……」。

「じ、冗談だよ〜……一々殴らなくても……」

「あっははは……さ、朝ご飯にしようか」

「そう言っつて、はやては車いすで移動してキッチンに向かう。やっぱり、車いすだと不便だろうな〜……」。

「はやてちゃん、手伝つよ」

「あ、ありがとうな、アニス君」

「ほら、アंकも手伝つて」

「はあ……」

そんなこんなで、居候始めました……。

はい……体で払う云々は、一応バイトして稼ごうと思ったんだけど……このナリと年齢じゃあ無理だわ……翠屋は……客寄せパンダになりゃ行けんじゃね？

男の娘がウエイトレス！とかさ。

へ？女装っ気？無いですけど何か？

「あ、アंकお皿出して」

「この戸棚で良いのか？」

「あ、大丈夫ですよ」

「アंक、箸出して」

「この引き出しに入ってるか？」

「はい、合ってますよ」

「アंक「お前も何か手伝え！」えへへ、バレちった」

まあ、当たり前だよな。

それにしても、やっぱりはやては料理上手いな。

「さて、盛り付け盛り付け」

「あ、それ俺がやるよ」

「そか？ならお願いするわ」

盛るぜえ、超盛るぜえ！

とは、流石にいかないよね……限度って物があるし。

「さて、運びますか」

お盆におかずやご飯を乗つけて運ぶ。
後は色々と用意をして、席に着く。

「ほな、いただきます」

「「……いただきます」

あれだ、いつも家ではトリコ風の挨拶をしていたから。
俺とアंकは少し戸惑ってしまったんや……。

「……もぐもぐ……」

「あ、あの……どち？」

「……うん、美味しいよはやてちゃん」

「そっかー、安心したで」

うん、マジで旨い……あぁ、何年振りだろうか……日本食を食べる
のは……。

アニス感動……うめえうめえ……味噌汁うめえ……。

「またそうやって汁物ばかり……野菜食べ野菜」

「うるさい、年がら年中アイス食ってる奴に言われたくないよ」

実を言うと、俺は汁物系の物が好きなのである。

味噌汁、スープ、ラーメンやうどんやそば……まあ、汁入ってりや何でも行ける。

「ホンマに二人は仲良しさんやなあ」

「まあな。こいつとはもう九年の付き合いになる」

「へえ、産まれた時から一緒何か」

「そうなるな」

「アंकクつたらこう見えてすっごいお節介焼き何だよ？この前何で俺がちよっと擦りむいただけ何に、いそいそと消毒液と絆創膏片手に走って来たんだよ」

「あはは、アंकさんもアニス君が大好きなんやね」

「ふん……」

あ、顔背けた……もう、照れちゃって。

この九年間で見つけたアंकの癖。それは照れたり嬉しい事があったりすると、こっやって顔を背けるのだ。

「あらら、嫌われてもった」

「違うよはやてちゃん。顔を背ける仕草をする時は、決まって照れてる時だから」

「アニス〜！」

「うわっ、こわっ！めちゃくちゃ怖い！いや、くちゃくちゃだ！くちゃくちゃ怖い！あはははー！」

「ったく……」

「冗談だよ冗談。怒らないでよ〜アंक〜」

「ふん……」

まあ、これは怒ってると言うより、少し呆れてる感じかな？
でもいつもの事なので、気にしない。

「ごちそう様」

「あれ？アニス君もうええの？」

「うん、もうお腹一杯」

「ったく、そうやって汁物ばかり飲むから入らないんだよ。今度からちゃんとした物を食べ」

「いや、汁物もあるけど、食が小さいから仕方ないじゃん」

それに、この体結構燃費良いしね。

あんましカロリー使わないし、良いね、低燃費……今はやりの低燃費……略してTNP。

「だから背が伸びないんだ」

「まあ、背についてはどーでも良いけどね」

だって、大きくなっちゃったらアंकに抱っこしてもらえなくなるもん！

人間は、いつまで経っても甘えたいものなんだよ……。それに、神様に頼んで背はあまり伸びないようにしてもらってるし。

「でも男の子なんやから、やっぱり背えは大切やで？」

「まあ、そうだけとさ〜」

「八神の言つとおりだな」

うるせーアंक……。

「んじゃ、ちょっと腹ごなしに動いてくる〜」

「あんま激しく動いたら腹痛くすんぞ」

「分かってるよ。あ、はやてちゃん、庭借りても良いかな？」

「何をするのか分からへんけど、まあええよ」

もう何かいつものものが体に染み込んでるんだね。
訓練とかしてたし、仕方ないか……。
そう思いながら、俺は庭に出る。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ハッ！フッ！」

一応軽くシャドーをしてるお。

とは言っても……決まった型とかは持ってないんだけどね。  
強いて言うなら、自分の魔力を爆発させて相手に流すとか、ぶつけ  
るくらいしか出来ない。

あれ、ソウルイーターの魂威みたいな感じかな？

「ふう……良い汗掻いた」

パチパチ！

拍手が聞こえたので、俺は家の窓の方を向く。  
そこにははやてが顔を出して拍手をしていた。

「ありゃ、見てたの」

「まあ、居間の前でやられてれば、見えてまうで」

「確かに」

「はい、タオル」

「ありがとう」

俺ははやてからタオルを受け取って、汗を拭う。  
うむ、我ながら惚れ惚れするのう……この髪の毛……。

「それにしても、アニス君髪の毛結構長いな。切らんの？」

「いや、短くしようとは何度も試みたけど。その度にお母さんに止められるんだ。勿体ないって」

「あはは、ウチもよう分かるわ。アニス君の髪、綺麗やもん」

「ありがとう。結構大変なんだよ？手入れとかさ」

「せやるな。流石にウチもそこまで伸ばした事無いから、実際は分からへんけど」

「因みにアंकも今の髪型が良いって言って止めてくるんだ」

「ほんま、アंकさんはアニス君の事好きなんやな。でも……流石に犯罪やで……」

「あはは、犯罪って。そもそも俺は男だし、アंकにしてみても、対象外でしょ」

「そやね」

俺とはやては話しながら笑う。

今日出会ったばかりなのに、何でこんなに話が弾むんだろうか？

「さて、運動が済んだなら、買い物行くで？」

「うん、分かった」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「すんまんなあ、押してもらって」

「ガキが何遠慮してんだ、少しは大人にも頼れ」

「あはは、ウチも言われてもった」

「あれは嫌な事件だったね……」

まさか車いすを押そうと思ったら、車いすと少ししか身長が変わらなくて、押せなかつたとか……。

車いすの長さは、大体90〜100？が一般……まあ、はやてのも一般の車いすなんだけど……。

まさか俺、100？位しかないとか……。

まあ、身長何て無くても良いし、戦闘に有利だから良いんだけどね！

「まさか車いすも押せないほど小さいとは、俺も思わなかつたぞ…

…

「うん、俺も……」

あつちの世界では背を測るだのの概念があまり無い。
故に、俺は今の今まで自分の身長を知らなかった……。

「ウチでも130?程度やねんけど……」

「30?の差とか……アंक……マジデカイ」

アंकは大体170強ってところかな?
70?さか……まあ、嫌いじゃないわ!!

「さて、まずは服買おか」

「いきなり高く付きそうな物を選んだね……」

「大丈夫や、安く手に入る場所があんねん」

「へえ、どんな店なの?」

「しま〇ら」

……あのやつすくて、大きい服も取り扱ってる店か……。あそこ、結構良い感じの服とか売ってるから好きだわ。某水原薫さんって人も大好きなしま〇ら……。

「あ、こじやこじ」

そこにはマジでしま〇らと書いてある店があった……。だが、平日だから、そこまで人が居ない。つか、は yet は常連だから大丈夫だろうけど、俺とアंकは何て言われるだろうか……。今の時間は学校の時間だし……って、アंकより俺じゃん。アंकは大人だし、良いのか。

「ほな入ろうか」

そう言っつて、は yet はアंकと一緒に店の中に入って行く。あ、置いてかないでよぉ〜！

俺はすぐさま二人を追いかけるために走りだす。そして、店の中に
in。

「うわあ、凄いいっぱい売ってるんだね」

「せやる〜?」

「あ、ワイシャツ発見。おっ！スパッツもある！寝間着確保!!」

「ちょい待ち！」

「ん?どうしたのはやてちゃん」

「それが寝間着何か!?ボケやる!それは関西出身のウチの対してのボケやる!!」

「いや、ボケじゃないし、ふざけてもないよ?これが俺の寝間着」

「……………ホンマに?」

「諦める八神、こいつはここに来る前もそうだった……………」

ああ、アंकが遠い目をしてる……………何か辛い事でもあったんだね。それにしても……………このし〇むらは凄いな……………。

何かコスプレの服も扱ってるよ……。
あ、今某腋巫女の巫女装束があった……。すげえなこ」……。

「……アニス……まさかあれ着たいかと思ってないだろうな？」

「そんなわけではないでしょアंक。第一、俺に女装っ気は無いし、サ
イズがないでしょうに」

「あ、100?の超絶ロリ使用って書いてる奴がある……」

「はやてちゃん、それをすぐこっちに持ってくるんだ……」

「言ってる事がさっきと違うじゃねえか!」

「あはは、冗談だよ冗談。ほら、はやてちゃんも冗談で言ったんだ
しよ」

「いや、ホントにあるねんけど……」

「なん……だと……」

どうやら俺の知ってるしまむ〇は……死んだようだ……。
何でこんなこんな物を売り出そうとしたし……。

「あ、あれは……」

少し遠めの所に、キチツとした服が、一式飾られてある。

「ほお……懐かしいな」

アंकは俺の視線に気づき、その服の所まで行き、それを見る。
そう、その服とは……オーズ本編でアंकがいつも着ていた服があつたのだ。

「……懐かしい、ね」

「何だアニス、悪いか？俺が懐かしいと思っちゃ」

「べっつに〜」

少しムフフとなっただけやねん……。
まあ、気にせんといて……。

「アंकさん、その服がええんか？」

「……………」

アंकはその服をじっと見る…………昔を懐かしがっているのか…………その目は今を見ていない。

過去を見ている…………そう言う目だ…………。

そして、アंकは一回視線を逸らし、フッと、自嘲気味に笑い。

「いや、他を探す」

そう言って、アंकは他の所に行ってしまう…………。

…………過去と、決着付けたのかな？

アंकサイド

「はあ……………」

こんな所で、まさか…………昔の事を思い出すとは…………。

映司…………比奈…………伊達や後藤…………今思うと…………あれはあれで、結構面白い奴らだったと、そう思えてくる。

特に、映司…………。

(楽しんで助かる命が無いのは、何処も一緒だな……)

(人の命より、メダルを優先させるな!)

(ありがとう……アंक……)

「っ!……ああ、そうか……」

俺は、まだ捨てきれなかったんだな……。
あいつに、掴む腕は俺じゃないと言っておきながら、俺はあいつの腕を、まだ掴んでいたらしい……。

「アンカー!」

「……………」

ふと物思いに耽っていると、いつもの声が聞こえた……。
俺は後ろを振り返り、そいつを見る。

「もう、どっしたのさ?」

「何がだ？」

俺のパートナー、アニスが、そこに居た……。

「捨てきれないんでしょ？」

「……まあな」

「……俺じゃ、頼りないかな？」

「……………」

「別に、俺の為に、その思いを捨ててくれとは言わないよ。そんなのは、ただのエゴだ。確かに、俺は映司みたいに、強くは無いよ……精神面で、アंकには凄い迷惑を掛ける……戦闘も、アंकのお荷物になっちゃうけど……その……俺も頼ってよ？」

「……………」

「アंकは俺を守ってくれてるって言った……俺、すっごい嬉しかった」

たんだ。あのアंकが、俺の事を思ってたんだった……」

……思い出したくもない事を……。

だが、確かに俺は言った……その事実は揺るぎない。

「だから……こう言う事位しか言えないけど……俺にも頼ってよ？俺はっかり、アंकに守ってもらってばっかじゃ、嫌なんだ」

その言葉一つ一つ、俺は聞き漏らさずに聞く。

「だから……頼ってよ。俺が迷惑かけちゃう分、俺にも迷惑掛けてよ。ね？だから……うわっ……」

全く……俺より小さくて、頼り甲斐が無くて、馬鹿ばっかする奴だけど……。

言葉だけは一人前な奴だ。

「アーン……ク……？」

「バーカ、誰がお前に迷惑掛けるかってんだ。もう少し、大きくなつてから言え」

俺はそう言いながら、ワシヤワシヤとアニスの頭を撫でる。

「身長は関係ないでしょっ！」

「大ありだ。そんな小さい奴に、頼ってくれって言われても、困るだけだ」

「酷くね!?!」

「……………気にすんなよ」

「え……………?」

「お前は今のままで良いんだよ。俺に迷惑掛けるとか、掛けれとか……………そんなのはどうでも良い。俺はお前さえ居れば、それで良い……………それが俺の生きて行く理由になる……………」

「……………アंक……………」

全く、調子狂うな……………。

いつもこの調子だ、こいつは……………何か突拍子もない事やるくせに……………何でこう言う時だけこう何だか……………。

「えへへ、アंकに頼られちゃった」

「？俺は頼った覚えは無いが？」

「だって、アंकは俺が生きてるだけで、生きる理由になるんでしょ？だったら、俺がずっと生きてなきゃ。ほら、俺を頼ってる！えへへ……嬉しいな」

「……………ふん」

ドガッ！

「った……………！」

アニスの頭に置いていた手を、手刀に変えて振り下ろす。

「お前を守るのが俺だって事、忘れんじゃねえ」

「……………だ、だからって……………チョップしなくても……………」

「ふん……それじゃ、俺は服を選びに戻る」

まあ、精々頑張って守るとするか。

小さい小さい……大事な欲望^{アニス}を……。

~~~~~  
~~~~~

アニスサイド

「いやあ、いっぱい買ったなあ！」

あれから俺達は、日用品やら何やらを買い。
さっきまで今日の夕飯の材料を買っていた。

「はやてちゃん、何作るの？」

「ん〜、今日は家族が出来たお祝いって事で、色々や！」

「そっか、色々か。楽しみだなあ〜」

「ああ、そうだな」

「……………」

「どうしたアニス。鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をしてるぞ？」

「……………アंकがそんな事を言うようになったとは……………俺聞いてない……………」

「一体どうしたんだアंक……………お前が楽しみって言うの……………初めて聞いたぞ……………。いや、実際は言ってないが、同意をしたのは初めてだ……………」

「何だ？俺が夕飯を楽しみにしちゃいけないのか？」

「えへへ、いや、嬉しくて。やっとアंकが素直になったんだなって」

「俺は素直だが？」

「どーだか」

「はいはい、その二人。イチャイチャ禁止やで禁止」

「イチャイチャ何てしてねえ！」

「アंक……酷い……」

「お前も乗ってんじゃねえ！」

ドスッ！

「あふん！！」

アंक は チョップ を した。

アニス に 100 の ダメージ を 喰らわせた。

……今何か頭の中にモニターらしきものが……気のせいだろうか……
……。じゃっかんドラクエ風だった気が……。

「変な声出すな！」

「……やっぱアニス君……女の子やないんか？どやったらそんな高い声出んねん……」

俺もそれは知らない……もしかして俺、変声期にスルーされたりすんのかな？

まあ、こんなナリで若本みたいな声とか、小杉さんみたいな声は嫌だし……それはそれで良いのかなあ……。

「良いもん！はやてちゃんとイチャイチャするし！！」

「へっ？ウチ！？」

「oh……まさか、はやてちゃんに嫌がられるとは……」

まあ、当たり前だろうね。会ってたかだか数十時間。まだ一日すら経ってないと言う……。

でも少しショックだね……原作キャラにはなるべく嫌われたくないお……。

「いや、嫌と言うか……そこでウチに振られた事に驚いただけや」

「何だ、そうだったのか。なら安心したよ」

「……やっぱ、アニス君は可愛えなあ……頭撫でたる」

「えへへ、何か知らんが褒められた」

「……はあ、男が可愛いとか言われて喜ぶなよ……」

あら、俺はカツコよさより可愛さを追求してます故。

だってこんなナリの奴がどう足掻こうと、可愛いに変換されるに決まってんじゃん。

まあ、そんな容姿を選んだのは、紛れもない自分自身何だけどね。

「ほな、さっさと帰って料理作ろうか！」

「賛成！」

「まあ、もう少しで陽が暮れそうだしな」

そう言って、アंकクははやての車いすを押し始める。

くそう……まず一番の問題は……どうやってはやての車いすを押し

かだ……。

これは……手ごわい相手になりそうだ！

第七話 意外な所で過去との決着（後書き）

声優、水原さんも御用達のしま〇ら

俺も結構重宝させてもらってます

あそこ、結構大きなサイズあるから好きやねん

……あ、ピザじゃないよ？

ちよっと、小学生の時に、水泳、野球、空手、サッカーなど、色々な少年団に入り、野球は部活で入り

平日の月・木、野球、水泳、空手をやり

他の平日、火・水・金では野球とサッカーをやり

休日は土曜に野球と空手、日曜日は野球と……何か小学生がやるにしちゃ、マジで体を壊しかねない様な事やってたら、筋肉がヤバい事になりました

腹筋割れてます……ふくらはぎの筋肉もマジありえねえって感じになってます……

しかも筋肉質な為余計に……

っと、また話が……

それにしても、はやて可愛いな

あ。感想とかで、アニスにしてほしいコスプレを受け付けます

二期が終わった後の日常編で、腋巫女のコスさせてえくな

たぶん東方とかが多いと思います

だから、どしどし他のコスを送ってください！

では、今日はこの辺で

読んでくださりありがとうございました

第八話 アニス、魔王と出会う（前書き）

いや、疲れた

今日は町のイベントで着ぐるみ着てガキどもの相手をしてました

駄目だ、子供嫌いだわ俺

二次なら許せるが、リアルだと無理あるね

はい、本編始まります

第八話 アニス、魔王と出会う

アニスサイド

〈朝〉

「……………ん……………ふぁ……………」

やぁ、おはよう……………どうやら朝の様です……………。

朝はあれだ、嫌いだ。朝が苦手なのだ……………口調も定まらないし、思考も変な方に行くし……………。

「……………顔……………洗お……………」

とりあえず、目を覚まさせたいので、予めはやてに聞いていた洗面所の場所を目指す。

確か、リビンググ通って行かないとなかったはずだ……………。

俺は何の躊躇いも無く、リビンググのドアを開けた。

「あ、アニス君おはよ……………」

入った瞬間、挨拶をしようとしたはやてが固まった……………。

固まんなし……俺の顔に何か付いてるのかな？

「……ななな……何やねんその恰好は！！」

「……ふえ……？」

恰好？……ああ、この寝間着か……これはワイシャツ、継ぎ目すら無い綺麗なフォームだろ？

いや、継ぎ目はあるんだけどね……ああ、変な事しか考え付かん。

「誘つとんのかー！！」

「……誘う？……何に……？」

「……ウチ……やってけるかな……」

なんかはやてが遠い目をしだしたよ？何か辛い事でもあったんだね。今度和菓子買ってやるから元気出せコノヤロー！。

「……顔洗ってこよ……」

はやてが何か悩んでるみたいだからそつとしいてあげよう。
あア、俺って何て気遣いが上手いんだろうか！流石俺！自画自賛し
てちゃんよ！

「…………ふあ、アंकおふあよ…………」

「…………取り敢えず一発殴らせろ」

「え…………何で…………」

ドゥッ……！

「つつう…………何すんだよ！？これ以上俺の脳細胞を死滅させない
で！俺の脳細胞のライフはとづくに0よ！」

「何でそんな恰好でうろついてんだ！普通の服着てから起きて来い
…………！」

「…………もしかして、アंक以外の人に肌を見せたから怒った…………オ
ーケー、冗談だよアंक。だからその手に持っている包丁を降ろそ
うか…………ゆっくりとだ…………」

あぶねえ、何で包丁持ってるのか不思議だけど。包丁を握ってるア
ンクにだけは、冗談は言わんとこ。
たぶん本気で切り刻まれるから……。

「取り敢えずアンの拳骨で目が覚めたので、顔を洗う必要性が無
くなったわけだ。んじゃ朝ご飯の用意でも……」

「だから服着て来い！目の毒だ！」

「酷い！アンはこの恰好がお気に召さないのね！？だったら下の
スパッツを脱ぐわ！……オーケーアンク……その両手に持ってる出
刃包丁と良く熱されたフライパンを降ろそうか……ゆっくりとだ…
…」

ヤバイヤバイ、ついネタに走ってしまった。

さっき包丁持ってるアンクにネタを振るのは駄目だと学習したはず
だぞ俺。

次やったらたぶん命は無いぞ俺……少し落ち着こうか……。

「つつ訳で昨日買った服に着替えてきまーす」

仕方ないよね、アンクが止めるって言うんだし。

それよりもさっきからはやてがうんうん悩んでるのは、俺のせいでは
ない筈……。

さて、服でも着ようかね。

く割愛く

「アंकく、服着て来たよ。似合っ似合っ？」

「ああ、似合ってる似合ってる……」

ちよっ、明らか棒読みやんけ……。

アニス悲しい。それよりも、まだはやては何か悩んでるわけ？

さっきからぶつぶつ言ってるけど……時折変な言葉も聞こえて来るけど。

「……アカン……ここは鋼の精神や……間違い起こしたらアカンでウチ……まだ会って二日目……」

……これってスルーしてもオーケーな感じだね。

そして、誰かツツコンですよ！今の俺の格好、スパッツに上半袖だよ！？ツツコンですよ！

仕方ないのでパーカーを着る……ちえっ、誰かツツコンですよ……。

「おいアニス、皿出してくれ」

「あ、分かった」

取り敢えず俺も気にしない方向で行く事にした。
カオスな八神家だねこれ……。

~~~~~

「んじゃ、俺この町探索して来るわ!」

「お前一人でか?」

「うん!」

「……何か心配になってきた……」

とりま朝ご飯食べて少し経った辺りです。  
少しこの町の事を知るところ……特に翠屋行きたい。それに、大体  
今原作に入ってるのか入ってないのか知りたいしね。

「まあまあアंकさん。アニス君なら何とかなるから大丈夫ちゃうか？」

「いや……こいつだったらフラッと誰かについて行きそうだから怖いんだ……」

「んな訳ないつしょwww。今日は休日だから、怪しまれずに行動できる！こんな日を逃してなるものか！という訳で、行ってきます」

俺はスタツと立ち上がり、そのまま玄関の方に駆けて行こうと思った瞬間。

アंकに腕を掴まれて動きを止められる。

「キャッ！？な、何だよアंक！びつくりするじゃんか！」

「までアニス。お前、まさかその恰好で行く気じゃないだろうな？」

「……へ？駄目？」

「当たり前だ！スパッツ脱いで普通のズボン穿け！」

え、お気に入りのにスパッツ……。

こんなに動きやすい物は二つとない！……いや、ブルマも動きやすかったな……確か。

よし、今度はそれで行こうか。採用。

「良いじゃんか別に。こんなチンマリした九歳の男の娘に欲情する変態ロリシヨタコン野郎がこんな真昼間から出るわけないじゃん」

「そんな事心配してねえ！俺は世間体を考えて言ってるんだよ！」

「……ああ、確かに。このまま出れば近所の人に目が付き、尚且つアंकが外に出れば……アंकがこんな格好させてるのかと、有らぬ誤解を生み、そのままアंकは刑務所行きか……それは避けた  
い」

「何で俺のせいになるんだよ！！」

「だって、アंकしか大人のいないじゃん。あ、そうだ！いつその事はやても履かない？スパッツ」

「いや、ウチはどっちかって言うとブルマの方が……」

「八神も真面目に答えてんじゃねえ！！」

「一々うるさいねえ。人の格好にとやかく言わないの！めっ！だよ！  
まあ、仕方ないので、そこは譲ってやったよ。  
真面目にズボンを穿いたぜ……ちくしょう……。」

「スースーするの……。」

「普段スパッツばっか穿いてるからだ！」

「……ズボンの中に穿いちゃ駄目？」

「駄目だ」

「ブーブー。分かりましたよ！んじゃ、行ってきまーす」

少し不機嫌モードなアニスたんのお通りですよー。

「……アंकクさん、良く耐えられますね？」

「何がだ？」

「ぶつちやけ、アニス君に欲情したりせえへんのですか？」

「ブーッ！……するわけないだろうが！あいつは男だぞ！？お・と・こ！分かってるのかお前は！」

「いや、アニス君可愛いし。たまに何かの手違いで欲情せえへんかな」と

「ガキがそんな事言っんじゃねえ！」

アニスが出て行ってから、直後の語らい。

二人とも危ない話をしてますね、ツッコミが来い。

アニスサイド

「ふんふん」

良いねえ、こうアスファルトの上を歩くと、日本なんだなと感じるよ。

まあ外国もアスファルトだけどね……。

「ここが海鳴市かあ、すげえな」

自然は少ない物の、それを補う海があり。

公園にはそれに見合う自然がある……つつくしー、調和だ。まさに  
ハーモニーだ！

「らんらんらん」

いや、つつい鼻歌を歌いたくなっちゃうねこれ。

こんなに気持ちの良い朝は初めてだよ。さて、先ずは何処に行こう  
かな。

「あ、ぬこだぬこ。おいで」

「にゃ」

おっ、寄って来た！何だこいつ！甘えるぞ！？

可愛い、むっちゃ可愛い！あっ！指ぺろぺろした！ああ、可愛い  
な。

「えへへ、何だコノヤロー。可愛いなコノヤロー」

飼いたいな。でも、八神家にはもう少ししたら犬が来るしな。あ、犬じゃなかった、狼だっけ？まあ、変わりは無い。

「んじやなぬこ」

「にゃ」

俺は名残惜しいが、ぬこと別れを告げた。

くそっ、可愛いぬこだったぜ……お持ち帰りしたい！っが！たぶんアंक辺りに、元の場所に反してこい！って突っぱねられそう。アंकのバーカバーカ。

「さて、目的地を絞ろう」

まあ、翠屋位しか行く所ないだろうな。

まだなのはと会ってないし、フェイトも今居るか分からないし。

それに、原作も始まってるのが始まってないのか……それが今一番気になってる事。

「しょうがないし、もう翠屋行っちゃうか」

友達がはやてしか居ないし、ちょうど良いか。

なのはとも友達になろうかね……ああ、本当はすっごくなりたくない

いねんけどな……。  
魔王だし……。怖いし……。砲撃魔だし……。トリガーハッピーだし……。  
魔王だし。

「ま、まあ……。臆せずに行こう！おー！」

俺は一人で意気込みながら歩いて行く。

あゝ、この身長で歩幅小さいから、あんまし歩きたくないな！。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ここ……何処？」

何か行き辺りばったりな感じで進んでたら、迷ってしまった。
つかしいな、こちら辺じゃなかったっけ？まあ、知らんけど。

「さて、困ったな……」

「何が困ったなの？」

「ああ、聞いてくれよ。それがさ……って……誰だお前は……」

何か一人で喋ってたなら、誰かが入って来たよ。

やあね、独り言に入って来ちゃって……アニス君、そう言っの感
心しないな。

へ？独り言して痛い子みたいに見られるよりましだろって？ですよ
ね！。

「私？私は高町なのは！」

「……へっ？」

魔王様が降臨なさいました……。

第八話 アニス、魔王と出会う（後書き）

ちよっ W W W W 終わり方 W W W W

まあ、続きは今日の夜にでも書きますよ

さて、気づいた方居ましたか？

アニスのツツコンでほしかった格好……

……その恰好のモデルは……

能美・クドリヤフカ！そう！彼女の格好なのです！

まあ、リトバス本編ではドロワーズとかアオザイだったりなんです

これは抱き枕の奴の格好なのです！

いやあ、やはりスパッツはジャスティス！あのムツチリ感……正直
たまりません

そして、感想でアニスとアंकがバカツプルに見えると頂いたので
すが

……見返すと砂糖吐きそうなほど甘々なシーンが所々……

でもアニスのえへへ〜が書きたいので止めません！

だから、言っただろ？

アニスは受け何だって！！

第九話 アニス、魔王と仲良くなる（前書き）

はい、昼ごろにあげた続きです

とりまアニスは可愛い……

そう思う作者なのでした

本編始まります

第九話 アニス、魔王と仲良くなる

前回のあらすじ

俺、死ぬかも shouldn't ……

~~~~~

「……」  
「こんにちは」

「一応、挨拶はしておこう。それが礼儀だ……魔王にとっての礼儀だ。」

「こんにちは。どうしたの？何か困った事でもあった？」

「……うむ、何だろうか、このお姉さん口調は……。まさか、この私が君より年下に見えるかね？……あ、見えますか。ですよー」。

「えっと……少し道に迷いまして」

「そんなの？じゃあ何処に行くのかな？お姉さんが連れてってあげるよ」

おう、案の定そうでした。この子、俺を同い年と見てませんねこれ。ああ、こう言ったデメリットや不祥事が起きるのか。なるほど把握

「えっと、翠屋って分かりますか？」

「……にやはは……それ、家の店だね」

「おお、マジか！っと……あの、お店まで案内してくれませんか？」

「にやはは、お安い御用だよ。それじゃあ行こうか」

そう言っつて、俺の手を取り繋ぐなのは……。いや、恥ずかしいのでやめてください……俺は一応、手を握られるのを回避する。

「あ、嫌だった？」

「あの、俺一応九歳なので、子ども扱いは止めてください……」

「……………」

あ、なのはが固まった。

最近俺の周りの人は良く固まるゝ、そんなに固まるのが流行ってるのだろうか？

「ええええええええええ！！」

「っっ……………はう……………み、耳が……………」

お前はトリコに出てくるゼブラか！

サウンドバズーカか！？それともサウンドミサイルなのか！？どちらにしろゼロ距離で放つな！鼓膜破けるだろうが！

「わ、私と同じ年！？こんなに小さいのに！！？で、でも、女の子だったらすくらくらい成長が遅れてる子も……………」

「だが男だ」

「……………」

おっと、オカリンの台詞を使ってしまった……。

「ええええええええええ!!!」

今度は事前に耳を塞いでいたので、耳がキーンってなる事は無かった。

まあ、それよりも……。

「あの、お店案内してくれないんですか？」

「あ、ごめんごめん。それじゃあ行くうか？」

なのははまだ引きつった顔をしてるけど、それでも何とか案内しようとして体を動かす。

こうなったのは俺のせいではあるまい……。

なのはサイド

こ、こんなに可愛い子が同い年で男の子な筈がないの！  
ありえないよ……絶対に！

「…………どうしたの、高町さん？」

「あ、ううん！何でもない何でもない」

やっぱり、見れば見るほど、女の子にしか見えない……。  
やっぱり嘘をついてる？でも、そんな嘘をついても特なんて何もないし、第一私達は会ったばかり。  
じ、じゃあ本当に……。

「……高町さん？」

「は、はい!？」

「どうしたんです？本当に。さっきから顔が愉快的なオブジェに変わってますよ?」

「そ、それってどう言う事かな?」

「……いや、変な顔をしていたので……」

そう言って、無表情に戻る彼(?)

その顔は整っていて、髪も私より長く、良く手入れが行き届いているのが分かる。

そして、何より圧倒的なのは……その身長！私とかなりの差があるの。

……やっぱり、信じられない……。

「……あの、さっきからコロコロと顔が変わるのは、何かの癖なのでしょうか？」

「ふえっ!？」

「俺の顔をじろじろ見て、悩みだしたかと思えば、いきなり否定的な顔になり。でもやっぱり的な顔になったかと思えば、やっぱり否定的な顔に戻ったり」

うっ、全部読まれてるの……。

「まあ、大方。俺が男だと信じ切れてないだけだと思いますけど」

「……ごめんなさい……」

「謝らないでくださいよ、もう慣れてますから。こんなの許容の範囲です」

「で、でも……それでも……君を傷つけちゃった……かもしれないし……」

「……アニスです……」

「えっ……?」

「名前ですよ。そう言えば、高町さんは名乗ったのに、俺は名乗ってなかったじゃないですか。アニス・クロイツベルです。以後お見知りおきお」

そう言つて……彼はニコツと笑つた……。

ああ、もう男の子か女の子かなんてどうでも良いの……取り敢えず……この子は可愛い、それで良いの！

アニスサイド

何やらなのはから嫌な視線が送られて来たが、スルーの方向で。

それにしても、こいつコロコロ顔変えてたな。全く、人の話は素直に信じてほしいわ。

まあ確かに、自業自得ではあるけども。それでも、ねえ？

「あ、ここが翠屋だよ」

「おお、ここが……」

喫茶翠屋……またの名を、魔王の巣窟。

ここに入ったパーティは最後……骨の髄までしゃぶり尽くされると言う恐怖の館……。

おう、考えただけで寒気が。怖い怖い。

「ありがとうございます」

「あ、ううん！全然良いよ！どうせ帰る途中だったんだし」

「そうですか……では、これで」

俺はなのはにそう言って、翠屋の中に入る。

「いらっしやいます。喫茶翠屋へようこそ」

そこは……魔王の巣窟何かじゃなかった……。

フワリと甘い匂い漂う店内……だけど、ただ甘いだけじゃない……  
コーヒーの苦みや紅茶の渋みの匂いも飛び込んでくる。

更には店内の雰囲気とマッチしており……それは凄く、美しく映っ

た……。  
つつくしー……。これぞ調和！ハーモニーだよ！！

「あ、あの。どうしたのかな？」

「はっ！すみません、つい呆けてしまいました」

ヤバイヤバイ……。凄く遠い所に行ってしまった。  
流石人気店。やはり伊達じゃない……。よもやこの俺が魅了されるとは……。悔りがたし、喫茶翠屋……。

「あら、小さいのに礼儀正しいのね。お母さんとかは来てないの？」

「あ、自分一人で来ました」

「お使いかしら？偉いわね」

そう言いながら、俺の頭を撫でてくる。  
えっと……。誰だっけこの人？確か高町……。

「桃子、どうしたんだ？」

そう！桃子さんだ！思い出した思い出した！  
いやあ、頭ん中のモヤモヤが綺麗に晴れた！これでスッキリだわ！

「ああ、土郎さん。ちょっと、小さいお客さんと、ね」

桃子さんは土郎さんに向けてウィンクをする。

けっ！リア充爆発しろ！イチャイチャすんな！砂糖吐きそうなほど甘ったるいぜ。

「おや？本当だね。お母さんのお手伝いかい？」

「あ……その……」

つつい押し黙る。さっきは然程気にしなかったか……もう一回改めて言われると、キツイ物が……。

ああ、鬱だ、死のう……つつか首吊らせて死なせてくださいお願いします……。

「お母さん、買って来たよ。あ、アニス君、まだ選んでなかったんだ」

「あ、高町さん」

その時、厨房からなのはが出て来た。

「どうやら裏口から入って着替えたのだろっ……ウエイトレス姿でした。」

「羨ましい……俺も着てm……いやいや！俺に女装っ気は無いんだ！」

「お帰りなのは。知り合い？」

「にはやは、帰る途中に知り合っつて。どうやらここに来る途中に迷子になっちゃっつて。それで案内したの！」

「へえ、そうなのか。偉いななのは」

「士郎さんは笑いながらなのはの頭を撫でる。」

「そして、なのはは恥ずかしそうに笑いながら、それを受け入れる。ふと、士郎さんの撫でる手が止まる。」

「ん？アニス、君？」

「あ、そこ気にしちゃっつ系ですか。」

「まあ、そうですね。貴方の娘さんもそうでしたし。」

「君、男の子なのかい？」

「あ、はい。それと、高町さ……なのはさんと同じ年です」

ここには今高町の性が三人いるので、ごっちゃんにならないように下の名前を呼んだ。

士郎さんは驚きで目が見開かれていたが、桃子さんはあらあらみたいな顔で士郎さんを見ていた。

何故驚かないし、桃子さん……。

〈割愛〉

「あの、ケーキ買いたいのですが。良いですか？」

「ええ、どうぞ。好きなものを選んでくださいね」

……うむ、良い笑顔だ。これが俗に言う、接客笑顔なのだろう。

まあ、桃子さんののは本当に笑ってるだけなんだろうけど。

さて、ケーキを買うにしても、何を買おうか……。

アंकはアイスしか食べないから、ケーキを買っても食わないかもしれない。

はやては食べるな、間違いない。翠屋の名前くらいならはやても知ってるはずだ。

当然、その旨さも。

……ここはやはり、当店人気のシュークリームが無難だろうね。後はショートケーキにやチョコケーキ。ショコラも置いてある。可愛いな。

こう言った甘い物、ケーキとか作ってアंकに上げたら喜ぶかな？それとも、食べてくれないのかな？アイスしか食べないアंकでも、俺の作った物なら！

「……えへへ……」

自然と顔が綻ぶ。

そうだ、今度日頃の感謝も込めて、ケーキを作ろう。

幾ら不格好でも良い……必要なのは相手を思いやる気持ちだって、誰かが言ってたな。

「あ、あの……アニス君」

「？どうしたんです？高町さん」

「あ……あの……その……わ、私と友達になってください！」

……いきなり何言ってるんだ、この砲撃魔は……。

んだア、その思わせぶりな表情は……あ、思わせぶりじゃない、本  
気。

あややや、こんな俺と友達になりたいとか、凄く変わった子ですね  
この子。

「あ、はあ。良いですけど……」

「本当に！？ありがとうございます！」

「……何でそこまで喜ばれるのかわかりませんが、よろしくお願  
いします」

「あ、こちらこそ……。そ、それとね」

「まだ何かあるんですか？」

「その、敬語……使わなくて良いよ？同い年何だし、それに、下の  
名前で呼んでほしいの……」

「……うん、分かった。よろしく、なのはちゃん」

ははは、キミの頼みは断れないです。

元ネタ知らん人は、某動画サイトでうる覚えでエルシャダイって検索してみる。

まあ、エルシャダイはもう古いが。俺は好きだ！

「……………わ……………」

……何かなのが呆けちゃったけど、気にしない方向で行きます。さて、何を買おうかな。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ありがとうございます」

はい、買い終わりました。それにしても、すっかり話し込んでしまったな。

あの後、ケーキを選んだのは良いけど、なのはがちょうど休憩に入ってたんだ。

それで、なのはが俺を誘って、一緒にケーキ食べながらお話ししよう？って言われたんだ。

……背筋が凍るように冷たくなったのは……気のせいだと思いたい。
しかも話が弾み、桃子さんと土郎さんからお昼をごちそうになり。
お昼を食べたらまたなのはと喋り、美由紀さんとブラコンが帰って
来て、美由紀さんに愛でられ。
ブラコンは俺が男だと分かるといきなり襲いかかってきたが、土郎
さんが取り押さえお説教。

俺は最後に、獣と言って止めを刺した。
そんなでもう夕方です。いやあ、すっかり話し込んだよ！
アंक、怒ってないと良いな……。。

そんな事を思いながら、俺は何とか迷わないではやての家に着きま
した。

……玄関から異様な殺気を感じるのは……嘘だと思いたい……。

「た……ただいま……」

「随分遅かったな、アニス……」

「ひいっ……」

そこには腕を組み、仁王立ちで待ち構えていたアングの姿が!!

「ア、アング……」

「今までそこほつつき歩いてたんだ？怒らないから俺に話してみろ？なっ？」

ああ、顔は笑ってるのに、どうして目だけ笑ってないのでしょうか？
答えは単純明快！怒ってるからです！！
何それワロエナイ……。

「ア、アング……」

「何だ？」

「……もし素直に話たとして、許してくれる？」

「……内容次第だ」

良い笑顔で突っぱねられました。

でもやっぱり目が笑っていませんでした……。そして、素直に話したら拳骨一発と、俺がどれだけ心配したか分かってんのか、と、くどくどお説教されました。はやても同様です。取り敢えず……。ごめんなさい……。あ、ちなみにだけど。まだ原作は始まってなかったお。ユーノもレイ八さんも居なかったし無かったお。

オ・マ・ケ

「アंकアंक！」

「何だ？」

「ケーキ買って来たんだ。はやてちゃんの分もあるから、一緒に食べよ？」

「わあ、ケーキ買って来たん！？やったでえ！」

「ふん、俺は甘い物はあんまり好きじゃないんだ」

「何だよ。せっかくこの町一番人気の喫茶店、翠屋のケーキとシュークリーム買って来たのに」

「マジかいな！？あの人気の！？はぁ、一度でええから食べてみたかったんや、そのケーキ」

「喜んでくれて嬉しいよ。アंकも食べようよっ」

「だから、俺は！」

「じゃあ、さ……俺がアंकの為にケーキを作ったら……さ。その、食べてくれる？」

「……ふん……」

「……アंक？」

「……まあ、食べてやらん事もない」

「……シンデレレ」

おおっ、はやくも同じ事思ってた口に出したのか……。
アニスたんびっくり……。

第九話 アニス、魔王と仲良くなる（後書き）

現在のフラグパロメーター

アंक：ツンとデレの狭間辺り

はやて：ただ今理性と格闘中

なのは：まだまだだね、後百ゲームは行けるよ？

全くわけわかめ

アंकはツンとデレの狭間と言っても、城壁が五重位なので一筋縄じゃいかないです

その点、なのはとはやてはアंकほどでは無い

でもまだ落ちぢゃいないよ

だって、まだ会って数日そこら

流石に落ちないよ

では、今日はここまで

次回は儀式の話を書きたいな

読んでくださりありがとうございます

第十話 儀式と契約（前書き）

今日は一段と寒かったです

まさかジャンパーを家に忘れて、ジャンパー無しで部活に出るハメになるとは

まあ、自業自得か

忘れた俺が悪い

本編始まります

第十話 儀式と契約

結構な日が過ぎた。

俺ははやてとどンドン仲良くなり、休日には翠屋に行き、なのはと話す。

そんな事をしてる内に、なのはとも仲良くなった。

そして、ふと思ったんだ……。

「儀式って、いつちゃんの？」

……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

少し俺は、だらけ過ぎた様だ。

本来の目的を、少しばかり忘れていた……。

「と、言うわけでアंक。儀式っていつちゃんの？」

「……はあ？」

アंकに聞いてみた所、何言っただこいつみたいな目で見られた。いや、聞いてないんかい、神様に……俺もいつやるは聞いてないけどね。

「儀式？」

「あれ、やっぱり聞いてないの？」

「ああ、初耳だな」

「ありゃりゃ……」

神様エ……ちゃんと説明しようよ……。  
俺は神様から聞いた事を全てアंकに話した。全く、神様もちゃんと話しておいてくれよ。

「……大体分かった」

「そう、良かった……それで、儀式っていつやるのかな？」

「それは俺に聞かれても分からん。あいつに直接聞くしかないだろ  
う」

「そつだよね」

どうやって神様と話そうか……そう考えていた時、俺の首に掛けていたデバイス。クイーンがいきなり光りだす。  
俺はびっくりして、少し短い悲鳴を上げてしまった。

「な、何でクイーンが光りだしたの!？」

「さあな」

……ま、まさか……ね。

神様が通信してきた……何て事は無いよね？

《あー、あー……テストス……おお、元気か！アニスにアंकよ！》

「……予想通りだコノヤロー」

今この場にはやてが居なかつた事を感謝するがいいおっさん。  
はやてが居たら魔法バレする所だった……まあ、しても良いんだけどね。

これから起こる事を事前に伝えおけば、心構えがまた違ってくるしね。

「ああ、俺は元気だ」

「俺も元気だよ！」

《そうかそうか。それより、儀式の事で何か話があると聞こえたのじゃが》

おっさん、神様の癖に地獄耳かよ………すげえなこのおっさん。  
どんだけハイスペックよ………ああ、神様だから………。

「うん。それがさ、一体儀式って何をすれば良いの？それと、儀式っていつやるの？」

《まあ、大方そんな所じゃろうと思ったわい》

「知ってるんだったら早く話してくれても良いだろう！」

《ははは、すまんすまん。それじゃあ、簡単に儀式の内容と、いつやるのかを決めよう》

そんな簡単に言っただけなの……？

それに、いつやるのかも決められるのかよ……。

《先ず、何をするかじゃが。簡単じゃ、悪魔を倒せば良い》

「悪魔を？」

《そうじゃ。悪魔をじゃ》

「まあ、悪魔の加護って言うし、やっぱり悪魔を倒したりすんのかなどは思ってたけど」

《それを、数回やるのじゃ》

「数回ねえ。分かったよ、基本的に悪魔を倒せば良い。それも数回……ルールは？」

《倒しさえすればそれで良い。もちろん、アंकと協力するもよし、

斬魄刀をフルに使うもよしじゃ《

「分かった！それで、いつやるの？」

それが一番知りたい事だ。

自分自身、もう儀式何てやらねんじゃね？とか思ってたし……。

《そうじゃな。お主はいつやりたい？》

「いや、俺に聞かれても。て言うか決めれるの！？」

《基本、悪魔は融通聞くぞ？》

ええ！？あちら側結構アウト！しかもあっちが協力してくれるのかよ！？

うわぁ……何か、悪魔さんごめんなさい……。

「それって、倒しちゃ可愛そうなんじゃ……。悪魔さん達が率先してやってくれるんでしょ？」

《いやまあ、悪魔のご加護を人間に与えちゃったこちら側の不手際なので気にしないと申してたし……》

「……悪魔さん……ごめんなさい……」

貴方達は良い人だ！いや、良い悪魔だ！このおっさんより優しい！俺なんかの為に儀式してくれるなんて……。

「そ、それじゃあ……明日の夜、はやてが寝静まったころにでもお願いしようかな？」

《うむ、分かった。言っておくぞ。それと、死にたがりを抑えてる様じゃが、少し晴らしておかないと、いつか重くのしかかって来るぞ？それでは！》

そう言つて、神様の声は聞こえなくなり、クイーンから発せられる光は消えた。

さて……どうしようかな。

「アंकアंक」。悪魔さんに菓子折り持ってた方が良いかな？

「俺に聞くな。て言うか、悪魔に菓子折り持って行く奴なんて初めて見るわ」

「いや、だってあつちの不幸際とか言われても……実感湧かないんだもん……それに、さ。この死にたがりを治す為に儀式するのに……もしかしたら……消えないかもしれないって言われちゃったんだ」

そう、それは一番最初。神様に初めて会った時に言われた言葉。別に、これが治らなくても、今の俺はちゃんと抑えられている……でも、いつかはそれが出ちゃう事があるだろう……。今は、アंकもそうだけど、はやてが居る……。なのはも居る。だから、これを克服したい……。

「あの……アंक……俺に力を貸してくれないかな？あ、嫌だったら良いんだよ？強要はしないよ、これは俺個人の問題なんだしさ……うん……アंकは関係……ない事だし……」

「……はあ……」

ギョッ……。

「ふわあ……」

不意に、俺はアंकクに抱きしめられる……。  
い、いきなり何だよ、変な声出ちゃったじゃん！

「そんな今にも泣き出しそうな顔で言われても、説得力ねえんだよ。  
バーカ」

「ふわあ！やつ！ちよつ！耳元で喋んな！」

「……やらせるよ、俺にも……」

「ふえ………？」

「手伝ってやる。それで文句無いだろ？」

「……アंकウ………ありがとう………」

やっぱりアंकクは優しいな！  
良かった、嫌だって言われたら泣いちゃう所だったよ……ふう、助  
かった。

「あ、でも……あまり悪魔さんを痛めつけないでね？」

「はいはい、分かった分かった」

「うん！オツケー！」

よし！これで大丈夫だ！

あ、でも……悪魔さんの方が強いって事もあるかも……まあ、斬魄刀を使って頑張ろう！

その時、この部屋のドアが開かれる。

「アニス君、アंकさん、ご飯やで〜って……失礼しました……」

ボタン……。

何故かはやては顔を真っ赤にしながらこの部屋を出て行った……。

そして、それを見た瞬間アंकは俺から離れると、すぐさまはやてを追いかけに行った……。

あれ？俺なんかした？……まあ、分からないや。

「もう、アंक……」

やんちゃになっちゃって……アニスたん嬉しい！

あのアंकが、ここまで感情豊かになるなんて……素晴らしい！！

「はあ……………アंकウ……………」

…………… ああ、やっぱり…………… もの凄く依存しちゃってるんだな俺……………。  
…………… いやいや！危ない方向じゃないよ！？俺とアंकウは同じ男！い  
くら俺が女の子みたいな顔でも、アंकウは嫌でしょうに！お、俺は  
…………… まあ…………… 来るものは拒まず？いや、でも…………… アंकウ限定かも…  
…………… でも！俺はゲイじゃないし…………… 普通に女の子が好きだし……………。

「……………結論、どっちでも良いや」

もう、この際どうでも良くなっちゃった。  
だから、ご飯食べに行こつと。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

そしてあっちゅう間に次の日、はやてが寝静まった頃。

「さて、アंकウ行こつか」

「そつだな……所で……」

「ん？どうしたの？」

「……何処でその儀式はやるんだ？」

……時間が止まった……。

ああ、場所、決めてなかったっけ……どうしよう……。そう思った時、昨日みたいにまたクイーンが光だし、いきなり喋りだした。

《場所について知りたいのじゃな？》

「あんた見てるだろ。絶対上から見てるだろ……」

《何の事じゃ？》

うわ、こいつ嘘下手だ……。

八橋やるからもう少し嘘磨いてこいコノヤロー。つうか、もしかしてこのおっさんに入浴シーンを見られてたり……。

《それで、場所じゃったな。この家の外に出れば、すぐにでも始め

「られるぞい？」

「マジかよ……でも、音とかヤバくない？もし結界を貼るんだとしても、管理局にばれちゃうよ？」

《そこは抜かりない。ちゃんと魔力を感知されない様に貼ってある。それに、斬魄刀や他の魔法を使ってもばれないようになってるぞい》

「おお、流石神様だな。至れり尽くせり乙」

《それじゃあ、健闘を祈る。ではの》

そして、クイーンの発光は止んだ……さて、それじゃ行きますか！俺とアंकは靴を履き、玄関のドアを開けた……。

「……ほう」

先ず言葉を漏らしたのはアंक。

短い言葉ながらも、普段アंकが上げない声なので……十分アंकが驚いてるのが分かる。

「……あ、あれは……」

少し周りを見渡すと、少し遠めの所に、人影が見える。
たぶん、あれが悪魔さんなのだろう……。
俺はバリアジャケットを展開して、アंकは翼を展開して空を飛ぶ。

少し移動してから、悪魔さんも気づいたのだろう、俺達の所まで飛んで近づいてきた。

ああ……。何でそんなに優しいんですか？

「こんにちは」

「あ、こんにちは……」

「……ふん」

「今回はこちらの不手際で、悪魔の加護を授けてしまい申し訳ありませんでした。貴方様の事情は良く把握しています、差支えが無ければ、このまますぐにでも第一回の儀式を執り行いたいと思います」

うわぁ……。めっちゃやり難い……。凄く低姿勢何だけどこの悪魔さん……。

今、俺の中の悪魔のイメージが崩れ去り、目の前の悪魔さんのイメ

ージが築き上げられた。

「あ、あの……もし悪魔さん達が、僕に倒されちゃったら……消えちゃうの?」

「いえ、確かに消えますが。それは地獄に戻るのと同義なので、大丈夫ですよ。貴方は優しい方なので……」

「あ、ありがとうございます……」

えへへ、褒められちゃった……。

「それでは、始めましょう。私の名はザゼルと申します」

「あ、アニス・クロイツベルです。それで、こっちはアंकって言います!」

「分かりました。それでは、儀式を始めましょうかアニス君」

おお！一発で俺が男だつて分かった！
すげえ、悪魔さんすげえ！

「手加減は一切不要です。2対1でもよし、いきなり全力で掛かってくるもよし。さあ、掛かって来なさい！」

「分かりました！行きます！」

俺は先ず、デバイスの剣でザゼルさんと対峙する。
ザゼルさんは武器も何も持たず、自らの肉体で俺の剣を防いだ。そして、そのまま流れるように蹴りを加えられ、吹き飛ばされる。

「くっ！」

「まだまだですよ！」

「っ！？速い！」

「はぁ！！」

ドカツ！！

「かふっ！……ちいっ！」

ブン！

追撃を加えられたけど、そのまま反撃に転じ、フック寄りのパンチを繰り出すが、簡単に避けられてしまう。

「ハアッ！」

ドンドンドン！

アंकが後ろで火炎弾を出して援護してくれる。けど、ザゼルさんはそれを全て素手で払い落とす。

「そんな物！」

お返しとばかりに、ザゼルさんは大きな火の弾を作りだし、アंकに飛ばす。

アंकは旋回してそれを避けるが、ザゼルさんがその隙に一瞬で回り込み、アंकを殴り飛ばす。

「くっ……アニス！こいつ強いぞ！斬魄刀を使い！」

「分かってるよ！……こい！」

俺は一振りの斬魄刀を取り出す、そして、始解のキーワードを唱える。

「射殺せ、神槍！」

ビュン！

もの凄い速度で斬魄刀の刀身が、ザゼルさん目掛けて伸びる。だけど、それをザゼルさんは紙一重で避け、こっちに突っ込んでくる。

「やっぱー！」

「まだまだですね！」

「ちいっ！ラシルドー！」

障壁じゃ間に合わないの、ここはラシルドを使うことにする。

でも……強度が心配だなこれ……。

ドンー

「くっ！少し、固いですね……でも！」

ピシ、ピシピシ……バカンー！

「砕けないほどじゃないー！」

くっ！やっぱり突破された……何てね。

「月牙……」

「なっ！？」

俺はラシルドを視覚にし、瞬時に神槍から斬月に変え、魔力を込めて月牙の構えを取っていた。いつけえ！

「天衝！」

シュン!!

黒い月牙がザゼルさんに向かって行く。

ザゼルさんは防御の構えを取るが、月牙の勢いがあり過ぎて、吹っ飛んでしまう。

ドン!

「ぐっ……はっ……」

「バインド!!」

ガチン!!

これ以上俺は戦いたくなかったので、ザゼルさんをバインドで動けないようにする。

ああ、体が痛い……でも、初めてだな、お父さんやアंक以外の人と戦うの。人じゃ無いけど……。

「はい、降参してくれるよね?」

俺は斬月の切っ先を向けて、魔力を込めながら言う。
ザゼルさんは観念した顔になり、苦笑する。

「ええ、私の負けで良いです。いやあ、お強い！こんなに強い人と戦うのは久しぶりでした！ああ、出来るならもう少し戦いたかったですけど……それでは、これで第一回の儀式が終了しました」

ふう、これで第一儀式終了か……でも、ザゼルさん顔に似合わず戦闘狂なんですな……。
シグナムとやらしたらいつまでも戦ってそう……。

「それでは、最後に契約に移りたいと思います」

「へ？契約？」

「あれ？聞いてないんですか？アニス君が私に勝ったら、貴方の使い魔になって一生を守護するよう命じられたのですが？」

「……ええええ！？」

「何だと！？」

あ、アंकも流石に驚くよね。
て言うか俺聞いてないよ！あの馬鹿神様！また重要な事だけ言い忘れてやがったな！

「ち、ちなみに……俺が負けた場合って……どうなってたんですか？」

「アニス君が負けたら、私が貴方を食べてました、性的な意味で」

「……ふえ！？」

「おい！アニスに何言ってるんだ！」

た、たたた……食べられるって……しかも性的な意味で！？
うわわわわ！か、勝って良かった……。

「あれ？もしかしてザゼルさんって……女性？」

「ええ、性別的にはそれであってます。でも、私はまだ女性と言われるような年齢ではありません。まあ、人間の年齢で言うなら、裕に100歳は超えていますけど」

「そ、そんなんですか……」

さ、流石悪魔さん……規格外すぎるぜ……。

「それでは、契約に移りたいと思います」

「あ、はい……」

「それでは、頂きます」

「へっ？」

ザゼルさんはそう言うと、俺の所に近づいてきて、首筋に口を添える。

最初は軽い甘噛みから入ってきた。

「ふぁっ!」

「ぶーっ!」

そして次に、そのまま一気に首筋を咬み。

チュー、チュー……ゴクン。

俺の血を吸って行った。

しかも、痛み何て一切感じない……あるのはただ、快樂のみ、だから俺は。

「ひやああああ!!」

終始喘いでました。

ああ、顔から火が出るほど恥ずかしい……死にたいな……。

「……つく……はあ、ご馳走様でした。これで契約は終了しました。それでは、私を呼びたい時は、使い魔召喚と唱え、最後に私の名前を呼んでください、そうしたら私が出てきますので。では」

「あ、おいまて!!」

アंकがザゼルさんに掴みかかろうとしたが、時すでに遅し。ザゼルさんは既に何処かに消えてしまった……。

「おい、アニス！大丈夫か！」

「ハア……ハア……アン……ク……」

「どうした！？何処か痛むのか！？」

「ハア……ハア……違うの……か……体が……ハア……ハア……熱
くって……ドキドキが止まらないのお……きゅう……」

そして、俺は意識を失った……。

次の日、あの後俺はどうしたのかアंकに聞いたら。

そのまま目を回して気を失ったらしい。たぶん、ザゼルさんが吸血した時に、痛みが生じないように、最初の甘噛みで媚薬効果のある何かを注入してたらしい。

それも、次の日に、ザゼルさんと呼んで聞きました。

いやぁ……俺、もう一生媚薬何て体に混入されたくない……そう思った俺なのでした……。

第十話 儀式と契約（後書き）

ザゼルの予想C Vは三瓶由布子さんです

ハガレンのプライドの声の人です

あの人の声は凄く好きなので、その感じに合うように書いてしま
いました

そして、やはりそこは受けなアニスたん

まさか人生初の媚薬を盛られるとは……

でも、私は媚薬はもう出さないかも……たぶん……

久々の戦闘が書けたので、取り敢えずは満足

まだ斬魄刀はいっぱいあるな

さて、無印の話どうしようかな。やっぱり傍観かな

……うん、傍観で良いや

今度はアニスとはやての絡みを書ければなと思ってます

ここまで読んでくださりありがとうございます

第十一話 正直に話そう(前書き)

今日もさみー

だから布団に入っていたい今日この頃

あれだね、寒いと炬燵が欲しくなってくるね

ちょっと倉庫から引っ張り出してこようかな

さて、本編始まります

第十一話 正直に話そう

はやてサイド

も、もう我慢できひん……。

アニス君が悪いんや、アニス君が可愛いのが悪いんや！

「アニス君！」

「ん？どうしたの？はやても、キャッ!？」

「アニス君かわええよ〜」

何やろう……アニス君を見てるところ……抱きしめたくなるんはど
ないしてなんかな？

母性本能がくすぐられると言っか、何と言っか。

「は、はやてちゃ〜ん……恥ずかしいよ〜」

「いつもアंकさんに抱きしめられとるのに何言っつとんねん!」

「あーうー、幾らアंकが居ないからって、些か大胆過ぎだよはやてちゃん……あうあう……」

そう、今アंकさんは絶賛就職活動中。

アニス君は年齢的に働けないので、必然的にアंकさんが仕事を探して働くと言う事になっている。

就職と言っても、アルバイトやねんけどな。

うちは別に気にしてへんのに。

「アニス君のその恰好、他の人に見せたらアカンよ？」

「寝間着は人に見せる物じゃないよ、はやてちゃん離れてよ。苦しい〜」

「ホンマ、こつ近くで見ると……どう見ても女の子にしか見えへんな〜……胸揉んでみるか」

「ひゃっ！は、はやてちゃん！？だ、だめ！くっ、あはははは！くくすぐつたいよ！あはははは！」

「あぁ……幸せや……」

「こ、こんなことで幸せを感じないですよ！？あぁ、ワイシャツがシ

ワくちやに……もう、はやてちゃんが僕を膝に乗っけたいなんて言
い出すから……」

「あはは、すまんなあ。アニス君が可愛すぎるから、どうしても歯
止めが効かんくなってまうねん」

「ぶーぶー。結構恥ずかしんだよ？」

「……もうかわええなあ！」

顔を赤らめて上目づかいで言われても説得力の欠片もあらへん！
もうアニス君は妹！ウチの妹に決まりや！性別？アニス君の前では
塵にも等しいで！

「アニス君、ウチホンマ幸せや」

「……はやてちゃん」

「両親が亡くなってもって……足が不自由になってもって……ウチ、
寂しかった……学校にも行けへんし、病院から帰って来ても、誰も
お帰り何て言ってくれる人……おらんかったし……ご飯を作っても、
美味しいって言って、笑ってくれる人がおらんかった……」

「……………」

「ホンマ、アニス君とアंकさんには感謝やで……………不謹慎やけど……………アニス君がここに逃げてきてくれて、ホンマ良かった……………」

「……………はやてちゃん……………」

「何や……………?」

「……………魔法つて、信じる?」

アニスサイド

今までの事を思い出して泣いているはやてを見ているのが俺には出来なかった。

寂しいとはやての口から出るのを見ていられなかった。そして、今がとても幸せだと言って笑うはやてを見ていられなかった。

これから始まる悲劇を、これから動き出す運命を……………。何も知らずに、今が幸せだと言って、俺に笑いかけてくれるはやての笑顔を見て……………俺は俺を許せなくなつた。

たぶん、俺が手を出さなくても……なのは達が終わらせる。
むしろ、俺が手を出さなければ、物語は改変されなくて済む……だ
けど……俺ははやてに嘘をつきたくなかったし、はやての笑顔を、
守りたくなつたんだ……。

「ま、ほう……?」

「そう、魔法」

「あはは、アニス君、夢見すぎやで。このご時世に魔法で……そんな
なんある訳ないやん」

「それが、あるとしたらどうする?」

「……せやな、取り敢えず、見せてもらいたいわ」

「……だったら、見せてあげるよ」

「へっ……?」

俺ははやての膝から立ち上がり、はやての目の前に立つ。
そして、極限まで魔力を抑え、クイーンを起動させる。

「クイーン、セットアップ」

《了解しました》

バリアジャケットを纏い、ブリジットと同じ格好になる。
はやては目を丸くして、俺を見ている。

「まあ、魔法と言っても……少し科学的だけどね」

「……か……かわええなあ！何やねんその修道女みたいな恰好は！
？似合いますぎや！」

「い、いや、はやてちゃん……結構真面目な話なんだけど……」

「はっ！カメラ！カメラどこや！？アニス君のこんな可愛い格好、
いつ見れるか分からへん！……いや、いつも見とるか」

「……お……お願いだから、俺の話当真面目に聞いてほしいんだけ

「ふう……それで、魔法の話やったな」

「は、賢者タイム……だと……」。

「は、は、あの間奏の間に何してきたんだ……」。

「取り敢えず俺はバリアジャケットを解除して、話を続ける。」

「は、は、は……実は俺、この世界とは違うから来たんだ……」

「違う世界？」

「うん……そこは……そうだね、魔法の世界って言うても間違いないかもね。俺はその世界から来たんだ」

「……ちよつと待ってえな……せやったら、逃げてる云々は嘘やっ
たんか？」

「ううん……それはホント……俺は逃げて来たんだ、あの世界から。
俺の一族、クロイツベル一族の手から……」

「クロイツベル……一族……？」

「そう、俺の一族。……俺は、生まれちゃいけない存在だったんだ。その昔、俺の一族の一人が……それはもう、化け物の様に強かったんだ……だから、その人は皆に恐れられて、殺された。その生まれ変わりが、俺」

「……………」

「だから、俺は……その一族から命を狙われる事になったんだ……その時、お父さんとお母さんが戦ったんだけど……連れて行かれちゃって……俺はアंकと逃げたんだ……この世界に……」

自分が力を使いすぎたせいで、あんな事が起きた。

俺が引き起こした悲劇……いや、自業自得なのかもしれない……。

「……いきなり、魔法だとか、世界だとか言われても困っちゃうよね……ごめん、はやてちゃん」

「……アニス君……」

「……何？」

「アニス君は、ズルいで……」

「……………えっ？」

「そんな事、隠しとつたんか……。しかも、命狙われてない言つたのに、そっちが嘘やつたんか……………」

「は、はやてちゃん？」

「そこに座りい！！」

「は、はい！！」

いきなりはやてが大きな声を出したので、俺はびっくりしてはやての言つ事を聞いてしまう。

「ええか！ウチらは家族や！！隠し事はするなどは言わへん！！せやけどなあ、産まれたらアカンだとか、困っちゃうよねとか！！そないな事言わんとして！少なくとも、アニス君が産まれてへんかったら、ウチは今も一人のままや！せやから……………そないな事……………言わんとして……………」

そう言つて、はやては泣き崩れてしまった……………。

「は、はやてちゃん!?!」

「うう……アニス君……グスッ……居なくなったり……せえへんよな?」

「……うん、俺は絶対に居なくなるらないよ……」

「アニス君……」

「はやてちゃん……ありがとう」

「ふえっ?」

「はやてちゃんのお蔭で、少し気が楽になったよ」

「……ふふ、そうか?……なあ、アニス君」

「何?」

でも、はやての寝顔可愛いな……俺ははやてを床に置き、すぐさま部屋から毛布を持ってきて、はやてに掛ける。

「泣き疲れちゃったのかな？」

悪い事しちゃったな……。

アंकクにも言わないと、はやてに魔法バラしちゃったって。怒るかな？

……ほう、それはそれでしょげるわ……。

あ……はやての寝顔見てたら……俺も眠くなってきちゃった……俺ははやての横で眠ってしまった。

~~~~~

「ただいま」

はあ、何とかバイト先を手に入れた。

まあ、何とも魔力が高いガキが一人居たが、関係者ではないので害はないだろう……。

それにしても、静かすぎる……。

いつもならアニス辺りが走って来て抱き着いてくる筈だが……。

俺は靴を脱ぎ、居間に向かう。

「……………ああ、静かな理由が分かった」

八神が寝ている傍らで、アニスがはやての手を握って眠っている。傍から見たら姉妹に見えるな……………っと、アニスは男だったな……………日に日に女っぽくなってくるから複雑だ……………。

「……………取り敢えず、グリード、撮っとけ」

《あいよ》

何となく写真にとっておこう。

……………た、他意はねえよ！ただたまたまにデバイス使ってやらないとあれだと思って使っただけだ！！

第十一話 正直に話そう（後書き）

キンクリと急展開にワロタWWW

どうしてこうなったWWW

さて、ここでフラグパロメーターを見ましよう

アंक：負けるものかああああ！！

はやて：アニス君……お持ち帰りしてもええか？

なのは：まだだ！まだ落ちんよ！

はやてええええええええええ！！お前が一番目に落ちたのかああああ！！

まあ、俺の意図です、さーせんWWW

後ね



## 第十二話 アニスの異常性（前書き）

今日はもうあれだね

修学旅行の話で盛り上がったね

来月の始め辺りに修学旅行行ってくるんで、その話合いました

みんな、自分勝手すぎやろ……

本編は始まります

## 第十二話 アニスの異常性

アニスサイド

「ハア……ハア……」

洒落になってねえよ……これ……。  
ヤバい……体が言う事を効かない……。

ガン！ガン！ガン！

「ハア……ハア……」

さっきから俺は、意識を保つため壁に頭を打ち付けている。  
もう、何度ぶつけたか分からない……頭の皮膚は切れ、血が噴き出  
ている。  
にも関わらず、俺は一向に止めることをしらない。

「ハア……ハア……」

まさか、こんな朝早くから出るとは思わなかったぞ……。

ガン！ガン！ガン！

「ハア……ハア……」

頼むから……収まってくれ……これ以上……は、俺も……意識を……  
……。  
持って行かれる……流される……。

その時、この部屋のドアが開かれる……。

「アニス、朝だ……ぞ……。おい！！お前何やってんだ！？」

「ハア……ハア……ははは……やっと……来てくれた……」

アंकがこの部屋にやって来たのに、俺は一向に頭を打ち付けるのを止めない。  
そろそろ、本気でヤバイよ……。

「血が出てるぞ！もう止めるー！」

「ハア……ハア……簡単に言つなよ……結構、正気を保つので精一杯……何だよ……」

「……まさか……」

「ハア……ハア……そう……その……まさかだよ……もう、頭の中で、ガンガンうるさいんだ……」

殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して、死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい……。

「アン……ク……もう、無理……だから、俺を縛り上げて……。後、口も何か加えさせて縛って……何するか分からないし……下を咬んで死ぬかもしれない……」

「そ、そこまで……」

「早く！……もう……無理……手遅れに……なる前に……」

「ちいつ！はやまんじゃねえぞ！……」

「ははは……死なない……よ……」

そこで、俺は意識を失った……。

アंकサイド

くそ！何もこんな朝早くに出なくても良いだろうが！  
俺は急いでアニスの部屋から出ていき、リビングに向かう。

「八神！」

「は、はい!？」

「何か縛るものとタオル無いか!？」

「あ、それやったらキッチンの戸棚の中に、ビニール紐と、洗面所にタオル干してありますよ」

「分かった！」

急いで持って行かないと、あいつが何を仕出かすか分かったもんじゃない！

部屋に戻ってきて、辺り一面血の海とかだったら絶対に嫌だぞ!!

「アंकさん、そないに急いでどうしたん？」

「今は構ってる時間はねえ!!」

俺は八神を無視して、そのままアニスの部屋に走る。

「アニス!!」

「……………ア……………ク……………」

部屋に戻ってみると、そこには目に光が無く、うつろになっているアニスが居た。

俺が部屋に入ってきたのに気づき、俺の所に視線を向ける。

「……………死に……………たい……………」

「ふざけんな!何が死にたいだ!まだ両親見つけてないだろう!」

「……もう……無理……」

震える声でアニスは良い、目をきよるきよるさせる。  
そして、俺が持つてる紐に目が留まる。

「……アネク……その紐……ちょーだい……？」

「何……言ってるんだよ……お前……」

「紐……ちょーだい……首……吊って死ぬから……」

「正気に戻れ！！自分が何言ってるのか分かってんのか!？」

「……死にたい……死にたい……死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい……!」

「ちいっ!」

俺はアニスの押さえつけ、手首と足首を縛り上げ。  
口に猿轡の様にし、タオルで縛る。

「むーっ！むーっ！」

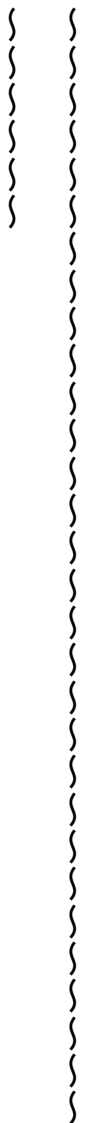
「……何か、酷い絵図らに……」

アニスは頭から出血し、手足は縛られ口も塞がれている。

「むーっ！…！むーっ！…！」

「しばらくそのままです、頭冷やしやがれ」

そう言って、俺はアニスの部屋のドアを閉める。



「……むっっ……」

「……何だ？」

「アニス君、起きてけえへんなあ」

「……今日は、まだ寝かしといてやれ」

「……アंकさん、何か隠してへん？」

「……何でそう思う？」

「アニス君は、隠し事……魔法の事や、自分の事を話してくれた。でも、アंकさんからはまだ何にも聞いてない」

「……あいつ、バラしたのか……。  
つたく、お人好しも、ここまできれれば呆れて来るな。」

「……まあ、そこまであいつが話したんなら、そこまでお前を信頼してる証拠か……」

「ふえっ!？」

まあ、こいつが原作キャラ……だったか？  
その立ち位置に居るから話した可能性も高いけどな……。

「……八神、この話を聞いて、あいつを軽蔑したり、怖がったりし

ないか？」

「……いきなり何を言い出すんですか？ウチがアニス君を軽蔑するなんて……そないな事考えられへん」

「……そうか……だったら教えてやる……」

俺は、アニスの死にたがりについて、簡単に八神に説明した。  
昔は酷かったが、今は自分の意志で抑えている。だが、箍が外れるとすぐに自我を保てなくなり、目につく物全てで自分を傷つけ、自分を死に晒すような事を繰り返す。と。

「……それじゃ、アニス君は今……」

「ああ、今日がちょうどその日にぶち当たっちゃった。だけど、今さっき紐で縛り上げて来たから大丈夫だろ」

「ひ、紐とタオル持ってたんはその為か！？……マニアックやな  
……」

「違う！勘違いすんな！！何がマニアックやだー！！」

「でも、九歳の子を縛り上げるなんて……少しやり過ぎとちやいまずか？」

「いや、そうでもしないと、本当に首を吊りかねなかつたし、何かで自分を刺しかねなかつた」

「……そんなに酷いん？」

「見に行くか？今頭から出血して酷い事になってるが」

「って！そないな事何でサラツと言っねん！せやつたら血い流し過ぎで今気を失つとんのちやう！？」

「……おお、そういう事もあるのか……」

「何でそんなに落ち着いてるんですか！？はよお見に行きますよ！」

俺は八神と一緒に急いでアニスの部屋に行く。

勢いよくドアを開け、そこに居るのであろうアニスを見る。

「うわぁっ！？やっぱり氣い失つとる！？しかも血が止まってへん

!？」

「ア、アニス!!」

……とにかく、アニスは死にたがりを発動しても、気を失っても、手が掛かる奴だと、今日身に染みた……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「いやあ、恥ずかしい所を見せちゃったね」

おはよう、つと言っても、もう夕方何ただけどね。
何か一回気を失って目が覚めたら死にたがり消えてたよ。

「全く、心配掛けやがって」

「えへへへ、ごめんねアंक。ほらほら、抱きしめて良いよ〜?」
「褒美ご褒美〜、キャハハ!」

「じゃあお言葉に甘えて……」

「ちよっ！？はやてちゃん禁止！胸揉んでくるから嫌だ！って、言ってる傍から！？あはははは！や、やめて！くすぐったいって！あはははは！」

「いやぁ！はやて胸揉まないで！くすぐったいから！そして痛いから！……あぁ、やっと地獄から解放された……」。

「それで、どうなんだ気分は」

「うん、少し腫物が引いた感じだよ。でも、まだ全部晴らした気分ではないよ」

「……そうか」

「いやぁ、それにしても、些かマニアック過ぎたねあれ。まさか人生初のSM紛いな事をやるとは、しかも自分からアंकにやっつて言つとか……あぁ、恥ずかしすぎて、過去の俺をぶん殴りたいよ」

「あはは、まあ、頭から血を流しとったから、ウチは見る余裕無かったで」

「でも、もうあんな羞恥は嫌だよ……はっ……」

「はあ、もう俺もこりこりだ……あんな姿見たくないは……」

「でも……アंकがしたいんなら……良いよ？」

「ええい！頬を赤らめて言うな！お前には羞恥は無いのか！いい加減俺をからかう癖を治せ！！」

「あははは！怒った怒った、キャハハハハ！！」

「じゃあウチがしたる！！」

「……丁重にお断りします」

はやてにさせたら死にそうなのでやめとくよ……ああ、今回は収集や纏まりがつかなかったけど……ま、これで良いっか！
それじゃ、また明日とか！

第十二話 アニスの異常性（後書き）

収集つかねー

後、 g d g d

さて、今回は短めでしたね……

明日はなのはとの絡みを書きたいです、それと、アングのバイトの話とかも……

ここまで読んでくださりありがとうございます

簡単なプロフィール

名前：アニス・クロイツベル

デバイス：クイーン

性別：アニス

バリアジャケット：ブリジットの格好、もしかしたら変わるかも

年齢（現時点）：九歳

魔力ランク：SS -

魔法の種類：ベルカ式、ミッド式、クロイツ式、ガツシュ達の呪文

スキル：死にたがり、魔具生成、???、???

容姿

男の娘で、髪は伸ばしっぱなし。
精神が肉体に引つ張られ、口調は少し大人びてるものの、恥ずかし
かったり悲しかったり、嬉しかったりすると、幼くなる。

武器：剣、杖、斬魄刀、???、???

考察

アニスの前世は童顔な男です。

死因は首吊りで、極度の死にたがり。実はこの世界に来てからは、
その制御も理解してきたが、たまに箍が外れ、死にたがりモードに。
性格は温厚、と言うか、基本デレデレ、余りツンツンしたりはしな
い。そんな事もあってか、男女問わず落とします。

ゲイじゃない男の人も、その道にずると引きずりこむ。アंक
が良い例です（笑）

友好関係は今の所、はやて、なのはのみ。

アニスにハーレム思想があるのかと言われれば、無いです。でも、
アニスのキラースマイルや、寝起のアニスで落ちる子も少なくない
のです！

基本、服装はパーカーにジーンズ。寝間着は裸ワイシャツにスパツ
ツ。

三度の飯よりスパッツが大好きな変わった子、本人曰く、あそこま
で動きやすい物はない、だとか。

好きな物はアंकクに甘える事、褒められること、頭を撫でられること、はやての料理。

好きな者は、アंकク、はやて、なのは。

嫌いな物は管理局、胸を揉まれる事はやてのみ

嫌いな者はクロイツベル一族（クラウドとアリスは除く）

このプロフィールは、編集、改変、項目増殖があります

名前：アंकク

デバイス：グリード

性別：男

バリアジャケット：まだ本編未使用

年齢：?????

魔力ランク：A A A +

魔法の種類：ミッド式

スキル：完全グリード化

容姿：オーズに出てきたアंकクそのもの

武器：己の体のみ

考察

アニスのパートナーにして守護騎士みたいな存在。
ツンデレだが、アニスを抱きしめるのが日課な、少し腐臭のする人。
完全作者が好きだったので、こういった立ち位置に……みんな、す
まん……悪気はなかったんだ……。

好きな物：アイス

好きな者：アニス、はやて

嫌いな物：特になし

嫌いな者：クロイツベル一族（クラウドとアリスは除く）、アリス
に害を成すもの

位ですかね。

短くてごめんなさい……まあ、これからも更新しまくるんで、応援
お願いします！

それじゃ、また明日とか！

第十三話 アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説（前書き）

いやあ、今日は雨が降ったよ

雨は最高だね、大好きだ

本編始まります

第十三話 アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説

アニスサイド

今日ははやての診察の日……何だけど……。

「あーうー……ごめんねはやてちゃん、俺の背が小さすぎだから、車いす押せなくて……」

「あはは！そんな事気にしてへんで、アニス君。その心遣いだけで嬉しいで」

「……………はう……………」

「ああもうかわええな！！大丈夫やて、アニス君達が来る前は、自分一人で行って帰って来てたんやで？」

そう言われると……少し空気が重くなるよはやて……。それにしても、アンク何処行っちゃったんだろう？朝起きたら既にいなかったし……。

「ねえはやてちゃん。アンク何処に行っただか知ってる？」

「あれ？アंकさんならバイトに行っただけ……」

「……何それ初耳……」

アंकめ！俺に内緒でバイトを入れたんか！せつかくの休日、俺が朝から活動できる限られた時間、今日はアंकとイチャコラしてやるうかと思ってたのにい！！

とは思ってないですよ？流石に、俺にいバイトが決まった云々の所だけ本ただけど、後は嘘だよ？

だって、俺が無理言っただけ働いてくれてるんだし、仕方ないよ。

でも、言ってくれよ。気になるじゃんか。

「はやてちゃん、アंकが何のバイト始めたか知ってる？」

「いや、知らへんな。何も言っただけだったし」

アंकえ……お願いだから言わないってのは止めてください……。

「よし、探してみよう」

アंकクの魔力を辿れば、何とか辿り着けると思っただ。
でも……はやてがな……。……。

俺は考え事をしてはやてをチラッと見、また考え事をしては、チラ
ッとはやてを見……。それを数度繰り返す。

「ああもつかわええなあ！そう何度もチラチラ見んといて！探し
て来れば良いやん。アニス君の事や、魔法かなんかで探ってみるん
やろ？」

「あはは、まあ、当たらずも遠からずだね。ただアंकクの魔力を辿
つてみようかなって考えてた所」

「行つてきてええよ？ウチは気にせえへんから」

「……もう、何て言うか……。はやてちゃん大好きだあああ！」

「ウチもやああああ！」

テンションたつか。

あ、俺もか。気にしない気にしない。さて、行きますか。

「ごめんねはやてちゃん、今度俺が付き添うから！それじゃっ！」

俺はダツシユで玄関に向かおうとしたら、はやてちゃんに手を引っ張られて止められる。

「キヤツ！？……は、はやてちゃん……肘抜ける……痛い……」

「あ、すまへんな。でもアニス君、その恰好は駄目やって、アंकさんも言ってたやん。スパッツはええ、だけどその上！ワイシャツは脱ぎい！そしてちゃんと服着い！」

「あ、そうだった。まだ寝間着のままだったっけ。えへへ、うっかりうっかり」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「さっ！行くか！」

「ほな、行ってらっしゃい」

「…」

あの後俺は速効で着替え、アंकを探すミッションに向かう。  
え？今日の服装？ふっふーん、良くぞ聞いてくれた！今日の服装は  
上が普通のパーカー、下はスパッツにニーソックス！そこ！ロウキ  
ゆーぶとか言わない！！そして女装じゃねーよ？うん、違うから。

「ああ、アニス君アニス君……ハアハア……生足もええけど……あのチラツと除く太もももええ……」

後ろに居る変態はぢては気にしない。鼻血出し過ぎて倒れないでね？

「ふんふふーん」

うん、やっぱりどろどろと青空の下を歩くのは、気分が清々しくな  
って気持ちいいな。

学校、通ってみようかな？でもでも、アंकやはやてに迷惑や負担  
が掛かっちゃうし、諦めよう。

「……………むい？」

目の前にぬこはけーん。さて、何をしようか？

先ずお腹をもふもふする……それから……っと、いかんいかん。今  
はアंकだ。

俺はぬこをスルーして歩き出す。

飼いたいな、ぬこ飼いたいな。にゃーにゃー。

「さて、真面目に探そう」

俺は少し集中し、アングの魔力を探る……。

……うん、ここからもう少し行った所に魔力を感じるな……でも、反応が二つなのはな何故？

まさかなのは？はははー、まさかー、アングが喫茶翠屋でバイト何て、ありえないでしょ。

そう思っていた時期が、俺にもありました……。

ドンッ！

「……あはは……」

着きましたのは喫茶翠屋……その中にアングの魔力が感じられる……。

「あー、あの子可愛い」

「本当だー、お母さんのお使いかな？」

道行くお姉さん方、これでも男なんだぜ？こんなナリして、男なんだぜ？

まあ、冗談はさて置き、中に入らん事には始まらない。

カランカラン

相変わらず、良い香りがスツと鼻に入ってくる。  
パーフェクトハーモニー  
良いねえ、やっぱ調和だよ調和。完全調和！そう、それだ！

「いらっしよ……」

「……ほう……」

そこには、いつも見慣れた奴が、見慣れない格好で、営業スマイルを浮かべていたアंकが居た。  
が、俺だと分かるや否や、顔が引きつる。

「……アंक……」

「……何だ……」

「……グッジョブ……」

「うるせえ！だからお前達には教えたくなかったんだ！特にアニス！！て言うかスパッツ脱げていっつも言ってるんだろ！！」

「アंकクのウェイター姿！いただきました！！だからスパッツは俺のジャスティス！！」

「帰れえ！！そしてズボンを穿け！女みtainな格好してんじゃねえ！！」

「いやはや、まさかアंकクが喫茶翠屋でウェイターとしてバイトするとか……。」

「ああ、アंकクはどんな姿させてもカッコ良いなあ……。て言うか、心外、これは女装じゃないんだよ？」

「アंकク君、どうしたの？そんな大きな声出して」

「あ……何でも……ない……」

「？あらー、アニス君じゃない。こんにちは」

「桃子さん、こんにちは！」

「今日はどうしたの？またお菓子買いに来てくれたの？」

「ううん！今日はアंकをからかいに来たの！」

「てめえ！やっぱそれが目的か！」

「だって、アंकバイト入れたのに教えてくれないんだもん。だから探しちゃった テヘペロ」

「ええい！帰れ！八神はどうした！？お前と病院行くとか言ってたぞ！？」

「もちろんはやてちゃんには無理を言っちゃいました アニスたん  
つたら強引」

「八神いいいいい！！！」

「ア、アंक君、落ち着きましょう！？アニス君も煽らないの！」

「ハア……ハア……すいません……」

「ごめんなさい」

さて、若干俺も歯止めがきかなくなっただ気があったが、そんな事はなかったぜ！

「それで、アニス君とアंक君の関係は？」

「結婚を前提に付き合ってるんです」

「馬鹿か！」

ドスッ！

「っ！……っつゝ、アंकく、冗談なんだから……一々殴らないでよ……」

「ふんつ。ただの兄弟だ……です」

「ぶっ、アंकったら、敬語下手だね」

「うるせえ」

「兄弟にしては……似てないわねえ」

「まあ、気にするな……です」

嘘だから仕方ないんだよ桃子さん……。でも、アंक金髪だから案外外人に見えるし……大丈夫かな？

「さて、お話はこれ位にして！アंक君、仕事仕事！」

「了解だ。それじゃ、俺は戻る」

「分かったよ」

そう言うと、アंकは仕事に戻って行った……。桃子さん？何で貴女は俺の隣に居るのですか？貴女も仕事あるんじゃないんですか？

「それにしても、アニス君は相変わらず可愛いわねえ」

「あはは、褒め言葉として受け取っておきますよ」

「あ、そうだ。なのは呼んでみましょうか。アニス君も久々にお話ししたいんじゃない？」

桃子さん、それは要らんお節介なのですよ。

つてああ、なのはを呼ばないで！いやだ！止めて！

「はい、どうしたのお母s……」

「や、やっほー……」

なのはは何故かいきなり無言になり、数秒後、つかつかと俺の所に来る。

しかも無言でだ……。

「アニス君……」

「な……何……かな？」

「……お持ち帰りはしてますか？」

「当店のアニスは、テイクアウト禁止です」

「でも持ち帰るの!」

「いやあ!止めて!?!引つ張らないで!?!桃子さん!貴女はあらあらみたいな顔で見ないで助けてください!!!」

「もうアニス君可愛い!!そうだ!お母さん!ウエイトレスの服って確かあったよね?あ、でもサイズ無いんだっけ……」

「ふふふ、なのは、その点は抜かりないわ!ちゃんとアニス君用のウエイトレス服を用意しているわ!」

「ちよっ!いつ俺のサイズ測ったし!?!」

「アニス君。身長は95?、体重は19キロ。それ位で大体は出来るわ!」

「俺ですら知らない身長と体重を知ってる……だと……つつか俺100?も無かつたんだ……orz」

せめて100？は欲しかったな……もう伸びないだろうね。八歳辺りからも成長止まって来てるし……神様、あんた極端だよ。

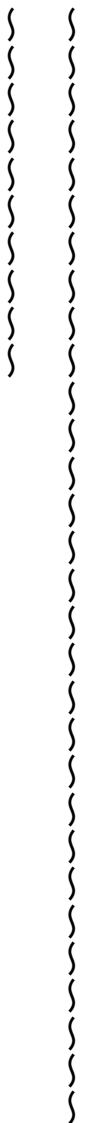
「さあ、着替えるの！」

「……有無を言わさぬその言動……」

流石魔王となりうる器……ははは、君の願いは断れないです。

「はあ……とうとう女装か……」

もう、何も思いません……。



「うわー、アニス君可愛い〜」

「あはは、ありがとう〜……」

着て来たお……スパッツが無かったら即死していた。  
ははは、サンキュースパッツ！！

「うおおー！可愛いぞお！」

「あれが男……だと……」

「違う！第三の性別！アニスだ！」

「うおー！アニスたん！俺だ！けっく「言わせねえよ！？」」

「……何ぞこれ……」

何か、いつの間にか翠屋がこんな事になってるお……。  
つうか何で俺の名前知ってるし……。

「あれ？アニス君知らないの？」

「へっ？何が？」

「アニス君、海鳴市では都市伝説みたいになってるんだよ？九歳と

は思えない大人びた口調、それに見合わない身長に、凄く可愛い。  
なのに男の子！って感じてね」

「なん……だと……」

この俺が、都市伝説化……だと。  
某とあるの、超能力が効かない男、脱ぎ女みたいに……歩く都市伝説化しただと……。

「……てめえら帰れ！」

「アニस्ताーん！」

「男勝り……ハアハア……いや、男か」

「もう男でも女でもなんでも良い！けっく」だから言わせねえよ！  
？」「」

「……はあ……どないせいっちゅうねん……」

「……」パシヤツパシヤツ！

何かバカテスのムツツリーニみたいな奴が、鼻血を出しながら写真撮ってるんだが……。

「なっ……あいつは!?!」

「ああ、間違いない……奴だ……」

「ゲンドウ乙」

「アニスさんに並ぶ、もう一人の歩く都市伝説……」

「……ムツツリーニ寡黙なる性識者」

「……」  
「ブンブンブンブン！」

「分かりやす過ぎなのに！頑なに否定してるぞ!?!」

「流石はムツツリーニ!」

お前、この世界でもそう呼ばれてるんだな……バカテスに帰れ。

「ね、ねえ、君名前は？」

「……………土夜孝太……………」

漢字が違っただけじゃねえか！！  
ありえねえ……………この世界、何でもありか……………。

「よ、よろしく、土夜君」

「……………できたら孝太と……………」ブシャアアアア！

「こ、孝太君……………？」

「……………悔い……………なし……………」ガクッ

「ムツツリイイイイニイイイイ！！！」

「な、なんて事だ……………スカウターが壊れた……………だと……………」

「……ス、スカートの中……が……」ブッシャアアアアアアア!

「ああ!? 倒れたことで! 傷口が悪化した!? ムツツリーニ! 何色だ!? 教えてくれえええええ!!」

「……ス……スパッツ……ムチムチ……」ガクツ……

「ムツツリイイイイイイニイイイイイイイイイイ!!」

おいそこの変態共……いい加減にしろや……。  
もう収集つかんぞこれ……まあ、俺もやり過ぎた感は……無いな。  
今回、俺は何もしてないし……。  
その時。

「ホラっ」

パサッ……。

「……アंकク？」

「着てる……お前のその恰好見られんの、何か癪に障る」

アंकは何処からか大きな上の服を持ってきて、俺に掛ける。  
……えへへ……アंकは優しいな、まだバイト中なのに。

「……えへへ、アंकありがとう」

「……ふん……」

鼻を鳴らして、アंकはまたバイトに戻る……。

「アニスたんが……ハニカンだ……だと……」

「奴は誰だ!？」

「はっ!数日前からこの喫茶翠屋でバイトしてる、アंकと言う男です!女性客に人気があるイケメンでございます!」

「異端会議だ!」

「戦争だ!!!」

「アンク×アニス……ありだと思います……」

今度は日傘を差した子が現れたぞおい……今度は西園さんかコノヤロ―。

髪の色、若干被ってるじゃねえかコノヤロ―。

「……アニスさんは、好きですか？」

「……何が？」

「……男と男の、濡れ場ですよ」

「……あはは、ごめん、分からないよ」

「……そうですか……では、また今度、何処かでお会いしましょう。貴方は完全に、こっち側ですから」

そっち側ってどういう事さ!?!怖い!この子怖い!!  
ヤバイ、やっぱりこの子、あの某小さな破壊者に出てくるあの子だよ!

「あ、名前聞いても……良いかな?」

「……………仁紫園溇にしそのみおです」

この子も漢字が違うだけか！？本当に何でもありだな、この世界…  
…。  
まさか、バカテス、リトバスと来ましたか…。  
何だか、今日は疲れたよ…。

「にやはは、お疲れ様アニス君」

「張本人の癖に……………ちゃっかり自分は安全地帯に居るなんて……………酷いや、なのはちゃん」

「にやはは、ごめんごめん。でも、まさか宣伝して数分で、あんなになるとは思わなかったんだよ」

「……………宣伝したの？」

「うん！」

「……………頭痛くなってきちゃった……………取り敢えず、なのはちゃんは極刑ね」

「ええ!?!」

何となく、なのはちゃんは俺と同じ苦しみを味わってみればいいよ。さっきの苦労が分かるよ?

いきなりたん付で呼ばれるわ、写真は撮られるわ、拳句の果てには求婚だよ?

もう、俺は疲れた……、帰って寝る。

~~~~~

取り敢えず、あれから着替えて帰りました。

あ、ちゃっかりムツツリー二と仁紫園さんとは仲良くなったよ?—
応メルアド交換しました。

「ああ、疲れた」

「お帰りアニス君。それで、何でそんなに疲れとるん?」

「いやあ、ちよつとね。アングのバイト先に着いたんだけど……そこで着せ替え人形みたいにされちゃって……」

「……ほう、それは興味があるなあ……」

「興味持たないですよ。それで、アंकは喫茶翠屋でバイトしてたんだ」

「……マジかいな……ウェイターとして？」

「うん、そうだよ」

「はーっ、さぞカッコえんやろっな」

「うん！それはもうカッコ良かったよ！」

「うわっ、惚気や惚気」

「もう、からかわないでよ」

「……ぷっ、あはははは！冗談や冗談！さっ、夕飯の支度しよか」

「そっだね。俺もやる！」

「オーケーや」

そんなこんなで、今日はアंकが帰ってくるまではやてと一緒に料理を作りました。

いやあ、もう何か……女装って怖いねえ。

第十三話 アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説（後書き）

はいっ！やり過ぎました！

バカテスの土屋好きなんで、出しちゃいました！まあ、漢字は変えてますけどね

後は西園さん……

リトバスの中ではキャラが好き、でも好みではない

まあ、この子も漢字変えて出しました

ごめんなさい……でも、これからもちよくちよく絡んできます。でも魔法は使いませんよ？

お友達です、そう、ただのお友達ですよ……

て言うかムツツリー二の女装で、俺は落ちたんや……可愛い……何だあいっ……マジ可愛い……と

西園さんは、まあ……キャラが好きただけであってですね、好みで言ったら美鳥の方が好きです

つつか姉御やはるちん、クドやこまりんの方がええねん

後は理樹、あいつは可愛い

つつ訳で、自重しきれなくなったんで、終わります

ここまで読んでくれてありがとうございます

第十四話 別荘と修行（前書き）

よっすー

いやあ、来週は忙しいので、もしかしたら一旦更新が止まるかもしれません

まあ、余裕があつたら予約投稿してみようかなとか思ってます

でも、番外編です

来週の水、木は居ませんので、更新できるのは月、火、金です

そして、日曜日は何かウチのバカ先公が、牛を借りて何かに出品するので、お前ら泊りなって言われました

死ね、市ねじゃなくて死ね

お前らの勝手な行動で、困るのはうちら何だよ、勝手に変な予定入れんな屑教師

つと、キャラが変わっちゃいましたね、すんませーん

そんじゃ、本編始まります

第十四話 別荘と修行

アニスサイド

「アंक、少し別荘で鍛えてこようと思うんだ」

「……そうだな。次の儀式にも備えておきたいし。なら、俺も行く」

「でも、そうになったらはやてが一人になっちゃうな……」

「そっだな。はやてはもう魔法の事は知ってるし、どうせなら連れて来る？」

「あ、でもまだ寝てるんだもん、て言うか、俺達が今日起きるの少し早過ぎた。」

「ん、じゃあザゼルさんでも呼んでさ。はやてが起きたら連れて来るように言っ？」

「……俺はあんまり、というか凄くあいつの事は嫌いなんだが……」

「そっ？俺は結構面白い悪魔さんだなんて思うよ？」

そう言っつてアंकはすぐに俺の頭を撫でてくれた。
うんー！やっぱりアंकは優しいの！

「えへへ、アंकの手は落ち着くから大好き！」

「……………ふん……………」

あから照れちゃった照れちゃった。でも、ちゃっかり頭を撫でるのはやめないんですね……………。

まあ、ツンデレなアंकちゃん。

「さて、ザゼルさん呼んじゃおっと。使い魔召喚、ザゼル！……………さん……………」

一応考慮してさんを付けたよ……………いや、何か付けなきゃ悪いかなって思っただけ……………結構語呂悪くて驚いた。

まあ、当然の結果か……………。

そう思っつていた時、急に床が光だし、魔方陣が浮き出る。そしてその中心から、ザゼルさんが現れる。

「……………あつ、アニス君じゃありませんか。お久しぶりです。全く、あれ以来一度も呼んでくれなくて、結構寂しかったんですよ？もしかして焦らしですか？アニス君はそっちの趣味があるんですか？それならそつと早く言ってくれば、私はどつちでも行けますよ？それと、食べても良いですか？」

「……………アニス、やっぱり帰ってもらえ……………」

「うん……………そうだね……………」

「ああ、嘘です！嘘嘘！全く、冗談に決まってるじゃないですか」

ほ、ホントにそうなんだろうか？

少なくとも、目がマジだったんですけど……………。

「それより、今日は何で呼び出されたんですか？」

「あ、そうだった。あのねザゼルさん、今日俺とアंकは別荘に行つてちよつと修行してくるから、はやて……………この家の主人が起きたら、別荘に連れてきてほしいんだ」

「ふむ、別荘ですか……………あれ？でも、ここは人間界ですよね？アニス君は違う世界出身……………だったら別荘って、その世界にあるんでし

ようか？だったら、私は長距離転移は出来ませんよ？」

「ああ、違うよ。別荘ってのは、俺が作った魔法空間……みたいなものかな？今見せるよ」

パチン。

俺はザゼルさんにそう言った後、指を鳴らして空間を裂く。これには魔力が必要ないから楽だな。何か適当にやったらまた出来たって感じなんだよね。

「さて……ここらへんに……うわっ、出てきちゃ駄目！あっ、お前も！あ、コラ！共食い禁止って言っただろ！……おっ、あったあつた」

（その中に、一体何が居るんだ（です））

アंकとザゼルは、互いにそう思ったとか思わなかったとか……。

「じゃじゃーん！ダイオラマ魔法球！」

「……ただのミニチュアの塔が入ったガラス球にしか見えないので

すが……」

「えっへん！説明しよう！これはダイオラマ魔法球と言い、外見はただのミニチュアが入ったガラス球にしか見えないけど。実はこれ、魔法で作った異空間何だ。これをセットして、中に入ると、こっちの世界が一時間経った時、こっちの中では24時間経過してる事になるんだ」

「へえ……アニス君は凄い物を作るんですね……それで、その中に入って修行すると」

「うん、そうだよ」

「……それ、女性が入ったら大変な事になりますね」

「ああ、年齢でしょ？そこは大丈夫！歳を取らないようにしたから！これで女の人でも気兼ねなく使えちゃう！さて、これで説明終わるけど、任せても大丈夫？」

「はい、任せてください。では報酬は……もちろんアニス君の体で……」

спан！

「お前は自重を知れ！」

「っつゝ……何ですか？焼きもちですか？」

スパンスパン！！

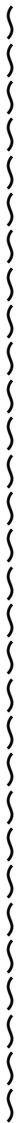
「……次言ったら、お前の顔に火炎弾を放ってやる……」

「……すみませんでした……」

アंकが計三発、ザゼルさんの頭を殴ったお……。しかも最後は顔に手をやり、脅すと言つ暴挙……ザゼルさん、ごめんなさい……。

「そ、それじゃあ、俺とアंकは行くね？よろしく」

俺はそう言つて、別荘の中に入る。アंकも続いて入る……さて、
久々だな。



~~~~~

ザザー！ザザー！

「……いやあ、着いた着いた……さて、アंकが来るまで、軽く動いとくか」

最初に入った人の次に入った人がここに来るのに、何分かのタイムラグがある。  
だから、数分は少し体を動かせる。

あ、因みに、本家のダイオラマと到着地点変えてるよ。  
だから、いきなり目の前が海なんだ。

「さて……ラウザルク！」

ドゴオッ！

雷が俺に降り注ぎ、俺の体は光だす。

……うし、身体強化は終わりつと……、俺のラウザルクの効果時間は一時間程度。本編のガッシュは30秒くらいだっけ？

そう考えると、すげえ長いな。まあ、これ使つてると他の呪文が使えないのが難点だね。

まあ、それでも斬魄刀と合わせれば、結構良い線まで行く。

「瞬歩！」

シュン！ザッ！

「……うん、まだ大丈夫そうだね。まだまだなまっではないね」

これでも結構久々なんだと、瞬歩使うの。

しかもラウザルクを使いながらだから、制御難しいな……やっぱり定期的に使わないと駄目だね。

「ラウザルク解除つと……さて次は〜つと……」

次にやる事を考えていたら、すぐ後ろで着地音が聞こえた。振り返るとそこには、アंकが居た。

「やあアंक、遅かったね」

「俺が入ったのは今さっきだ、それで遅いと言われても困る」

「だよねー。それじゃ、体を温めたいし、軽い戦闘やるつよ?」

「分かった。それじゃあ完全グリード化は後か……」

そう言いながらも、翼を生やし、右腕をグリード化させる。仕事はええっすアंकさん。

俺も、自分の身体能力だけでアंकと戦う。

「それじゃ……」

「……行くぞ!」

ドンっ!!

俺とアंकは同時に飛び出し、ぶつかり合う。

先ずアंकは右手で殴ってきたが、俺はそれを簡単に払い、蹴りを喰らわす。

けどアंकは空いている左手で受け流し、再び右で殴ってくる。

「甘いよー!」

俺はスタントマン顔負けの避け方をし、そのままアングの足を蹴る。

「ちいつ!!ハアッ!」

「くっ!」

アングは蹴りを食らいながらも攻撃をしてくる。

俺は意表を突かれたが、それを難なく受け止める。

「ったく、ただの身体能力だけで、この俺と互角……いや、少し上位か……」

「えへへ、アングに褒められちった」

「隙あり!」

「キャッ!」

俺は足を払われ、尻餅を付く……痛い。下砂だけど、案外痛い……。

「もっ、酷いじゃ〜ん」

「油断したお前が悪い」

「ぶー……ああ、スパッツが汚れちゃったよ……これ寝間着のなの……」

結構砂着いちゃったな。

まあ、洗えばいいか。取れる取れる、大丈夫大丈夫。

「じゃあ脱いで普通のズボン履いてこいよ！」

「ですよー。んじゃ、ちょっと変えてくるわ」

俺はアंकにそう言い、館の中に飛んでいく。

まあ、この中には一応着替えも詰め込んでるし、住めるようにはしてる。

ただ今館の中の俺の部屋の中です……ややこしいな……。

「さてさて……何を穿いたら良いやら」

俺の目の前には、所狭しとスパッツが仕舞ってある。  
アंकに見せたら全部燃やされそうだ……見せないでおこう。

「おっ、これは……」

半ズボン、それに半袖タイプのパーカーもある。

……うん、そうだね、今日は思い切って涼しい格好しよう。上は今  
長袖タイプのパーカーだからね。

じゃあ、半袖も脱いじゃお、ネギま本編でネギやコタローがしてた  
格好に俺は着替える。

まあ、ちょっととあるの土御門みたいになってるのは……気にしな  
い……。

「アंक〜、お待たせ〜」

「おお、そんなに待ってない。それと、もう来たぞ?」

「ん?……ああ、はやてちゃんか。それで、今何処に?」

「……そこ……」

アंकが指を差した方向を俺は向く、そこには……。

「アニスくん！ウチ、飛んでる〜！」

何故かザゼルさんに背負われて空を飛んでるはやての姿が……どうしてこうなったし……。  
まあ、そこは置いていて。

「ザゼルさん！！はやてちゃんをこっちに〜！！！」

「あ、分かりました〜！」

何とか俺の声が聞こえたようだ。ザゼルさんは言葉を返してくれると、すぐにこちらに飛んできて、はやてを下ろしてくれる。  
因みに、車いすはどうしたの？

「うわぁ……ここがアニス君の別荘なん？南国見たいやわ〜。そしてアニス君！」

「ど、どうしたの？」

「生足サイコーや！！それに、上が半袖のパーカーのみって……も

う痴女にしか見えへんで？」

はやてが顔を赤くしながら言う。

いや、痴女つて……俺は男だから、そこは間違えないでね……そこ、アंकも顔を赤くしない。後ザゼルさん、舌なめずりをしない。

「な、なあ……アニス君……ハアハア……胸揉ませてくれへん？ハアハア」

「嫌だよ！？何で揉まれないといけないの！？というか車いすはどうしたの！？」

「あ、車いすなら、ここに」

ザゼルさんは懐に手をつ突つ込むと、いきなり車いすがニョツと出てくるってっえええええええええええ！？

何で！？何で何で！？何で懐に車いすが入ってんの！？おかしいよ！？

「はい、八神さん」

「あ、ありがとうございます。まずザゼルさん。それよりも！いきなりザゼルさんがウチが起きた時に現れたんはびっくりしたで！お願いだ

から、ウチに一声かけてからにしてな？」

「あははは、ごめんねはやてちゃん。はやてちゃんまだ寝てたから、仕方なかったんだよ」

「まあ、今日は許したるわ。こんな綺麗な所に来れたしな！」

「そう言ってくれと、作ったかいがあったよ。まあ、修行用に作っただけなんだけどね」

「へえ、アニス君は凄いいんやな。それで、今日は修行する為に入ったん？」

「そうだよ」

「じゃあ、ウチは必要ないんじゃない……」

「いや、黙って入ったらはやてちゃん心配するだろうから。どうせなら連れて来た方が良くないかって」

「……アニス君……」

はやては何故か熱視線を俺に向けてくる。  
いや、俺普通に善意で言っただけなんだけど……そんな熱い視線を俺に向けないで……。

「さ、さて。それじゃあアंक、再開しようつか。あ、ザゼルさんははやてちゃんに着いてて？」

「分かりました」

俺ははやてをザゼルさんに任せて、アंकと一緒ににはやてと少し離れる。

巻き込んだらあれだしね。

「……それじゃあアंक、本気で来て。俺も本気で行くから……」

「分かった……ハアアアアア!!」

アंकは魔力を込めて、完全体のグリードのなる。アंकは自分の体を見て、こう言う。

「完全体のなるのは何年振りだ、最近じゃ、普通に翼と右腕だけで戦ってきたからな」

「あはは、ごめんね。アंकも定期的にその姿になれば良いんだけど、そうもいかないしね。ごめんね」

「気にしていないから安心しろ。さて、サツサと構えろ」

「まあ、待つてよ。斬魄刀出すから。……来い」

俺は、まだ始解をしてない斬魄刀を取り出す、え？今日は何の斬魄刀何だつて？

まあ、始解してからののお楽しみ。まあ、もうするんだけどね。

「舞え、袖白雪！」

「ほう、それか……」

本当は氷輪丸を使いたかったんだけど、それじゃつまらないし、氷雪系だったらランク落ちてる奴が何本かあるから、今回はお休み。だから袖白雪を使う事にした。うむ、相変わらず美しいなあ。

「それじゃ……」

「第二ラウンド……」

「「開始!!」」

俺とアंकはまた同時に駆け出し、ぶつかり合う……。  
模擬戦……開始します。

第十四話 別荘と修行（後書き）

g d g d g d

g d g d g d やね

g d g d g d

もう、今回が一番駄作なんじゃないかと……

それにしても、アニスは可愛い

生足サイコーですね！俺、足フェチなんです……後は髪フェチと腋フェチです

髪は良いが、後はマニアックですね

まあ、気にしない

今回はコレのはやてサイドから書きたいと思います

まあ、短いと思いますから、明日は更新で来たら二つ更新します

では、ここまで読んでくださりありがとうございます

第十五話 はやて視点と模擬戦（前書き）

やあ

これと言って、話すことは無いね

あ、そうそう、今日は水曜日にあげる番外編を書き終えたよ

明日は木曜日にあげる番外編を書き上げなきゃ

それじゃ、本編始まります

## 第十五話 はやて視点と模擬戦

はやてサイド

朝起きたら、知らん人がウチの顔除きこんどった時は凄く焦ったで。不法侵入者かドロボーさんかと思って、心臓バクバクやったで。

まあ、起きてすぐに、アニス君の使い魔言つてたから、落ち着いたんやけどもな。

それにしても、やっぱ魔法って凄いんやな。

ザゼルさん…… やったつけ？この人がいきなりウチの車いすを持ち上げて懐に入れたん見たけど、質量保存の法則無視やな、魔法つて

それからウチを抱えて、そのままアニス君の部屋に、入ってもうた。中には誰も居なくて、ミニチュアの家が入ってるガラス球が置いてあるだけやった。

「行きますよ？八神さん」

「へっ？行ってくつてどこにですか？」

「勿論、アニス君の所にですよ」

そう言つて、ザゼルさんとウチは、何処かに飛んだ……。それは一瞬の出来事やった。今まで見慣れた部屋におつたのに、いきなり周りは南国みたいな所に……。落ちとる？

「何でやあああああああ！！」

「おっと、設定違いですかね？まあ良いでしょう。よっと」

軽い口調でこの状況を物ともしていない様子。

「どうしてそんなに落ち着いとるんですかあああああ！！」

「え？いや、落ちてるんなら飛べばいいじゃないですか」

ザゼルさんがそう言つと、ウチらに掛かつた重力が無くなり、そのまま空中で止まる。

……ああ、そうやった、そう言えば……。空飛べばええんやったな……  
…ウチは飛べへんけど。

「おっ、どうやらちょうど、アニス君が戻つて来たようですね。何

処に行っていたのやら……」

「何か……いつものアニス君と違う気が……どないしたんやろ……」

「まあとりあえず、こっちに気づいた様なので、声を掛けてあげてください」

「はいな」

ウチはザゼルさんに言われたとおりに、アニス君に声を掛ける。

「アニスクーン！ウチ、飛んでる〜！」

ウチが飛んどる訳じゃないけどな。  
でも、空を飛ぶのって気持ちええなあ。

「ザゼルさーん！！はやてちゃんをこっちに〜！！」

「あ、分かりました〜！」

アニス君は大声でザゼルさんをこっちに呼ぶ。

ザゼルさんはアニス君の言葉に従い、下に居るアニス君の所まで下りてくれた。

そして、ウチはアニス君に率直な感想を述べる。

「うわぁ……ここがアニス君の別荘なん？南国見たいやわ。そしてアニス君！」

「ど、どうしたの？」

「生足サイコーや！！それに、上が半袖のパーカーのみって……もう痴女にしか見えへんで？」

そうか！これが感じた違和感や！

いつもアニス君はスパッツを穿いとったのに、今日はスパッツやのうて半ズボン！しかも上半身はパーカーのみで、半袖すら来ていない。それに、前も開けとるので、上半身は実質裸や……。

「な、なあ……アニス君……ハアハア……胸揉ませてくれへん？ハアハア」

「嫌だよ！？何で揉まれないといけないの！？というか車いすはどっつしたの！？」

「あ、車いすなら、ここに」

っと、ついつい暴走してもうた。

アニス君は男の子やのに、どうしても胸揉んじゃうねん。なんでやる？反応が面白いからかな？

でも……胸揉まれてる時のアニス君の可愛さときたら……ハアハア……っと、いつの間にかゼルさんが車いすを出してくれた様や。

「はい、八神さん」

「あ、ありがとうございます。それよりも！いきなりゼルさんがウチが起きた時に現れたんはびっくりしたで！お願いだから、ウチに一声かけてからにしてな？」

「あははは、ごめんねはやてちゃん。はやてちゃんまだ寝てたから、仕方なかったんだよ」

そうねん、一言くらい声かけえ！

幾らウチが寝とつても、起こすなりなんなりすればええんや。でもまあ、今日はこんな綺麗な景色も見れたし、チャラやな。

「まあ、今日は許したるわ。こんな綺麗な所に来れたしな！」

「そう言ってくれと、作ったかいがあつたよ。まあ、修行用に作っただけなんだけどね」

「へえ、アニス君は凄いいんやな。それで、今日は修行する為に入つたん？」

「そっだよ」

「じゃあ、ウチは必要ないんじゃない？」

「いや、黙って入ったらはやてちゃん心配するだろうから。どうせなら連れて来た方が良くないかって」

「…………アニス君…………」

ヤバイ、ウチ今顔絶対赤い…………全くアニス君は、天然のジゴロやで…………。  
ちっちゃくて、可愛くて…………もう非の打ちどころがないわ！！

「さ、さて。それじゃあアंक、再開しようっか。あ、ザゼルさんははやてちゃんに着いてて？」

「分かりました」

「どうやら今から訓練を始めるらしい。」

「ウチはこの場に居たら巻き込まれるんやろつな……せやから今、隣にザゼルさんが着いとる。」

「それに、アニス君とアंकさんは念のためなのか、ウチと距離を取る。」

「……それじゃあアंक、本気で来て。俺も本気で行くから……」

「分かった……ハアアアアア!!」

「アंकさんがいきなり力を籠めたら、アंकさんは鳥みたいな怪物……いや、アंकさんに失礼やね……何て言ったらええんかな？取り敢えず、変身した。」

「アंकさんはその姿になるのは久々なのか、自分の体を隅々まで凝視する。」

「完全体のなるのは何年振りだ、最近じゃ、普通に翼と右腕だけで戦ってきたからな」

「あはは、ごめんね。アंकも定期的にその姿になれば良いんだけど、そうもいかないしね。ごめんね」

「気にしてないから安心しろ。さて、サッサと構えろ」

「まあ、待つてよ。斬魄刀出すから。……来い」

今度はアニス君が何かを取り出した……と言うよりは、いつの間にか刀が一振り握られとった。

しかも抜き身や……あんな、今にも折れそうな刀で戦うんかな？

「舞え、袖白雪！」

「ほう、それか……」

そう思っとなら、刀はいきなり姿を変えてもった。

全部白一色になり、柄の下部には、布みたいな物がついとる。

「……綺麗や……」

そう、その刀は……凄く綺麗やった……。

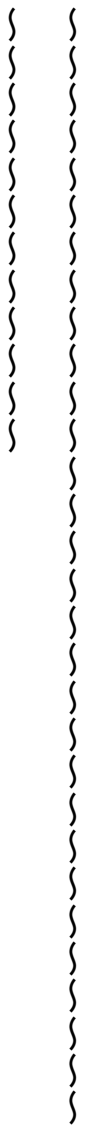
ただ白一色の刀やのに、それがまるで……キラキラ光ってる様に見える。

「それじゃ……」

「第二ラウンド……」

「「開始!!」」

二人が同時に動き出す……砂を蹴り上げて、二人は戦いを始める。



アニスサイド

「ハッ!!」

ブン!

「甘い!!」

バキッ！

「クッ！

俺はアंकに斬りかかり、攻撃を開始する。

アंकは俺の初撃を避けて、がら空きの体に蹴りを放つ。

俺はそのまま吹っ飛び、砂に突っ込む。うえ、口に砂入った……。

「ぺっぺっ！うえ、じゅりじゅりする……」

「ハア！」

ドンドンドン！！

アंकは火炎弾を三発出す。ちいっ！間に合わない！

「ウソデトリギンタビオラキキキキキリック・ラク・ラ・ラック・ライラック！ウソデトリギンタビオラキキキキ闇の精霊3柱！魔法の射  
ギカセリエス オフスクーリー手連弾・闇3矢！！」

俺はサギタ・マギカでアंकの攻撃を撃ち落とす。

まあ、後に思ったんだけど、ガツシュに出てくる氷か水系の呪文で撃ち落とせば良かったって思ったよ。

「はっ！そう来ると思ったよ！」

砂煙に紛れて、アंकは突っ込んでくる……。  
ふっ、甘いねアंक……。

「アंक、久々過ぎて、袖白雪の攻撃方法を忘れちゃったかにゃ？」

「何？……しまった！」

アंकは一気に俺と距離を縮めるスピードを落とす。  
だけど、もう遅いよ！

「初の舞月白」

カツ！！

アंकは、俺が仕掛けておいた月白の領域に、足を一步踏み出していた。

右足は氷、右手を同様に凍り付いてしまった。

「ったく、まさか……俺の技を避けた際に、もう仕掛けておいたのか」

「えへへ、正解！さっ、どうする？」

「はっ、まだだ、まだやるに決まってるだろ？フン！」

バリン！！

アंकは右足と右手に力を入れて、氷を砕く。

まあ、危ない事すんな。もし間違えたら、お前の腕と脚、粉々だよ？まあ、グリードだから大丈夫なのか？  
まあ、分らん。

「さあ、次はどう攻める？」

「……それじゃ……ソルセン！」

ブン！

呪文を唱えて、俺は刀を振るう。

ソルセン、アースが使っていた呪文。剣から剣閃と共に実体となっ

た刃状のエネルギーを放つ呪文。

攻撃方法が三つしかない袖白雪との相性は結構良い。

手札がグンと増えるし、使いにくい月白も、これで時間を稼いで使う事も出来る。

アングはその斬撃を避けるが、俺は既に動いている。

「ウルソルト！」

「ちいっ！」

俺は剣撃の速さを上げる呪文を唱える。

もはや普通の人間には視覚出来ない速度に上がっている……そう、普通の人間には見えない……。

ガシッ！

「……ふう、これが斬月だったら、俺の手は斬られて無くなってるな……」

アングが、刃に触れないように袖白雪を掴んで攻撃を防ぐ。

「さっすが」

「当たり前だ。完全体を甘く見んな!!」

バキッ!

「クッ!ハアッ!」

アंकの蹴りを受け止めて、俺は袖白雪を握っていた右手を開き、袖白雪を捨てる。

掴まれちゃままだったら攻撃も何も出来ないしね。

「ふん。今度は素手か?」

「そのまさかさ!」

俺はボクシングの構えを取り、呪文を唱える。

「ドラグナー・ナグル!」

ドラグナー・ナグル。テッドの呪文は結構使い勝手が悪い。

第一の呪文を使用しながら魔力を貯めないと、次の呪文が使えない。その他の呪文を使う時は、一段階ずつ呪文を唱えていくしかない。だけど、これは守護獣……アルフやザフィーラ辺りになら使える。もちろん、アंकにも。アंकはあんまりデバイスを使わない。

だから、今の完全体のままだったら、攻めに転じられる！

「はああああ！」

ブンブンブン！

「ちい！」

俺のパンチを紙一重で避け、そのまま攻めに転じようとするアंक。まだだ！まだ俺のターンだ！

「ギアを上げるよ！セカン・ナグル！」

ドンー！

俺は更に速さを上げる。

一段階アップしたスピードで再びアंकに殴りかかる。だがアंकはそれを今度は全て捌ききる。  
まあ、さっきみたいに紙一重で避けるのはキツイよね。

でも……無駄無駄！

「ギアを上げるよ！サーズ・ナグル！」

更にスピードアップ。

もう、これを捌ききるのは難しいよ！

「ハアッ！」

避けるのも捌くのも出来ないと感じたアंकは空に飛びあがる。  
へえ、そうしちゃう……マジで？まあ、良いか。

「上に飛び上っちゃ、俺の格好の的じゃん ザケルガ！」

シュン！

一直線上に真っ直ぐな電撃がアंकに向かう。  
ザケルガ、ガツシュやゼオンが得意とする呪文の一つだ。

ザケルと違い、真っ直ぐに飛んでくれるので使いやすい。ザケルは放出系だからね。

「はぁ！」

アंकは腕を振って、ザケルガを殴り飛ばす。

おお、すっげえ、殴り飛ばすか……いや、やらんだる普通……感電しますよ？

「だったら……グラビレイ」

ドゴオッ！

瞬間、アंकはいきなり空から落ちてきて、地面に叩きつけられる。まあ、まだ効果の範囲内だったから良かったよ。

「ぐっあ……！」

俺は、苦しんでるアंकの前に手を出して、一言……。

「降参、してくれるよね」

そう言い放つ。

## 第十五話 はやて視点と模擬戦（後書き）

いやあ、やっぱりガツシユの世界の呪文はこの世界にとってはチートだね

あ、補足

アニスは心の力ではなく、魔力で呪文を使っています  
そこん所、よろしく！

それにしても、やっぱり戦闘書くの楽しいわ

だからたまに自重できなくなっちゃうんだ

そして、アニスの可愛い場面があまりなかった今日の話

明日は可愛らしいアニスたんを書いてハアハアしたいです

では、ここまで読んでくださりありがとうございます

第十六話 羽休め（前書き）

やあ

今日は木曜日の番外編を書いたよ

まあ、面白いか面白くないかは、読んだ人たち次第です

それでは、本編始まります

## 第十六話 羽休め

はやてサイド

「オーケー、降参だ」

「えへへ、また俺の勝ちいゝ。そろそろアंकもデバイス使ったら？」

「凄いなあ……アंकさんに勝つてもうた。あれが魔法か……何か、実感湧かんな」。

「バーカ。俺がデバイス使うとしたら、人間の状態でしか使わねえよ。この状態で使ったら疲れるんだ」

「……アंक、お爺ちゃんみたいだね……」

「ほっとけ」

何か二人が軽口を叩きあいながらこっちに近づいてくる。

「いやあ、それにしても……凄かったですね」

「そうですねえ」

「前に一度戦ったんですけど……いやはや、あれでまだ全力ではないとは……流石に凹みます」

「ザゼルさんもアニス君と戦った事あるんですか？」

「ええ、つい最近にですけどね。あの時はあんな魔法は使わずに、ほとんど剣術と体術でやられちゃったんですけどね」

おどけて苦笑しながらザゼルさんは言う。  
それは悔しいとか、そんな感情なしに……本当に敬服しとる感じの  
声やった。

「やっぱり、私も強くないといけないですかね。更に使い魔も増えそうですし……競争率も高くなりそうですし……」

「競争率って……何がですか？」

「いえ、ただの独り言です。気にしないでください八神さん」

「はあ……」

「何やら……ウチも強くなるといけん気がしてならんやけど……」

「ああ、疲れちゃった」

「いつの間にかもうウチの所までアニス君が来ていた。アニス君は少し肩で息をしている。」

「アंक〜……暑い……」

「だったら南国の設定にすんじゃねえよ……」

「しょうがないじゃん、本家がそうだったんだから……あつあつ」

「はあ、あつあつ言っとるアニス君はかわええな〜」

「やっぱアニス君はあれや、天然さんやな。素でそれをやっとなるんだから……ある意味尊敬するで。」

「はやてちゃんは大丈夫？結構暑いけど」

「ああ、そう言われれば暑いなあ……………」

「どうせなら、遊んじゃう？水着に着替えてさ。はやてちゃんはさ……………泳げないけど……………その……………水際に座ってるだけでもだいたい違うと思うんだ」

「……………そやな。せやったらええかもなあ。でも、水着持ってきてないで？」

「それだったら心配ないよ」

パチン。

そう言って、アニス君は指を鳴らした。

そしたらいきなり空間が割れて、その中をアニス君が覗き込む。

「えっと……………確かこの辺に……………うわっ！コラ！争うな！ひやつ、手を舐めるな！うわあ、ベトベト……………きゃっ！ちよっ、コラ！触手伸ばすな！いやあ！服に入ってきたああああ！こいつ食べ！危ないから食っちゃえ！」

【ウボアアアアアアアア……ゴックン……ゲプ……】

「よしよし」

（（そこに何が入っているのか、凄く聞きたい……でも聞いたら負けだろう）ですね）（やね）（）

「ん〜っと……あ、あつたあつた」

そして、そのまま何かを引きずり出してくる。  
その手に握られていたのは……スク水。

「はい、これしかないけど……我慢してくれると嬉しいんだけど……」

「……まず、アニス君が何でスク水を持つとるのかを小一時間問い  
ただしたいねんけど……」

「八神聞いてやるな……こいつもこいつで苦労してるんだ……」

「そう……これだけは聞いてほしくないんだ……」

何や、アニス君とアंकさんが今にも泣き出しそうな顔をしてるのは……何でやるう？

アニスサイド

そう……このスク水は……前の世界で学校に通ってた時にストーカーから送られた品物です……。  
どうやら魔法で作られていて、成長しても着れる優れものらしいです……。

しかもこれ、捨てても捨てても戻ってくる魔法も掛かっているので、今まで魔法空間に投げ捨てていた物だ。

まあ、安全性は大丈夫。

俺一回着たから。その時使用人全員が鼻血を噴き出して倒れた。どうやらチャームの魔法が掛かってたらしい（実際は掛かってなくて、自分の恐ろしさに気づいていないアニス。可愛さ的な意味で）。まあ、ほとんど魔法は解除したので大丈夫。でも捨てても戻ってくる魔法と伸び縮みする魔法は消えなかった。

「はい、これ」

「あ、ありがとな……」

何かはやてが憐れみの視線を向けてきてるのは……気のせいであつてほしい。

「じゃあ、あの屋敷の中で着替えて来て？あ、アंक……運んであげて……」

「分かった」

アंकはすぐに動き出し、車いすを押ししていく。  
アंकも一応、屋敷の中知ってるから大丈夫だろう。

「アニスくん」

ガバツ！

「ふわあっ！？ザ、ザゼルさん！？」

「さあ、今なら私と良い事できますよ？さあさあ、良い事しましよ  
うよ！と言っか、食べても良いですか？」

ゾクゾク。

「ひやあああ……！み、耳元で喋らないでください……くすぐったいです……」

「ふふふ……その年で、良い感度ですね……これは食べごたえがあります……」

「いやあ……だから、耳元で囁かないでください……はう……」

「ああもう……こんなに愛らしい人を主人にしたのは初めてですよ……」

そう囁きながら、ザゼルさんは俺の体をまさぐりだす。  
うわあ！嘘嘘！？ダメダメダメダメダメ！！ダメエエエエエエ！

「死ね！」

ドスッ！

「ったあ！」

「ハア……ハア……ア、アंक……」

「全く、人が目を離れた瞬間これだ……」

アंकがはやてを連れて、既に戻って来ていた。  
た、助かった……はあ、もうザゼルさん呼ばない方が良いのかな？

「……あの……私砂に埋まっちゃったんですけど……」

「知るか、そのままずっとその状態で居やがれ！」

「……あっつ……」

まあ、頭を冷やすには良いかもね……日に晒されて冷やすどころではないだろうけど……。  
でもザゼルさんが悪いので、一向に可愛そうとは思わない。

「あはは、アニス君も大変やな」

「もう、他人事だと思って……結構恥ずかしいんだよ？」

「じゃあウチが恥ずかしいと思わなくなるほど胸揉んだるで?」

はやては手をワキワキさせながら、いやらしい顔で見てる。  
いや、そのワキワキやめなさい……女の子がはしたないよ?はあ、  
毎日貞操の危機とか……嫌だなあ。

「そ、それじゃあはやてちゃん。行こうか」

「せやね……あ、所で……アニス君はいつここ出るん?ウチ、洗濯  
とかしないといけないから」

「ああ、言ってなかったっけ?ここから出るのは24時間経って  
からじゃないと戻れないよ?」

「……へっ?マジかいな……せやったらどないすんねん!ウチ家事  
とかあんねんけど!」

「大丈夫だよ。こっちの中では24時間だけど、外の世界からして  
みれば一時間しか経ってないから」

「……うん、ウチはもう何も驚かん……驚かんで……」

「？」

はやてが何かぶつぶつ言いだしたけど……どうしたのかな？

まあ、大方現実味が無くなってきたんだろうね。大丈夫、君の周り  
はもう少しで現実味が無くなるから。

まあ、騎士達がねえ……でも、優しい奴らだから大丈夫だろう。

「さ、遊ぼうか、はやてちゃん！」

「うん！」

俺ははやてを車いすから抱き上げて、お姫様抱っこする。

「ア、アニス君……力持ち何やね……」

「……ま……まあ……ね……」

「……無理しとるんか……」

「し……してない……よ……」

「嘘や、腕と足がプルプルしとるで？」

「……あうあうあうあうあうあう……ア、アंक……パス！」

「……はあ、ほら、こっち寄りせ」

俺はアंकにはやてを渡すと、その場に座り込む。

はあ、やっぱり筋力無いからキツイな……。。

「あはは、ありがとうなアニス君。ウチそれだけで嬉しいねん」

「……はやてちゃん……」

「ほな、遊ぼうか！」

「うん！」

俺とはやてとアंकは、そのまま海の水際で遊びまくりました！！

「……あのー……私は何時になったら出られるのでしょうか……結

構深めに埋まったんで……力使えなんですよね……あの、今回の件、深く深く反省してますので……出していただけたら嬉しいのですが……」

ザゼルは犠牲になったのだ……by作者

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「いやあ、楽しかったなあ」

夜、あのまま遊びまくり、はやてちゃんがご飯を作ったりして、そのまま夜になった。
今はもう、寝る時間だ。

「それにしても、ここがアニス君の部屋か……何か、地味やな」

「ほつといてよ、俺は無駄な物は置かない主義なんだ」

「とか言いながら、この押し入れにはごっそりスパッツ入っとな
な」

「いや、勝手に開けてみないでくれる？」

プライバシーの侵害！！駄目！絶対！

「所で、ウチは何処に寝たらええん？」

「あ、そっか……ここにははやての部屋無いんだもんね……じゃあ今から部屋の用意するよ」

俺は立ち上がり、部屋から出ようとドアに向かおうとする。
だが、それをはやてが俺の腕を掴み阻止する。

「……どうしたの？はやてちゃん」

「……あの……な？もし、もしやよ？アニス君が嫌じゃなかったら……ウチと一緒に寝ても良い……かな？」

「……はう……はやてちゃん……些か大胆過ぎだよ……あうあうあうあう……」

うう、顔が赤い……照れてるよ俺……あうあう……。
何かそろそろ、このあうあうが定着しつつあるね……自重しなきゃ

……。

「……う、うん……俺は別に構わないよ？」

「ホンマに！？じゃ、今すぐ寝るで！」

うん……やっぱりはやてちゃんは些か大胆過ぎだね……。
はあ、俺理性保つかないや、いつも保ってたし大丈夫だろう……。
こうして、俺はやてちゃんと一緒に寝ることになった。

「……アニス君、ほんまに小さいなあ……ウチの腕にスッポリや」

「あう……はやてちゃんの胸が……顔に当たってる……」

あうあう、俺はロリコンじゃないよ！

こんなもので、俺は欲情なんかするものか！否！断じて否だ！こんなもので、俺の鋼の精神は崩せるものか！！

「アニス君の髪の毛、良い匂いや……」

「か、嗅がないですよ……はう……」

「ああ、ホンマに可愛い！」

ギョっ！

「ふわぁ！？ちよっ、はやてちゃん……苦しい……」

はやては思いきり俺を抱きしめる。

と言うか、主に顔なんでかなりキツイ……。

「……アニス君……ウチ、こんなに幸せでええんやろうか……」

「……はやてちゃん……」

「こないに暖かい家族が出来て……ホンマウチは幸せ者や。ホンマに……ウチには勿体ない位やで」

「……人が幸せになるのに、良いも悪いも無いんだよ？むしろ、子供だからこそ、色んな幸せを体験して、次の世代に繋いでいく。その方が、ずっと幸せが続くでしょ？俺は人の嬉しい顔や幸せそうな顔が大好きだ、だって、自分も幸せな感じになるから。それが俺のハピネス」

「…………アニス君…………ありがとうな」

俺とはやては、暖かい気持ちになり…………そのまま就寝した。

そして朝、起きてからすぐにゲートに行き、外の世界に戻る。

まあ、本当に一時間しか経ってなくてはやては驚いてたけど…………それはまた別のお話。

「あの……私、忘れられているのでしょうか？」

その後、ザゼルは何とか自力で脱出し、そのまま魔界に帰って行った……。

第十六話 羽休め（後書き）

不純なザゼル乙

まあ、頑張れザゼル、お前には良い事があるさ……たぶん……

それにしても、最近ドット寒くなったな〜とか思ってたら、まだ暑い時間が……

器官系とアレルギー系の発作、両方持つてるから、春先は酷いよ？

季節の変わり目と、花粉のダブルパンチです

まあ、死ぬね

はあ……体が環境に着いていきかないです

さて

ここまで読んでくださり、ありがとうございました

第十七話 予期せぬ起動と原作崩壊（前書き）

いやあ

今日は外部取り付け用のキーボード買ったんだ

俺のパソコンはノーパソでね、あんまり使いやすくないんだ

だから、電機屋で買ってきて、今使ってます

いやあ、固いはこれ……

でも、使いやすい

では、本編始まります

第十七話 予期せぬ起動と原作崩壊

……力が必要だ……。

今までこの小娘から魔力を得ていたが……足りぬ……。

まだ……まだだ……魔力が足りぬ……。

もう、あの小娘からあの小僧に移るしか手は無い……。

クククッ……小娘よりも質も量もけた違いだ……。

良いぞ……これは良い……やはりあの小娘よりもこの小僧から魔力を貰うとしよう……。

この小僧なら、一気に量を取っても死ぬ事は無い……。

小娘よりも、体が強い……。

ああ、それにしても……魔力が十分になっても……我は管理人格が出て行かないと出れぬ。

何としてでも……我は外に出る。

だが先ずは……復讐してやりたい……。

我をこんな所に閉じ込めた、人間どもに!!!

それをするには……やはりあの小僧が必要不可欠。

それにしても……クロイツベルか……懐かしい名を聞いた……。

何の因果か……我を殺した一族の魔力を必要とするとは……。

だが、普通の人間よりも馴染みが速いだろう……ククク……ああ、早く……早く出たい!!

……ふふふ、少し強引だが……小僧の魔力を奪えば……今にでもこの闇の書だけは起動できる……。

前倒しだ……少し、早いかな……。

~~~~~  
~~~~~

どうもつす……はやての家に来たから早二か月……。案外キンクリ活用し過ぎ。

今もう無印始まっています。

ユーノの念話が聞こえて来たから分かったよ。

まあ、ジュエルシードには興味ないし、どうでも良いんだけどね。

それで、今月はもう六月。後三日位ではやての誕生日&闇の書起動

……。何だけど。

ここで、驚く事が一つあります……。

「ア、アニス君！ウチの足が！今動いた！」

はい、決して動くことのないはやての足が、何故か動くようになりました……。

どうしてでしょう？俺にはサッパリです……。

小さいころから闇の書に魔力を取られ、そのせいで足が不自由になっってしまったはやて。

それなのに、何故か足が回復？してる様です……。

「ホントに！？良かったねはやてちゃん！ねっ！アंक！」

「ああ、そうだな。それじゃ、病院に行って石田に診せて来るか？」

「うん！石田先生、きっと驚くやろっな……。アニス君はどうや？一緒に行かへん？」

「あ……ああ、ごめん……。今日はちょっと……」

「？何か用事でもあった？」

「うん、まあそんな所だよ」

「……そうか、なら、ウチはアंकさんと病院に行ってくるさかい。戸締りよろしくな！」

「うん、分かったよ！アंक、はやてちゃんをお願いね」

「分かってるっての。それじゃあな」

俺が起きてもう昼過ぎ。

二人とももう俺より先に起きていて、リビングで二人で談笑してる時だったらしい。

はやての足が動いたのは。

まだ大きく動かせないものの、ピクピクとなら動かせるらしい。今までそんな事は一度もできなかったのに……。

俺ははやてとアंकが出かけた後、すぐにはやての部屋に行く。そう、闇の書を調べるためだ。

「……何で、はやての足は動くようになったんだ？」

俺は確かに、はやてに魔法の存在は話した。

だが、そこまで原作に大きく影響するような話でもないし……。どうしてだ？

「まあ、それはお前を調べれば分かるでしょう……なあ、闇の書？
いや、夜天の書」

俺は、闇の書の目の前に立ち、そのまま闇の書を見る。

……何処も変わったところはない。原作と全く同じ……だけど……魔力が少し漏れている？

どういう事だ？ 確かにはやての魔力ランクは高い……だが、ここま

で魔力を吸い取れば……いかにはやでも、すぐに死んでしまう量だ
ぞこれは……。

俺はそう思い……闇の書に触れる……。
その瞬間……。

バチン！

「キャツ!?!」

いきなり闇の書から電流みたいなのが流れ、俺を拒む。
そして、そのまま闇の書は宙に浮かび、光りだす……。

《起動します》

「なっ!?!」

起動するだつて!?!?
まで、おかしいだろ!どうして俺が触れた瞬間起動したんだ!?!
時期までまだ裕に三日はあるんだぞ!?!なのに……どうして!?!

俺は驚いて、後ずさってしまっ……。

その時、俺の胸から、ごく少量だが……魔力が出てくる。

「……嘘……だろ……そんな……これは……まるで……」

はやてが闇の書を起動させた時と同じ……現象……。

そして、その魔力が闇の書に吸い込まれた瞬間、闇の書の大きな魔方陣が現れる。

ドクン！

「うぐっ！」

ドタッ！

そして、次に俺に降りかかってきたのは……心臓の痛み。

誰かに鷲掴みにされてるような、そんな痛みが、俺の胸に走る。

俺は痛みには耐えきれず、片膝を付いて、胸を抑える。

「ぐっ……うあ……うあああああ！」

俺の叫び声とともに、魔方陣から放たれている光はより一層発光し、

徐々に弱まっていく。
そして……俺が目を開けたその先には……。

「……なっ!？」

「……闇の書の起動を確認しました……」

目の前に居たのは、この世界のキャラ……八神はやての家族となるであろう……四人の守護騎士が、俺の前で跪いていた。

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士でございます」

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を……」

そんな……嘘……だ……。

俺が……闇の書の……主……だって？

「ぐっ……ハア……ハア……あ、あの……顔……あげてくれませんか？」

「……はい……！？主！顔色が優れませんが！」

「ハア……ハア……だ、大丈夫……だよ……」

俺の体何ぞどうだっていい……先ずはこの、闇の書の事について、解かなければならない……。

何故あそこまで、闇の書から魔力が漏れ出していたのか……。

そして何故、俺が触れた瞬間に、闇の書は起動したのか？

「ハア……ハア……先ずは……自己紹介から……が、良いよね？俺は……アニス・クロイツベル……き、君達の、名前……は？」

「その前に主のご体の心配を！今にも倒れそうじゃないですか！」

「あはは……ハア……ハア……だい、じょうぶ……だから……」

「大丈夫などではございません！」

「ハア……ハア……スー、ハー、スー、ハー……よし……何とか落ち着いた……。それで……名前は？」

「……私は烈火の騎士、シグナムでございます」

「鉄槌の騎士、ヴィータ」

「湖の騎士シヤマルです」

「盾の守護獣ザフィーラです」

「そう……何だ……。うん、分かったよ。所で……シグナムさん」

「主、敬語など不要でございます。私の事は呼び捨てで」

「いえ、それはまだ何とも……まだ会って数分ですし……。それよりも……俺はホントに、君達の主……なのかな？」

「はい、間違いございません。主と私達は、パスで繋がっております。間違いなく、主は貴方様です」

と、シグナムがしれっと言う。

あはは、マジか……どうやら、世界は変わってしまったらしい……。

「……ふう、だいぶ落ち着いてきた……。分かりました……。では、固っ苦しいのは嫌いです！俺の事は主ではなく、アニスと呼んでください！」

「なっ、それは出来ません！騎士ともあろう者が、忠誠を誓った主に、そんな事は……」

「む、そうですか……。だったら、アニスたんでもオーケーですよ？」

「もっと酷くなってます！」

「あ、シャルルさんやっと思った。ほとんどシグナムさんしか喋ってないんだから、ヴィータちゃんにザフィーラも喋ってよ」

俺はもう、現実逃避しか出来なかったよ……。
だって、考えても分かんないし、なっちゃった物は仕方ない。うん、仕方ないんだ。

「ア、アニス……」

「こらヴィータ！主に向かって何だ！その口は！」

「シ、シグナムさん落ち着いて。俺は気にしてませんから。……何？ヴィータちゃん」

「……何歳……何ですか？」

ヴィータは慣れない敬語を使いながら話しかけてくる。

おう、この子……可愛いよ……。流石エターナルロリータの称号を持ちし騎士……伊達じゃない。

「あはは、小さい主でがっかりさせちゃったかな？今九歳だよ。あ、因みに俺男だから」

「……はい？」

「……いや、だから……俺は女じゃなくて、男だからねって……」

「……ええええええええ！？」

おお！？まさかあのザフィーラまで驚くとは……恐ろべし、俺……。その後、四人は盛大に謝ってきたのは、言うまでも無い……。

~~~~~  
~~~~~

「はい？主、今何と？」

「うんだから、収集はしなくても良いよ？俺、特に力とか必要としてないし。特にやりたい事も無いから」

「いや、しかし！」

「シグナムさん、お願い！収集は絶対にしないで！」

俺はシグナムに頭を下げる。

「あ、主！おやめください！主が頭を下げるなんて！」

「むぐ、じゃあ、皆収集しませんって約束で来たら、頭上げてあげる」

「うっ………はぁ………分かりました。みんなもそれで、異論は無いな？」

「はい」

「うん」

「……ああ」

うむ、どうやら上手く行ったようだ。

これで、収集する事も無いね……いや、だってさ……管理局に見つかりたく無いんだよ。

でも、あのリーゼ姉妹が見張ってるから意味ないか。

でも、リインフォース出してあげたいんだよな……。

でも、まだ現時点では収集は出来ない。あんまり目立った行動もとれないし、何より、俺の呪いの進行は、まだそこまで酷い訳じゃないしね。

まあ、俺が呪いの影響で倒れても、収集はさせる気ないし。

「うん、ありがとう！それにしても……みんな背が高いですね。」
俺、95？しか無いんで羨ましいです」

まあ、実際嘘なんだけどな。

「えっ！？私より小さいじゃん！？」

「くらヴィータ！」

「あはは、シグナム、気にしなくて良いよ？敬語は禁止！これから家族何だからさ！」

「か、家族……ですか？」

「うん、家族！あから、堅苦しいのは止めてね？ヴィータちゃんみたいにしつこくしてくれれば良いよ」

「……は……はあ……」

「さて……はやてとアंकが帰って来るまで……この四人の服どうしようかな……」

とにかくこの四人の服装……怪しすぎる……。アंकが襲い掛からないと良いけど……。

シグナムサイド

闇の書が起動し、我らが主の元に集まった……だが、
どういふ事だろうか……。

私が今話している主は……今までの主とは凄く違っていた。

先ずは容姿……凄く小さい……守護騎士のヴィータでも120はあるのに……主は95?と言っていた……そして、年齢は九歳……今までの主の中で最年少だ。

そして性別は男……実際、皆女性と思っていた……だが、男性……。
いや、何でもない！

「な、なあ……シグナム……今までの主よりも……全然違うな……」

「……そうだな……少なくとも、今までの主は……外道だったが……
……あの少年は、純粹だ……」

しかし、何故さつき、自分は本当に闇の書の主なのかと、聞いてきたが……どうして確認を取ったのだろうか？

「ザフィーラさんでけえ！抱っこして抱っこ！」

「はっ……」

ひょい。

「うわー！高い！わーい！高い高い！」

「……何だろっ、今の主を見ると……安心する……」

「そっだな……今の主は、心優しい」

今まで主は……本当に最低の主だった。

こんなに輝いた主の笑顔を見るのは……本当に、いつ以来なのだろう……。

「シャマルさんシャマルさん！ザフィーラでけえ！」

「そっですね」

シャマルは苦笑しながら答える。

まあ、返答に困るだろう……今までの我らの扱いを鑑みれば……な。

その時、近くで魔力の反応を感知する。

「レヴァンティン！」

《ja》

私はすぐにバリアジャケットを纏いつて……しまった！
まだ主にバリアジャケットを作ってもらっていなかった！

「主！早く我らに騎士甲冑を！」

「え？え？どうしたのみんな？いきなり血相変えて……」

「ここの近くに魔力反応が！こっちに近づいてきます！」

「魔力反応？……ああ、アंकかな？大丈夫だよ、たぶんそれ、俺のパートナーだから」

主はそう言つと、すぐに廊下の辺りから物音がする。

「いやあ、石田先生驚いとおったなあ」

「……そうだな……」

「……アंकさんどうしたん？いきなり怖い顔になって」

……我々に気づいたか……どうする……まだ騎士甲冑はもらっていない。
ない。

素手で対処すべきか？いや、この魔力量だ……あちらも手練れ……
無理に素手で行かない方が賢明か。

「あ、帰ってきた」

その時、主はひょいっとザフィーラの腕から降りて、すぐに廊下に
走り出す。

「主！駄目です！」

「キャッ！？はう……シグナムさん……痛いよ……」

「すみません……ですが、今廊下に出てはいけません！」

「え？どうして？」

主が首を傾げながら疑問をぶつけてくる。
だが、あっち奴はもうこっちに來ている……。
どうする……。

そして、ここの部屋のドアが開かれる。

ガチャツ……。

「……お前ら、誰だ？」

現れたのは、金髪の男。

そしてその手は、人間の物ではない……デバイスか？いや、背中に
翼が生えている……。

やはり人間ではないのか？

「我らは主アニスの守護騎士……主には指「p」「アंक」って、
主！？」

主はいきなり、得体のしれない男に抱き着く。
抱き着かれた男は、やれやれとため息をつきながら頭を撫でている。

「シグナムさん、大丈夫だよ？こいつはアंक、俺のパートナー！」

「……はい？」

「おいアニス、何がどうなってんのか説明しろ」

「……主、我らにもご説明を……」

この男が主のパートナー？

……どういう事だ……？

ヴィータは絶えず警戒をし、ザフィーラもいつでも襲い掛かれる状態だ。

シヤマルはすぐに主を救出できるようにしている。そして私も。

「まあまあ、皆落ち着こうよ。ところで、はやては？」

「ああ、危ないから、一応玄関で待たせてある」

「そう……じゃあ、はやても入れて話し合おうか。俺としても、そ

「うちのの方が早いし。シグナム達も、一体警戒を解こう？ね？」

「……分かりました……みんな」

「……了解」

「……はい」

「……」

それぞれ警戒を解く。

「……さて、どうぞ説明してくれるのだろうか、我が主は。」

第十七話 予期せぬ起動と原作崩壊（後書き）

何か……ごめんなさい……

無理矢理感あり過ぎなのは重々承知

でも、こう言ったの書きたかつたんだもん！

そしてキンクリ

困ったときのキンクリ

もう早く守護騎士だしたくて、キンクリしちゃったよ

因みに原作はもう開始してます

でも、介入するかは……まだ検討中

しかもただいまかなりの原作崩壊ですからねえ

それにしても、何か可愛いアニスを書けんかった

今回は可愛いアニスを書きたいと思います！

因みに、ヴィータの身長は122？だそうです

じゃあ、どんだけアニス小さいんだよと思った人

三期に出て来たヴィヴィオよりも三センチ小さいと行ってくださればいいです

ヴィヴィオの身長は98？です

いやあ、どんだけ小さいねんって話ですよ

それでは、また明日

ここまで読んでくださりありがとうございますございました

そして、超展開しません！！

第十八話 説明と呪いとお祝い（前書き）

いやあ、明日から実習で居ません

ですから予約で番外編を二つ投稿しときます

あ、そうそう

その内の一つはあれです

前・後編になってます

後編は日曜日に上げたいと思っています

日曜日も泊りがけでパソコン使えないので

それでは、本編始まります

第十八話 説明と呪いとお祝い

アニスサイド

「それでは主、ご説明を」

「う、うん……」

はい、どうも……さて、どう説明して良いやら。

一応はやてもこの場に呼んでいるけど……。やっぱり最初から話すべきなのかな？

「……アニス、何でお前が闇の書の主になってんだ」

「いや、うん……まあ……何だ……その……あの……えっと……俺にもサッパリ……」

「はあ……」

ため息つきたいのはこっちだよ……全く。

「じゃあシグナムさん。もう一度確認するけど、俺が本当に闇の書の主で間違いないんですね？」

「はい、先ほど申しした通り、主アニスから繋がりを感じます。ですから間違いないかと。それよりも、どうしてまた確認を？さつきもそうでしたが」

「……うん……実を言つとね、闇の書の主は、ホントはその車いすに乗ってる……はやてちゃんがる予定だったんだ」

「……え？ウチが？」

「……主、何故そんな事が分かるのですか？確かにあの子にも魔力は感じますが、私達には何ら繋がりがありません」

「いえ、そうでもないんですよ。つい昨日まで、闇の書に魔力を供給をしていたのは、紛れもないはやてちゃんでした……」

そう、昨日までははやてちゃんがそれを担っていた。

俺もそれは分かってたし、闇の書事態も、起動してからじゃないとどうすることも出来ないから言わなかったんだ、これまでずっと。

「でも今日、信じられないことが起きました。はやてちゃん、足は

少し動くようになったんだよね？」

「うん、いきなりでウチも驚いたけど、確かに動いたで。それに石田先生も、このままり八ビリを続ければ歩けるようになる言つてた」

「そう……ホントは、はよてちゃんは闇の書の呪いで、足が動く事は無かつたんだ」

「闇の書の呪い？」

「ほら、これだよ」

俺は闇の書をはやてに見せる。
あう、大きいから、重たい……。

「それ、鎖で縛られてた訳の分からない本や……それが闇の書なん？」

「そう……これははよてちゃんが小さい時からあつたでしょ？」

「……うん、確かにあつたで」

「はやてちゃんは、この本に魔力を取られてたんだ。そのせいで呪われて、足が徐々に動かなくなつた行つたんだ……」

「お待ちください主。仮にそうだとしても、何故あの子が私達の主にならなかつたのですか？」

「簡単です。はやてちゃんが年単位で取られていた魔力を、俺から一日も過ぎない内に取つたのでしよう。しかも上回つてしまった……だから俺に所有権が移つた……としか考えられないのです」

「……でも、そうしたら主が死んでしまうのでは？」

「そう、そこが問題なんだ……」。

俺の魔力ランクはSS、はやてと大体同じ位なんだ。

……あ、もしかしたら……」。

「俺が魔導師だからかな？はやてちゃんは魔導師じゃないから、量を取らないといけなかつたけど、俺の場合は量も質もある、だから、半分以下で補えたのかも」

「確かに、八神よりもお前の方が質は高いな」

「でしょ？まあ、そんな感じなんだろうね……はぁ……」

駄目だ、頭がこんがらがってきた……。

全く、何もして無いのに原作崩壊って……結構対処難しいんだね。

「大体これで説明は終わるけど、納得した？」

「……主、一つ質問良いでしょうか？」

「ん？良いよザフィーラさん」

「何故主は、そこまで闇の書に詳しいのでしょうか？」

「ああ、その事。答えは簡単だよ。俺はこの世界の出身じゃない、俺は次元世界の人間なんだ。俺はその世界では結構お金持ちでね、勉強させられたのさ。超機密事項の勉強をした時、ちょうど闇の書の事をね」

「……そうですか……」

「あはは、ごめんね、あんまり格言を獲れる内容では無かったね」

「いえ、それだけ分かれれば十分です」

「あはは、ありがとうございます」

さて、これで説明を終わって良いやら……。その時、はやてが俺の服の裾を引っ張る。

「ん？どうしたの？はやてちゃん」

「……あんな、ウチが呪われてた言うってたやん……」

「うん、そつだね」

「それはこの闇の書さんに魔力を取られてたのが原因って事は……ウチの代わりに、アニス君が呪いを受けたのと、同じ事やないの？」

「……ん〜……まあ、そうなっちゃうね」

「……ごめんな……アニス君……」

「何で謝るのさ?」

「だって、ウチのせいで……アニス君が……」

「気にしないの。俺ははやてちゃんの足が動くようになって嬉しいから」

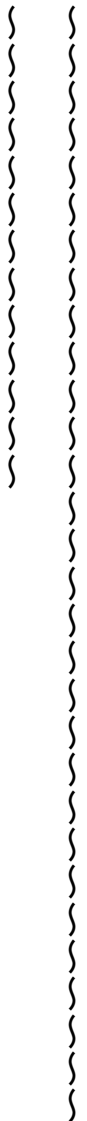
「それでも! アニス君が代わりになっちゃ、意味ないやん!」

「……意味ならあるよ。こつして、はやてちゃんの足が動くようになった、それで良いじゃん」

「……アニス君……」

「さて! もうこの話は終わり! さ、先ずは皆で自己紹介からしようか!」

さて……これからどうしようか……。



「ふう……」

あれからはやて達とシグナム達が自己紹介をし、皆で昼ご飯を食べ終わった後だ。

皆最初は、やっぱり遠慮がちだった。

はやてが気にせずたくさん食べてとか言ってたのに、皆遠慮しちゃって、

まあ、少しずつ慣れていけば良いんだもんね。

コンコン。

「アニス、入るぞ」

その時、ドアがノックされる。

どうやらアंकの様だ……何の用だろうか？

「良いよ〜」

ガチャッ。

アंकは、神妙な顔つきで部屋に入ってきた。
おいおい、どうしたどうした……辛気臭いぞ空気が。

「どうしたのアंक？怖い顔して……」

「……お前、何処に呪いが掛かってんだ？」

おおっ……それですか……いや、一番聞かれたくない事を……。

「さあ、俺にも分かんない……少し経ってからじゃないと分からないんじゃないかな？」

「嘘だな」

！……鋭い……でもな、これ言っちゃって良いのかな？
うん……どうしよう……。……。

「何で嘘だって分かるのさ？」

「何年の付き合いだと思ってんだ。お前の言葉の嘘本当何て、もう区別が着いてんだ……正直に話せ」

「……あつあつ……アंक怖い怖いなのです」

「……そんな事で誤魔化せると思ってんのか？」

「……はぁ……マジで怖いよアंक。今にも襲い掛かって来そうだし……オーケー、真面目に話そう」

俺は両手を上げて、お手上げだと言わんばかりにおどけて見せる。まあ、いずれは言わなきゃならない事だし、今言っておいた方が楽かな。

「率直に言うよ？俺が呪いを受けた場所は、心臓だ」

「！？何でだよ！八神は足だったのに、何でお前は心臓何だよ！」

「しっ！声がデカイ！みんなに聞かれるだろう？それに、まだ確証は無いよ」

「じゃあ、何で心臓だ何て分かるんだよ？」

「……まあ、少しね……闇の書が起動した時、胸が痛みだしたんだ

よ突然。たぶんそれだと思う」

「……どうにか……出来ないのか？」

「……俺にはどうとも出来ない。それに、収集した所で、はやての役割を俺が代わりにやる事になる。だから、闇の書に飲まれるのは俺だ。そして収集しなければ、俺は年内に死ぬだろうね」

「……」

「あはは、だから嫌だったんだ。この話するの……。まあ、仕方ないかもね。これは案外罰なのかも。俺が調子乗って力を使って、お父さんやお母さんを危険な目に合わせちゃった……」

「……アニス……」

「ん？うわあっ！」

何か知らんが、アंकに抱きしめられた。ちよっ、苦しい……ギブギブ！

「何で、お前なんだよ！」

「……………アंकク？」

「お前を守るって誓った俺は何なんだ！結局、守れてないじゃないか！！」

「……………アंकク」

「……………絶対死なせやしない……………絶対に、お前を救ってみせる」

「……………捕まるよ？例えアंकクでも」

「お前の為なら、何だってしてやる……………今ここら辺に散らばっている、ジュエルシードって奴……………あれでお前を……………」

「それは駄目！！アレは危険だ！それに、管理局も本当に黙ってないよッ！？」

「じゃあ他にどうすれば良いんだよ！ロストログアも駄目！収集も駄目！黙ってお前が死ぬのを見てろって言うのかよ！！」

「そうじゃない！でも、他に手がある筈だ！先ずはそれを探してからでも！」

「……じゃあ、他に手が無かったら……良いんだな？」

「そ、それは……」

ギュッ……。

「あつ……く、苦しいよ……アंक……」

「絶対に……死なせない……守ってみせる……」

何か……アंकがヤンデレになった気がするの俺だけ？
つうか、マジで苦しいんですけど……っ、潰れる……圧殺される……。

「ア、アंक……死ぬ……今死ぬ……」

「おっと……すまん……」

アंकはやっと気づいたのか、すぐに俺から離れる。
むう、別に離れてとは言っていないじゃん。

「まあ、何にせよ……今はシグナム達を歓迎しようよ?」

「……俺は出来ないな。なんたって、あいつらのせいでお前が呪われたんだ」

「アंक、流石に言って良い事と悪い事があるよ?俺も怒るよ?」

「……はあ、お前は本当にお人好しだな」

「えへへ、それが俺のジャスティス」

「威張んな」

ドスッ。

「あつて……っ、殴る事ないじゃん!」

「ふん……」

アंकは鼻を鳴らしてすぐにこの部屋から出て行った。
ツンデレか？そして今ツン期に戻ったのか？

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「さあ！今日はお祝いや！みんなたーんと食べてな！」

夜、何かはやてがお祝いとか言っつて料理をたくさん作っていた。  
はやてマジ天使。

「……………あの、主……………」

「ん？何シグナムさん？」

「本当にこんなにたくさん食べても良いのでしょうか」

「うん！食べても良いんだよ！つと、俺は居候の身だから強くは言えないんだけど……………」

「あはは！アニス君も気にしてるやないか！」

いや、まあ一応気にしちゃいますよ。

収入源はアंकなわけだし……やっぱり翠屋で手伝いしようかな？でも、信者共うるさいし……たぶんムツツリー二も来るだろう。

「ほら、ヴィータちゃんを見習ったら？」

俺は視線をヴィータに向け、シグナムに見るよう促す。

ヴィータは皿にたくさんおかずを盛り付けてモリモリ食ってる。

「シグナムさんもあれくらい食べて良いんだよ？主従関係なしに。それはシャマルさんやザフィーラさんにも言える事なんだから」

「主……」

「ありがとうございます」

「お心遣い感謝いたします」

「えへへ、早く皆が馴染んでくれたら俺嬉しいよ。それで呼び方もちゃんと名前だね」

「そ……それは……」

「え……嫌なの……」

「いえ！決してそのような！ですが、主の名前を気軽に呼んではいけない物なので……」

「あはは、固すぎだよシグナムさん。まあ、すぐに名前を呼んでと言われても困りますしね。慣れるまで待ちます」

「……すみません……」

「おかわり！」

「あ、こらヴァイター！少しは遠慮したらどうだ！」

ヴァイターよ、あんなに盛り付けていたのをもう食べたのか……。パネエ、すげえパネエよヴァイター。

「だって、はやての料理ギガウマなんだもん」

「あはは、そないな事言われると、ホンマに作った甲斐があったで。まだまだたくさんあるから、いっぱい食べてな！」

そう言って、はやては皿にたくさん盛り付ける。

おいおい、盛り付け過ぎだコノヤロー。

「主、何か取りましようか？」

「ザフィーラさん。いえいえ、自分でやりますので、ザフィーラさんは食べてて良いですよ？」

「そうだ、お前は食べてる。俺がやる」

「いや、アंकも食ってて良いよ」

「なん……だと……」

お前もキヤラ崩壊してんじゃねーかコノヤロー。  
人の事言えねえじゃねえかコノヤロー。

「ふっ……」

「何か言いたげだな、ザフィーラ」

「いや、別に……」

「てめえ……」

「ちよっ、ストップストップ！何怒ってんのさアंक！」

何か二人とも火花散らしながら睨み合ってたんだけど！？

て言うかその三人！シグナムにヴィータにシャマル！珍しいとか口に出して言わない！！

「アंकさん、焼もち妬いてるんやない？」

「あのねえはやてちゃん、俺は男、何でアंकが焼きもち妬くのさ？」

「だって、アニス君かわええもん。よしよし」

そう言いながら、はやては俺の頭を撫でてくる。

「あう、こんな公衆の面前で辱めないでよはやてちゃん……あうあう……」

「……ああ、もうアカン……アニス君！一緒にお風呂入るで！」

「嫌だよ！何考えてるのさ！？それとそこの三人！何悶えてるのさ！」

何か知らんが、シグナムとヴィータとシャマルが悶えてた。  
何で？ねえ何で？

「やんのかお前！」

「俺はそこまで言っていない」

「お前らは何時まで喧嘩してんだ！」

もう口喧嘩から殴り合いに発展しそうだぞこの二人。  
ヤバイヤバイ……流石に止められないよ？俺。

そんなこんなで、家族が増えた一日なのでした。

第十八話 説明と呪いとお祝い（後書き）

ザフィーラ大好きな俺が通りますよっ

ザフィーラマジカッコいい……なのに二期も三期もそんなに出番がない……

ええい製作者！何をやっている！ザフィーラにもっと出番を与えんか！

弛んどる！精神的に弛んどる！

全く、酷い扱だよ。何でリードして散歩してんのさザフィーラ……

つうわけで、アंकと争わせます（笑）

いやあ、それにしても……最後のお祝いの所、短い

それに呪いもあれだ、無理やり過ぎ

まあ、頑張ろう

明日は番外編を上げますゆえ

どうかよろしくお願いします

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございますとついでに

番外編　なのはが暴走????（前書き）

どうも

たぶんこれが投稿されてる時は、俺は居ないと思います

実習で二泊三日してるので、明日も本編進むことなく、番外編がまだ予約で投稿される事になってます

まあ、実際予約で投稿するのは初めてなので、うまく投稿されてればと

さて、今回は番外編、と、言う事で

普段あまり出番がないなのはとの絡みを書いてみました

アニスとのカップリングはアंक！が大好きな俺としては、何とも百合百合しい物を書いてしまったのではと思います

まあ、アニスは男なんですけどね

そして最後のオチは……

あ、ちゃんと最後辺りにアंकクとの絡みも……あるのかな？

それでは、番外編始まります

番外編　なのはが暴走???

アニスサイド

「なのはの部屋」

「……あゝ、あはは……どうしたのかな、なのはちゃん……」

「……アニス君ってさ……」

「……うん」

「……本当に男の子？」

何故かなのははいきなり、俺の体をペタペタと触り始めた……何これシユール。

どうも、へ？何でいきなりこんな事になってるのかって？H A H A H A！俺が知りたいくらいだよそんなの……まあ、良いんじゃないかな？知らなくても。たぶん、禄でもない理由に決まっている。

「男だよ？生物学上は」

「……やっぱり信じられないの！」

「ええ〜、じゃあ俺はどうしたら良いのさ〜」

「……一緒に風呂に入れば判明するよ！」

「おい、待て！何がお風呂だ！入るわけなかるうが！」

「でも、そうでもしないと本当に男の子なのか分からないし……」

「いや、他にも試す物はあるでしょ。後は確認することか」

「確認する所……」

そうやって、なのは俺の股間を凝視する……。  
おい、その変態。俺の股間を見るな、まだ精通はしてないから何も感じねえけど、それは立派な視姦何だよ……やめなさい、はしたない。

「あの、そんなにジロジロ見られたら恥ずかしいよ……」

「……ア、アニス君……今のは反則だよ……」ポタポタ

なのは鼻血を出しながら苦笑している。

最近の女の子は鼻血を出すのがデフォなのだろうか？否！断じて否！  
！そんな女の子は見たくない！

というかそんな奴！某幻想郷に出てくる完璧で瀟洒な従者みたいに、  
忠義心は鼻から出るがごとく出さないでよ！

「な、なのはちゃん、鼻血鼻血」

「ありや、本当だ……」

なのはちゃんはティツシユを持ってきて鼻を抑える。

本当にこの世界の主人公なのだろうか……威厳の欠片も無い……。  
て言うか酷い絵面だな……俺は、こんななのは、見とうなかつた！！

「それにしても、何で俺はなのはちゃんの部屋に来たんだっけ？」

「私と一緒に遊ぶためだよ」

「あれ？そうだったけ？」

「そうだよー！」

「……よし、帰ろう」

「何で!？」

「いや……何か後ろに、縄とか見えたから……」

気のせいであってほしいが、何故か見えてしまったものは仕方ない。後なのは、今更隠してももう遅い、見えてしまったのだから……。

「あ、あはは……これはその……」

「……なのはちゃんはその縄で、何をしようとしたの？ねえ、教えてほしいな」

「……」「めんなさい……」

「うん、分かればよろしい」

とにかく謝ってほしかったのは確かだし、それでナニかされたら溜まった物じゃないしね。

全く、何でいきなりこんな貞操のピンチに直面してんだろう俺。

「それより、何して遊ぶの？」

「それじゃあ……アニス君、おいで〜」

「……何故？」

なのはは両手を開いて俺においでと言っ。

完全に膝に乗っける気まんまんたるこいつ。だが、俺がそんな物に釣られクマー!!

「わーい」

釣られちゃいました(笑)

「うわー、アニス君軽い。これじゃ本当に男の子なのか分からないよ。それに、髪もサラサラだし、私より手入れ行き届いてるし……」

「あはは、特にこれと言って手入れしてるわけじゃないんだけどね」

お母さんが無理やり手入れしてくるし、この世界でははやてがその肩代わりしてみたいなものだしね……。

「アニス君の首筋……ハアハア……」

「ちよっ、なのはちゃん？」

何か後ろで変態がハアハアしてんだけど！？  
というか、鼻息が首筋に掛かって……。

「ふあっ、なのはちゃっ……くすぐった……いやっ……」

「……ああ、アニス君……可愛いよ」

ああ！？なのはが何かしらんがレナ化した！？これはヤバい！お持ち帰りされる！

誰か！誰か助けてええええええ！

「アニス君……良い匂いなの……」

「いやっ、匂い嗅がないで……恥ずかしいし、くすぐりたいよ。あ  
うあうあうっ」

「アニス君」

「ひゃっ！おかしいよ！手がおかしい！何処触った、やめっ！け、  
獣！いやあ！止めて！洒落になってないって！」

「大丈夫だよ、優しくするから。お母さんが言ったの。「アニス  
君は絶対に競争率が高いから、今の内に骨抜きにして手籠めにしち  
やいなさい！」って」

おおおおいい！桃子さあああああん！あんた一体何やってん  
だ！

実の娘に！まだ九歳の子供にナニを教えてんだ！って、なのは！？  
そこ駄目！

「ひうつ！？む、胸は……駄目……くすぐっても、あはははは！駄  
目！さ、触らないで！あはははは！く、くすぐりたいよ！あははは  
ははは！」

何でみんな俺の胸ばかり揉むのさ！  
最近胸が痛いのは絶対お前達のせいだ！

「アニス君、可愛いよ……」

「そ、それは……男の台詞なのは……ひゃっ！」

「あにふふーん……」

なのははいきなり俺の首を甘噛みしてくる。  
きゃっ！噛みながら喋らないで！振動でくすぐりたい！

「はう！ひう！あう！ふう！」

俺は変な声が出ているのに気づき、慌てて口を押えるが、それが更  
になのはの攻めに拍車を掛けてしまったようだ……。

「アニス君の声……もっと聞かせて？」

なのはは俺をそのままベッドに押し倒し、俺の両手を抑え、今度は  
俺を仰向けの状態で甘噛みを始める。

「いっや！ひう！あう！はあっ！」

「カプカプ……」

「ひい！あっ！ふうっ！」

「……ふう……」

「……ハア、ハア……」

賢者タイム……だと……と、とにかく、落ち着いた様だ。た、助かった。

「っと、思ったでしょ？」

「へっ？いやあああ！」

なのは俺の上の服をいきなり脱がし始めた。

くっ！この！振りほどけない！というかなのはの力ヤバい！何で振りほどけないの！？

っ！そうか！俺、今身体強化とかしてないんだ！体型が小さいだけ

あつて、この運動神経皆無なのはの力でも、裕に俺を抑えられるんだ！？

「いっや……やだよお……今のなのはちやつ……怖い……」

「はうっ……その涙目で訴えるの……凄くそその……」

うわあああ！逆効果だったあああああああ！

というかなのはがSに覚醒したあああああああ！

「その顔、ゾクゾクしちゃうよ」

「やだあ、なのは……許して……」

「何を許してほしいの？アニス君は何も悪い事してないんだよ？」

「それ……でも……もう、許して……」

「ふふふ、だーめ」

クリッ……。

「ひう!?!」

なのはが唐突に、俺の……その……胸の突起物をこねくり回す……。その瞬間、俺の体に電流が走るような感覚に陥る。

「ひ……あ……!」

声も出なくなってきた……これは本当にヤバい……どうしたら……。

「アニス君、アニス君、アニス君、アニス君」

壊れたラジオみたいに、連続して俺の名前を呼ぶなのは。ああ、どうしよう……本当にこれ、詰んだかもしれない……。

「に、にゃの……ひゃ……」

もう呂律も回らなくなっている……。体も熱くて、思考も覚束なくなってきた。

「アニス君……大好きだよ……」

ゾクゾクゾク……。

なのはに耳元で囁かれる。

その時、体がゾクゾクして、完全に思考が追い付かなくなった……。

「にゃのひゃ……もう、らめえ……これいひょうは……」

「駄目なの。アニス君にはもっともーっと、気持ちよくなってもらわないと……」

それはまさに死刑宣告。今の俺にとっては、もう快樂を感じたくない。

なのに、体は正直だ。それを望んでいるらしい……。

「ひゃあ……もふ……かえらひて……」

「それも却下なの。さあ、続きをするの」

そう言って、なのはは俺の唇に……自分の唇を……。

~~~~~  
~~~~~

「んだあああああ！」「りやあああああああああ  
あー！」「

「……高町さんとアニスの、濡れ場」

「おいムツリーニ！貴様は何を！何を書いているのだ！」

「そうですね、ムツリーニさん。どうせならここは、アंक×ア  
ニスを書くべきです」

「貴女も何を言ってるの！？仁紫園さん！」

「……でもこれ……俺が書くのは苦勞した……」ボタボタ

ああ、鼻血がたくさん出て、ヤバかったんですね。  
本編のムツリーニは妄想しただけで鼻血を出して倒れる奴なのに、  
この世界のムツリーニは些か根性があるようだ。

「では、今度はこちらも読んでくれませんか？」

「何々……?」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「アニス……ここが良いのか?」

「アंकゥ……ハアハア……ここが、切ないよお……」

俺は、アंकゥに見えるように、自分の穴を……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「はい!アウトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!……!はあ、  
はあ……」

「そうですね?あれ、ムツツリーニさん、どうしました?」

「……俺には、少し刺激が……」ブシヤアアアアア!

いや、お前にとってどれも刺激にかなりえないだろ……。  
それにしても、この二人に呼ばれたので来てみたら、自作の俺の同人誌を見せたいって……。

俺、一応九歳なんですけど？犯罪だよ？しかもこいつら、中学生だから、一応お前らも駄目な気がするんだが……。

「それにしても、たくさん描いたんだね」

「ええ、私の趣味ですし。やっぱり、被写体が良いって言うのもあります」

「……同意……」

「はあ……もう、帰っていいですかね？一応俺は九歳なんで、今度からは自重していただけると嬉しいんですけど？」

「それは出来ない（ません）」

「二人して否定しないで!？」

とにかく、これから俺の受難は続くようだ……はあ。

**番外編　なのはが暴走????（後書き）**

はい、落ちは同人誌落ち！

まだだ！まだ濡れ場は書かんよ！

いやあ、これを書いている時、めっちゃ恥ずかしかったです

俺、こう言っためっちゃより、苦手なんです

意外に初なんです

普段男の娘男の娘とか言ってる癖して、こう言ったものを見たり書いたり読んだりしたら、顔から火が出るくらい恥ずかしいのです……

それでは、今日はここまでです

明日も番外編になりますので、ご了承ください

ここまで読んでくださり、ありがとうございます

**番外編 ムツツリーニと遊園地（準備編）（前書き）**

今回の番外編は前後編です

まあ、後編を上げるのは日曜日ですけどね

何か……書き出したら長くなりそうだったんでわけちゃいました

相変わらずの腐臭

ムツツリーニファンのみなさん、ごめんなさい

あと、時期的にまだ闇の書は起動してません

それでは、番外編前編始まります

番外編 ムッツリーニと遊園地（準備編）

アニスサイド

（ ）

「……ふみゆ……電話……？」

朝、俺は自分の携帯の着信音で目が覚めた。  
うう、誰だよ……俺は朝が苦手なんだ……。  
仕方がないので、俺は電話に出る……。

ピッ。

「……はい……こふいら、アニフでふ……好きな食べ物……汁物  
でふ……九歳でふ……」

《……もしもし、土夜です》

「……ふぁ……ムッツリーニ……？……どつふいたの？」

《……今日俺と、遊園地行かない?》

「……ムツツリーニ……冗談は……君の性癖だけに……してください  
い……」

《……それは心外。俺は、普通だ》

「……ふぁ……そうでふね……それで……どうふいて、俺なの?」

《……単純に、アニスと行きたいと思ったから》

「……わふありまふいた……でふぁ……何時に……集合しまよう……?  
「?」

《……今が朝の六時半くらいだから……九時半に……海鳴公園で、  
待ってる……それじゃ》

ブツツ……ツィ、ツィ……ピッ。

……はっ、どつやら……ムツツリーニ君は……俺とデートしたいみ  
たいです……。

……どうしましょつ……下着は……勝負下着の方が……良いですか

ね？

……まあ、……俺はいつも……スパッツの下は……何も………穿いて  
ないんですけどね……。

「ZZZZZZZ……」

そして俺は、また眠りについてしまった……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「おい、アニス。起きろー!!」

「……ふぁ……アンふ？……もう少し……」

「何言ってるんだ！もう八時半だ！いい加減寝すぎだ！」

「……八時半……」

はっ………思い出した………確かムツツリーニから電話がかかって来て、
遊園地行く約束してたんだ。

危ない危ない。このままアंकが起こしてくれなかったら、ずっと

寝てたよ。

「……おはよう……アंक……」

「ああ……それより、顔洗って来い。もう朝飯だ……。あ、ちゃんと服着てから来いよ！」

「……はい……」

ボタン……。

「……さて……何を着て行こう……」

とにかく、今は顔を洗う事よりも優先すべき物はそれだな。

何を着て行こう……取り敢えず、最近某幻想郷の祟り神様の帽子を買ったので、それを被って行こう。

次に上……いつも通りパーカーで良いんだけどな……どうせならクドリヤフカみたいにマントでも羽織る？

よし、採用。

次に下……よし、ジーンズで決定だ。

「……すっげえ痛い子に見える……特にマント……帽子は良いね。何かびつたりだ」

想像できない人は……そうだね、可愛い男の娘が、マントを羽織って、ジーンズ穿いてて、パーカー着てて、ケロちゃんの帽子を被ってるのは想像してみれば良いよ。

「さて、行きますか」

俺はそのままリビングに向かう。うん、まだ中に入っていないのに、朝食の良い匂いがしてくる。

「おはよー」

「あ、アニス君おはよう。どないしたん？そんなにめかし込んで？デートでも行くん？（笑）」

「まあ、そんな所だね」

ピシッ……。

空気が固まる音がした……何でだろう？あ、アンクが凄い形相でこっち見てる……。

何か近づいてきた、つうかこっち来た……。

「誰だ……何処のどいつとだ!」

「キャッ!?ア、アंकク!?何々!?ちよつと……いたつ……痛いよ……」

「うっ……すまん……」

「全く……別に、デートって言うのは言葉の綾だよ。今日はムッ……じゃなかった。土夜君と遊園地で遊んでくるだけだよ」

「な……何や……男の子か……って……土夜君って誰や?」

「……俺は却下だ!何であんな変態と遊園地に行くんだよ!」

「ええ!?その子変態さんなんか!?!」

「いや、確かに変態だけでも……あれでも結構面白い人だよ?まあ、行くなつて言われても行くけどね」

「……はあ、何かされそうになったら電話しろよ?そいつ殺してや

るから」

「あはは……アंकさん物騒やなあ……許可するで」

おおつ……ムツツリーニ……君に死亡フラグが立ったよ……どうしましよう。

……まあ、お触り程度なら怒らんけど、流石にムツツリーニも男。俺をどうこうしようと思うわけないでしょうに。

たぶん、俺の写真とか撮って、ムツツリ商会で売りさばくつもり何だろう。

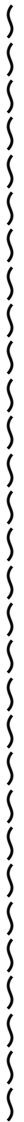
「まあそんな事より、朝ご飯にしよう？俺なら大丈夫、いざとなったら大声出して助けを求めろさ」

ごめんムツツリーニ……流石に俺は君の事を庇いきれないわ……なんてったって、ムツツリーニなんですもん。

まあ、ムツツリーニは変態という名の紳士なので、そういう事は全くないから大丈夫。

だから好きなんです。彼は別に、俺をどうこうしようと思んて遊園地に誘ったわけじゃないはず！

取り敢えず、飯食お……。



~~~~~

キング・クリムゾン!!

時を……結構消し飛ばした。既にアニスは待ち合わせ場所に着いている。

「つつちや〜!!おっはよー!!」

「おはよう」

「もう、いきなり誘わないでよ。もし俺に用事とかあったらどうする気だったの？」

「……その時はその時」

「……はあ……駄目だよ?ちゃんと一日前とかに言ってよ。今度からはそうする事!良い?」

「……把握」

「ん、分かれればよろしい。さて、行こっ！俺、遊園地とか初めてなんだ！エスコートお願いね」

「……………任せて」

相変わらず、口数が少ないねえ。  
まあ、そこがムツツリー二か……………。

「……………それよりも、着る物は統一した方が良い」

「あ、分かる？まあ、これしかなかったんだ。似合っていない？似合っていないならマントは取るけど」

「……………似合ってる。だけど、クドのマントを羽織るなら、帽子はやっぱりクドの帽子の方が良い。そのケロちゃんの帽子でも確かに良いけど……………今度からはそっちをお勧めする」

前言撤回……………結構喋る奴だった……………。

お前、この小説に出てきてから一番喋った場面なんじゃね？あ、メタ発言禁止？知ってるよコノヤロー！

「それじゃ、行こっ！」

「……………（コクリ）」

そんなこんなで、俺とムツツリーニは遊園地に向かった。

道中でムツツリーニは俺の写真を撮ってたが……まあ気にしないで  
おいた。

それよりも、結海鳴から少し出るのか……あ、ただ今電車の中でござ  
います。

そついや、転生してから電車に乗るのは初めてだな。

やっぱり休日なので、人がたくさん……だから立ちたかったんだけど  
……………。

「吊革が……届かない……だと……」

「……………やっぱり席に座ったら」

「ふっ、ムツツリーニ……この完璧健康なアニス君を舐めるな……  
吊革無しで立っててやる……！」

「……………無理はいけない」

「へっ？ちよっ……………！」

ムツツリーニはいきなり俺の手を掴み、引っ張って行く。  
そして、着いたのは席が一人分空いている車両。

「……………座って良いよ」

「ムツツリーニ……………悪いよ、俺だけ座るなんて」

「……………気にしない」

「いや、お前が気にしなくても俺が気にするんだが……………あ、そっか……………。ムツツリーニが座って、俺がムツツリーニの膝の上に乗れば良いんだ！」

「……………それは」

「ほら、早く早く！」

「……………出来ない」

「もう！ほら、座った座った！」

「うわっ……！」

ドサッ……ポス。

「うん！これでオツケー！」

「……し、刺激が」

何か後ろで聞こえたが……気にしないでおこっ……。

「あ、ムツツリーニ。鼻血は出さないでね？」

「……出そっ」

「鼻押さえてなさい！」

「……」

「……おい、大きくするな……違和感あり過ぎて嫌だ」

「……………」じめん」

「……………」はあ、謝らないですよ。て言うか、欲情するな」

こいつは……………」大丈夫かな？

まあ、こいつに限って間違いはないと思うから良いけどさ。

「それより、大丈夫？」

「……………」何とか」

「……………」うん、分かった、分かったから耳元でハアハアしないで。弱いんだから」

「……………」善処する」

ま、まあ……………」とにかく悪い奴じゃないし……………」仕方ない、許してやろう。

それも男の性だ。本編ではこいつ、秀吉でもこうだったし……………」まあ、初めから怒ってないけどね。

俺も男、良く分かるよその気持ち。

取り敢えず、俺とムッツリーニは、遊園地に向かうのでした……。

番外編 ムッツリーニと遊園地（準備編）（後書き）

いやぁ……もうムッツリーニ可愛いな

アニスはまあ、今回は何か強気な幼馴染風な口調でしたね

そして、息子を大きくされても動じないアニスたんマジパネエっす

敬服だねもはや

さて、今度後編を上げるのは日曜日です

明日は俺はもう家に居るので、本編を進めます

それでは、後編をお楽しみに！

ここまで読んでくださりありがとうございますとびびります

第十九話 買い物と誘い（前書き）

ただいま！

いやあ、やっと帰ってこれた！

だけど明後日も泊り（泣）

まあ、頑張りますよ

さて、今回は何か駆け足みたいになっちゃってます

中々話が進まない

本編始まります

## 第十九話 買い物と誘い

シグナムサイド

「シグナム、アニスを起こして来てくれ」

「……分かった」

我ら守護騎士が目覚めてから、二日目。

昨日分かった事は二つ。今回の主とこの家の主人は優しすぎる事と、この男……アंकと言う男は、とにかく怪しい人物だと言う事だ。

「ああ、言つのを忘れてた。気を付けるよ？寝起きのアニスにはな」

「？ナニを言っているのか理解できないが、覚えておこう」

取り敢えず、意味が分からないので適当に流しておこう。

それよりも、早く主を起こしに行かなければ。

私はリビングを出て、主の部屋に向かう。

コンコン。

「失礼します」

主は寝ているので、返事は返ってこなかったもので、まだ寝ておられるのだろう。

主は朝に弱いのだろうか？

そう思いながら、私は主が寝ているベッドに近づき、主に声をかける。

「主、もう朝です。起きてください」

「……ふぁ……アンふ？……何で……敬語？」

「主、私です。シグナムです」

「……はう……シグナムさんでしたか……すみません……寝ぼけてました……今起きます……よいしょっ……」

ガバッ。

主が起き上がり、そのまま立ち上がる。

「なっ……」

私は自分の目を疑った……。

「……どうしました？……シグナムさん……」

「あ、主……その恰好は……」

主の格好が……その……凄く、薄着なのだ……。

「……あうあう……シグナムさんが……固まっちゃったのです……」

「あ、あの……主……」

「……はい……何でしょう……」

「やはり主は……女性なのでは？」

「……あうあう……俺にも……付いてるもんは付いてんじやー……  
なのです……」

何でだろうか……卑猥な事を言っているのに、主が言つと可愛く変換されてしまう……。

「……………ねむねむ……………」

「って、ベッドに戻ろうとしないでください！」

「……………眠い……………」

「行きますよ？主」

私は主にそう言い、主の手を握る。

……………小さい……………これで本当に九歳なのだろうか？

「……………はい……………」

主は弱弱しく答える。

（気を付けるよ？寝起きのアニスにはな）

確かに……これは危険だ……。  
明日からは……覚悟を決めて起こしにこねばな……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

アニスサイド

「ほなら！みんなの服を買いに行こうか！」

唐突に、はやてが声を上げる。

まあ、内三人が女の子だもんね、それには賛成だよ。

「それって……またしま〇ら？」

「うん、そつちよ？」

俺もみんなも大好きなしま〇ら！

まあ、それは前世の事で……この世界のしま〇らは、俺の知っているし〇むらでは無かったのだ……。

「あの、何もそこまでしてくれなくても良いんですよ?」

「そうです。我々は主をお守りする守護騎士。そんな私達が、買い物などと」

「シグナムさん?遠慮はしちゃいけないって昨日教えたよね?」

俺はジト目でシグナムに良い寄る。

シグナムはバツが悪そうに答える。

「主は優しすぎます。プログラムでしかない我々に、何もそこまで
……」

「二のお馬鹿!」

ペチッ。

俺はシグナムの頭を叩こうとしたが、身長差があり過ぎたので足を軽く叩く。

て言うか絶対痛くないよ今の。

「シグナム達は家族だよ!プログラムだろうと、なかろうと。それ

は変わりないの！て言うかプログラムだから何なのさ？それとこれとは別！むしろ関係ない！分かったか！答えはハイカイエスかオーケーだ！」

「……は、はい……」

「ハア、ハア……疲れた……」

駄目だ、長い台詞だけでもこの疲労。
やっぱりもう少し背があってもよかったんじゃない？

「主、水です」

「あ、ありがとう、ザフィーラさん」

何故か用意が良いザフィーラ……と思ったらアंकに勝ち誇った顔してる……。
どうしてこうなった。

「ま、まあ。アニス君がほとんど言ってもうたけど、ウチも気にせえへんよ？せやから服買いに行こう？」

「……………」

「俺を見ても駄目だよ？さっ、買いに行こうか。それに、ヴィータちゃんもシヤマルさんも行く気満々だよ？」

「……………はぁ……………分かりました……………行きます……………」

シグナムはため息をつきながら妥協した。
うむ、良き事かな良き事かな。

「それじゃ、俺も新しい寝間着買いたいから行こう」

「ちなみに、次は何を着る気なんだ？」

「ん〜……………前に行った時に猫耳が着いた寝間着用の帽子があったから、今の寝間着に合わせようかと」

「……………前から思ってたんだけど、しま〇らがど何処に突き進んどるのか分からないんやけど……………」

「俺もさ……………」

とにかく、現実のしま〇らはそんな所では無いので、この話で行ってみようとこ思った人……。
お間違いないよう……お願いします。
しま〇らはそんな所じゃねーから。

~~~~~

「うわぁっ……すげえ……」

ヴィータが驚きの声を上げる。  
まあ、結構服が売ってるし、ヴィータサイズのも売ってるから嬉しいんだろっね。

「ほな、選ばうか」

そう言うてはやては三人を引き連れて行ってしまった……。  
うむ、男だけになってしまった……。

「……俺、選んでくるよ」

「ああ、こっちはこっちで見て来るから、遠くに行くんじゃねえぞ

「？」

「うん、分かってるよ。それじゃ、行ってくる」

俺はアंकとザフィーラにそう言って、服を見て歩く。

さて、何かあるかな？そろそろ暑くなりそうだし、夏物でも見に行こう。

「確か、こっちで夏物やってたな〜と……あつたあつた」

何故かこのしま〇らは結構広い。

だから何処で何を売っているのかを地図にしてそこらへんに束で置いてある。

俺はそれを見て夏物が売ってる場所まで来た。

「う〜む、やっぱり夏は暑いし、タンクトップかな？まあ、買いたね。1000円もしないし。あ、外に出かける時用に帽子も必要だね。後は……」

まあ、何やかんやで俺もショッピングを楽しむのであった。

途中、何かスキマ妖怪が着るような服と傘と扇がセットで売ってたのは、俺の目の錯覚なのだろう……うん、錯覚だ。

「おっ、これは……」

そして戻る途中、ヴィータが好きそうなウサギのぬいぐるみを発見。俺はそれを持ち、アंकクに買ってもらう。

アंकクと合流する前に、何か大人からヤラシイ目つきで見られてたのは……たぶんそいつらがロリコンだったかショタコンだったかだね。

来いよアグネス！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「いやあ、またいっぱい買ってしまったなあ」

「うん、袋を見れば分かるよはやてちゃん」

アंकクとザフィーラが結構いっぱい詰め込まれている袋を両手に抱えて運んでいる。

うむ、凄い量だな……。

「なあなあアニス！」

「ん？どうしたのヴィータちゃん」

「似合ってるか？」

ヴィータは俺の前で歩くのを止め、クルッと一回転して全身を見せてくれる。

うむ、似合う似合う。可愛いな。

ヴィータの格好は、アニメ本編となんら変わり無い。
少しゴスロリチックだね。

「うん、似合ってるよヴィータちゃん」

俺はヴィータの頭を撫でようとするが……届かない……。

「……………ドンマイ……………」

「憐みの目で見て言っても説得力ねえよコノヤロー」

軽く絶望した。

これでは逆ナデポではないか！まあ、良いんじゃないかな？
とか思ってたらヴィータが俺の頭を撫でて来た……。ちくせう……。

「あうあう……ヴィータちゃん、頭撫でちゃいやっ……」

「ヴィータ！主に失礼だろう！」

「だってシグナム……私より小さい人初めて見るから……」

まあ、この子も苦労してたんだろうね……。
だからって、俺の頭を撫でないでほしいな……。

「まあまあシグナムさん。俺は気にしないから。いつもアंकに撫
でられてるし……はやてちゃんにだって……」

どンドン声のトーンが落ちていく。

そうか、俺は撫でる側ではなく、撫でられる側だったのか……よっ
しゃ、ガンバロ。

「でも、ホントにアニス君は可愛いですよね」

「あ、シャルルさん、名前呼んでくれた それにちょっと反応遅れちゃったけど、ヴィータちゃんも」

「良かったなあアニス君」

「うん！えへへ、後はシグナムさんとザフィーラさんだけだね」

「……もう少し待ってください……」

「……右に同じく……」

「あはは、待つよ、いつまでも」

俺は二人にそう言って笑う。

その時、俺を射殺さんとはかりの視線を感じた。

俺はその視線の方をチラッと見る。そこには仮面を被った男が居た……。

やれやれ……来いって言うてるのかな？

仕方ない、乗ってやるか。

「みんな、俺ちよっと寄る所思い出しちゃった！さき帰ってて！」

「それでは、私達はお供させて頂きます」

「ううん、シグナムさん達も帰って良いよ?」

「しかし……」

「大丈夫。ちょっとした事だから。何かあったら念話で呼ぶから安心して?」

俺はシグナムにそう言う。

まあ、無理かな?でも、着いてこられちゃめんどくさいし……。

「……分かりました。では、何かあれば呼んでくださいね」

「分かってる!アंकも着いてきちゃ駄目だよ?」

「……ちっ」

舌打ちすんな。

「じめんねはやえちゃん。すぐに帰ってくるから」

「うん、分かったで。出来るだけ早く帰って来るんやよ?」

「うん、分かった!それじゃ行ってくる!」

俺は皆にそう言い、駆け出す。

さて、どっちの方向に行った?探すのめんどくさいし、魔力を辿る
う。

第十九話 買い物と誘い（後書き）

やあ！二日ぶり！

ディアボロだよ

今回は駄作だね

まあ、頑張ったよ……実習の疲れがまだ残りながらだからね

しかも今日は朝の3時に起きて、それから今までずっと起きてます

授業中は死にそうだった

そして眠い

だから、ついキンクリ使いまくっちゃったんだ

次はあの、仮面の男A・Bとの戦闘になります

まあ、ワンサイドゲームになるだろうね

それにしてもこの二人、マジで嫌いだ

第二十話 やっぱり好きにはなれないな（前書き）

どもー

私です

いやあ、眠たい

昨日11時くらいに寝たのに、起きたのが昼の12時

……すっげえ寝てた……

そんな一日の始まりでした

本編始まります

第二十話 やっぱり好きにはなれないな

アニスサイド

「こっちか」

俺は仮面の男を追っている。

追っていると言うのは、少し間違いかな？誘われた、俺はそれに乗った。

乗るか反るかは俺次第だったはず。

あの仮面の男……いや、悪戯猫……でもないな……まあ、重罪猫とでもしようか。

とにかく、その二人に誘われたのを、俺が乗った。

だから今だって、こんな人気のない所まで来ているのだ。

「……ふふ、お姉さん、身悶えしちゃうってお姉さんじゃねえや」

そんなボケを、一人で言っただけでツツコム。

この体になってから、久しく忘れていたよ……この高揚感。

若干口調が某とあるに出てくるオリアナみたい感じになっちゃった。

「……もう良いだろ？だいぶ人気も無くなってきた……それに、い

つまでも大人が子供を待たせちゃーよ？もつと大人は速く行動すべし」

俺は誰も居ない場所で言葉を発する。

うむ、こつ人が居ないとき、独り言みたいで恥ずかしんだが……。

「ガキが何を言っている……」

声が聞こえてくる。

それは俺の声ではなく、第三者の声だ……ふうん、もう一人は高みの見物かい？ふふふ、そう言つての、嫌いじゃないわ。

「おやおや、男の人でしたか。まさか俺の強姦しようとか？キヤアア！犯されるー！」

「……黙れ」

「あらあら、今どきの人には冗談も通じないのかしらん　つかこの口調めんどくさ、普通に戻そう。それで？何で俺を誘った？」

「率直に言おう。闇の書に関わるのは止める」

ほら、やっぱりこれだ……。でも、気づいてないのかな？俺が闇の書の現マスターだって事。

「え？闇に書？何それ分かんない」

「ふざけているのか？」

おつおつ、檜山ボイスでよう言つわ。

「ふざけてなんかないよ？でも、真面目ってわけでもないけどね」

「……それで、答はどっちなんだ？関わるのか、関わらないのか」

「答え何て決まってんじやん……関わるに決まってんだろっ？バカ」

「そっか……ならば……死んでもらおう……」

目の前の男がそう言うと、後ろから気配を感じる。

馬鹿だね……子供だと思って甘く見てるでしょ？んじや、お仕置き決定。

俺は後ろを振り向き、呪文を唱える。

「レイス」

「なっ！？ガッ！」

俺の手のひらから、野球ボールサイズの黒い球体が放たれる。
それは男のお腹に命中し、男は倒れ込む。

「ありやりや？今のは前戯なのに、もう腰が動かなくなってしまうの？」

「ぐっ……ふざけるな！」

男はそう吐き捨て立ち上がる。
そして、また後ろから気配を感じる。
うむ、仕留めれなかったから自分が……と思ってるのかな？

「はあっー！」

「ドラグナー・ナグル」

ゴツンッ!!

俺に向かって放たれた拳に、呪文で強化された自分の拳を合わせる。ふん、子供と思って、魔力強化を怠ったか？

俺はそのまま男の拳を殴りぬける。まあ、骨折はしてないだろうけど、使い物にはならなくなったね。

「ゲアアアアッ!!」

「おい、舐めてるのか？俺を………だったらお前ら………俺の実力の3分の1も出せないぞ？」

「ハアッ！」

「グッ！オオ！」

今度は二人掛かりか………まあ、止まって見えるわな。こんなスローパンチにスローキックじゃ。

「レドルク！」

簡単に合わせられて終わりだよ？

俺は足をレドルクで強化し、二人の軸足を払う。

「ウオツ！」

「ガツ！」

二人は盛大に転ぶ。

ぷぷぷ、哀れだね、今度何か買ってやるから頑張れこのヤロー。

「あらあら、さっきまでの威勢は何処に行ったのやら……」

「貴様……何故デバイスもなしに魔法が使える！」

「ん、そんな事を敵に教える義理も義務もないと思っただけだな……それに……ソルド・ザケルガ」

俺は呪文を唱え、巨大な雷の剣を作り出す……。

「今から死に行く者に……言っても無駄でしょ？土産話にでもする？」

「結構だ!!」

右側の男がそう言って立ち上がり、俺に蹴りを入れてくる。
まあ、無意味に等しいねそれは。

バチバチッ!

「クッ!」

「動けないよね?あはは、残念だったね」

俺は目の前にまで転んで尻餅を付いているもう一人の男に剣を向ける。

「卑怯な……」

「へ?何言ってるのお兄さん?お兄さん達が卑怯何だよ?俺はただ自衛してるだけだよ?そこを穿き違いないですよ?人聞きの悪い。お兄さん達がいきなり殺すとか言ってきて俺に殴り掛かってきたんじゃない。なのに、敵に剣を向けて卑怯と言われる何て……心外だな。俺は悪くないよ?悪いのは闇の書から手を引けたの、関わり合いになるのなら殺すだの……いきなり言ってきて来たお兄さん達が悪いじゃん。じゃあ裁判でも開こうか?まあ、一切お兄さん達に勝ち目はな

いだろっけどね?」

俺は愉快に愉快に言葉を紡ぐ。

少し悪乗りしてる気もあるけど、まあ、やり過ぎがちょうど良いって言うしね。

「まあ、俺としては今ここで殺っちゃっても良いんだけどさ」

俺は剣を消して、二人を見る。

「それじゃ駄目なんだよね。あああ、残念残念。んじゃ、俺は帰るね、バイバイ」

そして俺は後ろを向き、歩き出す。

時間の無駄だったねこりゃ。ああ、これだったらアंकと戦ってた方が良い訓練になるよ。

「舐めるな!!」

後ろの男が何か叫び声を上げた。うるさいな……。

俺は振り向きもせず手だけを後ろに回して。

「グラビレイ」

ズガン！

呪文を唱える。

「ガハ！」

「あややや、一人の勝手な行動で、お仲間さんが巻き込まれてしまいましたね。貴方のせいですねこれは」

「アッ……ガアッ……」

「グッ……アッ……」

「まあ、重力で押し潰されそうになってるから、喋れるわけもないか……さて、今度こそ帰ろつと……」

俺は再度後ろを向き、踵を返す。

まあ、久々の戦闘で、少しは退屈しの手になったかな？
あんましこう言った実践を怠ると、勘が鈍るしね。

「さて……もうここまで来たら追ってこないだろう」

さつき居た場所よりも少し遠くまで歩いてきた。

もう追ってこないだろうし、あれだけ体力を減らしてやったんだ。今日は諦めるだろう。

「それにしても、やっぱり好きになれそうもないな……あの二人は」

まあ、どうでも良いんだけどね。

その時……。

ドクン……。

「っ……！」

俺は急な痛みにも、片膝をつく……。

「ぐっ……あっ……」

胸が痛い……だと……。

これは、闇の書が起動した時と同じ痛み……。

「ハア……ハア……」

やっぱ……これ、あの時よりも痛い……。
洒落になってない……。

「アゲツ！……か……帰ら……無いと……」

俺は胸を押さえながら歩き出す。

今の状態じゃ、転移系の魔法は使えない……影のゲートでも使うか？
いや、仮に使えたとしても、こっぴ人が居ると駄目だ……。

「つく……急に……どうした……んだらう……」

俺は止まりそうになる思考を無理やり動かして考える。

心臓麻痺？いや、名前を書いたら死ぬ黒いノートを持ち主とかと接
点無いぞ？

つか居るのか、この世界に……。

「ハア、ハア……くっそ……」

ドクン、ドクン……。

痛い……尋常じゃないねこれ……いやマジで……。

「はは……こりゃ、無理だわ……」

俺はもう一度人気がない所に移動する。
こうなったら、もう使っしかない……。

「……つく……ここなら……大丈夫……だろう……」

俺はアंकの魔力を探り、場所を絞り込む……。

……ここか……。

俺は少しだけ魔力を開放し、そのまま影に溶け込む……。
影のゲートによる転移。ネギまでエヴァが使っていた転移魔法の一種。

習得していてよかった転移魔法！

そんな事を思いながら、体が完全に影に溶け込む。

ああ、もう……意識飛ぶなこれ……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

アंकサイド

「まったく、あいつは何処に行きやがったんだか……。気になるだろうが。」

「どうしたアंक？主が心配なのか？」

「当たり前だ。そういうお前だって、随分挙動不審じゃないか。え？シグナム」

「主を心配しない従者なんていないだろう。それにしても、遅い……」

「まあまあ二人とも。アニス君やったらすぐに帰ってきてくるて」

あれからすぐに家に帰り、アニスの帰りを待つて早30分。  
一向に帰ってくる気配がしない。  
全く、何処に行ってるんだか……。

「はあ……」

「あはは、本当にアंकさんは心配性やね」

「ふん……」

俺はいつも通り、鼻を鳴らして顔を仰向ける。

その時、俺の後ろに魔力の反応がする。

これは……アニスか！

俺はすぐに後ろを振り向く。

ズブブ……。

そこには、俺の陰からドンドン姿を出していく、アニスの姿があった。

しかも、横たわった状態で。

「アニス!!」

俺は急いでアニスのそばに近づいた。

「ハア……ハア……」

息はしてるものの、意識は無いようだ。

だが、明らかに息切れって感じの呼吸じゃないな……。

「なっ、主……どうしていきなり……」

「おいアンク！説明しろ！」

ちっ、守護騎士どもも気づいたか。  
まあ仕方ない。めんどくさいが後で説明しないと……。  
それよりも、今はアニスだ。

「説明は後だ。それよりも、今はアニスを部屋に運ぶぞ……」

「……分かった」

取りあえず、部屋で寝かしときゃ大丈夫だろう。  
俺はそう思いながら、アニスを部屋に運ぶ……。

~~~~~  
~~~~~

「……んっ……知ってる天井だ」

俺は目を覚ます。

どうやら影のゲートの転移は成功したようだ。だが、さっきの胸の痛みで、体力を持って行かれた……かなり体が重たい……。

「よいつしよっ……と……あれ？」

どうやら、体力を持って行かれたのと……この寝ているヴィータのせいで体が重いようだ。潰れるって……。

「……ふふふ、誰かの寝顔を見るのは……久しぶりだな。プニプニ」

「ん、うん……子ども扱いすんな……」

「クスツ……夢の中でも子供扱いされてるんだ……可愛い」

もう頭撫でちゃえ。

こんなチャンス、滅多に無いや。まあ、普通に撫でようとしても届かないし、良いよね？

「よしよし」

俺はヴィータの頭をなでる。

オレンジ色の髪の毛……俺、髪染めようかな？思い切って白か銀に

……。

ああ、でも……リアルクドになっちゃうからな。

まあ、保留ってことで。

そんな時。

ガチャツ。

この部屋のドアが開かれる。

入って来たのはシャマルだった。まあ当然か。この中では医療担当だしね。

「アニス君！目が覚めたんですね！」

「あはは、おはようシャマルさん。なんてね」

「今は冗談を言ってる場合じゃないですよ！」

「あつあつ……シヤマルさん怖い怖いなのです。ほらほら、笑って笑って。にぱーって」

「す、すみません……少し取り乱してしまいました……。アニス君、動けます?」

「ん、大丈夫だよ。どうしたの?何かあった?」

「いえ、そうではないですよ。目立った外傷は見当たらなかったのですが、もしかしたらと思ひまして」

「そっか……うん、大丈夫ですよ。心配してくれてありがとうございます」

「従者として当たり前です」

「えー、そこは家族だから、でしょ?まあ、良いけどさー。ぶーぶー」

俺は少し拗ねた感じを出して言ってみる。  
シヤマルは少し焦ったように訂正してきた。

「クスツ、冗談ですよ、冗談」

「もう……アニス君だったら……あ、後敬語は要らないですよ？さん付けもしなくて良いです」

「そう？……じゃあ、シャマル」

「はい、何ですか？」

「えへへ、呼んでみただけだよ。それにしても、シグナムさんやシャマル。ザフィーラさんを見ると、お姉ちゃんやお兄さんが出来たみたいで嬉しいよ」

「……それじゃあ、お姉ちゃんって呼んでも良いんですよ？」

そう言って、シャマルはニコツと笑う。

あつ……自分で言うておいてなんだけど……恥ずかしかも……。

「あつ……シャ、シャマル……お姉ちゃん……」

「何ですかー？アニス君」

「えへへ、本当にお姉ちゃんが出来たみたい」

「本当に、アニス君は可愛いですね」

「あつ……一応俺も男だから……少しは自重してください……」

「ふふふ、ごめんなさい。それじゃ、みんなに報告しに行きますよ」  
「？」

「はい。それより、ヴィータちゃんはどつしよっ？」

「そのまま寝かしておいてください。起すのも可愛そうです」

「そうだね……それじゃ、ヴィータちゃんをベッドに寝かしつけて……  
つく、持てない……シヤマルお姉ちゃん（泣）」

「はいはい」

そんなこんなで、シヤマルとは打ち解けました。  
まあ、そんな事よりも……。

「どうしてこうなった」

あの後シャマルと一緒にリビングの中に入ると、二人の般若が居た。一人は言わずもがなアंकだ。二人目ははやて。そしてその後ろではシグナムとザフィーラが、物凄く悔やんだ顔をしていた……。  
うむ、どうしてこうなった。

「ア〜二〜ス(く〜ん)」

「……あ〜……あはは……どうしたの？二人とも？顔が怖い怖いなのですよ？」

「……正座」

「へっ？」

「そこに正座しろ……」

「は、はい……」

俺ははやての気迫に負け、正座してしまう。

「さて……お待ちかねのお説教タイムや……」

「いや、誰も待ってない……」

「ああ!?!」

「ヒイツ! ごめんなさい!」

アंकに睨まれてしまった……。

この後、二人から小一時間以上説教されたのは……言うまでもない……。

ああ、疲れた……。

あ、所で、あの胸の痛みは何だったんだろうね？

俺も今だに分からない……ま、何時か分かるでしょう。  
それじゃね。

くオマケく

「アニス君、大丈夫ですか？」

「はう〜、足が、痺れて痛いよ〜（泣）シヤマルお姉ちゃん……」

「「「お姉ちゃんだと（やと）！？」」「」」

あれ？なんか三人とも反応したんだけど……。  
しかも、三人ともシヤマルを睨んでるし。

あ、三人って言うのは、アंक、はやて、シグナムの三人だよ？

「シヤマル……これはいったいどういう事だ？なぜ主が、お前の事をお姉ちゃんなどと……」

「せやな〜、ウチも気になるな〜」

「吐いてもらおうか？何故お姉ちゃん、何て呼ばれているのか……」

「あ、あれ？三人とも、どうしたの？わ、私、何かしたかしら？」

「「「問答無用！……」」」

そう言って、三人はシャマルを何処かに連れて行ってしまった。  
……終われ……。

あ、そうそう、ヴィータがどうなったかって言つと。

あの後起きて来ていきなり抱き着かれました。

「も、もう絶対に一人でどっか行くんじゃないやねえぞ!!」

「……う、うん……」

あれ、もう俺に慣れたの？懐くの早くな？

しかも、それ男の俺が言う台詞じゃ……つかヴィータがかっこよく見える……。

そんな感じでした。

今度こそ終われ。

第二十話 やっぱり好きにはなれないな（後書き）

最後わけわかめ

さて、ここでフラグパロメーターを見よう

アंक：うん、まだいける

はやて：アニス君……抱きしめてもええか？

なのは……まだ……まだあ！

シグナム：今回の主は、優しすぎる……

ヴィータ：信用………してみるか……

シャマル：お姉ちゃんですよ

ザフィーラ：今回の主は、小さいな

こんな感じですよ

相変わらず落ちてるのはまだはやてのみ

シヤマルはお姉さんと呼ばれるだけで、落ちてはいません

それより聞いてくれよ

家の妹さ、最近二次に染まりつつあるのよ

彼氏の影響だねこれ

僕花を毎週見てたし、ウサギドロップも見てるし

最近じゃ俺に

「エンジェルビーツって面白いの？」

って聞いてきた……

……今のこいつにリトバス勧めたらやりそうで怖いwww

まあ、妹嫌いなんでも思わないがな

どうせならお姉ちゃんが欲しかった……

田村さんみたいな、な

あの人はブラコンで有名らしいね

何か弟に彼女出来たの知って、泣きながら実家に帰りたくないって  
言ったらしい

……まあ、そんなお姉ちゃんが欲しいわけではないけど……田村さ  
んは可愛いからな

弟さんが羨ましいは

そんな事を思う私なのでした

それでは、明日はまた番外編

ムッツリーニと遊園地後編をお楽しみください

ここまで読んでくださりありがとうございます

## 呪文説明

レドルク

足を強化する呪文

ウォンレイの呪文で、良く移動にも使われている呪文

ソルド・ザケルガ

ガツシュの兄、ゼオンが独自に作ったオリジナルの呪文

巨大な雷の剣を作りだし、それで相手を攻撃する呪文

そんな所ですかね

では、また明日とか

番外編 ムッツリーニと遊園地（遊び編）（前書き）

どもっす

今夜は俺居ないので、木曜日に上げた番外編の続きを上げます

今回は……甘々なのかな？

自分で見直して、少し砂糖を吐きそうになりました

それでは、番外編始まります

番外編 ムツツリー二と遊園地（遊び編）

前回のあらすじ

土夜と遊園地に行く事になりました。

~~~~~  
~~~~~

「おお！ここが遊園地！でけえ！テンションあがって来たよ！」

「……………（グッタリ）」

「……………あの俺が言つのも何なんだけどさ、大丈夫？」

「……………心配ない」

「そっか、ごめんね、無理させちゃって」

「……………子供に心配されるような軟じゃない」

「……………えいつ」

俺は何かむかついたので、ムツツリー二に抱き着いてみた。  
そしたらムツツリー二は鼻血を出して悶えてしまった。

「あはは！やっぱり軟じゃん！」

「……………それは反則」パシヤッ

「おっ、早速一枚？気が早いね」

「……………撮れる内に撮っておく」

「いつ倒れても良いように？」

「……………」  
「……………」  
「……………」

「あはは、やっぱり軟だ。それじゃ中に入ろうか？」

「……………」  
「……………」  
「……………」

俺とムツツリーニはようやく遊園地の中に入る事にした。  
まあ、無駄話してたら時間無くなっちゃうしね。

「あ、そうだムツツリーニ」

「……………?」

「手、繋ご?俺こんなナリだからさ、人ゴミに簡単に飲まれちゃうから。迷子になりたくないし、ムツツリーニにも迷惑掛けたくないわけよ。だから、繋ご?」

「……………把握」

ムツツリーニはそう呟いて、俺が突き出している手をぎゅっと握る。  
……………やっぱ大きいな、ムツツリーニの手。まあ、俺がほぼ幼稚園児と変わらない体格だから仕方ないんだけどね。

「えへへ、ムツツリーニの手、暖かい」

「……………」パシヤ

「もう、また写真。案外恥ずかしいんだから、自重してよ……あうあう……」

「……………」パシャ、ボタボタ

「こらこら、鼻血流さない。変質者扱いされるよ?」

そんなこんなで、乗り物に乗るチケットを買い、そのまま遊園地内に入った。

それにしても、やっぱり休日だから人がいっぱい。

子連れからカップルまで……子連れは良い、だがリア充、てめーらは駄目だ。

「……………」何から乗る?」

「うーん……………」ジェットコースター……………」と言いたいけど……………」あはは、この身長じゃ規定に引つかかっちゃうから駄目か……………」

「……………」大丈夫、ここのジェットコースターは割かし安全にできてるから、小さい子でも乗れる仕様になっている」

「ホント!?じゃあ行くつよー!」

「……良い笑顔」パシヤッ

「もっ、だっからっ！恥ずかしいってば！」

全く、油断も隙もない奴だ。

俺、あんまり写真撮られるの好きくない。

まあ、それから写真撮られながらジェットコースター乗り場に  
着いたのだが……。

「うっわあ、人がゴミの様だ」

「……ムスカ乙」

何か、長者の列が如くの勢いなのだが……。

あ、そうだそうだ、帽子とマント取っとかないと。ジェットコース  
ターの勢いで飛ばされかねないし。

「……持とうか？」

「ん？大丈夫大丈夫。自分の荷物だし、これ位持てるよ。いくら非  
力だからって、それは心外だよ？」

「……冗談」

「おい、ムツツリーニ」

全く、こいつの冗談は分かりにくい。  
それにしても、ホントに人気だよな、ジェットコースター。何処の  
遊園地でもそれが目玉だし仕方ないか。

「つつか、前が見えん……」

「……まだだいぶある」

「そつか……あゝ、暇だ……」

「……アニスつて、結構無責任」

「あはは、俺もまだ子供ですから。でもま、自分で言った事は大体  
責任持つてるよ？まあ、今回はホントに先が見えないからつい口に  
だしちゃったけど」

「……やっぱりアニスは俺より大人」

「あはは、気持ち悪くないかな？実際、他の同い年の子よりも成長してないけど、口調とか考えが逸脱してるから……」

「……そんな事ない。大丈夫、アニスは気持ち悪くなんかない」

「……えへへ、ありがとう」

「……いただき」パシャッ

「あう、油断した……」

くっそ、ムツツリーニめ……。

速すぎる、表情が戻りきる前にシャッターを切るから反応できない。

「ええい！いい加減に自重しろ！パシャパシャ撮るなあ！」

「……それは出来ない」

「……お前、今日遊園地に誘ったのは、10割方俺の写真を撮る為

だろ？」

「……………（フルフル）」

「あれ？違つもの？」

「……………9割9分9厘」

「おい！変わらねえよ！ほとんど一緒だよ！？何考えてんだお前！」

「……………」パシヤッ

「ええい！無言で撮るな！」

その後も、順番が回って来るまで何回も写真を撮られた。ちくせう……………。どんだけ撮られたんだ……………。

そして、ジェットコースターの乗る俺とムッツリーニ。

「それでは、発射いたします」

そうアナウンスが入り、コースターが動き出す。  
帽子とマントと、ムッツリーニの愛用のカメラはスタッフに預けた  
から、これで落ちる物は無くなったわけだ。  
そして撮られる心配もない。

まあ、流石にムッツリーニも、ジェットコースターに乗りながら写  
真を撮ろうとする馬鹿では無いと、俺は信じている。

まあ、危ないしね。  
それよりも……。

「あう……緊張してきた……」

ガタガタガタガタ……！

ゆっくりと進んでは行くが、徐々に徐々に、高くなっていく……。  
普段空飛んでるのに、どうもこう言った機械仕掛けの物に乗るのは  
なう……。って、デバイスも一応機会に入るやん。

「……大丈夫」

ギョッ。

ムツツリーニはそう言うと、俺の手を握る。  
あう……若干安心したのは、秘密だ。

「は、恥ずかしい……」

「……さっき自分から握ろうって言ってたくせに」

「じ、自分からなら案外恥ずかしくないんだよ？って、キヤアアアアアアアア！」

無駄話をしていたら、いつの間にかジェットコースターが一番上まで来ており、そのまま発車した。  
す、凄い速度！

「キヤアアアアア！」

他のお客も叫んでいる。

まあ、大半はカップルなのだが……リア充爆発しろ。

「あ、なんか慣れてきた」

案外慣れるものなんだね、ジェットコースターって。

「キャハハ！楽しい！」

俺は隣にいるムツツリーニの事を忘れてはしゃいで楽しんだ。  
一方、ムツツリーニは……。

「……………」

叫びもせず、笑いもせず、ただ無表情にアニスを見続けるのであつた……なんか怖い。

~~~~~

~~~~~

「いやあ、楽しかったね！ムツツリーニ！」

「……………（コクリ）」

あれからジェットコースターを降りて、遊園地内をブラブラしてる。  
ホントに人がいっぱいだな、はぐれたら迷子になりそうだ。

「ムツツリーニ、絶対に手、離さないでね？」

「……………大丈夫、離さない」

「えへへ、ホントだよ？」

「……………（じっくり）」

「うん、なら安心だね」

「……………」パシヤッ

「あ、くっそ。油断した」

「……………油断大敵」

「お前が言うな！」

まあ、何やかんやで楽しいわなこれ。  
それから俺とムツツリーニは、色んな乗り物に乗り、昼飯を食べて

から、また違う乗り物に乗りまくった。

夕方

「いや、すっかり日が暮れちゃったね……」

「……………（コクリ）」

「……………もう帰ろっか」

「……………そうだね。そろそろ電車も来る時間だし、帰ろっか」

俺とムッツリーニは、そう言って、ベンチから立ち上がる。  
あはは、少し疲れちゃったな。はしゃぎ過ぎた。

「う……………あ……………ふあ……………ねむ……………」

「……………大丈夫？」

「ん……………大丈夫。ちょっとはしゃぎ過ぎて疲れちゃったただけだから」

「……………無理は良くない」

「ふわぁ!?!」

ムツツリーニは何を思ったのか、いきなり俺をお姫様抱っこしました。  
た。  
ちよっ、いきなり何だし!

「はう、ムツツリーニ……………は、恥ずかしいよ……………」

「……………子供なんだから、無理はいけない」

「むぐ、子供扱いするなぐ!バカバカバカバカ!」

俺は手足をバタバタさせて反抗する。

「……………暴れたら駄目。幾らアニスが軽いとは言え、流石に落とす  
そう」

「しっわっど、めんど……………って!降ろせば済む問題じゃん!」

「……………無理はいけない」

「お前はそれしか言えんのか！降ろせ！今すぐ降ろせ！呪うぞ！アホー！」

「……………それじゃ、おんぶなら良いの？」

「うっ……ま、まあ……………それならまだまし……………かも……………」

「……………そう」

ムツリーニはそう言うと、俺を降ろし。俺の目の前で後ろを向いた状態で屈む。

「……………はい」

「……………い、良いの？」

「……………（コケリ）」

「……………鼻血出さない？」

「……………頑張る」

「……………そ、それじゃあ、お言葉に甘えて……………よいしょっ」

俺はムツツリーニの背中に乗る。

そしてそのままムツツリーニは立ち上がり、そのままスタスタと歩く。

「……………ムツツリーニ」

「……………何？」

「今日はありがとうね。俺、すっごく楽しかった」

「……………これ位お安い御用」

「えへへ、ムツツリーニは優しいね」

「……………ありがとう」

「えへへ。……ムツリ二の背中、暖かい……眠たくなってき  
ちゃった……」

「……寝ても大丈夫。着いたら起こす」

「……うん……ありが……と……」

俺はうつらうつらと船をこぎ、睡眠の波に飲まれ、そのまま眠りに  
ついてしまった……。



「ニス……ア……ス」

「うっ……ふぁっ……ひゃい……」

急な振動……誰かに揺さぶられている様だ。

うっ、誰だよ、気持ちよく寝てたのに……。

「……アニス、着いたよ。もう海鳴市だ」

「ふえっ……」

おいおい、まさかおんぶされたまま電車に乗ったってこと？  
……恥ずかしい……。

「……はう……電車に乗る前に……起こしてほしかったよ」

「……たぶん、兄妹にしか見られてなかったと思う」

「……字が違う気がするんだが……まあ良いか……もう降ろして良  
いよっ。」

「……駄目」

「えっ……何で？」

「……疲れてるんでしょ？このまま家まで送る」

「あう……だ、大丈夫だよ！少しだけだけど、寝たし、体力も回復したよ！だから降ろして？自分で帰れるから」

「……………そう？」

「そう！」

「……………分かった」

ムツツリーニはそう呟くと、すぐに降ろしてくれた。

「ありがとう、ムツツリーニ。また今度誘ってね」

「……………アニスが行きたいなら、また連れてく」

「あはは、ありがとう。それじゃ、バイバイ」

「……………（ムクムク）」

俺はムツツリーニ手を振り、駅からはやての家まで歩いて帰る。  
いや、今日は楽しかった。また行きたいな。

じゃあ、そんな感じで、終わりますわ。

番外編 ムッツリーニと遊園地（遊び編）（後書き）

いやあ、実はさ

途中でネタ尽きました（笑）

だからこんな中途半端な落ち方になっちゃいました

まあ、仕方ないよねテヘペロ

さて、明日は俺は居るので、ガシガシ本編を進めていきたいと思  
います

そして報告！

11月5日から11月10日まで、俺は居ません！

だから、この5日間は、たぶんまた番外編になっちゃいます

へ？今度は何があるんだって？

へっへっへ……それがね、修学旅行なんだ

すまんね、流石にこれには文句は無いよ、俺は……

まあ、そういう事なので……もし五個書けそうだったら、書きます

無理そうだったら……大体三つくらいは頑張っ書きます

では、また明日とか

ここまで読んだ下さりありがとうございます

第二十一話 はやてを祝おう前編（前書き）

はい、こんばんは

帰ってきました

いやあ、疲れた

何が疲れたかって？

朝までずっと起きてたからさ

しかも外です……

いやあ、寒いなの、冬になりかけの北海道の朝方舐めんな！

へたすりゃ死ぬぞ！

とか思いながら、牛の後ろで一緒に牛見張ってる奴と、湯を沸かしながらカップめん作ってハフハフしてました

しかも、先輩はエロ本読んでたし……

先生の隣でだよ？しかも、一般の人もいる中でだよ？

モラル考えようぜ……

後、テント張ったのは良いけど、結局寝たの三時間

その間ずっと牛見張ってた

疲れた……

つうわけで、本編始まります





「……不思議なー、夢だったなー……」

おはようございます、アニスです……。

何か壮大な夢を見た気がします……いや、そうでもないか……。

何か疲れてます、夢見ただけなのに、体が疲れてます……どうしてでしょう？

はい、と言う訳で、今日ははやてちゃんの誕生日でございます。

「盛大な出落ち乙」

とりあえず、これだけは言いたかった。

「さて、どうしたものか……」

朝、いつもなら思考が定まらず、口調が覚束ない状態なんだが。何故か今日は思考が纏まってるし、口調も普通だ。

(神は言っている……はやてを祝えと……)

誰だよお前、あれか、シャダイに出てくる奴か？  
つか出てくんなコノヤロー。

コンコン。

「失礼します」

あう、考え事の途中で誰かが来てしまいましたね。  
まあ、声からしてシグナムだろうな。

「あ、主。起きておられましたか」

「おはおはー。いや、何か壮大な様で壮大でない夢を見て」

「？」

あら、シグナムが頭の上にはてなを浮かべて首を傾げちゃったよ。  
まあ、俺も首傾げそうな程なので、分かる。

「まあ、気にしないで。さって、今日は少し出かけるし、さっさと朝ご飯食べますかにゃ〜と」

俺はベッドから降りて、そのままドアを開ける。  
勿論、背的に背伸びしてなのは、もう慣れた事。

~~~~~  
~~~~~

「はい、朝早くからみんなに集まってもらってのは他でもありません。今日はやてちゃんの誕生日なのです」

あれから朝ご飯を食べてすぐ、シグナム達とアंकを俺の部屋に呼び、作戦会議。  
とにかくはやてには聞かれたくないなので、少しだけ魔法で小細工を施す。

当然、魔力なんぞは感知されないようにしてる。

「まあ、それは知ってるだろう。昨日、あいつ小さい声で呟いてたしな」

「そだねー。まあ、それは置いて。今からはやてちゃんを祝う為に作戦会議をしたいと思います。まずはアंक」

「何だ？」

「何か良い案無い？」

「いきなり丸投げかよ！」

「まあ、俺としてはプレゼントに。自分にリボンを巻いて「俺がプレゼントだよ」「何てを思いついたんだけど、はやてちゃんにそれをやると、信じられないくらい食いつきが凄いと思い、敢え無く断念」

「………それを考えるお前の思考が、俺にとって恐怖だ………」

「あはは、まあやろうとは思わないけどね。冗談だよ冗談」

「………ちっ」

「誰だ！今小さく舌打ちした奴！」

何かアंकがいきなり叫びだしたんだが、どうした？

まあ、アंकはさて置き。

「これから役割分担をしたいと思います。先ずははやてちゃんをこの家に踏み入れさせない係。ヴィータちゃん」

「私か？」

「うん、ヴィータちゃん。ヴィータちゃんならはやてちゃんと外に出て、町の事を知りたいから一緒に行こうとか言っても問題ないかと。もちろん、シグナムさんやシャマルお姉ちゃん、ザフィーラさんでも良かったんだけど、ここはヴィータちゃんが適任かと思ってたから、できれば夕方まで引きつけて。次に飾りつけ、これはシグナムとお姉ちゃんに任せたいんだけど……」

「主のご命令とあらば、喜んで」

「はい、任されました」

「うん。次に買い出し、これはザフィーラさんとアंकに任せるよ」

「分かりました」

「了解だ」

「そして俺は、プレゼントを作ってくるので翠屋に行ってきます」

「?ケーキでも作るのか?」

「Exactly。桃子さんにケーキの作り方を教わりに行くのよ。まあ、前からやってみないって誘われてたからさ、お願いしてみようかと」

「そうか……まあ、良いか。あいつの腕は確かだしな」

「うん、そうだね。さて、それじゃあそれぞれ、今の役割で行動をお願いね!」

「了解(把握した)!!」

こうして、俺達ははやての誕生日を祝う為に行動を開始した。あ、そうそう。今日の晩御飯を作るのは俺だよ。

シャルルにキッチンに立たせたらそれはそれはとても大変な事になっちゃうのは目に見えてるからね。

~~~~~

「と、言う訳なので、ケーキ作りを教えてください！」

へ？展開が早い？

気にしてたら人生損するよ？

「あらあら、もしかしてアニス君の彼女さんかしら？その人」

ピクッ……。

近くに居るなのは耳が動く。

うむ、気のせいだろう……きっと、メイビー。

「あはは、違いますよ。ただの友達なのです。その子に、俺が作ったケーキをプレゼントしてあげたいな〜って思って、来ちゃいました」

「ふふふ、それだったら大歓迎よ。それじゃあ、厨房に行きましょうか」

「ありがとうございます！でも、お仕事の方は……」

「大丈夫よ。今日は美由紀も手伝ってくれてるし、ちょっとくらいなら。ね」

「あはは、すみません」

「謝らなくても良いのよ？それじゃ、行きましょうか」

そう言つて桃子さんは厨房の方へ向かう。
俺もそれに後ろから着いて行く。
なのはの視線を無視しながら……。

「それじゃ、始めましょうか」

「はい！それより質問があります！」

「何かしら？」

「何故ウエイトレスの格好をする必要があるんですか！」

「需要があるからよ」

誰にだよ……と思ったのは、許されるはず。
それにしても……。

「壁」 ・（）ジーツ

あのこつちをジト目でジーツと見てるのはを何とかしてほしいの
ですがね。
俺としては、このままでも良いんだけど、気になって仕方ないんだ
よ。

「それじゃあ先ずはスポンジ作りから。最初はバターを湯煎で溶か
すの」

「はい」

俺はお湯の入ったボウルの上に小さめのボウルを入れ、その中にバ
ターを入れる。
それを木べらで動かしながら徐々に溶かしていく。

「……ん、全部溶けたわね。それじゃ次は、薄力粉をふるいに入れて、だまにならないように塊を粉にする作業よ」

「はい」

次に薄力粉をふるいに入れ、下にボウルを置く。

トントンと小刻みにふるいを叩きながら、粉を振るって行く。

「よし、これで良いわ。さて次は、方にさっき溶かしたのと違うバターを型に縫って良くわ」

俺は型にバターを塗って行く。

……何だろう、ホントに視線が気になって来たんだけど……俺はそう思い、後ろを向く。

「調理台下」 「ジーッ」

うわっ！近づいてきてる！？

こわっ！？ていつか仕事どうした！？なのは仕事しろ。

「……なのは、一緒にやりたいなら素直に言いなさい?」

「にやっ!?!お、お母さん!」

何故かなのはは動揺してる。

何でだ?あ、首にレイ八さん発見。俺の魔力を感じてなのはに告げ口しないと良いけど。

まあ、分からないように細工してるから良いけど。

案外ユーノとかに名前知られてたら一発かも。

あいつ、スクライアー族だしね。

そんなこんなで、スポンジ生地を型に入れ、オーブンに入るとこまで終わらせ、今度は生クリームづくりとイチゴの下準備をする事に。

先ずはイチゴのシロップ用の水を温め、その中にグラニュー糖を加え、火を止めて冷ます。

そして、冷ましてる間に今度は生クリームを作る。

これがまた大変、とと思ってたけど、そこはやはり現代。ハンドミキサーなる物があるので、それを使い角が立つまで泡立てる。

チンツ!

「あ、スポンジが出来たの」

そしてちゃっかりケーキ作りに混ざってるなのは……パネエっす。

そしてスポンジが出来たと言う事なので、急ピッチで生クリームを仕上げます。

まあ、ハンドミキサーだから速いんだけどね。

生クリームが出来たら、スポンジを横に半分切り、下段部分に生クリームを塗る。

全体に滞り無く塗ったら、さっき冷ましていたシロップに漬けていた、半分に切ったイチゴを乗せていく。

最後に、上段部分を下段部分とドッキングし、上段部分に生クリームを塗る。

そして、余っている生クリームを絞り袋に入れ、デコレーションしていく。

後はイチゴを乗せて……。

「出来た　！！」

完成！！

うん！初めてにしては上出来だね！

「あらー、上手くできたわね。初めての人はスポンジで躓いちゃう人とか多いのに、アニス君はスポンジも完璧だったわ」

「ありがとうございます、桃子さん。なのはちゃんも、ありがとうね」

「ううん、私が無理言っちゃったんだし……」

「俺は気にしてないから全然良いよ。桃子さん、箱に詰めるの手伝ってもらって良いですか？最後の最後で失敗したらもう目も当てられないので」

「それだったら私がしてあげる。アニス君はそれが終わるまで休んでて良いよ」

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて……」

俺は厨房に置いてある椅子に腰かける。

いやー、疲れた。ケーキーホール作んのも、大変なんだな！。

桃子さん達は凄いなー、それをほぼ毎日やってるとか、考えられん。

「お疲れ様、アニス君」

「ありがとう……あー、疲れた……あ、これから家に帰って今日の

晩御飯作らないといけないんだっ……まあ、良いか……何作ろうかな」

「……ねえ、アニス君……」

「何？なのはちゃん」

「アニス君がプレゼントしたい人って……大切な人？」

唐突に、なのはが聞いてくる。

愚問だね……。

「うん、大切な人だよ」

「……そうなんだ……アニス君は、その人の事が、好きなの？」

「……大好きだよ……」

「……そう……」

なのはは顔を暗くして俯いてしまう。

？一体どうしたんだろうか？

「まあ、大好きって言っても、友達で言う大好きだからね。恋とかでは無いよ」

それを聞いたなのはは、いきなり顔をバツと上げる。
その表情は、さっきの暗い顔と打って変わって、キラキラしている。

「ホントに!?!」

「う、うん……本当だよ……」

一体どうしたんだ？
今と良い、さっきと良い……あ、桃子さんが来たみたい。

「はい、アニス君」

「ありがとうございます、桃子さん。それじゃ、俺はこれで」

「あら、もう少しゆっくりしていけばよっ?」

「いえ、これから晩御飯の支度もありますし、少しケーキ作りに没頭しちゃったんで……それじゃ、また来ます。バイバーイ、なのはちゃん」

俺はなのはに手を振り、店を出る。

さて、今日は何を作ろう……一応買い出しは頼んだけど……買ってくる物、教えとけばよかったかな？

第二十一話 はやてを祝おう前編（後書き）

はい、恒例の長くなりそうなので前・後編分けました

つか、もう疲れがピークです……死にそうだ

あ、ケーキの作り方は、ほとんど覚えた奴を書き記しただけです

菓子作り大好きwww

ケーキって手間はかかるけど、結構簡単に作れちゃうもんなんだ

パウンドケーキは、あれ手が腱鞘炎になりそうな位生地混ぜるぜ？

バターと薄力粉を混ぜる時点で手首痛くなるし

まあ、愚痴は良いや

それより昨日はホント酷かった

何が酷かったって？

先輩がエロ本読んでたのもそうだけど、どっかの農家の人が、テレビとDVDプレイヤー持ってきて、AV見たた親父が居たwww

もうわいぢ

そんな俺は、アレルギー性の喘息が出て呼吸困難に陥りました

死ぬかとオモタ

まあ、生きてるから良いけどね

さて、次回は晩御飯を作るのと、はやての誕生日を祝う話を書きます

ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十二話 はやてを祝おう後編（前書き）

どもっす

いやあ、眠たい

まだ日曜日の疲れが抜けていない私です

ねむ……

それにしても、ホント寒くなってきました

そろそろセーター出さないと

学校の廊下の寒さは異常

そんなわけで、本編始まります

第二十二話 はやてを祝おう後編

アニスサイド

「たっただいま〜!!」

どもども、翠屋から無事帰還したアニスなのです
いやいや、それにしても初っ端から女装させられるとか、流石に思
つてもみなかったよ。

「おっ、帰って来たか」

「お疲れ様です、主」

リビングに入ったら、既にアंकとザフィーラが居たのだよ。
ああ、買い出しただけだしね。それに、結構な時間翠屋に居たし。

そして、飾り付けも結構良いね。
綺麗だね。

「お帰りなさいませ、主」

「あ、シグナムさん。ただいま。それにしても、だいぶ飾りつけ進んでるね」

「はい、主よりも先に帰ってきたアंकとザフィーラも手伝ってくれたので」

「そうだったんだ。ありがと、アंक、ザフィーラさん」

「気にするな」

「これも主の為」

「固い、固いぞザフィーラ。」

「まあ、本編でもこんな感じだったし、仕方ないか。」

「所で、お姉ちゃんは？」

「……シャマルなら、あそこに……」

俺はシグナムの指を指した方を向く。

そこには縄で縛られ、気絶しているシャマルの姿が。

「どづしてこうなった」

「シャマルがキッチンに立とうとしたので、止む無く……」

oh……それはそれは、いい仕事をしましたなシグナム……。
俺は親指を立てて、サムズアップする。

さて、それよりも料理を作らないといけないわけだ
そしてこの私、何を隠そう。転生してから一回も料理を作っていないのだ。

前世では作ってたんだけどね、それにこのナリだし。やり難いかもしれないし、なまってるかもな。

「みー、困った困ったのです……」

最近、梨花の口調が定着しつつある。

まあ、可愛いから良いんだけど、狙いすぎとか言われそうなのです。
ああ、言ってる傍からいきなり。いや、どっちかって言うと羽入かもな。

所で、アंकとザフィーラは何を買って来たんだ？
俺はキッチンにある買い物袋を覗き込む。

うむうむ……ほうほう、この材料だったら結構多めに出来るね。
まあ、良いかこれで。

「うん、じゃあ俺は晩御飯作るから、みんなははやてちゃんが帰ってこないか見張っておいて！」

「「「了解！（把握）」「「「

さて、取りかかりますか！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

はやてサイド

「はやて、次こっち！」

「はいはい、しゃあないなヴィータは」

いや、今日の朝、ヴィータが町を案内してほしいって言って来た

のは嬉しかったでホンマ。

こうして車いすも押ししてもらいながら町を案内するのも、結構ええもんやな。

せやけど、何でヴィータだけ何やるか？

シグナムやシャマル、ザフィーラも町の案内をした方がええのに……なーんか気になるなあ……。

「なあヴィータ、何か隠してへんか？」

「うっ……は、はやて、いきなり何言ってるんだよ。わ、私が隠し事なんて……」

「じゃあ、何でもっとるのかな？ヴィータちゃん？」

「あ……あはは……」

さあ、キツチリ問い詰めたるでヴィータ。

ウチは手をわきわきさせながらヴィータに寄る。

「あ、アイス屋さんだ！はやて行こう！」

「えっ、ちょっ、ヴィータ!？」

ヴィータは突然車いすの後ろに回り込んだと思ったら、いきなり車いすを押し始める。

ちよっ！？何処に行く気やヴィータ！？

そう思っとなら、着いたのは公園やった。

「はやてはやて！アイス食べたい！」

ヴィータははしゃぎながら言う。

……ふふ、しゃーないなあ。ほなら……これを食べ終わってからでも問い詰めたる。

ウチはそう心の中で呟き、アイスを買う。

まあ、たまにはこんなんびりな日があってもええか。

「おじちゃん、バニラ二つください！」

「はいよ！ちよつと待っててくれ、すぐに出来るからよ。それと俺はまだ20代だ！」

「あはは、それはすいませんでした」

結構愛想がある人で良かったで。

まあ、そうじゃないと接客業とか出来へんもんな。そう考えとったら、いつの間にかアイスが出来ていた。

「はいお待ち。二つ合わせて300円ね」

「よいしょ……はい、300円」

「毎度！また来てくれな」

さて、話も聞きたいし、そのベンチにでも座って食べるとしますか。

「ヴィータ、そのベンチで座って食べよか」

「うん！」

ふふふ……お楽しみはこれからやでヴィータ……。ウチはにやけそうな顔を必死に抑え、ベンチに移動する。まあ、ウチは車いすなんやけどもな。

さて、どう聞き出したるか。

~~~~~  
~~~~~

アニスサイド

ピキーン！

「はっ、ヴィータちゃんがピンチだ!？」

「…………お前、頭大丈夫か？」

「…………あれ、何で俺そんな事言っただらろう?」

何かいきなり、そんな予感がしたんだよね。

はっ、これがニュータイプか!？え？違う?？ですよーWWW

「まあ、気にしないで…………それよりも、はい、出来たよ」

俺は焼き上がったハンバーグを皿に盛り付けアंकに渡す。

うん、少し手順を思い出すのに時間かかったけど、うまくできてる。

「シグナムさん、唐揚げはどう？」

「はい、もういい頃だと思います」

「どれどれ……うん、そうだね。それじゃ、もう油から出して、油を切らないと」

うむ、良い匂いだ。

体が覚えてるんだね、こう言うのは……まあ、体自体リセットされてるから分らないけどね。

「ザフィーラさん、そっちはどう？」

「もう皿に盛りつけました」

そう言って、俺に見せてくるザフィーラ。

うん、これも良くできてるね。やっぱりオードブルには欠かせないよね、エビチリ。

後はエビフライもそうだし、アスパラのベーコン巻とかも作ってます。

これで抜かりは無いはずだ……。  
後は色々作っているので、足りると思う。

「ねえねえアंक、やっぱり出迎えるときって裸エプロンの方が良  
いかな？」

「……………」

ガスッ！

「ひうつ！？……………つた……………」

「目が覚めたか？寝言は寝て言え」

「あうあう……………はう……………やっぱり痛い……………」

こいつ、絶対軽く本気だしたろ。

一瞬グリード化してなかったか？右腕。……………気のせいで合ってほし  
い。

「いい加減俺の頭をグーで殴るのは止めなさい！脳細胞が死ぬだろ  
うが！馬鹿になっちゃうんだよ！？脳細胞が減ったら！」

「あの発言をする時点で既に馬鹿だ」

「あーうー、言わないでよー……」

だって、なんとなく行ってみたかったんだもん。

それにしても、もうこんな時間か……そろそろはやとヴィータが帰ってくる頃かな？

「さてみんな、そろそろ配置に付きましようか。はい、クラッカー持って」

俺は四人にクラッカーを渡す。シャマルはまだ気絶してるけど、無理やり手に握らせておくわ。

勿論、自分の分も確保しておく。

それにしても、やはり百均クオリティー、絵とか柄が安っぽい……まあ、仕方ないけどね。

さて、早く帰って来ないかな。

「ねえねえシグナムさん。やっぱりこう言う時ってコスプレした方がいいのかな？猫耳とか猫尻尾とかつけて、やっぱりひげも必要かな？それで語尾にゃんとかつけてみたり」

「……………っ!？」

シグナムは急に後ろを体ごと振り向いた……………。

一体どうしたんだ？何か体プルプル震えてますけど……………しかも鼻押さえてる……………どうして？

「変態がまた一人……………か……………」

「なっ、アंक！貴様は私を変態とでも言いたいのか!！」

「どうせ想像して鼻血でも出してんだろ？その手を退けて見せてみるよっ。」

「い……………良いだろう……………私の変態ではないと証明してやる!！」

そう言い放って、シグナムは鼻から手をどける。

……………あ、鼻血……………。

「……………ほらな」

アंकにはやっとながらシグナムに言う。

しかもその顔は、何故か勝ち誇っている……状況がつかめないのだが……。

誰か説明してくれない？三行以内で。

「主、これを……」

「ん？ザフィーラさん？」

何かザフィーラに犬耳と犬尻尾とひげを受け取ったのだが……付けれと？

あ、アंकがぶん殴った……ありやいや、ズルズル引きづられて行っちゃったよ……。

まあ、付けとくか仕方ない。

「……わふー！！」

取り敢えず付けてみた。

そして言ってみただけ、気にしないで。

「いやあ、猫も良いけど、犬も良いね」

さて、このままの状態で待っておくかな……。

それよりシグナムお願いだから、鼻を抑えるのは止めて……そろそろ血を止めようか……。

っと、その時。

ガチャッ。

「ただいま」

「……………」

玄関からはやての声が聞こえた。  
帰って来たか……それにしても、ヴィータがやけに静かだな……どうした？

「みんな、準備は良い？」

「俺は大丈夫だ」

「私もです」

「「……………（チーン）」」

約二名、物言わぬ者に変わり果てたが……気にしない方向で。それにしても、アंकは何時の間に戻って来たんだ……恐ろしい。

「て言うか、それ取れよ！」

「もう時間が無いから無理！諦めろ！」

アंकは俺が着けてる犬耳と犬尻尾とひげを取ろうとする。でも時間が無いので諦めさせる。

そして……。

ガチャッ。

リビングのドアが開かれる……。

パンパンパンー！

「「「はやて）ちゃん（ー誕生日おめでとう！ー！」「「「

部屋にクラツカーの破裂音が響き、三人のハモる声が部屋を包む。  
そして、それにあっけに取られているはやての顔が飛び込んでくる。

「……………へ？」

はやてサイド

えっ、ちよお……………待ってえな……………。  
うわ、ウチ……………今絶対顔が変になつとる……………。  
ヴィータから聞いたけど……………まさかこない盛大にしてくれると  
わいわへんかったは……………。

「あ……………えと……………アニス君……………？」

「何？はやてちゃん？」

「……盛大過ぎや無いか？」

「そうかな？これが普通だと思うよ……でも、イマイチ驚きが足りないな……もしかしてヴィータちゃんから聞き出したりして……あはは」

「……あ、あはは……ごめん……聞き出してもった」

「……なん……だと……。ま、まあ良いや。やる事は変わりないしね。それより、どうしてヴィータちゃんはそんなに疲れ切ってる？」

アニス君は疲れ切っているヴィータを見て言う。

あはは、聞き出す為にくすぐまくったとは言えへんな……。

「ま、まあ気にせんといて……。それよりも、ありがとうなアニス君。ウチ、とっても嬉しい！」

「あはは、お礼ならアंकやシグナムさん、ヴィータちゃんやお姉ちゃんやザフィーラさんに言ってよ。ほとんどやってくれたのはこの五人なんだから」

「良く言っぜ。メインは自分がほとんどやってたくせに」

「そうですよ。料理もほとんど主人一人がやっていた様なものですし」

「……………アニス君、料理で来たんか？」

「いや……………作る機会が無かったと言うか……………出し惜しみしてました……………みたいな……………あはは……………はう」

そう言っただけで恥ずかしそうに鼻のてっぺんを掻きはじめたアニス君。  
あゝ、もう……………何やってもアニス君はかわええなあ……………。

「そか……………ほなら、ちょっと早いけどご飯にしようか。アニス君の手料理、食べてみたい」

「うん、分かった。それじゃあ椅子に座って待ってて？すぐ用意するから。アंकとシグナムさんは、そこで気絶してる二人を起こしておいて？」

「分かった」

「了解しました」

な……何で二人が気絶してんねん……。  
て言うか今気づいたわ……アニス君、犬耳つけとるやん、しかも大層に尻尾とひげも……。  
ああ、アニス君……モフモフしたいわ……いや、ぺろぺろしたい……  
……アニス君ぺろぺろ……。  
はっ、今危ない事考えてた……自重せなな。

そう思いながら、ウチは席に付く。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

アニスサイド

何故か悪寒が走ったのは気のせいだと思いたい。
さて、料理運んじやいますか。

俺は、既に皿に盛りつけてあった料理をテーブルに運ぶ。
それと、ケーキも用意しないとね。

はやてちゃん、喜んでくれるかな？

「はい、これで全部だよ」

「うわぁ…………アニス君、料理上手なんやね〜…………綺麗に出来てるわ…………」

「ありがとう。さ、皆も席に着いて?」

俺の一言で、皆も座る。

既にシヤマルとザフィーラは復活していた。しかも、すっごい笑顔なのだが…………。

「さて、ここではやてちゃんにプレゼントがあります!」

「プレゼントまであるんか?何か、ホンマに悪い気になってきてもった」

「気にしない気にしない。さて、問題のプレゼント何だけど…………ジヤジャーン!何とこのケーキ!俺の手作りです!」

「…………な…………なんやってえ!?!この店で売つとる様な綺麗なケーキがかいな!」

「そつだよ。今日は翠屋で桃子さんに教わりながら作ったんだ。は

やてちゃんの誕生日プレゼント……どうせなら形がある物でもよかつただけど……それはまた今度で良いかな？はやてちゃんには日頃お世話になりっぱなしだから、そのお礼も兼ねて」

「……ホンマに……もう何て言ったらええんか分からんけど……みんな……ありがとうな……」

はやてはとうとう泣き出してしまった。

まあ、そうだろうね……両親が亡くなってから、いつも一人で誕生日を祝ってたんだもんね……。
俺ははやての背中を撫でながら、落ち着かせる。

「大丈夫？」

「グスツ……大丈夫……ありがとうな、アニス君。それに、皆も。ウチ、皆と家族になれてとっても幸せや……」

「はやてちゃん……」

「八神……」

「「「「「」」」」」」

「……………さっ！辛気臭い空気はここまでにして、いただくっか！」

はやては笑みを浮かべながら俺達に言う。

その笑顔は決して無理をしながら笑っている笑顔ではなく、心の底から……………純粹に喜んでくれている笑顔だった……………。

うん、やっぱり、はやてには笑顔が一番だよ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「そして、どうしてこうなった……………」

「アニスくん……………」

どうも、ただ今寝る時間で、俺のベッドの中にはやてが居ます。

何か……………あれからみんなでご飯を食べ終わって、しばらくしてから。

「アニス君……………今日だけ、我がまま言ってもええやろっか？」

「何？はやてちゃん」

「……あんな……今日……アニス君と一緒に、寝てもええかな？」  
って、もじもじしながら言われたので、速効オーケーしました。  
だけど、何で抱き着いてくるのが分からない……。

「……アニス君……もう可愛すぎや……それに、暖かい……」

「もうすぐ夏になるけど、暑くなっちゃわないかな？」

「大丈夫や、ウチにはちょうどええから……」

ギョッ……。

「はう……はやてちゃん……そんなに強く……抱き着かれたら……」

「ふふふ……離さへんで？」

あうあうあう、はやてちゃんが悪い笑みを浮かべてるのです……。  
どうしたら良いものか……。

「こつしてアニス君と寝るのは、別荘以来やね」

「そうだね……あの時も確かこんな状態だったよね」

「あはは……そやったなあ。アニス君、抱き心地最高やもん……ああ、それにシャンプーの香りが良くて……つついな……」

「だ、だからって……俺を胸に押し付けちゃ駄目なんです……俺だって男の子、変な気分になっちゃいますですよ？」

「ふふふ、アニス君の軽さやったら、簡単にまるみこまれるとおもっけどなあ……」

「あっあっ……それは言わないでよ……」

全く、確かにはやてでも全力で俺を抑え込めば俺は動けないけどね。やるうとしないですよ？

「……アカン……眠くなってきた……」

「フウハハハ、では早く眠るが良い……かく言う俺も眠りたいけどね……」

「それじゃ、寝ようか……お休み、アニス君」

「うん、お休み、はやくちゃん……」

こうして、俺とはやては眠る事にした。  
この幸せが、長く続きますように……。



「アニス君……寝てる？」

「スー……スー……」

よし、よお眠つとるな……。

全く、無防備過ぎやでアニス君。ウチがそう簡単に眠るとでも？

「……ふふふ、可愛い寝顔や……」

ウチはアニス君の顔を覗き込んで、ニヤニヤする。  
ああ、これが至福の時みたいになりそうや……。

「……アニス君……」

ウチはアニス君の名前を呟き、徐々に徐々に、顔を近づかせていく。

「……アニス君が悪いんやからね……」

そして、ウチは……アニス君にキスをする……でも……。

チュツ……。

「……まだウチのファーストキスは上げへんで？ やっぱり、起きてる時じゃないと損やもんね……でも……ふふ、アニス君にチュウしてもうた……幸せすぎてウチ死にそうや……」

ああ、テンションが上がってもうて来て……どうないしよう……。もうこれは、アニス君のお腹をモフモフしながら寝るしかあらへんな。

ウチはアニス君のお腹に顔を蹲らせ、そのまま目を閉じる……。

今度こそ本当にお休みや、アニス君……。

「おやすみ……」

こうして、ウチの幸せな一日が終わった……。

第二十二話 はやてを祝おう後編（後書き）

いやあ、クリスマスまで残り二か月ですね

どうしようかな

ライブの練習が入ってくるからな、はあ……

今日メールで

そのクリスマスライブ内でやるカラオケに、何故か俺も出る事になったんです

いや、一応バンドも出るから無理だろう……

しかも、何を歌うかと言うと、ボカロのシリョクケンサって言う歌

聞いたこともねえよ……

つつかまだスターフィッシュ覚えてないし

どうしよう……

まあ、頑張ろう

それにしても、中々話が進まない

たぶん次はキンクリすると思う

もしくはシグナム達と模擬戦か儀式の話を書くかも

それでは、また明日とか

ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十三話 死と隣り合わせとある騎士の覚悟（前書き）

どもー

ディアボロです

いやあ、今日久々に部活に出ました

体力が落ちてました、そしてなまってました

ヤバい、来年で最後なのに、大丈夫かな

さて、本編始まります

## 第二十三話 死と隣り合わせとある騎士の覚悟

アニスサイド

「はあっ……………」

どうも、アニスたんのお。

何か……………もつため息ついてないとやってられないよ……………。

「ん？どうしたアニス、そんなに疲れ切った顔して。まだ朝だぞ？」

「いや……………まあ、色々あるんだよ……………それより、今日の夜儀式あるから……………」

「ああ、そうか……………って、はあっ！？何だそれ！」

「むう、俺ってそう思ったよ……………さっき、馬鹿神から連絡あったんだ」

〈回想〉

そう、俺はちようどご飯を食い終わって部屋でウダウダやっていた時だった。

急にデバイスが光りだしたのだよ。

そう、まさにあの時みたいに。俺がいつ儀式をやるのか悩んでた時、神が通信して来た時みたいに。

《ハロハロー、神様じゃよ。ー元気にしとったかー？》

「……………帰れ」

《ハツハツハ、冗談がへたじゃのうお主も》

「いや、マジで帰れよ……………」

《ほっほっほっ、なんじゃいなんじゃい。せつかくお主に忠告と知らせがあるのに……………聞かなくてええのか？》

忠告と知らせ？

はあ、またしょうもない事だと思っるのは、仕方のない事だと思っ。

「……………ちっ、教えるコノヤロー」

《おう、何故上から目線なのか気になるが……ま、まあ良いじゃろう……。まずは良い忠告と悪い忠告、どっちが良い?》

「……んー、じゃあ悪い忠告からで」

《分かった。……お主、このまま魔法を使ったら、間違いなく死ぬぞ?》

なん……だと……。

「どづいつ事だよそれ!」

《お主も、薄々気づいとるじゃろ……闇の書の呪いじゃ……》

「……はあ、まあ、感づいては居たけどさ……。じゃあ、やっぱあれか?猫二匹と戦い終わった時の胸の痛みも」

《その通りじゃ。お主の呪いは心臓じゃ。しかも、そこには魔力の核となるリンカーコアの近く、じゃから魔力。魔法を行使したら心臓に負担がかかり、激痛が走る……》

マジか……。それは結構キツイな……。

じゃあ何か、斬魄刀も使えないって事か？

《そうなるな》

「心読むなコノヤロー。それで、どうすんだよ？このままだと、俺はいずれ死んじまうぞ？」

《率直に言おう。収集をするのじゃ》

……はっ、今なんて言ったこの馬鹿神は……。  
収集しろって言ったか？

《そう言ったが？》

「お前ふざけてるのか！それは、シグナム達を犯罪者にしろと同義だぞ！」

《仕方ないじゃろ……お主をここで死なす事は出来ぬ。お主は神の加護を受けし人間。その人間がその呪いで死ぬ事は、我ら神とて良しとせぬのじゃ》

「何でだよ！あいつらを危険な目にあわせろってか!？」

《……分かつとくれ、それ以外に、お主を救う手だてが無いのじゃ。それに、お主が死ねば、あ奴らも消えるぞ?》

はっ、消えるか……。

ならそれで良い。俺が死ねば闇の書はランダム転移で次のマスターの元に行く。

そうなれば、死ぬのは俺一人だけだ。

《……お主は大事な事を忘れてはおらぬか?》

「……なに?」

《……八神はやて……》

「……」

ああ、そうか……クソツタレが……。

俺が死んだら、はやてが一人になっちまうじゃねえか……。  
アंकもどうなるか分からない……。

《……期間は、お主の呪いが進行する前じゃ……》

「…………絶対に他の手段を見つける…………」

《…………そうか、頑張れよ。んじゃ、次は良い報告じゃ》

「…………この空気で良い報告を聞いてもな…………」

はあ、もう最悪なテンションだよ。  
つか、良い報告って何よ…………。

《お主に魔眼をくれてやる事にしたよーん》

「…………魔眼ねえ…………何？魔法が行使できないから魔眼をくれてやる  
ってか？…………浅はかだな」

《うぐっ…………な、何じゃい。もう少し良い反応をしてくれてもええ  
じゃろっ！…………》

「…………はあ、んで？どんな能力さ？」

《まあ、有体に魔眼と言ってるものっ。どうせなら写輪眼とか複写眼

とかがええか？それとも、直死の魔眼、キュベレイなど。どれでもええぞ？》

……おいおい、写輪眼は魔眼なのか？

複写眼とかは魔眼め分類されてるから良いけど……もしかして輪廻眼とかオーケー？

まあ、どうでもいいや。

「要らないよ、魔眼なんて。んな物騒なもん目ん玉に入れんじゃねえやコノヤロー」

《なっ！お主正気か！？これが無いと本当に死ぬぞ！》

「はっ、だから言ってるだろ？他に手段を見つけてるって。んなもん頼るよりも、自分の力を信じてやりたい」

《……この馬鹿者が！お主は何を考えているのじゃ！……ああ、もうええ！こつちで勝手に決めてやる！！拒否権は無い！》

ちよっ！？

そんな横暴な！？

「ふざけるな！要らないって言ってるんだろ！」

《ええいうるさい！もう決まったわい！お主に与える魔眼は宝石・隷属の魔眼じゃ！受けとれい！》

「何だよその魔眼！つて、いててててて！！両目が痛いって！！」

俺は慌てて両目を抑える……ちくせう……魔眼なんて要らないって言うてんのに……。

ああ、だいぶ収まってきた。

「つつう……何すんだよ！」

《ええいうるさい！黙つとれ！そして説明じゃ！その魔眼の能力は遠距離からの「分解・吸収・放出・変換」を同時に行う事の出来る魔眼じゃ！魔法を分解したり、吸収したり、その吸収した魔法を放出したり、変換したりできる！そして最大の強さは、物質、非物質を隷属させる事が出来る！本当は大地からマナを取り込み、体内でオドに変え、魔力という枷にはめ、詠唱によって意味を加え、魔術として放出するという魔術の大原則に則ったものなのじゃ！その効果を「視界内全ての存在」に適用させるのがこの魔眼の効果じゃ！じゃがお主には魔力が使えるし、魔術も使える。じゃから魔法の分解、吸収、放出、変換は、敵の魔法を封じるための手段じゃ！》

……それって……何てチート？

つつか、使いたくねえ〜……そんな強い魔眼、要らねえって……。

《そして、その魔眼は人間には効かんからの。人間は、神の加護ほどでは無いが、多種多様な加護を受けていて対象にすることは出来る。そして、その魔眼を持つてるのは、人間ではお主が一人目じゃ。それは神しか持ちえない、最悪の魔眼と言われておる》

そんな魔眼をホイホイと俺にくれてんじゃねえよ！  
何でだよ！

《そして最後に、良い知らせじゃ！今夜儀式じゃ！分かったら準備でもして待つとるんじゃな！！》

ブツツ……。

……最後まで馬鹿神の奴、怒ったままだったな……。それにしても、今夜儀式か〜……あれ？マジで？

〜回想終了〜

「てなわけだつてばよ〜……」

「……お前、死ぬかもしれないのにどうして断ったりしたんだよ……」

「だって、要らないじゃん？今のままでも良いとこまで行けてるし、それにもう力なんて要らないよ。後は自分で伸びたいしね」

「ふざけんな！！いい加減お前は自覚しろ！死んでもらっちゃ俺が困るんだよ！それに八神も！守護騎士達も！！」

「だ……だから、他の手段を見つけて呪いを解こうって……」

「それが無いから今回神が通信してきたんだろうが！！どうして分かんねえんだ！！お前は魔力が使えないのに、この先どうやって戦うんだよ！魔法を使ったら死ぬんだぞ！？呪いはもう後戻りできない所ま出来てるじゃねえか！」

「むー……アंक、耳が痛い痛いなのです……。まあ、まだ時間があるし、十分抗える。それにね、アंक……俺は家族を犯罪者にしてまで、生きながらえようとは思わないよ？それだけは覚えておいてね？」

俺はアंकを見据えて言う。

確かに、死にたくないと思ってるし、まだ生きたいと感じている。だけど、俺の生き死にのせいで家族が犯罪に手を染めちゃ駄目なん

だ。  
それだったら、喜んでこの身を差しだそう。

「…………ちつ…………。…………今日の儀式終わってから、考えんぞ…………」

「…………うん!!」

とにかく、アंकはツンデレなのですな。ニヤニヤ  
だが、俺は気づかなかった…………この話を聞いていた者が居た事に…………。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ヴィータサイド

本当に、たまたまだった。

この話を聞いたのは、本当にたまたまだった…………。
私は何の気なしにアニスの部屋の所を通ったんだ。その時、少しド
アが開いていたので声が聞こえてきた。

アニスとアंकが話をしている。

私は部屋の中に入ろうとした。アニスと少し話があったからだ。

だけど、私はアंकクの言葉で動きを止める。

「……………どうして分かんねえんだ！お前は魔力が使えないのに、この先どうやって戦うんだよ！魔法を使ったら死ぬんだぞ！？呪いはもう後戻りできない所ま出来てるじゃねえか！」

……………は？

何……………言ってるんだよアंकク……………アニスが……………死ぬ？魔法を使ったら……………死ぬ？呪いで……………死ぬ？

「むー……………アंकク、耳が痛い痛いなのです……………。まあ、まだ時間があるし、十分抗える。それにね、アंकク……………俺は家族を犯罪者にしてまで、生きながらえようとは思わないよ？それだけは覚えておいてね？」

アニスはいつもと変わらぬ口調でアंकクと話す。

何でだよ……………死ぬって分かっているなら……………どうして私達に収集を命令しないんだよ！

……………家族を犯罪者にとって……………私達は……………マスターに命令される為のプログラムだ……………。

それなのに……………アニスは私達の事を思ってくれている……………。

そう思っているアニスを見てるのが、私は堪らなく辛かった……………。出来る事なら目を背けたくなってしまっ……………。

「ただ、背けることが出来なかった……。私は、ただ純粹に嬉しかったからだ。自分が呪いに掛かって苦しんでいるのに、私達を家族と呼んでくれる、思ってくれているアニスが……。」

「……ちっ……。……今日の儀式終わってから、考えんぞ……。」

「……うんー!!」

……儀式？

……何の儀式をすんだ？

私はそう思いながら、アニスの部屋のドアを開けて、中に入り……。

「……なあ、儀式って……何だよ?」

アニスサイド

抜かった……。

まさか、ヴィータが聞いていた何て……思いもよらなかった。

「ん?どうしたのヴィータちゃん。儀式って何の事かな?アニス分かんない」

「誤魔化すなよ！もう、聞いちゃったよ……アニスが呪いで、魔法を使えないって……使ったら死ぬって事も……」

……そこまで聞かれちゃってたか……。

まあ、自分が悪いか。注意が散漫過ぎたね。

「……アニス……命令しろよ……私達に収集を命令しろよ！！私達はアニスを守る守護騎士だ！！どんな事だって、どんな命令だってやるよ！アニスが収集して、自分を助けるって言えば、私達は何時でもやってやる！！……だから……頼むよ……」

「……ヴィータちゃん……」

……ヴィータちゃんの覚悟は分かった……。
だけど……それじゃ駄目なんだ……。

「ヴィータちゃん……その言葉はとても嬉しいよ。だけど……それは断るよ」

「！？何でだよ！」

「だって、家族を犯罪者にしてまで生きながらえるのってさ……ズルくないかな？」

「そ……そんな理由で……」

「ううん、そんなじゃないよ。俺にとって、ヴィータちゃん達は大切な家族何だもん。それに、どんなちっぽけな理由だと思われても、どんなにくだらなと思われても、俺はこの信念を曲げはしないよ」

「……アニス……」

「だから、ヴィータちゃんがそんな事気にする事は無いよ？でも、ありがとね？俺、嬉しかったよ」

そう言った瞬間、ヴィータは俺に駆け寄り、抱きしめる。

「嫌だ！！アニスが居なくなるなんて、絶対に嫌だ！！」

「うおお！？ヴィ、ヴィータちゃん、苦し……い……」

「アंक！お前から何か言っただれよ……」

「……はあ、こいつに何を言っても無駄だ……それに、こいつは一度決めた事は途中でやめたりしないから厄介なんだ。……だから、俺とお前で支えてやるぞ」

「……支える？……私と……お前が？」

「ああ。こいつは今、魔法が使えない。使ったら死に近づくからな。そこで提案だ。お前、今日からこいつの儀式手伝え」

「はあっ！？アंक！お前何言ってるの！？ふむぐっ！？」

俺はヴィータに手で口を塞がれる。
ちよっ！？離せ！苦しいつて！？

「……やる！アリスを支えられるなら何でもやる！」

「……決まりだな……。ははっ！良いなあ、その欲望！！気に入った！その欲望、解放しろ」

そう言って、アंकは何処からか銀色のメダルをヴィータに投げつける。

そして、その銀色のメダルはヴィータの額の中に入って行く。

「うわっ！？今何か入ったぞ！？」

「慌てんな。お前の中にセルメダルを入れた。まあ、グリードは生まれないが、少し身体能力と魔力が強化された筈だ」

「……そう言えば、魔力量が上がった気がする……」

「当たり前だ。俺の魔力を蓄えてあるメダルだからな。そんじよこちらの強化と訳が違う。さて、これで俺とお前は、利害が一致した仲間だ。よろしく頼む」

アंकは不敵な笑みを浮かべながら右手を突き出す。

「……お、おう……よろしく、頼む」

そして、ヴィータは少しオドオドしながらアंकの右手を握り、握手を交わす。

……どうでも良いけど。

「もがもがぁー！（早く手を退けてええええええ！）」

何時になったらこの口にやられてる手は離されるのだろうか……。

第二十三話 死と隣り合わせとある騎士の覚悟（後書き）

いやあ、今日は早く書き上がりました

と言っわけで、ヴィータがこっち側に来ました

これからはアंक・ヴィータが絡んできます

ヴィータはなのはキャラの中で一番お気に入りのキャラです

……ロリコンじゃないやい！

でも、何かヴィータの忠義心パネエっす……あれ？本編でもこんなもんだっけ？

まあ、いいや

そろそろフェイトとも絡ませたいな

たぶん次の次の次辺りからちよいちよ無印に絡ませるかも

主にアंकを

さて、次回は二回目の儀式の話を書きます

ここまで読んでくださりありがとうございました

宝石・隷属の魔眼

「物質」「非物質」に関わらず、その視界に入ったものを『隷属』させる

遠距離からの「分解・吸収・放出・変換」を同時に行う

つまり、空気をダイヤモンドに変える事すら可能になる

本来は「大地からマナを取り込み、体内でオドに変え、魔力という

枷にはめ、詠唱によって意味を加え、魔術として放出する」という魔術の大原則に則ったもの

その効果を視界内全ての存在に適用させるのがこの魔眼の効果
自分の力量を超えて隷属させることは不可能であり、生命を持ったものは特
有の加護を得ている為に効果は及ばない

実質最悪の魔眼と呼ばれるが、所有者はこれまで「神」以外に存在
しないとされる

物質変換とも呼ばれる

第二十四話 魔眼の能力と二回目の儀式（前書き）

いやあ、時間かかったね今日は

まさかの23時過ぎに書き上げるとは

少しゆっくりしすぎた

さて、今回は儀式二回目だね

一体どんな悪魔が出るのか

それでは、本編始まります

第二十四話 魔眼の能力と二回目の儀式

アニスサイド

「なあ、儀式つて一体何をやるんだ？」

「そう言えば、まだ説明してなかったな」

「まあ、簡単に説明すればいいか。」

「簡単に言えば、悪魔と戦う事」

「悪魔……って、嘘だ」

「いや、ホントホント。まあ信じるか信じないかはヴィータちゃん次第だし。さて、儀式は今日の夜中。みんなが寝静まった時にやるからね」

俺がそう言うと、ヴィータちゃんは少し、顔をしかめた……。何か不都合でもあったのだろうか？

「何か不都合でもあった？」

「いや……いつもはやてと寝てるから、夜中に起きたら怪しまれな
いかなって……」

「ん〜、そうか……。だったら、今日は俺と一緒に寝るってはやて
に言えば？」

「それだと、はやても一緒に寝るとか良いそうなんだけど……」

あ〜、そうか〜……難しいな〜。

どうしたら良いかな？

「もういっその事、トイレで起きたって言えば良いんじゃないかな
？それが、はやてに気づかれないように起きるとか」

「……アニスって案外デリカシー無いんだな……。でも、やっぱり気
づかれないように起きるしかないよな〜。アंकは良い案無いのか
？」

「気絶させる」

「……アंकに聞いた私が馬鹿だった……」

「てめえ……」

アंकはヴィータをにらむ睨む。

そしてヴィータも負けじとアंकを睨み返す。

「ま、まあまあ！二人とも落ち着いて！それじゃあ、ヴィータちゃんはやてちゃんに気づかれないように部屋から出て俺と玄関前で合流って事で良い？」

「うん、それで良い」

「オーケー。それじゃあ、これでお開き。後は夜を待つだけだね」

さて、この魔眼どうしようかな……。まあ、さっき目を見たけど、特に色とかは変わってなかったし、大丈夫だろう。

それにしても……魔眼か。正直要らないんだよね。でも癪だけど、これに頼るしかないんだもんね……。悲しいな。

「はあ……」

さて、これからどうしようかな……。……。

~~~~~

と言う訳で、うだうだ考えても仕方がないので、少しだけ魔眼を使う事に。

魔力とか使わないから、ただ見ただけで物質を変えたり出来るらしい。

つう事は、石を武器に変えたり、空気を水に変えたり出来るのかな？  
まあ、複写眼は見ただけで魔法をの術式を覚える事が出来るのだから、そう言う魔眼があっても良いのかな？

592

「まあ、良いや。少しだけやってみよう」

つう訳で、ただ今庭です。

家の中でやるのも何だし、どうせなら石が落ちてる所の方が良いじゃない？

「でも、どうやって発動させるの？念じれば良いの？それとも常備展開しとけて事？」

空の境界の両儀式みたいに、死の点が見えたりしねえよな？  
あれ、かなり物騒だから、やめてよね。

「ん〜、現れる俺の魔眼〜。ん〜、ん〜！見えた！」

俺は目を瞑っていた両目を一気にカツ！と開く。

さて、手鏡手鏡……。

ありゃ、何にも変わってないや……む〜、どうやら違ってるのだ……。

「あーうー……分からないよ……」

どうしたら良いのやら。

もしかしてあれか？命の危険に晒されたときに開眼するとか？

はは、厨二乙。でも、そうしたら魔眼授ける意味なくね？今出来な  
きゃ儀式でも使えんのだし。

たぶん、あの二人だけでもやれると思うけど。

まあ、使えないなら仕方ない。

魔眼には悪いけど、このまま封印しておこう。

「まあ最後にもう一回……」

俺は最後に、そこら辺に転がってる石を睨んでみる。

……うん、やっぱり何にも変わらないか……。  
そう思いながら、俺は家の中に入るうとする。

だが。

バキヤツ！

何かが砕ける音が聞こえた。

俺は、音がした方を向く。そこには、さっき俺が睨んでいた石がある所だった。

だが、先ほどの石は、ハンマーで思いきり叩かれたように粉々になっている。

「……………え〜つと……………あはは、これってもしかして、魔眼の効果……………なのかな？」

確かこの魔眼には、分解、吸収、放出、変換が出来るって言ったな。

じゃあ、これは分解？

……………あゝ、なるほど、やっとこれの本質が分かった。

これは、魔法を吸収する際、分解し、吸収する事が出来るんだ。

そして、分解の工程を行わないで吸収したら、それが魔力に変換さ

れる前に放出を行えば、相手の攻撃魔法をそっくりそのまま返せる  
ってわけか……。

そして、魔力回復も行えるし、相手の武器を見ただけで分解も可能。  
人間にはこの魔眼は効果を示さないなので、小さいペンダント型のデ  
バイスとか、指輪型のデバイスを見立てても、人間は分解されず、デ  
バイスが優先的に壊される。

更には、相手のの周りの空気を物質変換し、有から無に変えること  
もできる。

なので空気を奪い真空にし、殺せたり出来る。

空気を無数の刃に、空気を雷に、空気を毒に、空気を重力に、空気  
を火に、空気を光に、空気を水に、空気を土に、空気を風に。

使い道は裕に無限……って事が……。

もはや錬金術も使えそうだな、この魔眼……おお、怖い怖い。

「……さて、中に入ろうつと」

何か、ホントにとんでもない物をもらっちゃったな。

はあ、あの馬鹿神目。ホント要らん事をしてくれた。どうすんだよ  
コレ、ただでさえガツシュの呪文はタイムラグ無しで使えるし、斬  
魄刀はほとんど使えるし。

それに、まふだ試してない物もあるし……。お前、ネギまの魔法何てそんなに使ってないんだぞ？

「まあ、なるようになれだな……。頑張りますか」

とにかく、今日は儀式を終わらせて、この身の呪いについて考えないで。  
時間が無いんだから……。それに……。お父さんとお母さんも探さなきゃ。

「…………お父さん、お母さん…………」

絶対…………見つけるから…………。

くキング・クリムゾンく

はい、あつちゅく間に夜になりました。  
キンクリ様々ですね…………あ、メタ発言駄目、絶対？  
すみませんなので…………。

「あ、アंकもつ居たんだ」

「ああ、つい数分前に準備終わらせてな。後はヴィータだけなんだが……」

「ん〜、やっぱり難しかったかな？」

「……いや、どうやら来たみたいだ」

俺は後ろを振り向く。

そこにはいつもの格好をしたヴィータが立っていた。

「良かった、気づかれないで出てこれたんだね」

「うん。はやてグツスリ眠ってたし。大丈夫だったよ」

「そう。それじゃ、準備は良い？ヴィータちゃん」

「……なあ、今まで思ってたんだけど……ちゃん付けは止めて欲しいって言うか……その……」

「嫌だった？」

「いや……何て言うか……呼び捨てで呼んでもらいたくて。はやてだつて呼び捨てで呼んでるから……アニスにも呼んでほしいって言うか……子ども扱いしないでほしいって言うか……」

「……うん、分かったよヴィータ。それじゃ、行くつか」

「……うん…」

まあ、これ位なら良いか。

俺も呼びづらかったし、それに……少し距離が縮まったとも思えるしね。

そう思いながら、俺は玄関のドアを開け、外に出る。

そして、目に映ったのは、久々の灰色の空間。

ヴィータはいきなり空間が変わった事に驚いているが、たぶんそんな暇は無いと思う。

まさか、今回はそっちから出向いてくれるとは。

「あら、こんばんは」

「あ、どうもです……」

「貴方がアニス君……で良いのかしら？」

「あ、はい……よろしくお願ひします」

「ふふ、よろしくね。私はイシュタル、二人目の悪魔よ」

「イシュタル……あれ？イシュタルさんって、女神の筈じゃ……」

「あら、良く知っているわね。そう、私は元、女神なの。私に名前から女神って分かってるのなら、分かるでしょ？私が何をしたのか」

イシュタル。

バビロニアの豊穡の女神の一人で、ギルガメシュ叙事詩で知名度を高めた事で有名な女神だ。

冥界に囚われていた神、タムムーズを助ける為に、自発的にアラルにくだった女神の筈……。

まあ、少し話がアレになっちゃうから後は省くけど……。

「あれ？人間界ではそんな事になってるんだ？」

「え？違うんですか？」

「ただ私は、天界の仕事がめんどくさくて、定期的に冥界に遊びに行ってたら、墮天しちゃって。それで部類もいつの間にか悪魔にされちゃってたんだ。アラトウが気を利かせてくれてさ。今では自墮落の二ートまったただ中なのよ！」

うっわー……最初の威厳あるオーラがすっかり見えなくなっちゃったよこの人……。

つつか、まさかそんな事になってるとは……話変わり過ぎだろ……。

「いやいや、それにしても人間の妄想は怖いね。アラトウがデーモンとナムタルーに命じて、裸になった私を襲わせるなんて……そんなのある訳ないよーwww人間の妄想の方が怖いよ」

……はう、この人も痴女系の人だった……。  
ちくせう……まともだと思ってた俺のバカ！

「コラそこー？そんな痛い子を見る目で見ないの！お姉さん怒りますよっ。」

「……おい、こいつにも勝ったら使い魔になるのかよ……」

「ち、ちあ……」

「……こいつ……私は苦手だ……」

「あらあら……お姉さん悲しみますよー？ま、良いですけどね。さて！それでは儀式を開始しましょうか。私はもう準備万端なので、あとはそちらだけですよー？」

うん。

まあ、こっちも準備万端だし……。

「二人とも、行ける？」

「当たり前だ。もうグリード化は済ましてある」

「グラーファイゼン、行くぞ！」

《Jawohl》

ヴィータはグラーファイゼンを起動させ、騎士甲冑になる。

まあ、アニメ本編となら変わってないのだが、生で見ると感動的だね。

つか、原作キャラのバリアジャケット見るの、ヴィータが初めてだな。

「それじゃあ、二人ともお願いね！俺も出来るだけ、サポートするから！」

「任せろ」

「私とグラーフアイゼンなら大丈夫だ！」

「……準備は良いですね？……それでは……行きます！」

イシュタルはそう言うと、武器を取りだし……  
つて……おいおい……そんなのありかよ……。

「二人とも！あの武器に気を付けて！」

そう、イシュタルが持っている武器……。

それはこの世全ての宝具の原典の王……英雄王ギルガメッシュ……  
正しくはギルガメッシュが持つ、最強の武器……。  
エヌマ・エリシュ 天地乖離す開闢の剣……何でそんな物を……。

「あら、やっぱり分かりますか……。これはエヌマ・エリシュ 天地乖離す開闢の剣……  
…私はバビロニアの豊嬢の女神なんですよ？一応オリジナルではあ

りませんので、そこまでの力はありませんが……慢心せずして掛かって来るが良い！人間！」

つと……これはこれは……大層な事を。  
でも、あの闘気……正直ヤバいな……。

「アニス、指示を頼む！お前だけがあの剣の能力を知っている！どうやって戦えば良い！」

「……あの剣に……弱点は無い……近距離、遠距離、どちらも最強でも、やるとしたら近距離で、技を放たせる前にイシュタルさんを叩けば、十分行ける！だから、近距離で戦って！」

「分かった！行くぞ、グラーファイゼン！」

《Ja》

ヴィータはアイゼンをギュッと握りしめ、勢いよく掛けて行く。  
大丈夫かな……まあ、こっちもサポートしてやんよ！

「アंक！ヴィータと同じく戦って時間を稼いで！俺はその間に、準備をしとく！」

「分かった。だが、何の準備だ？」

「……あの剣の技を封じる準備だよ」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

イシユタルサイド

「ハッ！」

ガキン！

「動きが単調すぎますね。そんな事では、足元を掬われますよ？」

私は、ヴィータと呼ばれているこの足を払う。

その子はそのまま転ぶが、すぐに立ち上がりまた攻撃を開始する。

ガキン！ブン！ドガア！

……なるほど、力はあるようですね。
これは、一撃喰らえばひとたまりもない……。でも、これ位の攻撃
なら十分に避けられる……。
だけど……。

「貴方が厄介そうですね、アंकさん？」

「ハアッ！」

ガスッ！

アंकと言う男の蹴りが私を襲う。
だがその蹴りを私は受け止め、そのままから空きのボディに剣を
付く。

ドスッ！

「ガハッ！」

全く、この剣に刃が無くて良かったですね？
今頃貫通してましたよ？

「い、け……ヴィータ！」

「言われなくても！アイゼン！！！」

《Explosion Raketentform》

ほお、これはこれは……まさかこの男が囷とは……。でも、一体何をしてくるのでしょうか？
そう思いながら見ていると、さっきまで小さかったハンマーが、形を変えて大きくなっている。

「ラケーテン！！！」

シュゴツ！ゴオオオオオ！

そして、ハンマーの片側から炎が噴き出し、その勢いで女の子が回り始める。
その勢いは徐々に加速し始め……。

「ハンマアアアアア！！！」

シュツ！ヒュゴオオオオ！！！！

そのまま突っ込んでくる。
だけど、さっきとは比べ物にならないスピード……。
だったら……。

「起きなさい、エア……」

キュイイイイイイイン！

私の声に反応し、エアが回転を始める。
そして、私は男がエアを掴んでいる手を強引に引っぺがし、女の子の攻撃をエアで受ける。

ドガアアアアンー！！

「……なっ……受け止められた……」

「……どうやら、その程度の様ですね……ハアー！！」

私はハンマーを弾き上げ、そのままエアを振り降ろす。

《Panzerhinderis》

ガキン！

だけど、その攻撃は障壁で止められる。

「サンキューアイゼン！」

くっ……結構固いわね……。
だったら……こうしましょう……。

私は女の子から距離を取り、狙いを定める。
なるべき手加減はする……。……。……。……。……。三人いっぺんに終わらせませます！

「……………天地乖離す」

キュイイイイイイン……！！

さっきよりも回転が速くなる。
そして、徐々に剣に力が溜まってくる……。……。……。その時。

「二人とも！俺の後ろに！」

なっ！？何で近づいてくるの！？
ヤバい、もう止められない！？

「^{エリッシュ}開闢の剣！くっ、避けなさい！」

幾ら加減してるとは言え、こんなに近づいていたら、大怪我じゃ済まないわ！

お願い、避けて！
だけど、私の心配は杞憂に終わった……。

「ハアアアア！！」

私の攻撃が、小さくなっていく……。
それも……凄く速い速度で……。

そして、見えてしまった……。
あのアニス君の目の色が……変わっていたことに……。
あれは……神しか持ちえない最悪の魔眼……どうしてあの子が……。
だとすれば、攻撃が消えたのは……分解を使ったのね……。

やれやれ、じゃあ初めから勝ち目がないじゃない。
私はそうそう思い、エアをしまっ……はあ……負けだわ負け負け。

アニスサイド

やっぱりは放って来たか……。
それにしても、ぶっつけ本番程怖いものは無いな。
死ぬかと思ったよ……。
それに、ちゃっかり魔力も吸収しましたので、少し体が軽くなった
気がする。

そんな事を思っていると、イシュタルが何故かエアをしまった。
いきなりどうしたんだ？

「ああ、負けた負けた。まさかそんな隠し玉があるなんて思わなかったわ。隷属・宝石の魔眼だ何て……どの神でも、悪魔でも相性最悪じゃないの。攻撃を見るだけで分解するだなんて……このままだったらエアも分解されるか吸収されるか、分からなかったわね……」

「……つと、それじゃあ……」

「ええ、第二回目の儀式も無事クリア。おめでとう」

「…………ふう…………終わったあゝ」

俺は地面に座り込む。

いやあ、案外度胸要るわこれ…………技の真ん前まで来て見なきゃならないから、恐怖が倍増。

なのはの砲撃とか目の前で見たくねえよ…………。

「良かったな、アニス！でも、今のは何なんだ？」

「ああ、魔眼って言ってね。俺のレアスキル。魔力が使えないから、魔力なしで使えるこの目が今の俺の武器。まあ、癩だけどね」

「そうなのか…………」

ありゃりゃ、何かヴィータが少し驚いてるね。

まあ、俺も驚いてるわ。

「さて、契約しちゃいませうか」

ああ、そうだった。

勝ったら契約しなきゃならないんだった。

それよりも……。

「イシュタルさんの契約方法は何ですか？前のザゼルさんは、俺の血を吸う事でしたけど……」

「ああ。私との契約は簡単よ？手出して？」

「あ、はい……」

俺はイシュタルに言われたとおり、手を出す。
因みに右手だ。

「それじゃ……」

チュツ……。

イシュタルは片膝を付き、俺の手の甲に軽いキスをする。
その瞬間、イシュタルの体が光だし、数秒で収まった。

「……これで契約は完了しました。それでは私は悪魔界に帰りますので、用事があれば、ザゼルと同じ呼び方で私を呼べますので。それでは」

そう言っつて、イシユタルは帰って行った。

「……………ふう……………それじゃあ、もう寝ようか。儀式も終わった事だし」

「そうだな」

「……………今ので終わりなのか……………」

「でも、後何回があるし。その時は、またよろしくね、ヴィータ」

「ああ、任せとけ！」

そう言っつて、良い笑顔で俺を見るヴィータ。

さて、後何回儀式があるんだろうな……………まあ、頑張ろう。

そう思いながら、俺達三人は家の中に戻り、各自の部屋で、そのまま眠りについた……………。

第二十四話 魔眼の能力と二回目の儀式（後書き）

すみません

イシュタルの武器と話は、全て捏造です

ホントの話は、アニスが地の文で話していた通りになります

ここで言うっておきますので……それは間違っているとかの感想は止めてくださいね……

さて、今回は二回目の儀式だったわけですけども……

次は何の話を書こうかな……

もうフェイト出そうかな？

まあ、イシュタルでも良いんだけどさ

少し無印にも絡ませたいしね

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。

第二十五話 修羅場……なのか？（前書き）

どうも

いやあ、もう寒い

ここ最近、寒い寒いしか言っていない気が

それはそうと、明日はお休み

なので修学旅行用の番外編を書いちゃいます

そして、ここでお願いです

ネタをくださいお願いします！

感想に、書いてほしい話を送ってください！

一つしか思い浮かばなくて！

お願いします！助けてください！

そんなわけで、本編始まります

第二十五話 修羅場……なのか？

アニスサイド

「ニートの分際で！」

「何よ、そっちだって変態の癖して！」

「変態とは何ですか！私は純粹に愛しているんです、アニス君を」

「あら、どの口が。悪魔界では手癖が悪いと評判のザゼルで通っているのよ……」

「それはあらぬ誤解です！」

ギユムツ！

「うわぁー!？」

「私はアニス君を愛しています！アニス君一筋です！」

「あらあら、でもアニス君は、貴女みたいな貧乳よりも、私みたいな胸の方が好きに決まっているわ」

ギョムツ………！

「ちよつとお！？」

あ、どうも………ただいま修羅場の真つただ中に居るアニスです。

切実に言います、誰か助けてください………そもそも俺は誰の物でもありません。

むしろ俺の所有物俺なので、俺に許可を取ってください。

そして俺は美乳はです。

さて、みんなにはどうしてこうなったのか話さないといけないね。

まあ………回想に入ろうじゃないか。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「さて、イシユタルさん呼んで、後何回儀式をすればいいのか聞かなくちゃ」

昨日思っていた疑問を効くために、契約したてのイシュタルさんを呼ぼうと思います。

まあ、あの人ニート生活してるとか言ってたし、呼び出しても大丈夫だろう。

でも、ザゼルさんは……まあ、良いか。

「使い魔召喚、イシュタル！」

何か最近、魔力を他の所で感知するんだけどさ。もしかしなくてもジユエルシードの反応？ たぶんそれしかないよね。

そう思いながら、俺はイシュタルを召喚する。

ザゼルさんの時とは違い、少し小さめの魔方陣が展開された。

そして、発行が収まると、視界が開けてくる。

俺はそこで、見てはいけない物を見た気がした……。

「おっ、よっしゃ。紅玉k t k r……あっ」

「……すみません、取り込み中でしたか……」

イシュタルは何故かソファーに座りながらモンハンをやっていた…。  
えっと……マジでニート生活してたんだこの人……。

「……あ、どうぞお続けください……」

「その優しさが妙に痛いから止めて!？」

「いえいえ、妙ではありませんので気にしないでください。ただ、これが元女神か、落ちた物だと思っているだけなので気にしないでください」

「二回も気にしないでって言われた……orz」

それは貴女のせいなので、特に言葉も掛けないぞコノヤロー。  
つか、何で神はこんな人を女神にしたんだろうか。

仕事はしないし、他の世界に遊びに行くし、墮天するし、いつの間にか悪魔になってるし。

……ああ、顔か、なるほどなるほど。ホント、神は節操無しですね  
……ド変態。

「つう〜……小さい子に虐められた〜……」

「あの……マジ泣きしないでくれます？ニートさん」

「ニートって言わないで！せめて自宅警備員って言うてくれないかしらー！」

「……契約破棄しちゃいましょう……」

「いやあ止めて！？やっとな手に職付いたのに、一日で解雇ってあんまりよおおおおー！！」

「……何なんだこの悪魔……もとい元女神さんは。  
ああ、もう虫を見るような目を見た方が良いのかもしれないねこれ。  
だってちよつど良いでしょ？」

「はあ、分かりました。こちらがいきなり呼んだのが悪かったのですから、別に契約は気なんてしませんので安心してさい」

「ホント！？やったあ！それで、何で私を呼んだのかしら？星を一つ壊してほしいって願いなら今すぐにでも！」

「いやっ、やらなくて良いから……。それより聞きたいことがあったんだ」

「?聞きたい事?何です?」

「実は、儀式って後何回で終わるのかな?って思ってた……イシユタルさんに聞こうかなって思いました」

「ああ、その事……。そうねえ、悪魔の加護を取り払う為の儀式だし……。ん?……多くて後七回、少なくて五回かな」

「まだそんなにあるのか……」。

そして、最低でも後五人の悪魔が使い魔に……。多いなおい……」。

「用はそれだけかしら?」

「あ、はい……。すみません……。忙しい中お呼びしてしまいました……」

「それは私に対する挑発と取っても良いのかしら?アニス君……」

あ、ヤバッ……。調子に乗り過ぎちゃった……」。

「良いでしょう……そまで言うなら……私にも考えがあります」

「な、何でしょう……」

「……貴方を襲います……勿論、辱めると言う意味ですけど……」

えっ……ちよっ……それはいわゆる逆レイプと言うものでは……。  
もしくは……いえ、なんでもありません。

「私、昨日から思ってたんです。「この子は良い声で鳴いてくれそ  
う……」って」

うわあ、この人DSさんだあ!?

しかも、九歳の子に何言ってたんだこの人!?

「……冗談ですよね?」

「……私が冗談を言うだけでも?」

「……あつあつ、今から俺、襲われちゃうのですか?みい、痛いのは嫌々なのです……」

「……誘いの言葉としか聞こえないのですが？」

なにい！？

俺の渾身の梨花の真似で切り抜けよう作戦が通じないだ！？  
くそ、ここは黒梨花で行くべきだったか！？

「おトイレは済ませましたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ命乞いする心の準備はオーケー？」

いや、殺しちや駄目でしょ！？

仮にも俺、貴女のマスターなんですから！？

「それじゃあ……行きますよ」

「ちよっ！？ヤバいッ！？使い魔召喚！ザゼル！」

俺はもうなりふり構っては居られなかった。

仕方がないのでザゼルさんを召喚する事にした。

「ハアーイ！アニス君のアイドル、ザゼルさんですよー！って……あれ？」

……ザゼルさん、痛いですってその台詞。  
余りに痛すぎて、イシユタル固まりましたよ？

「……久しぶりね、イシユタル」

「……ええ、そうね。ザゼル……まさか、貴女もこの子の使い魔になっっているとは……」

「貴女の方こそ、私と同じ人と契約していたとは……いやはや、気づきませんでしたよ。それで、何をしようとしているのですか？私の物に手を出そうとは……流石、墮天した女神は違いますね。ニートさん？」

「はっ、変態が良く吠えるわね。そんなに今の主が大事？あはは、笑っちゃうわ。性癖がおかしい貴女には言われたくないわね、変態さん？」

そう言いあい、二人は睨み合う。  
えっと……これって修羅場？修羅場だよな？

そして、冒頭に戻ります。

~~~~~  
~~~~~

「ちよっ！？いたたたたた！？痛いよ二人とも！？二人の力を考えて！俺死んじやうから！」

「あ、すみませんアニス君……」

そう言っつて、ザゼルさんは離してくれたのだが。

「どござら、私の勝ちの様ですね」

何故かイシユタルだけは離してくれなかった。

ああ、胸の感触が嫌に腕に着く……はあ、助けてほしい。

「何が貴女の勝ちなんですか！？どう見たって、引いた私に勝ちでしょう！」

「はん、それは言い訳に過ぎないでしょ？それに、先に引いた方が勝ちなんていつ言っただかしら？」

「ずっと腕を組んでいた方の勝ちとも言っていないじゃないですか



「「っ……たあい!？」」

ほら、来ちゃった……アंकが……。しかもかなり虫の居所が悪いみたいだ。

「な、何するんですか……アंकさん……」

「そっよ、何するのよ」

「……良いか……てめえらのせいで俺がどんだけイライラしてるか分かってんのか!今すぐにでもここで捻り潰して晒すぞ!と言っかアニス!もうこいつらと契約は破棄しろ!」

「「なっ!」「」

「……その方が……良さげだね……」

「「すみませんでしたあ!」「」

「「しゅわぁっ!はやっ!」「」

土下座の最高位、ジャンピング土下座を綺麗に決める悪魔が二人、完成しました。

すげえ、アंकと契約破棄と言う魔法の言葉……使えるなこれ。

「ふん、お前らはもう帰れ。良い迷惑だ」

「……はい……」

二人はシヨボンとしながら元の世界に帰って行った。

……えっと、もしかして今回はこれがオチ？

……終われ……。

第二十五話 修羅場……なのか？（後書き）

はい

どうやら、今回はネタ話みたいな感じになっちゃいましたね

糞面白くもねえやな今回

と、自分でも思ってます……つつか、何故フェイト出さなかったし俺

明日に出そうかね

もしくはアリサとすずかを出すとかもありだと思われ

そしてユーノ、もとい淫獣との出会いとか

……もしくはここで、余り出番のない仁紫園さんとか絡ませたりす  
んのも面白いかもね

さて、ここまで読んでくださりありがとうございますとございまして

あ、そうそう……近々100000PV達成記念を書きたいなとか  
思ってたか思ってたなかったり

しかも現在のPVが、既に170000位なので、もしかしたら  
200000PV記念になりそうかもです

それでは、また明日とか

## 第二十六話 アンクの苦悩（前書き）

こんちゃー

最初に言っておきます

今日はかなり短め&駄作です

今日はちょっと親が出かけるので、家事をしていて忙しくて、朝の内に急いで書き上げた物です

拙い話ですが、楽しんで頂ければと

それでは本編始まります

## 第二十六話 アンクの苦悩

アニスサイド

「アニス、ちょっと来い」

「ん？何さアンク」

どもつす、アニスですぞー。

何か開始早々アンクに呼ばれたので近づいてみる。

ひょい。

「ちよっ!?!」

何か知らんが、いきなり脇腹辺りを掴まれ、そのまま上に持ち上げられた。

あーうー、恥ずかしいよー……。

ほら、ここりビングだよ？

はやてとかシグナム達が見てるから……。

「……やっぱり体重が軽くなってる……」

「へっ？」

「お前！前よりも体重落ちてんだよ！」

「……ああ、そうなんだ」

「そうなんだじゃねえ！お前、最近体重測ったか……？」

「……あー、つい昨日測りましたよ……。  
ちくせう……。」

「あー……あははー……」

俺はアंकから視線を外して、壁を見る。  
さて、どうしたものか……。

「……測ったんだな？」

「……はい……」

「……何キロだ」

「……1……7……キロ……っす……」

「……」

「……」

ああ、沈黙が痛いのです。  
だ、誰かたすk……。

「てめえ！！二キロも落ちてんじゃねえか！！」

「ひゃい！？」

「どっやったら二キロも落ちんだよ！？九歳の体重じゃねえぞ！」

「いや……あの……俺……身長95しかないから……はう」

「ああもう！飯食えちやんと！！分かったか！！」

そう言っつて、アंकは俺を降ろし、部屋から出ていく。  
あうあう……仕方ないじゃんか……食小さいんだし。その分以上に  
動いちゃうんだし。

「なあなあ。アंक、何であんなに気が立ってるんだ？」

いつの間にか俺の横に居たヴィータが話しかけてくる。  
いやまあ、驚きはしないけど、いつの間に……。

「さあ……俺には良く分からないし……」

特に今日はいつも通りだったけど。  
俺が朝食を食べてた辺りから、少しアंकが険しい顔してたけど……。

「ちょっと聞いてくる」

「へ？ヴィータ……良いの？」

「うん、別に大丈夫」

「……そう、分かった。何か分かったら教えてね」

「分かってる。それじゃ行ってくる」

何か、最近マジでヴィータがカッコいいんだけど……。うっは、ヤバス。騎士補正掛かって来てるねこれ。

「アニス君、いつの間にヴィータとあない仲良おなったん？」

「ありゃ、はやてちゃん。いつの間に」

あの、あんたらはどうしていつの間に俺の横に居る事が多いのかな？ 神出鬼没とかのレベルじゃねーぞ。

「まあ、色々とね……」

「ふうーん……そかそか……ヴィータは呼び捨てで、ウチは未だにちゃん付けか……そかそか……」

「……あの……どうしたのでしょうか、はやてちゃん……？」

「いや、何でもあらへんよー……アニス君なんて知らへん」

とか言つて、はやても何処かに行つてしまつ……。  
あの、俺何かしたのでしょうか？

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

アंकサイド

最近、あいつは少しやつれて来た様に感じる。
いつも通りのあいつ……だけど……何処かが違うあいつ。

だから、思い切つてあいつを持ち上げて測つてみた。
案の定、あいつの体重は落ちていた。

そう、これがただ普通に痩せただけなら良いんだ。
俺もあそこまで怒鳴つたりなんかはしない。
だが、それが果たして普通の痩せ方なのだろうか？

確かにあいつは身長は低い……だが、それでも体重はいつもキープ
していたし、たまに少し減る事もあった……だが、あの日からだ。

アニスが呪いを受けたあの日から、徐々に何かが変わり始めているのを、俺は何処となく感じていた。気のせいであってほしいが、そうとも限らない。俺の杞憂で合ってほしいが、それすらも思えない。

ただ刻一刻と、アニスが呪いに蝕まれて行くのを見るのが、この上なく苦痛に感じる。

そつで無くても、俺はあいつの親が飛ばされたときに、それを嫌と言っほど痛感した……。なのに、どうする事も出来ない……。

やはり、ここはジュエルシードを……それとも、無理やりにも収集を……。いや、俺には出来ない。するとしたら、あいつらが率先して動かなければ意味がない。

どうしたものか……。

そう考えていた時、部屋のドアが叩かれる。

「入っても良いか？」

声からしてヴィータの様だ。
俺の部屋に訪ねて来るとは珍しい。

「ああ、良いぞ」

ガチャッ。

「うわっ、質素な部屋だな」

「黙ってる。俺は無駄な者は置かない主義なんだよ。それで、何の用だ？」

「いや、何でお前がそこまで気が立ってたのか聞きたくてさ」

「……ああ、その事か」

「その事かって……まあ良いや。それで、どうしたんだ？」

「……最近……あいつが、やつれて来たなって思ってたよ。それで持ち上げてみたら案の定ってわけだ」

「そうか？見た感じはそんなに変わってなかった気がするけど……」

「……でも、落ちていた。少し心配し過ぎなだけかもしれないが……それでも、あいつには爆弾があるんだ。心配し過ぎな位でも足りないくらいだ」

俺はやれやれと言いたげにため息をつく。

厄介だな、本当に……。今のアニスには負担にしなければならないし、下手に動く事すらできない。

「まあ、確かに……。でも、そこまで症状が表に出てるわけでもないし。今もアニスは元気なんだからさ、少しは気を緩めねえと、倒れるぞ？」

「はっ、そんなに軟じゃねえよ。それに、あいつがああやって立ってんだ。先に倒れるわけにはいかねえよ」

「……そうか……。何かあったら頼れよ？私も、シグナムも、シャマルも、ザフィーラも。力になってやれっからさ」

「ああ、そんな時は頼むよ、ちゃんと」

「そっか……。そんだけだから。戻る」

「あゝ、ちっさと出掛け

「ちっ、むかつくけど、やっぱりそっちの方がアंकらしいわ

ボタン。

……一言余計なんだよ、あいつは……。
ったく、口の減らないガキが。

「余計な、お世話だったの……」

全く、マジ腹立つ……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「おらー！ドンドン食べえー！」

「あつあつ、もうお腹いっぱいだよアंकぅ……うわっ、また皿に

盛られてる!?!」

「アंकさん、もうその辺にしとき。アニス君ももう限界ですよ?」

「いや、こいつだって男だ。もっと食べれるはずだ。ほら食べ!もつと食べ!」

「……あつ……もうお腹が痛い……シグナムさん……」

「分かりました。私が代わりに食べましょう」

「お前が食っても意味ねえんだよ!」

あうあう、最後の切り札、シグナムを投入したのに……軽く突っぱねられた……だと。

しかも何でまた皿におかずが盛られてるんだよ!!  
どう考えたっておかしいじゃないか!!

「も、もう……無理……」

「ほら!後一口だ!頑張れ!」

「ふ……不幸だあああああああああ……！」

こうして、何故こんな事になったのか、皆目見当もつかない一日な  
のでした

……終われ……。

第二十六話 アンクの苦悩（後書き）

いやあ、すんません……

マジですいません

何か今日は、話をまともに進められなくてすみません

明日！明日は絶対にフェイト出す！

出すから！許してください！！お願いします！！

はい、今回はここまで……！！

ここまで読んでくださりありがとうございました……！！……！！

第二十七話 自販機での出会い（前書き）

いやっほお

何か、寝すぎた

そして、目がスッキリしてる

何だろう、久々にスッキリしてる

そして、今日は部屋を掃除しました

まあ、ちょっと探し物がてらに掃除しただけなんだけどね

それでは本編始まります

## 第二十七話 自販機での出会い

アニスサイド

「にっしっしっし」

どうも、アニスたんのお

いやぁ、今日はアंकがバイトで居ないのだから。

だから思い切って俺のアイデンティティであるスパッツを穿いて外に出ようと思うんだ。

だから先ずは、はやてを振り切らないと駄目なのだから……。

さて、今日の格好だが。

まんまクド。あ、ちゃんとマントの下はスパッツだおー。

いやさ、最近めっきりこの服の存在価値と言う物がね、無くなって  
と感しているのだよ。

だから思い切って完璧クド使用にしてみました。はい拍手！

でも女装では無いので悪しからず。

「さて、行きますか」

俺はそう眩き、動き出す。

ガサツ、ズズズズズ。

ん？何の音だつて？

はっはっはっ、段ボールが床に擦れてる音に決まっているじゃないか。

まあ、そんな訳で……摩擦でケツが痛い。つつか熱い。

「ん？何でこんな所に段ボールが……」

あつ……この声はシグナム……。

開始早々見つかるとか、俺にはスネークの素質は無かったのか……残念だ。

まあ、そんな事思ってたら段ボール持ち上げられたよ。そりゃ当たり前だ。

「……主、何をしているんですか？」

「あはは、見つかったやいましたか……わふー……」

さてと、まあシグナムにばれちゃった事なので、全速力で逃げとしますか。

ふはは！全速前進DA！！

「あつ、主！」

「ちよつち出かけてくるおー！！」

俺はシグナムの声を無視して靴を急いで履き、勢いよく飛び出していく。

それをシグナムは、少し苦笑しながらやれやれと言いたげな感じのため息をつき、段ボールを置く。

シジュールにも程があるだろ。

「いつえーい！！無事に家から出られたって、アニスはアニスは綻んでみたり！って、俺のキャラじゃねーや」

某打ち止めの真似を試みたが、俺のキャラに似合わず敢え無く断念。

いやあ、無理だわ。俺にあんな純真無垢な子供の真似をするとか、俺の心は薄汚れてますしね。

「いやあ、それにしても……補導とかされないよね？今日平日やし」

まあ、大丈夫。このナリだし、何とか誤魔化せば行ける行ける。それにしても、俺ってニートじゃね？

学校にも通ってないしね……いや、学校に通ったら通ったで、結構大変な気がする。

主に男子の目線的な意味で。

それにしても、道行く大人共の視線が痛い。

何だよい！そんなにマントと帽子が気になるのかよい！

「まあ、仕方ないか……さて、何処に行こうかね」

今日は無計画で出て来たから、これと言ってやる事も行く所も無い。だからと言って、速効家に帰るのもあれなので、徘徊する事に。

「それにしても暑いな。やっぱりマントはまずかったかな？」

流石にもう夏だしね。中はスパッツと半袖だから良い物の……マントで蒸れるわ。

でも着ないともったいないやん。

まあ、クドわふでじゃ夏にも限らずクドは羽織ってたのでおk。

「でも、喉乾いたな。何か自販機で飲み物でも買おうかね……」

俺は辺りを見渡して自販機を探す。

えっと……何処かに自販機は……っと……おっ、あったあった。  
俺は自販機を見つけて、すぐさま駆け出す。

いや、喉乾いてるなら走んなよってな……。

「おっ、色々売ってる〜でもこのどろり濃厚ピーチ味って……何  
なんだ……」

そんな物が置いてあるとか……パネエな……。  
さて、まあここは無難フアンタとかだね。  
って、ガラナもあるのか……あれは北海道限定ではないのか……。  
気にしないで良いか……さて、お金お金って……。

「……届かない……だと……」

ここで問題発生！

自販機のボタンは愚か、お金を入れる所までもが届かないのです！  
これは由々しき事態なんだよ！くそ！これではジュースが飲めない  
ではないか！

「ん〜！んん〜！……と〜ど〜か〜な〜い〜！うな〜！……！！」

ピョンピョンピョンピョン……！！

くそ！届け！俺のコスモ！ってちやうわい！！  
届かない……あ、何処かに何か乗っかるものねえかな。  
とか思ってたら。

トントン……。

「キヤツ！？」

いきなり肩を叩かれた。  
いや、びっくりして悲鳴あげちゃったよ。

「あ、びっくりさせちゃったかな……」

俺は後ろを振り向き、声の主の顔を見る。  
うむ、金髪でサイドツインで可愛いのが。それに、何か水樹さんの  
声に似てるね。

……ってフェイトじゃん！

「あの……何でしょうか……？」

「いや……君がさっきから何かやってたから、気になっちゃって。どうしたのかな？」

「ほう……大変お恥ずかしながら、この自販機の、お金を入れる部分に手が届かないのですよ……あはは……はあっ……」

いきなりのフェイトの登場に驚いたものの、そこは俺。何とかポーカーフェイスを保ったよ。いやあ、生フェイトは可愛いね。

あれだよ、大人になったのムチムチフェイトよりも、今の方が俺的には好きだ。

……ロリコンではない。

「……ここに入れるだけで良いのかな？」

「……入れてくれるのですか？」

俺はたぶん、目がキラキラしてると思う。

いやあ、世の中捨てた物じゃないね。こんな優しい子が居るとは……もう精神年齢が成人してるので、こっつ……来るものがあるね。

「うん、私が代わりに入れてあげるよ」

「すみません……お願いします」

俺はフェイト二小銭を渡して入れてもらう。

ああ、何て優しいのだろうフェイト……こんなフェイトを人形扱いするかプレシア……許すまじ……。でも無印に介入するのは……まだ検討中。

「はい、入れたよ」

「ありがとうございます……さつて……って……ボタンも届かねえorz」

もう、何なんだよ……俺。

確かに小さくって頼んだが、ホントあの神極端だよな……。

「あはは……ボタンも押してあげようか？」

「あつあつ……みいー……お願いしますのです……」

もう……どつでもいいや……。

~~~~~  
~~~~~

フェイトサイド

「えっと……何処だったっけ……」

私はこの世界に来てすぐに、サーチャーを飛ばしていました。それを終えたので、マンションに戻ろうとしたのですが……まだ場所を把握しきれいでなくて、迷ってしまいました……。どうしよう……。

「こんな事になるんだっいたら、もう少し地図とか見て道を覚えるんだっただ……」

照るつける太陽が、ジリジリと地面を熱し、その暑さが私の足などに襲い掛かる。  
暑い……。黒系統の服を着ているので、熱を吸収しているのだろう……。

そんな時……。

「……届かない……だと……」

不意に、近くから声が聞こえた。

声の高さからして、女の子だろう……。

何故かその声は、凄く驚いてる声に近かった。

「ん〜んん〜！…と〜ど〜か〜な〜い〜！…うな〜！…！！！」

ピョンピョンピョンピョン！！

少し歩いて角を曲がったら、マントを羽織り、帽子を被った子が、  
ピョンピョンと飛んで何かをしている……。

……あの機械みたいのは何なんだろうか？

そしてあの子の飛び跳ねてる姿……可愛い。

私はその子の近くまで行き、少し屈んでからその子の肩を叩く。

トントントン……。

「キヤツ！？」

いきなり肩を叩かれてびっくりしてしまったのか、女の子は短い悲

鳴を上げる。

……びくっとなったところも可愛い……はっ、いけない、私ったら……。

「あ、びくくりさせちゃったかな……」

女の子はこっちを振り向き、私の顔を見る。

その子は、とても肌が白くて、目がパツチリとしていて、顔も整っていた。

そして、人形のように可愛らしい唇……いや、もう全てが人形みたい綺麗だった……。

その子は一瞬驚いたような顔になったが、すぐに元の整った顔に戻り。

「あの……何でしょうか……？」

そう聞いてきた。

やっぱり初対面だし、いきなり肩を叩かれたんだもんね、しょうがないか。

「いや……君がさっきから何かやってたから、気になっちゃって。どうしたのかな？」

「ほう……大変お恥ずかしながら、この自販機の、お金を入れる部分に手が届かないのですよ……あはは……はあっ……」

そう聞いた私に、女の子は顔を赤らめて、恥ずかしそうに訳を話してくれた。

ああ、可愛い……すごく可愛い……こう、ぎゅってしたくなるような小ささに加え、そのあどけない笑み……本当に人形が生きているみたい……。

そしてその子はため息をつき、項垂れてしまう。

私はこの子が見ていた機械を見る……。

見たところ、ジュースを売っている様だけど……。

あつちとは全然形も違うので、分からなかった。

そして、私は声を上げる。

「……ここに入れるだけで良いのかな？」

そう言った瞬間、女の子がバツと顔を上げる。

その目はキラキラしていた、とても期待に満ち溢れてる目をしていました。

「……入れてくれるのですか？」

……お預けをされて、ようやく良いと言えわれた犬みたい……。  
愛くるしい……。今すぐにも頭を撫でてみたい……。  
でもその感情をグツとこらえ、言葉を紡ぐ。

「うん、私が代わりに入れてあげるよ」

「すみません……お願いします」

女の子は私に何かを手渡してくれた。

ああ、手も小さい……。にぎにぎしたい……。

それにしても……。これをその隙間みたいな金属口になっている所に  
入れれば良いのかな？

私は機械に近づき、三枚のコインを投入する。

三枚目が入れ終わったら、いきなりボタンが光りだす。

「はい、入れたよ」

「ありがとうございます……さって……って……ボタンも届かね  
えorz」

お礼を言ってから、クルツ機械に向かい、ボタンを押そうとするが。  
コインを投入する所よりも上にあるボタンを、この子が押せるわけ

も無く。

それに気づいた女の子はまた落胆する。

私は苦笑交じりの笑い声を出す……。

「あはは……ボタンも押してあげようか？」

「あうあう……みー……お願いしますのです……」

……み……みーって……。

それに……あうあうって……っ~~~~~~~~~~~~!!

可愛い……抱きしめたい、頭を撫でたい、プニプニしたい……。

今この子、鳴いたよ！

「どれを押せば良いかな？」

私は顔に出さないように必死に堪える。

お母さんのお仕置きよりも、ずっと苦しい……何でだろう……。

「あ、その紫色のをお願いしますです……」

「じれだね」

ピッ、ガコン！

女の子が指を差していたボタンを押す。  
そしたら下からジュースが出て来た。  
女の子はそのジュースを取り出して……。

「ありがとう」

満面の笑みで、お礼を言ってくれた……。  
……もう死んだも良いかもしれない……。  
はっ、いけない……死んじゃったらお母さんのお願いが……。

私は首を横に振り、正気を保つ。  
危なかった……。

「それじゃあ、俺は行くね？」

ん……俺？

「君、女の子が俺とか言っちゃ駄目だよ？」

ここはお姉さんとして言うておかないと。

この子の将来が……。

「あはは……俺、男何だけど……」

「……………えっ？」

~~~~~  
~~~~~

アニスサイド

ですよねー。

まあ、仕方ないからさー。

つか、フェイトがすごい変な視線をさっきから俺に浴びせてたのは何で？

すごい寒気を感じただけ……。

「ええええええー！！嘘……嘘だよね？」

「ホントだよ？良く間違われるから仕方ないですよ。そして、このナリで九歳なんですよねー」

「……私と同じ年……は、反則だよ……」

ですよー。

頑張れフェイト、驚いた分だけ良い事あるぞ。

「大丈夫ですか？」

「……あ、うん……大丈夫……」

フェイトはまだ驚きが取れてないので、まだちょっと顔が引きつっている。

まあ、ドンマイだね。

「何か知らないですけど……ごめんなさい……」

一応謝るところ……紳士の嗜みです。

「あ、全然気にしてないから大丈夫だよ。こっちこそ、女の子って間違えちゃってごめんね……」

「いえいえ、さっきも言った通り、何時もの事なんで気にしないでください」

うむ、埒が明かないねこれ。  
でも、フェイトってこんなに喋ったっけ？  
まあ、良いか。

「……所で……名前聞いても良いかな？」

「あ、良いですよ。俺はアニス・クロイツベル。みんなからはアニスって呼ばれてるから」

「……クロイツベル？」

その名を聞いた瞬間、少しだけフェイトの顔色が変わる。  
……どないしたん？

「……もしかして……アニスは……魔導師……？」

そう……フェイトが口にする。

その目は、少し戸惑いの目をしている……半信半疑か……。

「……どうして俺が魔導師って、分かったんですか？」

「私の住んでる世界では、クロイツベルの名は絶対。そして、この世界でその名前の人間は居ない……だからです」

「……ふえー、知らなかった……俺の一族って……そんな有名だったんだ」

「あーっ……」

フェイトが転びそうになる。

あはは、キャラじゃねえって。

「……もしかして、知らなかったの？」

「うん、全然。俺一切自分の家の事とか把握してませんでしたし。して、貴女は何なのでしょう？魔導師を知っているのなら、貴女も魔導師なのですか？」

「うん、私もそう……もしかして……アニスもこの世界に落ちたジュエルシードが狙いなの？」

「ジュエルシード？……知らないですよそんなの。第一俺がこの世界に来たのは、家が襲撃されたからこの世界に逃げて来ただけであ

り、そんなジュエルペット何ぞ知りませんよ」

家が襲撃された、その台詞を聞いた瞬間、またフェイトの顔色が変わる。

何これ、面白い。

「……ごめんなさい……聞きちゃいけない事聞いちゃったね……」

「いえいえ、気にしないでください。これで疑いが晴れるのならば、安いものですよ。ところで、貴女の名前、まだ聞いてませんのですが……」

「あ、そうだったね。私はフェイト・テストロッサ。フェイトって呼んで」

「はい、分かりましたフェイトちゃん。それで、疑いは晴れました？」

「……まだちょっと……半信半疑かな……」

「ですよー。まあ、信じるか信じないかは貴女次第です。でも、これだけは聞いてください。俺はそのジュエルなんたら何て物、この世界に落ちて来た事すら知りませんでした。今こうして貴女に言

われても、ホントにそんな物がこの世界に？って思っていますし、  
どんな物かも分からない物に興味を持つなんてあり得ません。です  
ので、俺は白とでも言っておきます」

「……ホントに、信じても良いのかな？」

「だから、信じるか信じいかは、フェイトちゃん次第です……」

俺は真っ直ぐにフェイトを見つめて言う。

……何故かフェイトは少し顔を赤らめているが、気のせいだろう。

「うん、じゃあ信じるよ」

「やけにあっさりですね……」

「だって、初対面でそんなに面と向かって言えるものかな？こっち  
が嘘って思っても、私は何も分からない。それは裏を返せば本当か  
もしれない……だから、私は信じてみようって思ったの」

「……oh……純粹……痛い、心が汚い俺にとっては痛い……or  
z」

もう、フェイトにたんの称号を授けようと思っ。  
これからフェイトたんと名乗るがいい。  
あ、嫌だ……さーせん……。

「それじゃあ、私は行くね」

「うん、また何処かでね」

俺はフェイトに手を振り、俺も歩き出す。  
さっさと、何処に行こうかな。  
とか思ってたら……。

トントん。

「わふっ!?!?……フェ、フェイトちゃん……またなの?」

またフェイトが俺の肩を叩いてきた。

いや、お前あつちに行ったんじゃねえのかよ……。

「あの……マンション何処にあるか……分かるかな?」

「……はい?」

## 第二十七話 自販機での出会い（後書き）

フェイトたんマジフェイト

つうわけで、フェイトはキャラ崩壊させた方が面白い！

そんな事を思っている俺が通りますよ〜

さて、やっとフェイトが出せました

フェイト可愛い、ヴィータの次に可愛いよ

でも三期のフェイトには何の魅力も感じなかったのは……何故だろ  
う……

どっちかって言うと、ナンバーズの方にグッと来たんだけど

……スバル可愛いよ

どうだ！これで俺はロリコンでないと分かったろ！！

はっはっはっはっ！

それはそうと、あのガンダムのデータカードダス付きのアイスあるじゃん

あれ、アイス美味しいし、カードも欲しいから最近食べてるんだけど

今まで本数から言うと四本食べたんだけど

何故か当たるカードがシャアとシャアザクのみ

内三枚がシャア、一枚がシャアザク……

俺はおとめ座でもなければ、センチメンタリズムも感じません

狙いはダブルオーと刹那何だけど……

そして抱きしめたくもねえよ！！

つう話でした

いじまび讀んでくだせりあらがといじちました

第二十八話 道案内と黄昏と（前書き）

ディアボロだす

いやあ、もう疲れた

今日は実習の日で、一日家で仕事してました

もう疲れて書き終わらせるのに時間かった

つう訳で、前書きはもう良いですね

本編始まります

## 第二十八話 道案内と黄昏と

「むう、フェイトちゃんはおっちょこちょい何ですね。道を忘れてしまうとか」

「あはは……返す言葉も無いよ……」

何かこの子、迷子になってたらしい。

懐かしいな、つい二ヶ月位前に、俺も迷子になったよ。

その頃は地図すら目を通してなかったから、あそこでなのはに会えたのは運が良かった。

俺、案外幸運Bくらいはあるのかな？

「さつて、それじゃあジュースのお礼も兼ねて、道案内してあげますよ」

「ありがとう。アニスって優しいんだね」

「いえいえ、フェイトちゃん程ではないのですよ、にぱー」

っと、いかんいかん。また素で梨花になりかけている。

うむ、どうやらもうこれがデフォになっている様だ。

まあ、自分自身この口調は好きなんだけど……万人受けはし無さそ

うだよね。

あれは幼女がやるから愛でられるのであって、男がやってもあまり需要はないと言いますか何とというか。

でもそれは容姿の問題であり、もし仮に圭一がやったら、それはそれはとても大変で凄くて気持ち悪い結果になり。

圭一自身がバットで自分の頭をウツディしそうな勢いでしょよね。

そして何故こんな事について俺が語ってるのかと言うと。

目の前のフェイトが悶えているのでこの様な暴挙に出ました。

だって、軽く鼻から忠義心が見え隠れしてるんだもん。

「あ、あの……フェイトちゃん？鼻血みたいなのが出てるんだけど

……」

「はうっ……」

フェイトは慌ててポケットに手を突っ込み、ティッシュを取り出して拭く。

その間二秒。

お前は第四次聖杯戦争初期の切嗣か……、まあ少しなまってワルサーに弾詰め込めなかったけどな。

「……フェイトちゃんは変態さんなのかな？かな？」

「へ、変態さんじゃないよ……」

「まあ、家にも似たような人が居るので慣れてるので気にはしませんけど」

「お願いだからその人と同類みたいに言わないで……」

「みいー、変態さんには罰をなのです」

「どんどん黒くなっていくね俺。」

「これならリアル梨花を目指せそうなんだけど、既に中の人と繋がりがあるので止めておこうかな？」

「まあ、誰とは言わないけど。」

「……アニスってやっぱり女の子なんじゃ……」

「あはは、何を言ってやがりますのですか。こんなダンディズムにあふれた男の子を捕まえて、女の子と口走るとか……って、何処もダンディズムあふれてねえやな。しかもこの格好だし」

「何処からどう見ても、男子がする格好じゃねえしな。」

まあ、好きでこの格好してるから良いんだけどね。

「つか暑い……マント取ろうかな……」

「アニスってマントとかいつも羽織ってるの？」

「いや、気分だよ。この帽子もね。最近使ってたからね。似合ってる？わふー！何てね」

俺は右手を上にあげて元気よく言う。

わふーは共通言語で良いよ。

あ、そういや今日ナツブラ終わりじゃん……あ、何でもない、こっちの話だよ。

「わふー？」

「あ、口癖の様なものだから気にしないで」

共通言語になるのはまだまだ難しそうだ。

まあ、フェイトが知ってたら今飲んでるジュースを吐き出す所だったけどな。

「それにしても、フェイトちゃんは暑くないんですか？そんな黒一色だ何て……見ててこっちが暑いよ……」

「実は結構……」

「ですよー」

ホント、フェイトは黒色が好きなんですわー。

まあ、俺は来るものは拒まずと言いますが、似合えば何色でも何でも着るからね。

あ、女物は別な。

「今度から半袖を着ることをお勧めしますのです」

「うん、そうだね」

うむ、やっぱりこう見ると、あんまりフェイトは笑わんな。

笑わんと言うよりも、笑顔が無いと言いますか、何と言いますか…

でも可愛いんです、優しいんです。

「むう、もう飲んじった。ゴミ箱はこの辺に……ねえか」

そこら辺にポイ捨てしたら隣のフェイトがお母さん化するからな。  
どうしたものか……まあ、ゴミ箱見つかるまで持ってよう。

「それにしても、結構あそこから遠い所まで来ましたね。マンション結構遠いよ?」

「行き辺りばったりで来ちゃったからね」

「こんなに暑いのに、根性ありますねー。俺は無理ですわ」

「でも今外に出てるけど」

「……さて、行きましょうか」

痛い所を突かれました。

もう生きていけません……ちくせう。

「それにしても、さっきから視線がウザい……」

それがフェイトに行けばいいんだけど、如何せん……その視線全てが俺に来ている気がするのは、俺の自意識過剰故の被害妄想なのだ

ろうか……。

「さて、フェイトちゃん。少し速く歩くけど大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫だよ」

「そう。それじゃあ行くよ」

俺は少し速度を上げて歩き出す。

それに着いてくるフェイト。

速度を速めたのは、一刻もあの視線から逃れたかったから。  
あんまいい気分にはなれそうも無かったからね。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「と、言つ訳で、マンションに着いたお」

「……誰と話してるの？」

「あ、気にしないでフェイトちゃん。ただの独り言だから」

「あ、そうなんだ……」

「に、しても……結構豪華なマンションに住んでるのね。何、フェイトちゃんって良いとこのお嬢様だったりするのかな？」

「ううん、違つよ」

「ですよー」。

いや、でも……プレシア結構凄い奴だし、案外的を射てるかもしれぬな。

「それじゃあ、また縁があつたら何処かで会おうね」

「うん。それじゃあ、またね」

俺はフェイトに手を振り、そのまま後ろを向き歩き出す。

さて……今何時だ？

俺は付けている腕時計を見る。

「むっ、13時か……早いな、もうそんな時間か……」

どおりでお腹が減っていると思ったよ。

ちよいとフェイトと長話し過ぎたし、視線が無くなってからまたゆつくり歩きだしちゃったから、仕方ないか。

いやあ、それにしても、フェイトと敵対し合わなくて済みそうだね。へ？なのは何？

戦わせときゃ良いじゃん。

戦いから生まれる友達つてのも、中々おつでしょうに。

べ、別に、介入するのがめんどくさいとか思っていないんだからね！でも、プレシアどうしよかな。

助けても良いんだが……ねえ、今の俺は魔法が使えないわけですし。そして闇の書のマスターですし、あまり管理局には顔を割られたくないのです。

「さて、どうしたものかな……」

まあ、時期が来るにはもうちよい時間がある。

それまでに答えを出しておこう。

優柔不断は嫌われちゃうので、サッサと結論を出したい所ではあるね。

それにしても、お昼どうしようかな。

別に食べなくても良いんだけど、またアंकに痩せたとか言われてグチグチ言われたくないし。

あんまし食べ過ぎも良くないんだぞ、アंक。

「よし、んじゃこのまま突き進もう」

何かお昼お食べるのめんどくさくなってきたので、このまままた町を徘徊する事に。

今度は誰と遭遇すんのかな。楽しみだわ。

~~~~~

「……さっき楽しみだか思ってた過去の俺を思いきりエスカリボ  
ルグでぶん殴りたいわ」

はい、ただ今時刻は夕方の四時でございます。

結局誰とも会わないまま時間と体力ばかりを消費しました。

いやあ、やっぱフェイトみたいに行き辺りばったりは駄目なんだね、  
痛感したよ。

「はあ、もう学生たちが下校する時間なのですか……」

何だろう……なまじ中途半端に高校生活を送り、高1で死んでしま  
い、今に至る俺なだけだ。

……学校行きたいなって思っちゃっ。

小学校でも良いって思うけども……流石に無理だよな、今の家庭事情じゃ。

戸籍は……まあ、何とかなりそうだけど、シグナム達はやての事もあるしね。

「……はあ、学校行きたいな」

別段、友達と言う物が欲しいと言う訳ではない。

学も欲しい訳ではない。ただ、中途半端に通っていたのだったら、せめてちゃんと通っておきたかった。ただそう思っているだけ。あ、でも学校生活に友達はつきものなので、やっぱり欲しいかも。

そんな事を思っていたら。

「……アニス、ここで何やってるの？」

「ふえ？」

不意に声をかけられた。

俺は後ろを振り向き、そいつを見る。

……ムツツリーニ……。

「あ、ムツツリーニ。久しぶりだね」

「……………（こくり）」

相変わらず、表情が変わらん奴だなこいつは。  
ん？後ろに数人人が居るな、こいつの友達か？

「あー！ムツツリーニが女の子と話してる！？しかも子供の！」

「彰久落ち着け、もしかしたら道を聞いてるだけかもしれないぞ。  
女の子が」

「いや、明らかにムツツリーニの方から声掛けてたし……………」

……………おいおい、見た目的に結構見覚えあるんだが。  
つか、完璧バカテスの明久、雄二、美波なんだが……………。

「お友達？」

「……………（こくり）」

「……………そうなんだ。挨拶しても良い？」

「……………（こくり）」

うっし、ムツツリーニの許しもえたし、いつちよかましますか。  
俺は三人が居る所に、ムツツリーニと一緒に行く。

「ねえムツツリーニ、その子どうしたの？ムツツリーニの知り合い  
？」

「……………紹介する、この子は……………」

「土夜お兄ちゃんの彼女の、アニスです よろしくね。お兄ちゃん、  
お姉ちゃん」

「……………ブーーーーッ!?!?」

ふははは!?!?どうだムツツリーニ!  
これが俺の奥義よ!?!?

「ムツ、ムツツリーニ!? 恋愛は人それぞれだけど、それは犯罪だよ!」

「見損なつたぞムツツリーニ! 決して女子には手を出さない紳士のお前が、実は隠れてこんな幼気な幼児と……クツ、俺のクラスに、まさか犯罪者が混じっていたとは……」

「ムツツリーニ、ウチ、信じてるよ? ムツツリーニはそんな事しないって」

「……………(ブンブンブンブン!)」

ムツツリーニはすっごくい首を横に振って否定している。  
……………何これ、面白い。

「そんな……………お兄ちゃん……………あの時私に、あんな事しておいて……  
うう、酷いよ……………アニスはお兄ちゃんの彼女じゃなかったの?」

「ムツツリーニ、お前!」

「……………アニス、いい加減に悪ふざけは……………」

「えへへ、まあ、今回はこのくらいで許してしんぜよう。この前遊園地でバカス力写真を撮りまくった罰だよ」

「「「へっ?」「」」

ふはは、どうよ?

四人ともアニス節に引き入れるこの手際のよさ! 惚れ惚れするねもう。

「改めまして、こんにちは。アニス・クロイツベルって言います。ムツツリーニとはただの友達何で、そんなヤラシイ関係じゃないですよ?それに、野郎と付き合っただけ俺落ちぶれてないので悪しからず」

「えっと……じゃあ……」

「全部この子がでっち上げた嘘?」

「……………(コクリ)」

「何だー、良かったあ。ムツツリーニがとうとうやらかしたかと思っただよ」

「ああ、俺もだ。まあ、これで何よりだ」

「所で……俺って言うてるけど……まさか君って……」

「あ、はい。俺は正真正銘男ですので。できれば君付けをお願いします」

うむ、やっぱり驚くよねそりゃ。

あのフェイトですら驚いてたし。

「……まさかここにも、第三の性別が……」

「ん？第三の性別？」

「いや、こつちの話だから気にしないで」

何か、このバカっぽい奴がいきなり切り返したんだが……。  
まあ、良いか……。

「……所で、あそこで何をしていたの？」

「ああ、ちよつち黄昏てた」

「……まだそんな年じゃない」

「あはは。子供に、色々事情があるんですよ……んじゃ、もう家に帰るわ」

「……今度はその恰好でまた会えることを願う」

「何で？」

「……クドの格好のアニスは需要がある。今日はカメラのバッテリーが切れた」

「あはは、そりゃ残念。そんじゃ、行くねムツツリーニ」

「……バイバイ」

俺はムツツリーニ達と別れた。

別れ際に手を振ろうと後ろを向いたら、何かムツツリーニが変な格

好をした奴らに連れてかれた。

何かアニスたん見守り隊とか書かれてたのは、俺の目の錯覚なのだろう。

取り敢えず、俺は何も見なかったことにして、そそくさと帰った。

こうして、俺の一日が終わりを告げるのであった……。

今日の日記、お終いまる

## 第二十八話 道案内と黄昏と（後書き）

まさかの日記オチ

いやあ、それにしても……バカテスとクロスさせ過ぎやね

そろそろ自重します

はあ、可愛いアニスたんを書けたので、今回は満足

でも戦闘を書きたいな

戦闘を書くのは楽しいは、ネタばかりの日常よりも、戦闘やシリアスの方が筆が進みます

でも文才は皆無つと

ああ、そうだ

昨日ガンダムのアイスで付いてくるカード云々ってあったじゃん

昨日コンビニで二本買っててさ、今日最後の一本食べようとして、  
アイスに付いてるカードを剥がして、袋を開けたら

何んと、ダブルオーガンダムが当たったんだ

やったね！

これでまたシャアやシャアザクだったらどうしようかと思った

アイス売ってる会社に文句つける所だったよ

まあ、無駄話はこちらまでにして

明日はどんな話を書こうかな

そろそろアリスとすずかとユーノとレイ八さんでも出そうかな

うん、そうしよう

そして、軽くジュエルシード争奪戦も書きたいしね

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十九話 イチャイチャと気づいた事とサッカー観戦（前書き）

どもっす

最近、ホントに暖房が欲しいと思っている俺です

俺の部屋には暖房器具がありません

隣の妹の部屋には何故か元から完備されていたので、俺の部屋にはありません

何これ虐め？

北海道の冬舐めてんの？

暖房無かったら、部屋普通にマイナスの温度だよ？

息白いんだよ？

まあ、暖房器具は本格的に寒くなったら買ってもらおう

それでは本編始まります

第二十九話 イチャイチャと気づいた事とサッカー観戦

アニスサイド

~~~~~

ピッ。

「ああ、やっぱり、今回も駄目だったよ。あいつは人のいう事を全く聞かないからな。次は、これを見てる奴らにも、手伝ってもらおう事にするよ」

《……アニス君、何を言ってるのかな？》

「やっぱり、アニスさんだよ。」

「早速出落ちだね、まあ、良いんじゃないかな？あいつも、良くやってくれてるしね。」

「って、あいつって誰だろう？」

「まあ、とにかく……何故かこんな朝早くから電話来たんだけど……。出てみたら相手はなのはだった。」

「何だ、イーノックじゃないか。私のサポートがそんなに心配なのか？」

《だ、だから……ナニを言ってるのかなアニス君は？それに、私はなのはだよ！》

「……いやですね……私とてそんな事は分かってるのですよ……ですがね……寝起きの私は、物凄く思考回路が纏まらず……変な事を口走ってしまうので……朝早くに電話をするのは……やめてください……それじゃあ……」

《あ、うんごめんね……って、違ああああうー！切っちゃ駄目！なのはまだ要件言っていないの！？》

「……すー、すー……」

《寝ないでえええええー！！》

うう……うるさい……。

耳がキンキンする……何でこう、皆ってこんな朝早くに電話をかけてくるのでしょうか……。

俺は眠くて足りないのに、そいて今日は休日……ゆっくりしたいやん。

まあ、学校に行っていない俺にとって、毎日が休日なわけなんですけ

おね。

「うう、はいはい……何でしょう……」

《あ、あのね！今日、お父さんがコーチ兼オーナーをしてるサッカーチームの試合だあるんだけど！一緒に見ない！？》

……何このなのは、テンション高すぎてついていけないんだけど……。
あうあう、めんどくさい……まあ、行っても良いけど……サッカーねえ……。
サッカー……サッカー……。

ガバツ！

俺はある重要な事を思い出してベッドから飛び起きる。
サッカーつつつたら、あれじゃん。原作の第三話め。
しかも、ジュエルシードを持つてるのが、そのサッカーチームに居るやん。

まあ、介入はしないんですけど、町に被害が及ぶのはねえ……。

「……分かった、行くよ」

《ホントに！？やったあ！それじゃあ、公園の近くのグラウンドに来てね！九時半くらいから始まっちゃうから、できれば九時くらいに来てほしいんだけど……》

「あい、分かった。それでは」

《うん、それじゃあまた後で！》

ピッ！

パタン。

俺は携帯を折りたたみ、そこら辺に置いておく。
さて……どうしたものか……。

まあ、取り敢えず先ずは、朝飯を食わなアカンな。
よし、リビング行こうつと。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「おっはよー！」

あれから俺は服に寝間着から少しラフな格好に着替えた。  
と言っても、上を半袖に変えたただけなんだけどね。

「おはようアニス君。今日は誰にも起こされんでも起きたんやな」

「まあ、ちよつと友達からモーニングコール的な電話来てね……」

「ん？また何処か出かけるんか？」

「うん。何か友達のお父さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチームの試合があるらしく、それを見ないかって言うお誘いが来てね、行ってみようかと」

「やっぱりアニス君も男の子やなー、そう言うスポーツに興味を持つことはええ事やで」

「あはは、ありがとう。それにしても、今日はやけに静かだね。他のみんなは？」

俺は周りを見る。

何時もは居るはずの守護騎士達も、アंकも居ないのだ。  
めずらしい……。

「シグナムは道場で剣道のコーチに、ヴィータとザフィーラは散歩に。シャマルは何か医療の本を欲しいとかで本屋さんに、アंकさんは……よお分からへん……」

「そうなんだ……あう、迂闊だった……みんな居ないとは思ってなかったよ。これじゃあはやてちゃん一人になっちゃう……」

「あはは、ウチ何か気にせんと、遊びに行ったらええやん。ウチは家事とかで忙しいし。それに、もうすぐヴィータとザフィーラも帰って来るし、大丈夫や！それに」

ツツツツとはやては車いすで俺の所まで近づいてきて。

「アニス君分を補給させてくれたらそれで……」

「えっと……はやてちゃん……その両手のいやらしい動きの意味は何かな……」

「もちろん……」  
「こつする為やー！」

ガシツとはやては俺の胸を掴む。  
ちよー!?

「いいいいやああ！お願い！胸は！胸だけは止めてええええ！」

「ほらほら、ここがええんか？ここがええんか？」

「あはははは！くすぐったいって！そして痛いって！」

ちよー!？どさくさに紛れてスパッツの中に手を入れようとするなし！  
そしてそこー！舌打ちすんなコノヤロー！

「ええもんええもん。そないに嫌がるんやったら、抱き着いたる！」

と言い、はやては俺から距離を置くと、車いすから飛び降りた。  
って、飛び降りたあ!?

「ちよっ!？危ないってはやてちゃん!？って……あれ?」

「ぶっぶっん。どや？アニス君、ウチ立ってんねんで!？」

そう、はやては車いすから飛び降りたと思ったら、普通に仁王立ちで立っていたのだ。  
えっと……これなんて原作ブレイク？

「って、足プルプルしてるじゃん!？」

「ふふふ、まだ少し、歩くには時間が掛かるけど、これ位の距離なら!」

はやては震える足を少しずつ前に前に進ませる。  
そして、そんなに遠くなかった俺とはやての距離は縮み、すぐにはやては俺の胸に飛び込んできた。  
でも……。

バタン!

「むぎゆう……!」

さ、流石にはやての大きさだと、支えられないって……。  
だって、俺よりも40センチ位違うんだよ!？そんなのどう支えれと!？

「ああ、しもうた……。アニス君、ウチより背え小さいから、簡単に潰れんねんやった……」

「今……思い出さないで……。俺に……抱き着く前に、思い出してほしかった……。ったたた」

「い、ごめんアニス君！ウチ、すぐ避けるから！」

そう言つて、はやては俺からよけようとするが。

俺は経とうとするはやての腕を掴み、こっちに引き寄せる。

「えっ!?!」

「えへへ、しょうがないなはやてちゃんは。今回だけだよ？頑張ったご褒美に、アニス君分をプレゼントして進ぜよう」

そして、俺はやての顔を、自分の胸辺りに付け、抱きしめる。  
うむ、たまに攻守交代も良いね。

「あ、アニス君……」

「ん？何かなはやてちゃん？」

「は、恥ずかしい……」

「フウハハハ、それが俺の今まではやてちゃんに受けていた辱めだ！存分に味わうがいい！」

「……すーはーすーはー……アニス君の匂いや」

「ちよつ、順応するの早！？」

ものの数秒で慣れやがった！？  
恐ろし子、八神はやて……。

って、チュウチュウ吸うなあああああ！！

~~~~~  
~~~~~

「あ、おはようアニス君！って……随分やつれてるけど……どじつしてたの？」

「だ、大丈夫だ……問題ない……」

あれからはやてに返り討ちに合わされたのは言うまでもない……。そして、危うく貞操を無くしかけた……危なかった……。

「今日のごめんね、無理に誘っちゃって」

「いやいや、気にしてないよ。それにしても、まさか士郎さんがサッカーチームをねえ……」

まあ、多趣味なのは良い事なのかもしれない。でもここでふと疑問が。

俺、この前フェイトに会ったんだけどさ、確か三話ってあれだよな？  
まだフェイト出て無かったよな？

だって、もしその時点でフェイトが居たのだったら、町で暴走したジュエルシードの魔力を感知して、介入してきた筈だ……。

ううむ、これはイレギュラーが働いてると見ても良いですな。

それにしても……何故あの如何にもツンデレっぽそうな女の子は、こちらをジーっと見てるのでしょうか？

「なのはちゃん……どちら様？あの後ろに居る子。何か俺をジーツと見てるんだけど」

「あ、そうだった。それじゃあ紹介するよ。アリサちゃん、すずかちゃん。ちよっところち来てー！」

なのはは二人を呼び、こちらに来させる。  
むう……何でしようねこれは。

「えっと……どうも、アニスと申します……よろしくお願いします」

「アリサ・バニングスよ、よろしく」

「月村すずかです、よろしくね、アニスちゃん」

ろっとお……これはこれは、またまた女の子と間違えられていますね。

なのはさんや、この二人に性別の事は無していませんね。  
困ったものです。

「な、なのはちゃん……二人に性別の事は無してないの？」

「あ……にゃはは、ごめんね、忘れてたよ……」

「……ハア、まあいいけど。二人とも、良く聞いて？俺は女の子じゃなくて、男だから」

「……あはは！何それ！アニスったら冗談が下手ね！」

「そっだよ、こんなに可愛いのに、男の子な訳ないよ」

うむ、二人は笑いながら言うてくるのだが……普通そっですよね！。まあ、別にどっちでも良いんだけどね。たかが性別ですし。

「おっ、アニス君。久しぶりだね」

「あ、士郎さん。おはようございます」

「相変わらず、今日も可愛いね」

「ちょっと待ちなさい士郎さんや、貴方俺の性別分かってるじゃん

「わざと？ねえわざとなの？」

何か士郎さんに会って早々、いきなり可愛いとか言われたんだけど、何それ怖い。

「練習見て無くて良いんですか？」

「あはは、何、少しくらい目を離しても大丈夫さ。それよりも、アニス君もどうだい？試合に出てみるってのは？」

「あはは、冗談は止してください。試合何て……俺が混ぜたら間違いなく俺死にますよ？身長差を考えてください。あの中に絶対六年生とか混ぜたってそんなんですけど？俺と60？さもある相手からどうゴールを決めると？そしてどうボールを取れと？」

「それもそうか」

「考えてなかったんかい……」

危なかった、危うく殺されるところだったよ。  
いやあ、それにしても……俺、サッカーのルール知らないんだけど……。

第二十九話 イチャイチャと気づいた事とサッカー観戦（後書き）

明日にはジュエルシード出すし！

そして、ユーノ出すし！

それからもつとアリサとすずかに出番回すし！

そしてついに、アंकがジュエルシードを！？

と伏線を立てておきながら、それを回収するかはわかりません

それにしても、今日書き終わるの早くてね？

現時点でこの後書きを書いているので大体八時半

速い……速すぎる

まあ、良いんだけどね

さて、明日はどんな話を書こうかね

アニスにサッカーでもさせちまうか？

ジュエルシードの方は……もう決まっています

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十話 頑固とサッカーとイナイレ化（前書き）

おはっす

いやあ、もう足が冷たくて死にそうや

部屋も寒いし

懐も寒いし

人生も寒いし……

……本編始まります

### 第三十話 頑固とサッカーとイナイレ化

アニスサイド

「ですから！俺は男なので俺と言う一人称は合っているんですけど  
！」

「だから！何処にそんな可愛い男子が居るのよ！」

「ここに居ますって！」

どもー、アニスたんです。

どうにも、この人には俺の性別を分かってくれそうにも無いです。  
アリサ・バニングス……うむ、生でくぎゅボイスを聞くとはこの  
う。

何か一人称が気に食わないので、直しなさいと怒られたので、本気で性別を弁解してる俺なのですが、一向に信じてくれる要素がありませんねこれ。

ほら、なのはだって苦笑いししながらこっち見てるし……。  
助けんかいボケ。

「あーっ……どうしたら信じてくれるのさー」

「ア、アリサちゃん、アニス君は本当い男の子なんだよ、信じて  
」

「なのはまで！こんな何処からどう見ても女子にしか見えない子が  
男子？ありえないわ！」

「ア、アリサちゃん、落ち着こうよ。もう少しで試合始まっちゃっ  
し……」

「すずかは黙ってなさい！もとはと言えば、こいつが下らない冗談  
を言うから悪いのよ！」

「あうあう……ホントに僕は男の娘なのですよ？みいー」

へ？ホントにお前は弁解する気があるのかって？  
何か、めんどくさくなってきちゃった、こつ言った相手に誤解を解  
こつとすると、多大な時間と労力を使うので、こつちが引かざるお  
えないのだ。

つか、もう口調を梨花で統一しちゃおうかな？

何かそっちの方が、この体にはしっくりくるし。  
戦闘の時に黒梨花の口調になりやそれで十分。

「んー、何かめんどくさくなってきたし。もうどうでも良いか」

「そ、それで良いの？」

「うん、結局このナリに生まれた自分が悪いってわけよ」

まあ、自分で選んで容姿なので、後悔は微塵もしてないしね。  
むしろ毎日が新鮮なんよ。男なのに女の子扱いされんのか。  
前世は童顔でも、男だっと言えば通ったしね。

「さ、試合始まったし、見ようか」

俺は三人をグラウンドの方に視線を寄せる。  
見てやらんと可愛そうじゃん？主に、この三人に好意を寄せてる初  
な男子が。

それにしても、やっぱりサッカーのルール分かんないや。  
野球ならまだしも、サッカーはな〜。

やった事ないし、テレビでもちよびっとしか見た事ないからわかん

ない。

イナズマイレブンは知ってるけどさ。あれはサッカーじゃないと自覚してるよ？

でも、今の俺なら素で疾風ダッシュ位なら出来るかもしれないね。

うむ、それにしても、こういうのが青春なんですなー。

いやあ、若いつて羨ましいね。俺なんか体こそ若いけど、精神年齢がね、もう成人ですからね。

もう社会人ですよ、精神年齢だけは。

はあ、若さつて何なんですかね？

振り返らない事なんですかね？

いつもみいみい鳴いてあうあう言っつてさ、もう馬鹿かとアホかと。

……あ、別に田村さんをディスッてる訳じゃ無くて、俺ね？俺俺。

まあ、何が言いたいかつて言っつと。

俺って実際そんな若くねえなって言いたい、ただそれだけうん、それだけなんだ。

ああ、若さつてどうやって保つのだろうか……もういつその事17才教にでも入って、永遠の17歳と豪語しようかのう……。

つかサッカー関係ないねもうこれ。  
何でこんな話になったんだっけ？俺が若くないって言ったからだっ  
けか？

まあ、そんな些細な事は水に流して、試合を見なきゃ……って、い  
つの間に一点取ってたんだよ……お前ら、俺見てないのに。  
まあ良いけどね……さて、眠くなってきたんだが、どうすれば良い？

「……所で……何でフェレットが？今更感否めないんだけどさ」

ビクッ！

あ、何かなのはとユーノがビクッとした……。  
あ、もしかして念話でお話し中だったかにか？

「何々？これってなのはちゃんのペット？」

「あ、うん！ユーノ君って言うんだ！アニス君にはまだ話してなか  
ったね」

「キューー！」

あ、ユーノが鳴いた。  
何々、???……こいつ、人を馬鹿にしているのか？  
俺の何処が？だ！俺の攻撃はちゃんと命中するわ！

「ねえねえ、こいつちょっと触っても良い？」

「うん、良いよ」

そう言っつて、なのははユーノを俺の膝に乗っけてくる。  
うむ、今のうちに、去勢は済ませておいた方が良いかな？

「おう、何だコノヤロー、お前意外にモフモフじゃないかコノヤロ  
ー」

まあ確かに、可愛いつちゃ可愛いんだが……ねえ、何か違和感があるのよね。  
そりゃ怪しまれても仕方ないよね。

何処とは言えんのだけど、何処か違和感があるんだよね。

「む……まあ良いか。モフモフ」

そして俺は、考えるのを止めた……。

ピピ〜！！

その時、ホイッスルがけたたましく鳴り響く。

「大丈夫か！？」

あれ？ 土郎さん、何でそんなに慌ててんねん？

何や？ 誰か怪我でもしたんか？ …… ありゃー、こりゃ酷い、誰か怪我しとるさかい……。

ん？ 何かあの選手、無理っぽそつだね、可愛そつに…… うわぁー、足痛そ……。  
ドンマイだな、後でアイスノン買ってやるから我慢しやがれコノヤロー。

んで、何であんたは俺の方をチラチラ見てんだ土郎さん。  
こっち見んな。そしてこっち来るな。

「アニス君、お願いがあるんだが……」

何か隣辺りから、土郎さんまでそんな冗談を……って聞こえたのは、スルーの方向で。

「内容によります」

「さっきの選手の代わりに、試合に出てほしいんだが……」

「嫌ですよ。俺サッカーのルールしりませんし、スポーツ何て得意じゃないので」

だって、産まれてこの方、サッカー何てやった事ないもん。蹴った事も無いもん。サッカー何てやりとわない！

「そこを何とか！こっちは代わりの選手が居ないんだ」

「む……あまり過度な期待をされるのは困りますですよ？一点勝っているのであれば、俺はただ突っ立ってるだけになりますけど、それでも良いですか？」

「うん！それだけでも構わない！」

「それじゃあ引き受けましょう」

まあ、突っ立ってるだけなら何とでもなるでしょう。  
さて、では半ズボンを脱いでつと。

「あ、スパッツになる必要はないからね？」

なっ、俺の行動が読まれただど!?

マジかよ……まあ、良いか、たまには半ズボンで。  
俺はなのはにユーノを返し、そのまま中に入る。

三人が心配そうな目で見てたのは言うまでもない。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「あの……よろしく願います……」

「……し、土郎さん……この子、どう見ても女の子じゃないですか
！それに、まだ幼稚園児ですよ!？」

「いや、こっつ見えてもこの子は男の子何だ。それに、年齢は9歳……」

…信じられないとは思っけど……ホントの話なんだ」

「あつ……土郎さん、やっぱり俺じゃ無理なのでは？」

「大丈夫大丈夫。さてみんな、ここでアニス君が入ってくれないと不戦勝になってしまう。それで良いのかい？今まで練習してきたことを水の泡にしたくは無いだろ？」

「そ、それは……確かにそうですけど……」

「なら、この子を入れようよ。この子はただ立っただけだが、それでも足りないよりは良いと思う！さて、もう少しで終わりだ。今は一点差で勝っている。ここまで来たら勝ちたいだろ！」

うむ、土郎さんは煽るの美味いね。

でも、何か聞き捨てならない事を聞いたのは、まあこの際無視してあげます。

「……俺は、勝ちたいです！」

「俺も！」

「僕も！」

「うん、それじゃあ決まりだ。それじゃ、アニス君」

「はい？」

「頑張ってくれ！」

いや、何をどう頑張れと。

さっきあんた突っ立てるだけで良いって言ってたじゃんか。
俺、走らんよ？動かんよ？ボール蹴らんよ？

「それじゃあ、再開しようか！」

ああ、もうどうにでもなてやー！！

ピイイイー！

再びホイッスルがけたたましく響く。
再開の合図だ……さて、見てよう。

残り十分か……もう少しだが、その十分が長いんだよね。
つか、突っ立ってるだけならなのにも出来たのでは？
あ、女子にはやらせられない？ぶーぶー、男女差別はいけないと思
う。

「そっち行つたぞー！戻れ戻れー！」

それにしても、目の前で見ると、ホント青春だよね。

ああ、やっぱり若さか……若さが原因なのか？

そしてここに、血色の良い男どもの血がたくさん……。

いや、まあ、吸血する気はさらさらないよ？

吸血鬼じゃあるまいし、でも……やっぱり羨ましいよね、青春とかね。

リトバスが良い例だね。あれが最高の青春だよもう。

とか思つてたら、もう残り五分……。

あれ？何か軽くキンクリしてない？いつの間にかもう半分になつて
るんだけど？

ここにボスが居るのか！？何処だ？何処に居る！？

「ボール！そっち行つたぞー！」

テンテンテン……。

「あれ？」

何か、今俺の足元にボールがあるんだけど……目の錯覚かな？
あれ？しかも何かこつちに人が来てるんだけどさ……何？俺これど
うしたら良いの？

「ボール！こつちこつち！！」

ああ、そつちに蹴りや良いのね。

ボールをあいっつにパスするだけの簡単なお仕事です
つて、何速効マークされてんだお前！！

ああ！お前に気い取られたせいで、もう目の前じゃねえか！？

「貰った！」

……フッフッフ、そつ言つ三ノの合詞は……。

シュッ！

「……あれ？……消えた？」

「死亡フラグですわよ?」

シューーン!!

何か身の危険を感じたので、ボールを蹴って逃げ出しました。
いや、初めてサッカーやってるよ俺。

ズザザー!!

「ほっと」

何かスライディングして来た奴が居たので、蹴ってやるうかと思っ
たけど、絶対それはいけない事だと思い、俺はボールを足で挟み、
上にジャンプし避ける。

「じつの一!」

「何の何の」

今度は横からボールを奪いに来たので、俺は簡単にあしらう。

あはは、何か楽しー。

「そこだ！」

「何処でもねえよ」

次は真正面から。

それを軽いフェイトで抜き去り、ゴールが見えてきた。

「……何か、イナイレの円堂みたいなやつがキーパーやってんだけど……」

「じじっ……」

「……まあ、無難にここはパスですな」

俺は仲間にパスしようとするが、何故かみんなにマークが付いている。

……おい、お前ら……素人に何まかせつきりにしてんだよ……。

「はあ、仕方ない……適当にシュート外して時間稼ぐか……」

もうめんどくさくなって来たので、俺はシュートを適当に外すことにした。

さっき素人って言うてるし、外してもだれも攻めんだろっ。

「アニス君！合体技で行くぞ！」

「って、お前誰やねん！」

何か知らんが、いつの間にか俺の横にし知らん奴が居た。

あと、合体技って何だよ！？

「意味が分からんわ！」

「行くよ！..！」

「行かねえよ！..！」

俺はそいつを無視してシュートを打とうとする。
って、お前合わせてくんじゃねえよ！..！

「イナズマー！..！」

結局同時に打つんかい!!

って、速っ!?!何かボールがもの凄い速いんだが!?

「ゴッドハンド!!」

まてえ!

おかしいだろ!?!何でゴッドハンド使ってたあいつ!

そしてこいつから一点取った奴!出て来い!お前もうプロ行っちゃま
えよ!

「今度は合体技か!だけど、さっきみたいにはいかない!ハアアア
!」

「これも決める!」

お前だつたんかい!

そりゃそうだわ!お前しか入れれんわな!こんな合体技とか放つ奴
しか入れれんわ!

バシン!!

あ、ボールが弾かれた……っね、こっちに戻ってくんなし……。

「くっ、さっきよりもゴッドハンドが強力になっている！アニス君！あれで行くぞ！」

「あれって何!?!」

「クロスファイヤさ！行くよ！」

「えっ、ちよっ!?!」

ああもう！仕方ない！付き合ってやるか！

「ハアアア！」

「もっどっにでもなれえええ！」

俺と名も知らない奴が交差し、同時に回り蹴りをボールに食らわし、そのままボールは何かもの凄い勢いでゴールに向かった。

「ゴッドハンド！てえええあああああ！……！」

うむっ……あの子には魔力を微塵も感じない……やっぱあれ、超次元サツカーなんやろうか？

「うわああああ!!」

バスン!!

ピュー!!

「ありやま、入っちゃった……」

「やったねアニス君！」

「……いや、だからお前は誰なんだよ……」

何でだろう……確かに点が入ったのは嬉しいんだけどね。それでもね、こう思うんだ……。

俺の知ってるサッカーと違う。

第三十話 頑固とサッカーとイナイレ化（後書き）

イナズマイレブンは世界編から見えていない

エイリア編が大好きな俺としては、あの技の習得するための練習風景が好きだった

次はどんな技出るんだってワクワクしてた

エターナルブリザードが大好きな俺

後は豪炎寺と吹雪が大好き

二人ともカツコええよ

そして立向居の魔王・ザ・ハンドなる物があると聞いた時は

この小説の魔王様が降臨したら最強やうなうって素で思った

そして友達に言ったら

「それはね、言っちゃだめだよ？それもうキーパー技じゃない、ただの懺滅技だから……」

って言われました

まあ、スターライトブレイカーを手のひらから出して止めちゃった
ら、ボールが跡形も無く消えるね

それほどの威力を誇るSLB

おお、怖い怖い

アフロディとヒロトが可愛すぎて死にたい

何やもう、かわええな状態ですもん

さて、イナイレ談義はここまでにして

つか、結局は無し進んでないじゃん！

明日にはジュエルシード出すし！

もっとアリサとすずかとユーノに出番回すし！

もっと頑張るし！

ここまで読んでくださりありがとうございますとつづいきました

第三十一話 鬱と心の傷とはやて病（前書き）

どもっす

さて、明日ついに世界が滅びるわけなんだが

どうだろう諸君、そうと知っておきながら、何故俺達は学校や会社に行かなければならないのだろうか？

もしこれがホントなら、人生は明日で終わりを告げ、悔いが残ったまま死んでしまう……

これは由々しき事態だ！

だから、俺は！

……まあ、いつも通り寝て過ごしたいですはい

それでは本編始まります

第三十一話 鬱と心の傷とはやて病

翠屋

アニスサイド

いやあ疲れた……。

あの後試合が終わってさ、士郎さんが詰め寄って来てよお。

「アニス君サッカー出来るじゃないか！どうだい？うちのチームに入る気はないかい？」

って言われたけど、丁重にお断りした。

あんな超次元サッカーに巻き込まれたくない、つかめんどくさい。

だって何かあいつに付き合ってたら、エクスカリバー位なら素で出来そうになりそうで怖いねんもん。

おお、怖い怖い。

「……あんだ、やっぱり男子なの？」

「ん？やっと信じてくれやがりますか？」

それで今試合が終わったので、試合に出た選手……つつつても、士郎さんのチームが翠屋に来て飯とか食ってるだけなんだけどな。

「だって、どう見てもあの動きは女子には無理だもんね」

さすがが少しおっとりした口調で言ってくる。

うむ、可愛いなお前。だがはやてには適わない！

「でもサッカー何てやった事ないから適当にやってただけなんだけどね」

「それも嘘っぽいよね。何で初めてなのにあんな動きが出来るのか……ホントあんたは不思議よねえ」

「でもウエヒヒヒ、これホント。おっとそのクッキーはもらったあ」

ヒョイツ、パクッ！

「あー！それなのが取るうとした奴」

「んー、うまうまなのですー。にぱー」

俺はなのはが取るうとしたクッキーを横から奪い、そのまま口に入
れ恍惚の笑みならぬ恍惚のにぱーを繰り出す。
うむ、流石桃子さんだ。うまいクッキーだのう。

「ん？どつたの三人とも？顔を赤くしてさ。風邪でも引いた？」

「あ、アニス君……それ反則なの……」

なのはは顔を赤らめながらそう言い、後の二人が賛同する。

そしてそのフェレットモドキ、てめえも顔を赤くしてんじゃねえ
よ。風邪か？

生憎と、淫獣に付ける薬はねえんだ。

「むう、反則と言われてもねえ……俺は別に何もしてないんだけど
……」

反則と言われる筋合いわないよ！
全く、しつれいしちゃうねえ。

その時、なのはが急に視線を外す。

俺はそれに気づき、なのはと同じ方向を見る……。

ぬー、ジュエルシードですかねー……？どうしようかなー。

町に被害が及ぶのは嫌だけど、今の俺じゃ魔法は愚か、バリアジャケツトすら使えない状態なわけでして、それに、俺の、魔眼は果たしてジュエルシードに通用するのだろうか。

曲がりなりにもロストロギア、しかも暴走した状態なんだし……うむ、どうしたものか……。つか、いつの間にかサッカー小僧たち解散してるやん。

「それじゃあ、私達も解散」

「うん、そつだね」

「そつかー、今日は二人とも午後から用事があるんだもんね」

「うん、お姉ちゃんとお買い物」

「パパとお出かけ！」

「いいなー、月曜日にお話し聞かせてね？」

うむ、お姉ちゃんにパパか……。

……まあ、お姉ちゃんの良いんだけどさ……お父さん、元気かな。
お母さんも……まああの二人なら大丈夫だろう。

お父さんは正解も使えるし、お母さんは補助魔法の天才だしね。

「おっ、皆ももう解散かい？」

「あ、お父さん」

いつの間にか士郎さんがこちらに来ていた。

うむ、背高けえな……。

「今日はお誘いいただいてありがとうございます」

「試合、カッコ良かったです」

「ははは、すずかちゃんもアリサちゃんも、応援ありがとうございますー応援してくれて。変えるなら送って行くところか？」

「あ、いえ。迎えに来てもらいますので」

「同じくですー！」

「そっか。なのははどうするんだ？」

「んー、アニス君、この後用事とかある？」

「俺？今日は特にないよ」

「それじゃあ一緒に遊ぶの！」

うーん……まあ、良いんだけどさ……。

何をして遊ぶんだろっか？俺男ですし、なのはの遊びとかたぶん合わないし。

「別に良いけど、何して遊ぶの？」

「んー、それは家に行ってから考えよう！ねえお父さん、良いですよ？」

「ははは！良いよ、二人で遊んだら良い。お父さんも一っ風呂浴びて、お仕事再開だ。三人で一緒に変えるか」

「うん！ありがとうお父さん！」

むう……ええのう……お父さんが……。

（ほらっ！アニス！）

（ちよっ、お父さん！？もう俺もいい年なんですから、そのっ……高い高いは止めていただけないでしょうか……）

（ははは！子供が遠慮とは、世も末だな。なあ、アリス）

（それだけアニスが大きくなった証拠ですよ、貴方）

蘇るのは、あの楽しかった俺の毎日の日常。

隣にいつもお母さんが居て。仕事で忙しくて、たまにしか俺と遊んでくれないけど、それでも遊んでくれる時は俺よりも楽しんでるお父さん。

そして、それを見ながら微笑んでいるアंक……。

平凡で、何処となくファンタジーで。

それでも、前世の記憶を払しょくされる毎日の日々。

その中で、毎日俺は笑い、少しむくれたり、泣いたり。でも、すぐにまた笑って、お母さんやお父さんもつられて笑ってくれた。

ありふれた家族だったけど。

何処にも負けない、幸せな家族だったと、俺は自負している。

訓練の時は厳しかったけど、成功したら自分の様に喜んでくれた二人。

例え俺が、前世の記憶を持ち合わせていた子供でも、前世の親を覚えていた、二人を受け入れられなかった俺が居たとしても。

それを知らなかったとしても、きっと何処かで気づいては居たのだろうか……それでも態度も、接し方も変えなかった二人。

746

失って初めて気づく、隣にぽっかりと空いた穴。

それを埋める様に、今度はアंकが俺の隣で……そして、もう片方の穴にはやてが居て。

それから、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラが居て……。

それでも……やっぱり何か足りなくて……。

あの日の事をいつも悔み、嘆き、後悔してきた。

その為に、もっと力を付けようとも誓った……。

俺が欲しかったものが、今日の前に映っている。
平凡が……日常が……ただ親と笑い合っているだけでも良かった……。
……。原作介入とか、崩壊とか……ホントはどうだって良かったのかもしれない。

それはただの建前で、ホントはその……前世でほしかったものが、手に入った事に酔いしれたかっただけなんだろう。

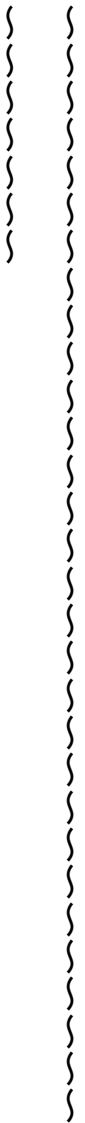
「よしっ、それじゃあ行こうか」

「うん！ばいばい、アリサちゃん、すずかちゃん！」

「またね、なのは！」

「ばいばい、なのはちゃん」

二人はなのはに別れを告げて、そのまま帰って行く。
……ふう、鬱になりそう……。



「……はあ……」

結果的に、夕方辺りまでなのはと雑談しただけであったのだ。
何か……もう……あう……。

「……うう……」

もう、泣きたくなってきた……。
まあ、なのはが悪い訳じゃないし……なあ……うむ、もうどうしたら良いんだろうね……。

つつか、何で魔力反応無かったんだらう？
今日はジュエルシードの暴走日じゃなかったっけ？

まあ、無いに越したことはないんだけどさ、やっぱりイレギュラーが働いてんのかな？
うむ………どうしたのか………まあ、俺が闇の書を起動させちまった辺りでもう原作は崩壊してるしね。

「もう良いや、帰ろう……」

何か今日はどっと疲れた……。
肉体的にも精神的にも………ああ、これが病み期なのかな？

ああ、明日辺り何か死にたがりになりそうですねコレ……。
はあ……。

まあ、そんなこんなで家に着いたわけなんですけども……ここで
つ違和感が……。
何故か魔力の残り香が感じられるのは何故？
それにこの感じ、翠屋で感じたのと同じ魔力なんですけど……。

だれかがジュエルシード持って帰ってきやがったな……これ。
まあ、大概検討は着いてるからいいや。

俺はそう思いながら玄関のドアを開けて、無言で家の中に入る。
もうただいまを言う気力も無いよ……。

そして俺は終始無言のまま、リビングのドアを開ける。

「ありゃ、いつの間に帰って来たんアニス君？全然気づかなかった
で？」

「……うん……そうだね……アंक、何処かな？」

「ん？アंकさんなら今お風呂やで？」

「……………」

じゃあ、少し待ってよう……………」

ああ、頭が痛い……………」

「アニス君、どないしたん？何か元気あらへんけど……………」

「あ、ううん。大丈夫だよ？あはは」

もう無理してる感満載の笑い声だね。

乾いた笑い声しか出ないよ……………」ああ、鬱だ、死のう。

その時、アंकが風呂から上がり、リビングに戻ってきた。

「おっ、帰ってたのか」

「……………」うん、まあね……………」

「何か元気ないが、どうした？」

「……………アंक……………ジュエルシード、取って来たんでしょ？」

「!?!?……………な、何の事だ？俺は知らんが」

あくまで白を切るかこいつ……………。

つか、魔力の残り香で一発なのに、分から無いのかねこいつは……………。

「まあ、それをどう使おうが、アंक次第だしね。とやかく言う事や、余計な詮索はしない。でも……………俺は望んじやいないからね？」

俺はアंकにはっきりと告げる。

ジュエルシードに、ロストロギアに頼るなんて事はしない。

例え、それしか手が無かったとしても、だ。

「それじゃ、俺ちよつと部屋で休むは……………」

「……………ああ、分かった……………」

アंकはそれだけ言って、ソファ―に腰かける。

俺はその場を去り、自分の部屋に戻ろうとする……………。

その時ちょうど、道場からシグナムが帰ってきた。
俺は玄関でシグナムと鉢合わせしてしまった。

「あ、主。ただいまです」

「……うん、お帰り、シグナムさん」

「どうしました？主、顔色が優れませんが……」

「あはは、大丈夫。何とも無いさ……ただ……ちょっと疲れちゃっただけだから……心配しないで……」

俺はそれだけ言って、自分の部屋に入ろうとするが、シグナムがそれを許さない。

シグナムは俺の腕を掴み、こちらに引き寄せられる。

「な、何すんのさ!？」

「主。どうやら貴方は、何か勘違いをされている」

「な、何をですか……?」

「私は貴方の騎士です。心配するなと言われて、はいそうですかと言われて引き下がるほど、私は落ちぶれていません。何かあったのですか？もし出来るなら、私が話を聞きます」

「シグナムさん……」

俺はシグナムのを見上げる。

……話すことはしない……こんな話なんてしたって、スッキリ何てしないし……。
でも……出来る事なら……。

「……あの……さ、シグナムさん……」

「何でしょうか？」

「……あう……その……俺を……抱きしめてくれませんか……？」

「……主がそれで、笑顔に戻るのならいつでも」

そう言って、シグナムはそのまま俺を抱き上げ、抱きしめてくれる。
……暖かい、そして、優しい……。

女性特有の甘い香りに混じり、汗の匂いも感じられたが……気には
しなかった……。

ただ、ひたすらに湧いてくる感情を抑えるので、精一杯だった。
泣いてしまいたい……そんな衝動に駆られている……。

「……どうです主、落ち着きましたか？」

「あうあう……ありがとうございますシグナムさん。お蔭で何とか元
気が出ましたのです、にばー」

まあ、何と単純な俺だ事。

でも……こう言うのも悪くないのかもね。

だけど……流石に恥ずかしいとは思っ……けどね。

「主、私の事はどうかシグナムとお呼びください。それに、敬語も
不要です」

「……シグナム、その……さ……それは良いんだけどね？……何で
手が少しヤラシイ動き方してるのか気になるんだけど？」

さっきからまさぐられてる感が否めないんだけどさ。

何？貴女も今巷で流行っている流行り病、はやて病にかかったんで

すか？

そして、無意識だったんだろね、何故かいきなりハツとなり、俺を急いで床に降ろしたよ。

そして光速の速さでリビングに走って行った。

……うむ、部屋で休もう。

第三十一話 鬱と心の傷とはやて病（後書き）

はい、はやて病がとうとうシグナムにも感染して来ました

シグナムはこれからどんどん変態の道へと足を踏み入れることに

なのはキャラの中では姉御肌の存在のシグナム

AS編を見た時思いました

こいつあやべえと

だって……ね？巨乳なうえ、姉御肌ってあなた……誰でも着いて行きたくなるやん！

カッコええやん！

リトバスの来々谷さんも姉御肌で着いて行きたくなるけどね

さて、前書きでも話した通り、明日世界が減びるらしい

やだねー、せめて俺、成人したいよ、酒飲みたいよ

エロゲーどつどつと買いたいよ

でも、買っても積ゲーしちまいそつで怖い

まあ、たぶんノストラダムスの大予言のごとく外れるに決まってるさ

さて、明日滅びなかったらまた会いましょうか

ここまで読んでくださりありがとうございます

第三十二話 例えばそんな一日（前書き）

何か短編集的な事になってしまった

いやあ、人類滅亡しなかったね

俺としてはバンバンザイだよ

さて、今回は守護騎士四人にスポットを当てて書きました

それでは、本編始まります

第三十二話 例えばそんな一日

アニスサイド

「トウツトウルー 人類滅亡しなかったー!!」

どもつす、アニスたんのお。

いやあ、今日人類滅亡しなかったね？あはは、アニスたんうーれー
しーいー！

それにしてもさあ……。

「何でヴィータは俺にくっ付いてるの？」

何故か朝起きてすぐにヴィータがべつたり何だよね。
甘えてるって言った方が差支えないかもしれないね。

「べ、別に良いだろ……」

「いや、まあ良いんだけどさ……」

どうやらただ今デレ期の様です。

まあそれだけなら構わないんだけどね、はやてとアंकが睨んでお

ります。ヴィータの事を。
ああ……誰か助けて……。

「例えばそんな一日」

「たれヴィータ」

「んで、ヴィータよ、何故俺にくっつく」

「何と無く」

「何と無くでくっつくんじゃないやありません!」

「いじや〜ん」

そう言つて、ヴィータはダラ〜んと俺にもたれてくる。
熱い、そして暑い……あうあう、これはこれで堪えますな。

「ヴィータ! アニス君に迷惑掛かるからやめなさい!」

うむ、はやてが怒ってくれた。
流石にはやての言う事は聞くだらう。

「嫌だ……」

なん……だと……。
はやての言う事も聞かないとは……これは相当ですな。

「今日は一体どうしたのさ? どうして急に甘えて来るの?」

「……シグナムから聞いた……アニスが何か悩んでるって。それと
私は甘えてない」

うむ、あ奴め……言いおったか。

まあ、良いんだけどさ。悩んでる理由は離話してないしね。でも、甘えてないって……これは甘えてるに入りますよ？

「まあ、悩んでるっちゃ悩んでるけど、それとこれとは話が別なんじゃ？それに、どっからどうみても、これはヴィータが甘えてるって……」

「うー、うるさいなー」

グダグダ言いながら、ヴィータはさらにもたれてくる。重くは無んだけど、暑い。ただひたすらに暑い。

「暑いって、もたれて来ないでって。暑いって」

て言うか、そろそろ体重支えなくて潰れそう。重くは無んだけど、でも如何せん踏ん張りがきかない。つか、この体いくら鍛えても非力にままなので、あんまし力は無いだ。

だから。

「むぎゅっ……」

すぐに潰されちゃいます。

と言うか、何か押し倒されてる感じさえするのは俺の気のせいでしょうか。

「いい加減にしろ！」

ドゴオッ！

「むぎゅっ！」

「いったあ！」

ア、アंक…… ヴィータの頭を殴るのは良い。

だが、俺が下敷きになってる事を考えて殴ろっよ……。

「あ、すまんアニス」

「うう……。鼻が痛い……。そしてヴィータ、早く避けて……」

結構キツイ、重さ的な意味では無く、羞恥的な意味で。
取り敢えず、ヴィータは自重を知ろう、そんな一日の朝。

く例えばそんな一日く

く何故か髪に執着のあるお姉ちゃんく

「何故か久しぶりに出れた気がするのは何故でしょう?」

「お姉ちゃん何言ってるの?」

何故かすっかり定着しえしまったシャマルの呼び名。

でも、お姉ちゃんよりもお姉さんの方が、シヤマルには合っているかもしれない。

「それにしても、アニス君は髪の毛サラサラですね」

「みんなそう言うんだよね。特に手入れもしてないし、これと言って特別なケアをしてるわけでもないし。ただシャンプーで洗い、リンスで洗い、流し、乾かし、終わり。ってだけだしね」

「羨ましいですね。普通だったらそう簡単にはいかないですよ？」

「そうなの？まあ、女の人は人一倍髪に気を使うからね。それにしても、髪切りたいな」

俺の背だと、もう少しで髪が床に着いちゃうし、今の髪だと洗いにくいんだよね。

良くシャンプーが行き届かないし。

「それは絶対駄目です！もったいないじゃないですか！」

「えっ、お、お姉ちゃん？」

「その髪でしたら色々な髪型が出来ますよ！ツインテールやポニテール！サイドツインやサイドポニー！ウェーブを掛けたり巻いてみたり！さまざまです！」

な、何だろう……いきなり語りだしたぞ？

「そもそもアニス君は遊び心がありません。そんなに髪の質が良いのなら、少し遊んで見るべきです！さあ、私が手ほどきしてあげますから、自分で結えるようになりましょう！！」

「ちょっと、自重しようよ！？何処まで髪にこだわってるのさ!？」

そして何処からそのヘアスプレーや櫛を出してきたし!？

って、おい……何でそんな手つきしてるの!？

それ明らかに髪を結う手つきじゃないよ!？

髪を弄られるそんな一日の昼前

く例えばそんな一日く

〜最近のシグナムの楽しみ〜

「ハアツ!!」

ドゴッ!

「踏み込みが甘いです!!」

チッ!

「おっと、てえいやあ!!」

シュッ!

ただ今シグナムと剣の鍛錬中。
真剣は使ってないよ? 木刀でやっています。

俺はそつちの方がしっくりくるから良いんだけど、最初は竹刀だったからね。しないは使っえんわ。

「そつっ！」

ドゴッ！

あちゃー、また受け止められちゃった……。うっむ、まだまだ駄目か。

「やっぱり駄目だ、しばらく剣を振ってないとなまっちゃっな」

斬魄刀が使えないツえのも考え物だねこりゃ。あー、たまには氷輪丸とか使いたいな。でも、出した出したで心臓痛くなるし、やんなるな。もう。

「でも、筋は中々あります。精進すれば、私なんて簡単に越えれますよ、主なら」

「まあ、だと良いんだけどね」

「そ、それで主……ね、例の約束なのですが……」

「あ、そうだったね。良いよ?」

「あ、ありがとうございます!……し、失礼します……」

シグナムは一度かしまつてから、俺を抱き上げ、抱きしめる。そう、あれ以来……何か俺を抱きしめるのにハマったシグナム。

まあ、良いんだけどさ、胸がすごいデカイからあたるんだよね。それに、結構苦しいし。でも、我慢だね。シグナムには稽古に付き合ってもらってるし。

(ああ、主……何て小さいんだ……そして、何て柔らかいんだ……。ああ、主……私は主の為なら何だってします!もう一生着いて行きます!)

何か……すごい事考えてないこの人?

俺の気のせいかな?……あ、気のせいですね、そうですね。

(主の柔肌、主の髪の毛、主の呼吸、主の息遣い、主の心音……ああ、どれをとつても可愛い……。こんな愛くるしい人が主とは……我が一生に悔いなし!)

……やっぱこの人変な事考えてるよね？
危なくね？精神的にヤバい気がするんだけど？
さつきからハアハア聞こえるんだけど……怖いってこの人、ちよっ、
お巡りさん！こつちです！こつちいいいい！！

「ああ、主……主いゝ……」

さつきからうわ言みたいに主主連呼してるんですけど……。
そして、そろそろ離してくれないかな？結構恥ずかしくなってきた。

ああ、暑い、苦しい……シグナム、胸でか過ぎ。
でも大きくならないのは凄いね、やっぱ体は子供か。

「シ、シグナム。そろそろ満足した？」

「……いえ……後もう少し……」

どんだけよ……。
いや、良いつて言ったのは俺だけど、まさかこんなになるとは思わ
なかったよ。
まあ、最初は冗談半分で言ったんだけど、思いの他本気にしちゃっ
て、こつちなっちゃったんだ。

「シ、シグナム……くっ……苦しい……」

「す、すいません主！」

シグナムは慌てて俺を降ろす。

いやあ、危つく殺されるところだったよ。窒息死とか洒落になつてないからね。

もしくは圧殺。

「もう、あんまり優しくしてくれないんなら、もう禁止するよ。」

「うっ、そ、それだけはどうか……」

「ぶぶぶ〜ん、どっしようかな〜」

やっぱり主には勝てないシグナムを虐める俺、そんな一日の夕方。

「例えばそんな一日」

「モフモフザフィーラ」

「ザフィーラモフモフ」

ただいま狼素体のザフィーラをモフモフしております。

いやね、モフりたいんだもの仕方ないじゃないか。くそ、猫一筋が揺らぐではないか。

つて、もう負けてるか。

「ザフィーラモフモフ」

「主、先程お風呂に入られたのですから、お戯れはそこまでしておいた方が良いでしょう。せつかく体を洗いになったのに、毛が着いてしまいます」

「そんな事気にしてたらモフれないじゃ〜ん。モフモフ」

「……………はあ」

むう、ため息とは酷いね。

俺は純粹にこのモフモフ感が好きただけなのに……………それを止めるなんて俺には出来ない!!

それいしても、青色の毛の狼なんて実在しなくね？

所々色も違うし……………あ、それ言っちゃお終いだって？
ですよー。

「ザフィーラはさ、俺の事どう思ってる？」

「……………唐突にどうしました？」

「いや、なんとなく」

「……………そうですね……………子供らしくない子供……………とは感じていますが、言動は子供。でも、行動が大人びていると言いますか……………たまた子供じみていると言いますか……………」

「つまりは子供と」

「……そうまりますね……」

「……うむ、まあそうだよね。そう言う教育を受けてましたからね、大人と対等に話せる様なしゃべり方、行動……それを払しょくするように口調も変えてるし、行動も少し変えてるんだけどね」

癖が抜けきれないのだ。

だから、それを少しでも消そうとしたいが為に、今の口調に定着してしまった。

まあ、梨花口調は好んで使ってるから良いんだけどね。

「……主は、一体何者なんですか？」

「むう、それ聞いちゃいます？」

「すみません……無礼が過ぎました」

「いや、そう言う事じゃないんだけどね……俺が何者……ねえ……
そんなの、俺が知りたいくらいだよ」

俺自身、自分の事は何もわかっていないのだ。

分かっているのは、前世の事。

が、であつた事は知っている。だが、がアニスに成り代わつた。

俺は、自分の家族や家柄の事は何も知らない。

今の俺は語れないが、前世の俺は語れる。

今の家族の事は勝たれないが、前世の家族の事は語れる。

「……………」

「ん？どうしちゃつたのかなザフィーラ、急に黙っちゃつて」

「…………主でも、自分の事は分からないのですか？」

「うん、全然。全くと言っていいほどね。俺が俺たる何かを、まだ見つけてないし…………それに、俺は家族の事を全然知らないからね」

「家族…………ですか…………それは八神やアングの事ですか？それとも…………」

「…………後者で合ってるよ。ザフィーラが言わんとしてる事…………それはお父さんやお母さんでしょ？」

ザフィーラは喋れない。

……凶星か。

「勘違いしないでね？俺のお父さんとお母さんは生きてるから」

「そうなのですか？……では、どうして主は……」

「ん……それは流石に、ね？」

「……失礼しました」

「うっん、気にしないで……さて！りがとうザフィーラ！俺もっ寝るよ」

「分かりました。お休みなさいませ、我が主」

男と男の語らい、そんな一日の終わり。

おやすみなさい、みんな。

第三十二話 例えばそんな一日（後書き）

いやあ、シグナムが一番酷いWWW

そしてたれヴィータ可愛いよ

さて、今回はあんまり出番のないシャマルとザフィーラを出しまし
たが、如何だったでしょうか？

俺は少し試行錯誤しながら書きましたけどねWWW

さて、明日は妹の学際か……

まあ、あいつの事は嫌いなんでも良いです

明日は何を書こうかな

ネタ募集中！

修学旅行中に予約投稿する番外編のリクを募集しています

もう主要キャラは出しましたので、出来ればリクエストしてくれたら助かります

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十三話 進行と結果と己の正義（前書き）

どもっす

いやあ、今日も今日とて昼寝してましや

どうも休日は昼寝してしまいます

夜眠れなくなるのに……

それにしても、お気に入りか250件になりました

嬉しいwwww

ホントにこんな駄作を読んでくださりありがとうございます

それでは、本編始まります

第三十三話 進行と結果と己の正義

シグナムサイド

「なあ、何でアंकってデバイス使わないんだ？」

「あ？何だ唐突に。別にどうでも良いだろ」

「良いじゃん、それ位教えてくれても。アニスも言ってたぞ？アंकのデバイス使った所見た事ないって」

最近、ヴィータと奴が妙に仲が良い……。

一体何があったんだ？あのヴィータが主の他にも懐く奴がいるなんて……。

だが、そこは些末な問題なんだ。

一番疑問に思っている事は、その切っ掛け。

あの二人に何があったのかは知らないが……。どうもあの男は気に食わない。

それは私だけでなく、他の二人もそう思っていることだろう。だが、ヴィータだけは違う……。

「ああもううるさいな！！理由なんてねえよ！」

「じゃあ見せてくれても良いじゃんか。アंकがどんな魔法使うの
か見た事ないし」

「また今度な。さって、少し散歩してくるか……。それよりも、ま
だアニスは寝てるのか？」

「アニス君、さっき起こしたんやけども全然起きないんです」

「……最近おかしいな、何時もだったら8時には起きるのに。今は
もう10時か……」

そうなのだ……。

ここ最近、主は起きるのが遅い。夜は早くから睡眠に入られるのに、
起きてくるのは私達よりもすごく遅い。

「きっと夜更かしでもしとつたんじゃないですか？」

「それは無いと思います。アニス君、いつも早く寝ていますし。そ
れに、一度寝ちゃったら揺すっても起きないくらい寝つきが良いん
で」

「それか、小さい体やし、人一倍体力使うんとちやいますか？良くチヨロチヨロしてますし」

「あ、それ分かる。アニスっていつつも動いてるよな」

グイータには共感だ。

主はいつも活発に動いていて、またその小さい体でたくさん動いているので、凄く癒される。

「まあ、あいつは活発な奴だからな。まあ、今の所はそういう事にしておこう。もしまだ続く様だったら、今度は病院かな」

「せやったら石田先生に見てもらった方が良いですね。何かと融通聞きますし」

「そうだな……」

それにしても、本当に主は大丈夫なのだろうか？

少し心配になって来た……。

私は誰にも気づかれないようにリビングから出て、主の部屋に向かう。

アニスサイド

「うむっ……これは流石に困った……」

どうも、アニスたんだお。

あ？何が困っただって？いやあ、聞いてくれよー、それがさあ。

「吐血しました」

うん、冗談じゃなく。

どうしよう、皆に急展開過ぎてワロタとか言われないかな？
まあ、それは良いとして。

「まさか今さつき起きてすぐに軽く咳き込んだ位で吐血とは……う
む、口の中でも切ったかな？」

それだったら良いんだ。

寝てる時にほっぺの内側を咬んで血が出て、咳した時に出ちゃった、
なら良いんだ。

でも、何処にもその形跡がない。

さつきから下でもゴモゴしして探したけど、無かったんだ。

「ふむ、これは……もしかして本気でヤバい？」

体はいつも通り何だけどね、どうしたのか……。その時、唐突に部屋のドアが開かれる。おっとヤバい、様子を見に来たのか。

俺は瞬時に手を拭き、窓の外を見る。まさに、今起きた的々な空気を醸し出しながら。

「あ、主。起きられましたか」

「みいー、シグナムおはようなのです。少しお寝坊さんになっちゃったです」

「誰も気には居ませんので大丈夫です。朝食は取られますか？」

朝食か……。つか、今何時だ？
……ゲツ、もう10時過ぎか……。うむ、前までは8時に起きてたのに……。どうした俺。
つか、あんましお腹減ってないや。最近さらに小食に拍車が掛かってるな。

「うーん、要らないや。そんなにお腹減ってないし」

「分かりました」

「んじゃ、着替えるからシグナムは戻って良いよ。着替えたらリビングに行くから」

「分かりました。失礼します」

そう言っつて、シグナムは部屋から出ていく。

うむ、固いねまだまだ。もう少し時間が掛かるかな？あ、でも本編でもそんな感じか……。

「さて……どうしたものか」

あんまりこう考えたくはないけど、呪いが進行してきた証拠かな？
心臓が呪われてるんだ、肺もその内やられるに決まってる。その予兆かな？

これまた随分と厄介な物を。戦闘中に吐血して血が詰まったら呼吸できなくなるぞ。

「ケホツケホツ……うむ、どうやら咳も出る様だ」

風邪は引いてないし、喘息持ちって訳でもないしな。

はあ、鬱だわ……そういやしばらく死にたがり出とらんな。
後が怖いわ……いつ出るか分かったもんじゃないし。

「ケホツ……着替えよ」

少し怖くなりながらも、俺は衣類を引つ張り出す。
さてと、今日は何の服を着ましようかね。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「トウツトウルー おはようなのです」

「あ、アニス君おはようさん。やっと起きたんやな」

「えへへ、少し寝すぎちゃった」

「何時もだろっが」

「うっ、痛い所を着突くねアンク……ケホツケホツ」

「ん？風邪でも引いたのか？」

「にはは、実はそうなんだ。ケホツケホツ」

「普段からあんな格好で寝るからだろ。自業自得だ」

それを言われると痛い。

まあ、風邪ではないんだけどね。

「さて、今日は何をしようかね」

「何言ってるんねん。風邪引いてるんやったら安静にしてなアカンで？」

「そうですね。そう言う訳なので、今日は外出禁止ですからね？」

「なん……だと……」

マジか……。

くそ、暇じゃマイカ。何をしてると言うんだ！

別荘にでも引き籠ろつかしら。

「んじゃ、寝るわ」

「そうしとき。それよりも、朝食は要らへんの？」

「うん、そんなにお腹減ってないから大丈夫」

最近ホントに飯を食わなくなったのよ。

いやあ、そのせいで、また体重落ちたんだよね。確か今……15キ  
ロだったかな？

まあ、もう九歳の平均体重じゃなかとね。

つか、もうそろアंकには何か言われそうだね。

「さて、んじゃまた寝間着に着替えよう」

仕方ないので、今日は大人しく寝ていることにする。

はあ……でも、どうせなら外に出て遊びたいな。

このまま外にトンスラでも……。

「分かっているとと思うが、抜け出そうなんて考えるなよ？」

「い、嫌だな〜アंकったら。お、俺が抜け出すわけないだろ？」

「どうだか……今日が一日安静だからな。俺はバイトに行ってくる」

そう言って、アंकはリビングから出ていき、そのままバイトに出かけてしまう。

ちえっ、良いよ。だったらヴィータとイチャコラして遊んでやる。

「よし、ヴィータ一緒に寝ようか」

「はあ!?!な、何言ってるんだよアニス!?!」

「いや、ヴィータを抱き枕にして寝ようかと……」

「いや、私は別に良いけど……」

「駄目に決まるとるやる! 風邪が移るから駄目や!」

くそ、なら本当に寝るしかなさそうだ……無念。

しゃあないから、デバイスとお話ししよう……もしかはずれさ

んでも呼ぼうかな、イシユタルでも良いけど……。

俺はトボトボと歩きながら部屋に戻る。

ああ、暇だ……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「それでさクイーン、こんなバリアジャケットなんてどうかな？」

《……マスターは少し、自重をした方が良いかと思われま……》

「うえっ、クイーンにまで言われた。何だ？反抗期かこんにゃろー
う」

ただ今寝っころがりながらクイーンと会話してます。

そっついやこいつと全然会話してなかったわ。

そして何故か声が……たみいボイスなのは仕様なのか？

「クイーンは今日から民安って名前を通ってくれる？」

《何を言っているのかさっぱりわかりません》

「いや、何と無く……」

《はぁ……久々にマスターから話しかけてくれたと思ったのに……
がっかりです……》

「あはは、ごめんねクイーン。でも、グリード何て一回も使われて
ないんだよ？そっちの方が可愛そうとは思わんかね」

《……グリード乙》

ですよー。

まあ、いつか使ってやるだろう。だってアंकだし……でもグリ
ード化したらデバイス無しでも強いからなー。

《それよりマスター、朝血を吐かれていましたが。大丈夫ですか？》

「ありゃ、見てたの？その事は皆に内緒にしておいて？皆づるさい
からね」

《了解しました》

うむ、本当に良くできたデバイスだ。
でも少し堅苦しい……ボイスがボイスだしな。
もう少しはっちゃんけたキャラでも良いのに。

《それよりも、マスター》

「ん？何、クイーン」

《マスターのリンカーコアなのですが……》

「あ、解析終わったんだ。それで？どうだった？」

さつき新バリアジャケットを考案する前にクイーンに頼んでリンカーコアの解析をお願いした。
さて、結果はどうなんだろうか。

《……大変言いにくいのですが……このままだとマスターは、後半年ももたないと言う結果が出ました……》

……半年ももたない……か……。

随分と進行が速いな……まあ、そんな事も無いのかな？

本編の時はクリスマスまでで進行がかなり進んでたし……大丈夫だ

ろう。

《マスターのリンカーコアは、徐々に汚染されて行っています。それに伴い、臓器の働きにも影響が出ています。影響が酷い臓器は、心臓と両肺……そして、今は胃にの所まで伸びています》

あゝ、やっぱり肺やられちゃったか……。

まあ、当然の結果だよな。呪いが心臓に直接来てるっただけでも酷いの。

《このままだと、マスターは寝たきりになると思います。脊椎にまで汚染が広がり、そして徐々に徐々に足を蝕み……最後は体の至る所の臓器や血管の機能が止まり……死に至ると……》

「ひゃゝ。怖い怖い……さて、どうしたものかな」

二択、何だよな。

このまま死ぬか、苦渋の選択で収集をするか……。でも、後者は絶対にしたくないし、させたくない……。でも、死んだら死んだで、もしかしたら今度はマスターの所有権ははやてに移り、物語にかなりのラグが出来てしまう……。

勿論……それは避けたいし、せつかく歩けるようになって来たはやてを、また悲しませたくない……。

……ああ……そうか……俺ってホント、頭が悪いな……。

「……シグナム達に収集を頼むんじゃないかって……俺自身で収集すれば良いんじゃないか……」

そうだ、結局。家族を巻き込まないで、俺一人だけ犯罪者になればそれで良いんだ。

でも……それだと少しリスクが高いな。

次元世界を移動するのは、まあ仕方ないけど魔具を使わせてもらおう事にして……。

俺の魔眼だったら、生物にリンカーコアを取り出すことくらいは出来るだろう。

生物を分解する事は出来ないが、生物の中にあるリンカーコアなら、俺が吸収して放出し、変換してリンカーコアを生成すれば行ける。

だが……ばれた特はどうするか……シグナム達にも、そして、はやてやアंकにも迷惑が掛かるし……最悪、守護騎士も捕まってしまう……。

「そうだ……これを闇の書による物と思わさなければ良いんだ。次元世界から一度こっに戻ってきて、それからリンカーコアにして収集すればいいんだ……それも、別荘の中で」

そうすれば、先ず管理局にはばれないし。

もし666ページ収集し終わっても、俺がリインフォースを説得して、最後に化け物を倒せば……それでオーケーだ……。

「……はあ、俺も大概だな……結局、収集をするんだ……」

何が、家族を犯罪者にまでしても生きながらえたくないだ……。

結局、俺は生にしがみ付いてる。

だけど……俺一人が罪を被るのなら……それはそれで、気が楽だ。

俺一人だけが……犯罪者になれば良いのだから……。

第三十三話 進行と結果と己の正義（後書き）

はい、アニスはダークサイドに落ちました

自分が一人が悪者になればそれで良い……

ははは、厨二乙

それにしても、クイーンのボイス……全くの俺の趣味ですwww

因みにアंकのデバイスのグリードの声は、中村悠一さんです

まんまハガレンのグリードwwwまあ、性格はグリリンの時のグリードです

つか、グリードの最後マジ感動した

最初で最後の嘘とか……もう、泣くしか無いやろ……！

さて、それでは、私が修学旅行に行ってる時に書く番外編を少しお教えしましょう

先ず一つは

アニスたん、翠屋でコスプレショー！

次に

もしアニスがFATEの世界で、サーヴァントとして呼ばれたら

次に

アニスとフェイト&アルフ、料理をいたしましょう

最後に

もしアニスがとある魔術の禁書目録に転生したら？同時上映、超電
磁砲もあるよ

……てな感じです

まあ、もしかしたら全部グダるいかもしれないですが、気にしないでください

ここまで読んでくださりありがとうございますございました

第三十四話 モンハン？いえいえ、違う違う（前書き）

どもっす

今回は超短いです

ちょっと今日はバタついてて長々と書けませんでした

明日はちゃんと書きます！

本編始まります

第三十四話 モンハン？いえいえ、違う違う

アニスサイド

どうも、体調があまりよろしくないアニスです……。
と言っても、体がだるいと言う訳で、別段横にならなきゃならない
様な感じではないので悪しからず。

そしてただいま、何処に居るのかと言つと。

「静かだあああああああ！！」

文明が無く、生物しか生きていない次元世界に来ています。

《マスター、うるさいです》

そっちか……ネタの方にツッコンで欲しかったのぜ。
まあ、それは置いて……。。

「ホントにこの世界に生物居るの？」

《私が信じられないのですか？マスターは》

「いや、そんな事思っ
てないよ」

《安心してください、ここにちゃんと生物が存在します》

「……………ホントだね？」

《やっぱり信じてないじゃないですか……………》

「ああ嘘嘘！ごめんねクイーン！今度猫見せて上げるから！」

《……………ま、まあ、今回は許してあげましょつ》

くふふふ、やっぱり猫好きにはこの言葉が一番。
まあ、猫可愛いもんね。俺も好きだよ。

「さて……………まずは手ごろな生物から狩りたいな……………この近くに何匹くらいいる？」

《……………約6匹……………ですね……………》

6匹か……。

まあ、それ位だったら何とかかなりそうかも。もし駄目そうだったら奥の手で呪文使おう。一回そこらじゃ死なねえしな。

「んじゃま、寄ってみますか」

それにしても……あっちの方は大丈夫かな？

体調は良くなつたと言って、遊びに行く的な嘘を付き、そのままこの世界に来たけど。

「アंकにはれるのだけは避けたいな」

あいつの鉄拳と怒号は、今でもなれない。

子が親の拳骨には勝てない原理かもね……ああ、いやだいやだ。

後はやての一时间正座の刑……あれも嫌だね。

今度は何か二時間に増やすとか増やさないだとか……増やされないね。

「それにしても、ここはジメジメしてて嫌だねえ……全く。こんな所に好き好んで住んでる生物何、きつと背中にこのことが生えてるに決まってるよ」

某ポケモンに出てくるパラセクトみたいなの？
あはは、そんなん出たら気持ち悪いけどね。

「おっ、あの影は………」

《……どうやら生物の様ですね》

「よっしゃ、早速狩りに行きますか!!」

俺はそのまま走りだし、その影が見えたところまで走る。
さて、一体どんな生物が居るのやら……。
その岩陰に隠れた奴、今すぐ出てきなさい!

「って、デカあ!?! 岩に隠れてんじゃなくて、岩そのものなんかい
!?!」

おっと、ついうっかり突っ込んだじえ。
それにしても、デケエ……何? ドダイトス?

「ブオオオオオオ!!」

《どござらにちらに気づいたようですな》

「言われんでも分かる！」

俺は急いで緊急回避を行い、何か凄いデカイ生き物の尻尾を避ける。
……あれ？何かこれ、急にモンハンっぽくなってね？

いや、どうでも良いけどな。

「ブオオオオオオオ！」

「ああもつっつさい！黙れ！」

ドゴオッ！

また尻尾で攻撃をしてくるデカ物。
さて、どうしてやるのかな……。

《マスター、早くしないとやられますよ？ただでさえ呪いを受けて
体が弱っているんですから。早く終わらせちゃってください》

ちえっ、怒られちゃった。
しょうがない、あっけない幕引きだったけど、まあ良いか。

「吸収!！」

俺は生物を見て魔眼を発動する。

発動するのは吸収の魔眼。……うむ、どんどんあの生き物から魔力を吸収できてるな。

おっと、あんまり吸収し過ぎると死んじゃうからこの辺でっと。

「ブオオ……」

ドタン!

ありゃりゃ、遅かったか。

でも呼吸してるから、気絶しただけだろう……たぶん。

「さて、確かまだ居たはずだな」

手当たり次第魔力を吸収して、地球の帰るとしますか。

~~~~~  
~~~~~

「ただいまあああああ！！！！」

「お帰りiiiiiiii！！！」

なん……だと……俺のハイテンション挨拶に着いてくる奴がいるとは……。
つか、まあはやてなら納得できる自分が居て怖い。

「いやあ遊んだ遊んだ。つつ訳で少し休憩」

「余ほど激しく遊んできたと見るで、服とか砂だらげやか。払っ
てきなさい」

「あいあい」

ホントにはやては主婦だね。

いや、お母さんかも……この頃から母性本能は目覚めていたしな。
主にヴィータ。

まあそれよりも……闇の書は今俺の部屋の中にあるわけなのだが……。
問題は別荘だね。使う所を探さないと、誰かが部屋に入って来た時にばれちゃうな。

もしくは予め、一時間位寝るから部屋に入っておかないでって言うっておこうかな？

うん、そっちの方が良いかもしれないね。

うん、そうだ、そうしよう。

俺は砂を払いながらそう考えていた。

よし、払い終わった。さて、行ってこよう。

第三十四話 モンハン？いえいえ、違う違う（後書き）

短すぎワロタ

さて、どうするか……

明日はたぶん闇の書に魔力を吸収させてから、ザゼルとイシュタルの修羅場二回戦目に突入させちゃうかな

それにしても……最近喘息の発作が酷くて、おちおち小説も書けやなし

今も出ているのでかなりきついです

まあ、バタついてたので結構体力も無くなってるのも原因の一つなんですけどね

さて、明日はちゃんと書きますので

ここまで読んでくださりありがとうございました

trick or treat!お菓子をくれないと悪戯しちゃっぞ
……そち

タイトル長wwww

はい、今回はハロウィンと言う事なので、それを題材にして番外編を書いちゃいます

そして、それプラス200000PV達成おめでとう&あざまーすの奴も兼ねてますので悪しからず

それではここで、アニスさんに恒例の挨拶を、どぞ!

アニス「trick or treat!それとも……お兄ちゃん達は悪戯されたいかな?」

よしオツケー!

それでは番外編始まります

trick & treat!……あ、違つか……

trick or treat! お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ
……そや

アニスサイド

ハロウィン、あるいはハロウィーン（Halloween、Hallowe'en）は、ヨーロッパを起源とする民族行事で、毎年10月31日の晩に行われる。

ケルト人の行う収穫感謝祭が、他民族の間にも行事として浸透していったものとされている。由来と歴史的経緯からアングロ・サクソン系諸国で盛大に行われる。

ケルト人は、自然崇拜からケルト系キリスト教を経てカトリックへと改宗していった。

カトリックでは11月1日を諸聖人の日（万聖節）としているが、この行事はその前晩にあたることから、諸聖人の日の旧称”All Hallow's eve”（前夜祭）、Hallowseveが訛って、Halloweenと後に呼ばれるようになった。

Wiki参照。

まあとどのつまり、日本には何ら関係も接点も無い日なただけ。それはその家庭の話で、店。

特に喫茶店やコンビニ、デパートなどはハロウィンとかこつけて、

カボチャなどで作ったスイーツを販売したり。

カボチャをくり抜いて顔を作ってそこら中に置いたり、結構日本では見る光景になっている。

勿論、それは店内での話で、家庭とかではあまりハロウィンに何かをする……と言った事はあまり聞かない。

精々カボチャをくり抜いて玄関先に飾ったり、店で買ったカボチャのスイーツを食べる程度の事位しかやらないだろう。

だから仮装をして近隣住民の家を駆け回り、trick or treat 何て言っても、子供位しか相手にされないだろうし。もしかしたら追い返されるかもしれない。

俺はそう思っているし、間違っではない……だけど……。

「trick or treat!なのです」

「よしよし、はい、飴玉を上げよう」

「ありがとう!おじちゃん!」

何故俺は、狐耳と尻尾を付け、更には付け髭を付けて、ここ翠屋でこんな事をしているのだろうか……。

「飴玉もらったった！」

「どうでも良いけど、恥ずかしくないか？」

「かなり」

うっさいアंक。そしてそこ、俺にもちゃんと恥じらいと言つ物が
だな。

それよりも、何故俺が翠屋でこんな事してるかって？

俺だって知りたいわ！

だって家でのんびりしてたらはやてから。

「今日は思い切ってみんなで仮装してみよか？そしてアニス君、翠
屋でアंकさんがカボチャケーキを予約済みやさかい、ちよつと取
りに行ってくれへんか？」

何て頼まれたから、翠屋に行つたさ、ケーキを受け取りにね。

んで行つたら行つたで桃子さんに捕まり、仮装させられてこんな事
をしています。

「trick or treat!なのです」

「おお、眼福眼福……どんなお菓子が欲しいですかな?」

「甘いのが良いです」

「それではおじさんのここを」

「あーwww反応に困るwww止めなさいwww」

つかナツブラネタ……それは止めなさいっておじさん。
しかも若干緑川ボイス……勿体ねえ……。

「やっぱり居ましたか……」

「あ、仁紫園さん。お久しぶりです」

日傘を差して颯爽と登場した仁紫園さん。

つか、あの話以来じゃん。ムツツリー二と同時に初登場した辺りか
ら。

「大人の事情と言う物がありますので……それと間違わないでください。二度目です。同人誌をアニス君に見せた時も居ました」

ああ、そっぴや居ましたね。

まあ、そんな黒歴史はもう葬り去りたいので蒸し返さないでほしいのだが。

「それで、ご注文は？」

「そうでした。それではこの、ハロウィン限定カボチャケーキと紅茶をお願いします」

「かしこまりました」

俺は注文を紙に書き、桃子さんの所に持って行く。

「桃子さん、ちゅーもーん」

「ありがとうー！そこに置いてちょうだいー！」

「はい」

俺はカウンターの注文用紙を置き、お客さんの所に戻る。それよりも、あの変態共は来ないの。珍しい。

まあハロウィンはあんまり日本に馴染みないし、案外翠屋でハロウィンフェア？やってる事知らなかったりしてな。

「それにしても、仁紫園さんもやっぱ女の子なんだね」

「……それはどついう事でしょうか？」

「いや、仁紫園さんってパツと見物静かでクールに見えるから、こつ言った物とか食べてる所が想像できないんだよね」

「それは偏見です。私だって甘いものは大好きです」

「うん、そのようだね」

「……ニヤニヤしないでください」

「えー、ニヤニヤ何てしてないよー。ウエヒヒ」

「その笑い方も止めて欲しいです」

「気にしない気にしない」

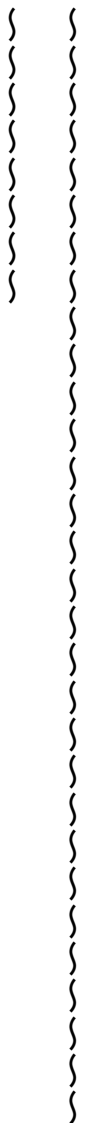
良かった良かった、仁紫園さんがBL以外にも好きな物があった。
甘いものは女の子の代名詞だもんね。

「んじゃ、俺は戻るね」

「頑張ってください。私はそれをネタに新たな同人誌を……」

「だからやめなさいって」

でもやっぱり変人なのですねこの子。
さて、サッサと仕事ケーキ受け取って帰るか。



《ふはははは！へい、boys & girls・happy Hal
lowe・en》

「止めなさいクイーン」

それは流石に駄目だよ。
分かる人には分かる言い回しだよそれ。

《某動画投稿サイトですね、分かります》

黙れ、この腐れデバイスが。

「それにしても、だいぶ寒くなって来たね」

《もう11月になりますからね。それよりも、呪いの方は大丈夫な
のですか？最近吐血してばかりの気がするのですが》

「ああ、大丈夫大丈夫。今日は血は吐いてないよ、ただし嘔吐はし
ただ」

《……はぁっ……》

呆れないでほしいな……。
へ？こんな外でデバイスと話してて良いのかって？
大丈夫大丈夫、人なんて何処にも見えないから。

「さて、サツサとケーキ持って帰りますか」

寒いし一人は寂しいし、アंकはまだまだし。
つか、帰ったらまた仮装しなきゃなんのか……めんどくち。
次は何を着せられるのか。

くキング・クリムゾン！く

「ただ今！」

「お、お帰りやでアニス君」

「あ、もう仮装してるんだ」

はやては何故かドラキュラの格好をしている。
外付け牙もついてるし、案外本格的。

「あ、帰って来ていたのですね主」

「あ、シグナ……何じゃそりゃ……」

いや、ホントになんじゃそりゃだよ。

何でシグナムはカボチャ被ってんだよ……。

「驚いたやろ？それ、カボチャやのうて被りものなんよ」

「へへ、でもこれってあり？」

「ありや」

「……まあ良いけどな……」

でも……良くシグナム了承したな……。

まあ、たぶんかなり際どい奴かこれ、どっちが良いって聞かれて迷わずそっちにしたんだろうけど……。

「所でさ、何でハロウィンなんてやるうと思ったの？日本じゃそんなに馴染み無いって聞いたけど」

「いやあ、ザフィーラを見とつたらやりとつなつてな」

ああ、ザフィーラはリアル狼男だからね。

それなら仕方ないか……それにしても、さっきからはやてがなにか持ってるんだけど……。

「それで？それは誰が着るのかな？」

「ふふふーん、勿論、アニス君やで？」

「ちょっと待て。その衣装は無しでしょ……」

はやてが持っている衣装、スク水にセーラー服に猫耳にメガネ……
何処の変態だお前は……。

「まあ、強制やで？」

「嘘ーん……いや、逃げさせてもらつから関係ないんだけど」

俺は速攻でリビングから出ようとするが。

「行かせないぜ！」

「ここから出しませんよ！」

「己！ヴィータにお姉ちゃん！裏切る気か！」

そこには何か良く分からない物に仮装したヴィータとシャマルが。
ええいどけえ！速くしないとあのためぎが！！

「捕まえたで？」

「……………オワタ……………」

く見せられないよ

「うう……………汚された……………」

「アニス君……………似合ってるで……………」

それよりも、ここには変態しか居ないのなもつ……ザフィーラは何か何処かに居るらしいけど、一向に顔を出す気配はない……。

とにかく俺は言いたい……。

この格好に果たしてハロウィンは関係あるのだろうか？

因みに、はやて達は帰ってきたアंकに怒られました、ざまあ。

あ、みなさん。

t r i c k o r t r e a t !

そして、これからこの小説をよろしくお願いします！

trick or treat!お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ

どもっ、ディアボロです

いやあ、ハロウィンにかこつけて、ようやく200000PV記念を書けました

楽しかった

そして、アニスがはやてに無理やり着せられた格好は

分かる人には分かりますよね？

あれです、変態アルビレオ・イマとの賭けで、エヴァが負けたら着ることになっていた例の物です

あそこのエヴァたんマジかわゆす

今はもう顔芸がすさまじいし

そして……刹那は百合百合してるし……

俺は百合が嫌いなんじゃああああああ!!

女の子と女の子がチュッチュ?

無理でございます……百合が大好きという方、気分を害したらすいません……

さて、楽しんでいただけたでしょうか?

今回はあんまり出番のない仁紫園さんを少しだけ登場させました

そして、番外編近況報告

もしアニ、FATE編は書き上がりました

喫茶翠屋編は後もう少しです

アニスとフェイト&アルフ、料理を作ろう(こんなタイトルだった?)は、まだ手を付けていません

もしアニ、とある魔術の禁書目録、同時上映、超電磁砲もあるよも、
まだ手を付けていません

たぶん水・木辺りで仕上げると思います

後、金曜日から修学旅行何で、また予約投稿

感想は……一応携帯かi p o d t o u c hで返そうと思っています

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございます

そして、これからもこの小説をよろしく願います！

t r i c k o r t r e a t !

第三十五話 罵倒罵倒また罵倒（前書き）

今週の金曜から初関西な私です

関東はデイズニーランドに行った位です

まあ、修学旅行でもデイズニーランド行くみたいなんですけど

俺、人ごみ嫌いなんですよねー

そして飛行機も嫌いなんだよね

俺高所恐怖症なんですよ

だから、飛行機に乗る時は目を瞑って耳塞いでぶるぶる震えています

ああ、何で鉄の塊が空を飛ぶんだろっ……

つうわけで、本編始まります

第三十五話 罵倒罵倒また罵倒

アニスサイド

「よし、こんなもんで良いでしょ」

どもつす、アニスたんだお。

ただ今細工中なのでございます

この別荘を何処に隠そうか現在検討中。

間違ってもアंकとかに入られたら一発ではれちまいますので、結構大変なんだよね。

「さて、闇の書ももつたし」

《私も居ますし》

「……いや、お前は要らんだろ」

《何故ですか!?!》

「ぶつちやけ今のお前の存在意義って、俺との暇つぶしでできる喋る機械の立ち位置何だよね」

俺バリアジャケット使えないしな。

それに、まだ喋れさせてもらえるだけでしたって。グリッド何て常にスリープ状態だからな。

「まあ、良いけどさ……」

《ほっ……》

何でホッとしてんだてめえは……。

まあ良いけどさ……。さて、んじゃ行くとしますか！

俺は魔方陣の中に入り、転移を開始する。

さて、闇の書に魔力収集し終わったら何して暇潰そうかな。

まあ、無難にこれからの対策練って、それから少し魔眼のコントロールかな。

とか考え事をしてたらいつの間にか着いてたみたいだ。

さつて、やりますか。

俺は浜辺の方まで歩いて行き、闇の書を開く。

そして、その状態のまま、俺は取って来た魔力を変換し、取り出す。それを闇の書は感知し。

《Sammlung》

そのまま魔力を収集した。
俺は闇の書を開き、ページを確認する。

「……大体7ページか……」

魔力を取った生物も7匹……。
う、うん……。仕方ないよ。だって生物の保有魔力なんてたかが知れてんじゃん。

《外れだな》

「そんな鈴ボイスは要らんとです」

《残念だったね》

「理樹ボイスも要らんとです。そして佐々美ボイスも要らんとです」

《……チッ》

舌打ちすんなし。

それにしても、何か割に合わないな。結構大変だったのにさ。結構シヨック大きいよこれ……。

「……やはりここは血色の良い魔導師から魔力を奪った方が……」

《今のマスターならすぐに捕まりますね。それに、逃げてる最中に吐血でもしたら、それこそ手が付けられませんので止めてください》

「ふふふ、吐血って何か厨二臭いよね」

それは俺の偏見かな？

でもとあるは厨二じゃね？イマジナリーイカー アクセラレータ 幻想殺し、一方通行、ダークマター 暗黒物質、レールガン 超電磁砲、マルチタワー 原子崩し、メンタルアウト 心理掌握……後の二人はよお分からん。

つか、良くこんな名前とか考えられんな。

まあ、ただ英語表記にただけだろうけどね。

後はハガレン……いや、あれはあれで良いのか？
でも神作である。とあるもな。

「そして今思った。俺って今軽くスカー状態じゃん」

錬金術の理解・分解・再構築で、俺は分解で留めてるみたいな。うわぁ、何それ厄介。

まあ、魔法を分解出来る時点でかなり厄介だけだな。

何か二つ名で魔導師殺しとか言われそう。

何その切嗣……魔術師殺しと同等やないか。

「まあ良いか……さてと……」

俺はその場に座り込み、今後の対策を練る事にした。

「ねえクイーン、どうしたら良いかな？」

《丸投げですか……まあ、マジレスすると。あれです、今のまま秘密裡で収集を行うか。もしくは守護騎士にまかせっきりにするか。二択ですね》

「いや、ばらさないから。みんなにやってほしくないから俺がやっている訳で」

「ここまで言ってくれと」

《……何を聞き直ってるんだか……》

まあ、そう取れるね。

でも聞き直ってなんかいない。十分俺はそれを受け止めてるんだ。理解もしてる。

自分が死に体だと言う事も、いずれ倒れるって事も。でも、それでも……踏んばらんといかんのよ。

俺も一応男。男には男の意地ってもんがある。

俺は非力だし、何もできないし、迷惑かけっぱなしだから……。だから、俺は俺がやれる事をしたいんだ。

「十分過ぎる位、俺は自覚してるよ。だけど、譲れないんだ」

《はあっ……ホント、貴方は馬鹿ですね》

「ウエヒヒ、俺はマゾヒストじゃ無いんだよ？そろそろ罵倒は止めようぜい」

《いえ、何度でも言います。このチビ助が》

「ハイハイ、どうせチビですよーっと。さて、それで今後の事なんだけど。今度は効率良く進めたいから、もうちよい生物が居る世界に行こうと思ってるんだけど」

《……まあ、それ位なら大丈夫ではないかと。でも、余り行き過ぎると、管理局に目を付けられますよ？》

「それは何とかクリアするよ。変装でもなんでもすればいい話だしね」

《……それが一番手っ取り早いですかね、あ、手っ取り早いと言えば。地球に落ちたジュエルシードを使えば、もっと早く魔力が集まるのでは？》

「それこそ馬鹿だよ。そんな事したら管理局に早々と目を付けられるだろ」

《だから変装でもすればいいんですよ。もしくはそれを集めてる人が見つけた瞬間に魔力を吸収してしまえばいいのでは？》

うーん。それもそれでやりたくないんだよね。

それに、ロストロギアにロストロギアを収集させたらどうなるんだか分からんし……。

「それはまあ保留にしようか」

あんましそっちの本編には首を突っ込みたくないし。

でも……アंकがジュエルシードの一つを保有してる時点でもう首突っ込んでる感が満々なのは……まあ深くは考えないようにしよう。

「まあ、今後の展開次第かな。さって……これで今後の対策会議は終わりつと。ついは魔眼のコントロールでもしようかね」

俺は立ち上がり、背筋を伸ばしてから歩き出す。

はあっ……頑張る。

その後魔眼の使い方を練習しまくって、夕飯食って、また魔眼の練習して、風呂入って寝ました。

そして、次の日には元の世界に戻りました。

誰も気づいていませんでした、ふふふ、チヨロイチヨロイ。

第三十五話 罵倒罵倒また罵倒（後書き）

ねむてえ

明日は番外編を書き上げないと……

まだ三つ残ってる

大変だ

さて、今回はあれです

色々厨二が何たら言っていました

作者自体がもう厨二何で、あんまり気にしないでください

鎌池先生すいません、荒川先生もすいません

ここまで読んでくださりありがとうございます

第三十六話 急展開過ぎてワロタァァァ！（前書き）

どうも

性癖に少し問題があると友人に言われた俺です

男の娘の何が悪い！

まあ、リアルにそんな子はいないので、俺の性癖何て世の中に何ら悪意を齎す事は無いでしょう

さて、もうすぐで四十話になるのですが……ここで時系列を言っておきましょう

大体なのはがフェイトと初めてエンカウントし辺りを想定しています

だから、次の次の章では……違った……

修学旅行から帰って来たら温泉の話を書きます

そして、修学旅行が終わって一週間たったらテストなので

一時更新を停止します

ああ、毎日更新が（泣）

まあ、良くも一か月も毎日書けたなと思ってます

それでは、本編始まります

第三十六話 急展開過ぎてワロタアアア!

アニスサイド

「ケホッケホッ……ウエッ……」

えー、食事中の方すみません。
中継をおトイレに繋いでいる為、少々酷い絵面ですが、チャンネルは間違いではありません。
どうも、アニスただお。

「ゲホッ……」

ビチャッ!

「……ペッ!」

トイレで吐血なう。

いや、洒落になってないって……。

「あう、気持ち悪い……それに、痛みが無いって所がまた恐怖を
あおるねこりゃ……ケホッケホッ……オエッ……」

駄目だ……まだ出そう。

口の中が鉄の味ですわもう、こりゃ呪うどころの前に、出血多量で死んじまうって。

「ガフツ……あゝ、ダリイ……」

ズルズル、ストツ……。

俺は耐え切れず、その場に座り込む。

全く、厄介だねえこりゃ。まだ足に呪い受けて動けんくなった方が楽だよ。

「あゝ……貧血かなこりゃ……体が小さいってのも考えもんだねこりゃ……あー、気持ち悪い……」

立ちたいが……もう駄目だ、フラフラ。

もうかれこれ20分はトイレの中だ。そろそろ出ないと、流石に駄目かな。

「よつと……ふう……水流さんとな」

カシャツ、ジャー！

「おお、水が赤い赤い。まるでサイレンに出てくる水みたいだ」

あれを飲めば死屍に……クッククツ……。
つて、何言っただ俺は。冗談じゃない。

「あーうー……フラフラするよ……あー気持ちわる……」

今にも倒れそうですね、分かります。

それにしても……どうしたものかな。こりゃ予定が狂うな。
予定よりも呪いの進行が速い……うむ、こりゃ本気でクリスマスまで生きてるかな？

「まあ、何とでもなるか。後でシン・ライフオジオでも使おうかな。
でも、使うと心臓痛い痛いなのです、みいー状態になるから……駄目か」

口では何とでも言えるが、実際あの心臓の痛みは洒落になっていない。

例えるなら……そうだね、麻酔なしで腹をかつ捌かれて、開きになった状態から手を突っ込まれ、至る臓器を手でぐちゃぐちゃに潰される……位？

いや、それだと俺ショック死してるから……うゝん、分かんない。
あ、因みに。シンと付く呪文は一通り使えます。

つてああ！！そうだった！！

ガツシユが使つてたシン系の呪文つて、確か心の力使わなくても使えてたやん！
でも、俺でも魔力なしで使えんのかな？

「つて……うだうだしてたらまた……！ウエツ！ケホツケホツ！」

ビチャビチャッ！

「ケフツケフツ……あー……もう駄目だ……しんどい……」

一気に血を流し過ぎた結果がこれだよ。

あーうー、貧血で頭くらくら……このまま気を失いそうで怖いね。
せめて血で、犯人はやすつて書いておかないと……。

「あうあう……もうまともな思考ですらなくなってきたと言っ
この事態……つか、無理に立ち上がるのはよろしくないか……」

無様だなあ……俺。

力をもらっているのに、これじゃあ前世と何ら変わらない。
これじゃあ、地を這う虫同然じゃないか……くっくっくっ……。

「ホント、無様だよなあ……笑っちゃう……くっふふふ……」

あー、もうまともな思考回路何ぞしてねえしな。
もうどうとでもなれってんだ。

「こんな状態で、収集か……ったく、決断が遅いんだよ、俺は……
よっと……」

俺は壁を使いながらヨロヨロと立ち上がる。
体が重たい……頭も痛いし……また吐きそうだ。

「ととと……いでっ！った~~~~」

壁に頭をぶつけた。

むっっちゃ痛え……あー、絶対こぶで来たってこれ……。

「あーっー……さっさとでよっ……っつと、流すの忘れてた」

カチャッ、ジャー！

「うむ、これでスッキリだな」

さつて、出ますか……。

俺はドアに手を掛けて、開く。

「……誰も居ないな……」

辺りを見回して、自分の部屋に戻る。
さつきトイレでの出来事を聞かれていたら即死だった。
危ない危ない。

「ハアツ……ヤッヴアイ……キツイ」

部屋が凄く遠く感じる……。
足がまともにも前に進んでくれない……。
息をするのが苦痛だ、焼きこげそうなくらい、肺が熱い。

「……駄目だ……こりゃ……」

ドタッ……！

「ハアツ……ハアツ……流石に……痛い……かな」

胸が苦しいと言うよりは、痛い。
俺は耐え切れずに倒れ込む。

あー、こりあマジでヤバいって……。

「ぐっ！……ケホッケホッ！」

ツー……。

やばっ、また血が……。

それに……このままの大勢だと……血が喉に詰まって……。

「ガフツ！……グツアツ……」

ガリツ……。

息が……出来ない……。

苦……しい……。

「うつぐあ……ゲホッ!!ゲホッ!!」

俺は無理やり口の中の血を吐き出す様に咳をする。
こりゃ……ヤバいな……。

ああ……意識……が……。
酸素が……行き届いて……ない……。

ドタドタッ!!

ああ……何だろう……誰かが……こっちに向かってきてる……。
えへへ……身体がポロポロなの……ばれちゃう……な……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

シグナムサイド

ドタッ!

部屋の外から、何か倒れた音が聞こえた。  
最初は気のせいかと思っていたが……。

ゲホッ……ゲホッ……。

誰かが咳き込んでいる様な声も聞こえてくる……。  
もしやと思って、リビングから出て見てみたら。

手洗いの近くで、倒れている主が居た……。  
それを見た瞬間、いきなり頭の中が真っ白になった……。

何故、どうして……と、思考の波はグルグルと私の頭の中で回っていた。  
そして我に返り、すぐに主の元に駆けだす。

「主……！」

ドタドタ……！

これは……酷い……。  
どうして……こんな……。

「ゲホッ……！」

「！主！お気を確かに！」

駄目だ、ここで無理に動かしては……。

それに吐血……すぐさま口内の血を出さねば、窒息してしまう……。  
……これしかないか……。

「主……すみません……」

私は主を抱き寄せ、主に口に自分の口を付け、そのまま中の血を吸い込ませる。

そして、吸い出した血を床に吐き捨てる。  
まだ残っている……どれだけの出血を……。

それを数度と繰り返して、息が荒かった主の呼吸が整っていく……。  
……やっと来たか……。

「シグナム、どうしたんだよきゆうん……って……アニス！？ど、どうしたんだよー！」

「主が血を吐いて倒れた……。すぐに主の部屋に運ぶぞ、ヴィータ」

「ちょっと待ってる！今シヤマルを呼んでくる！シグナム一人でも

行けるだろ！」

「……仕方ない、早急にな」

「分かってる！！」

ヴィータはすぐにリビングに戻り、シャルルを呼びに行く。  
だが……どうして急に、主は倒れたのだ……。  
これ程の事なら、日常生活を見ていれば……。

！？日常生活！

思い返せば……不審な所はいくらでもあった……。  
食欲不振に加え、睡眠の長さ、咳……私は主の守護騎士として失格  
だ！

何故気づけなかった！

……いや、悔いるのは後で幾らでも出来る。  
今は主だ……。

主……何故何も言わなかったのです……。

……私は……無力だ……。

第三十六話 急展開過ぎてワロタァァァ！（後書き）

どうしてもこうなった

何か、書きたいように書いてたらこうなった

しかもね……今日で話書いてんの三つ目……

疲れた……

今日は学校が建立記念日で休みなので、ずっと書いてた

……嘘ですごめんなさい

ほとんど見てないアニメを消化しながら書いてました

fate見れてなかったので全話見ました

……あの糞蟲爺……

とまあ、怒りはさて置き

バーサーカーパネエっす……

ナイト・オブ・オーナー  
騎士は徒手にて死なず……強すぎでしょ……

まあ、それは置いて

やっぱりzeroランサーカッケエは

声優が緑川さんって……

信じられるか？あれで43歳何だぜ……

俺の親父の一個上やん……

エロイ、すさまじくエロティックだ……

兄貴いいい！！

そしてあの糞蟲爺！やっぱ死ねやあああああ！！

っと、つい口調が汚くなってしまいましたね

では、今日はここまでにおかせていただきます

ここまで読んでくださり、ありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0814x/>

---

死にたがりな男の娘が転生

2011年11月2日21時35分発行